女鑑
第拾五年
第七號

季節向き、新柄物漏れなく取揃へ
店内一面に陳列致し置候間御来
観被成下候様奉希上候、
地方よりの御注文は御書面にて
御申付被下度く即日小包郵便を
もつて御届け可申上候尚ほ註文御案
内書は御一報次第呈上可仕候

東京日本橋駿河町

三越呉服店



女鑑 第拾五年第七號 目次

口繪



ムスク香水
芳香の永く保つ点に於て
其名富士の山より高し
色白くつやをだす
ホーサン石鹸
大形二十銭小形十銭
大瓶壹円
中瓶六十五銭
小瓶廿五銭
東京本石町四
松澤常吉化粧品部



○大日本の淑女方が一般に渇望する處の原料の確實なる洗粉は此の花洗粉也
一度御試用の上御高評を乞ふ
特約販賣店
辻小間物店

男爵松平正直氏の家庭



（松平正直男は嚢に熊本縣知事より内務次官となり今現に錦鶏の間祇候貴族院議員たり男爵の左方なるは令夫人須磨子嫡女芳子其他は令息及令孫なり）

女子高等師範學校教授篠田利英氏家庭



東京女囚携帯乳児保育會委員

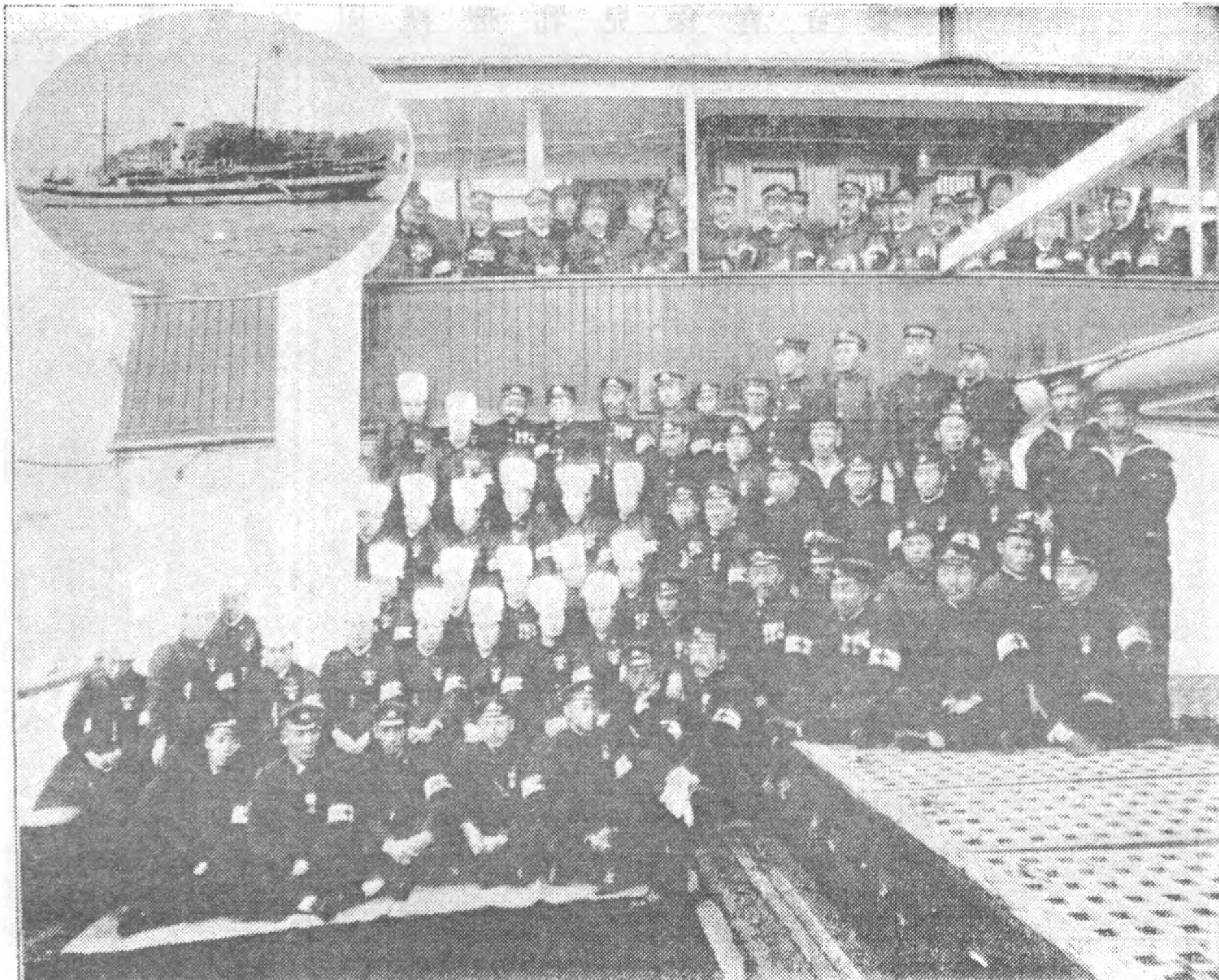


前列　佐野きせ子　小川婉子　保育者外浦ふじ子及保育乳兒　長松菅子及保育乳兒　板垣伯爵夫人及保育乳兒　清浦農商務大臣夫人及保育乳兒　水野神社局長夫人　木村松子

中列　白石萬子　名村泰藏氏夫人　兵頭喜舞子　福岡縫子　岡田靜子　小野芳子　仁尾專賣局長夫人

後列　川村福子　原貞子　林鶴子　竹村貞子　長島組子　松本靜子

赤十字病院船弘濟丸乘組救護員



セーネー

色白くなる高等化粧洗料

定價 大瓶五拾錢 小瓶貳拾錢

歐米最新流行品の紳士貴女の洗面用

本品は使用の時乳色に變化し永く芳香を保つ

御注文は 市内配達可仕候 市外小包料拾錢添付

發賣元 東京日本橋區くれまさ町七番地 松泉堂



横濱特約販賣所 尾上町五丁目

日進堂販賣部

清心丹は興奮、清涼、收斂、健胃消化劑なれば衛生家の四時日常欠くべからざる要藥なり依てポケット用、携帶用に便利なるニッケル罐入の設けあり定價は金廾錢、十五錢の二種あり販賣所は全國藥舖賣藥舖にあり御最寄にて人魚の商標御認めの上御愛求あらん事を乞ふ



本舖東京市元大阪町

高木與兵衛

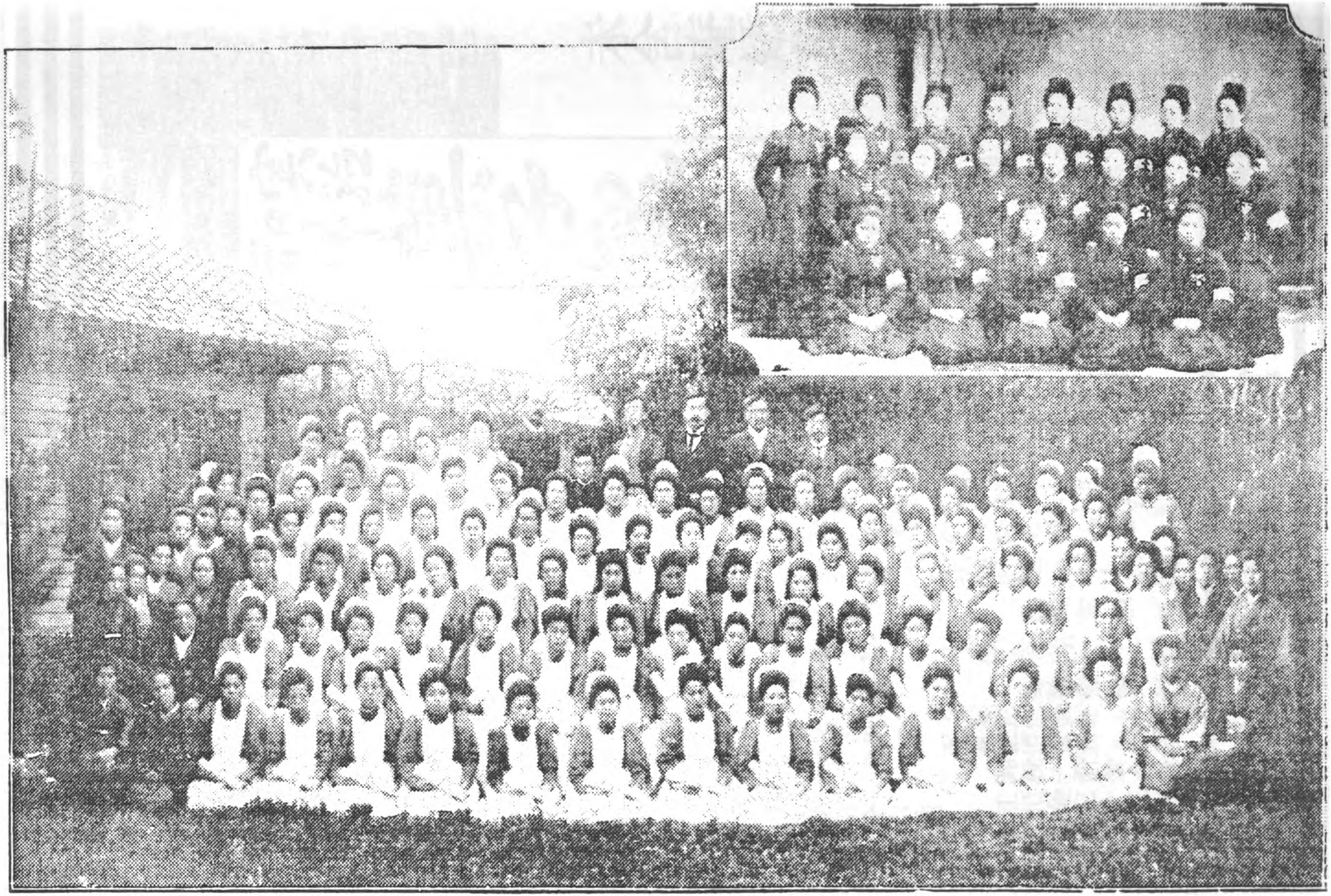
島根縣女子師範學校第一回卒業生並職員



大成學館國語體操專修科講習生並職員



同志社病院出身の日本赤十字社臨時救護班



京都同志社病院看病婦學校卒業生

(新判)

末合庵婦菓著

實驗和洋菓子製造法

挿畫十數葉入

洋裝頗美麗 全一冊 正價金六十五錢 郵稅金六錢

本書は著者が祖先以來多年間實驗を得たる製菓法中特に洋菓子百餘種と和菓子二百卅餘種の製法を選み之に挿畫を加へ懇切叮寧に說明をしたるものなれば一讀のもとに家庭に於て夫人、令孃方が容易に美菓を手輕に調製し得らるゝ良書にして又割烹家及び同業者の良參考書なり。

赤堀峯翁
赤堀峯吉
赤堀菊子 共著

◎即席惣菜料理

洋裝美製 全一冊 正價金三十五錢 郵稅金四錢

華族女學校教授
小野鵞堂書

◎增訂女子手紙文

和裝美製 全一冊 正價金四十錢 郵稅金四錢

赤堀峯翁
赤堀峯吉
赤堀菊子 共著

◎家庭十二ヶ月料理法

和裝美製 全二冊 上卷正價金五十錢 下卷正價金五十錢 郵稅一冊金八錢

三宅克己筆

◎水彩畫集

第壹輯全六葉 正價金三十五錢
第貳輯全六葉 正價金五十錢
郵稅一冊金四錢

發行所 東京日本橋區通一丁目 大倉書店

賣捌所 大阪市南久寶寺町 前川書店
大阪市備後町 吉岡書店

同 校長 正木直彦 序文

同 校教授 島田佳矣

東京美術學校卒業生 野口俊尾 共著

女子技藝 編物模樣圖案

全五册石版極彩色大判綴美本

定價 ●松の巻金四拾錢●櫻の巻●藤の巻各金五拾錢●菊の巻●梅の巻各五十五錢 郵稅各貳錢

本書 は毛糸、絹糸、木綿糸等にて諸模樣を編み或は刺繡するに必要なる圖案即ち下繪を集めたるものなれば女子技藝に於て教育上參考上必要携書なり

本書 の著ある所以は從來此類の歐米各國に於て幾多に出版されしものあれども其意匠圖案の樣式風趣は直ちに我邦工藝の趣致に應適せざるのみならず價格の點に於ても不廉にして一般に普及する能はざるを以てなり

本書 は著者が專門獨特の意匠を以て多年歐米の圖案を研究參考し其瑣の欠點を改善せし者にして我邦に於ける編物圖案の嚆矢唯一の書なり

發兌元 東京京橋區築地二丁目 國光社

通信教授

女子文學講義

○本會は女子に必須なる文學的智識を與ふると共に、女子の爲に文章（普通文、書簡文、小說、美文、言文一致等）和歌の作法を說く。

◎講師は皆斯道一流の名家講義は懇切丁寧を主とす◎會費低廉、文章和歌を嚴密に添削批評して其成熟を期す。但し添削無料とす◎講義錄每月發行一年卒業

▲講義錄一號近刊目下入學の好機

▲規則は申込次第進呈す可し。

東京牛込區新小川町一丁目 **女子文學會**

華族女學校講師

大宮兵馬著

中等日本文典

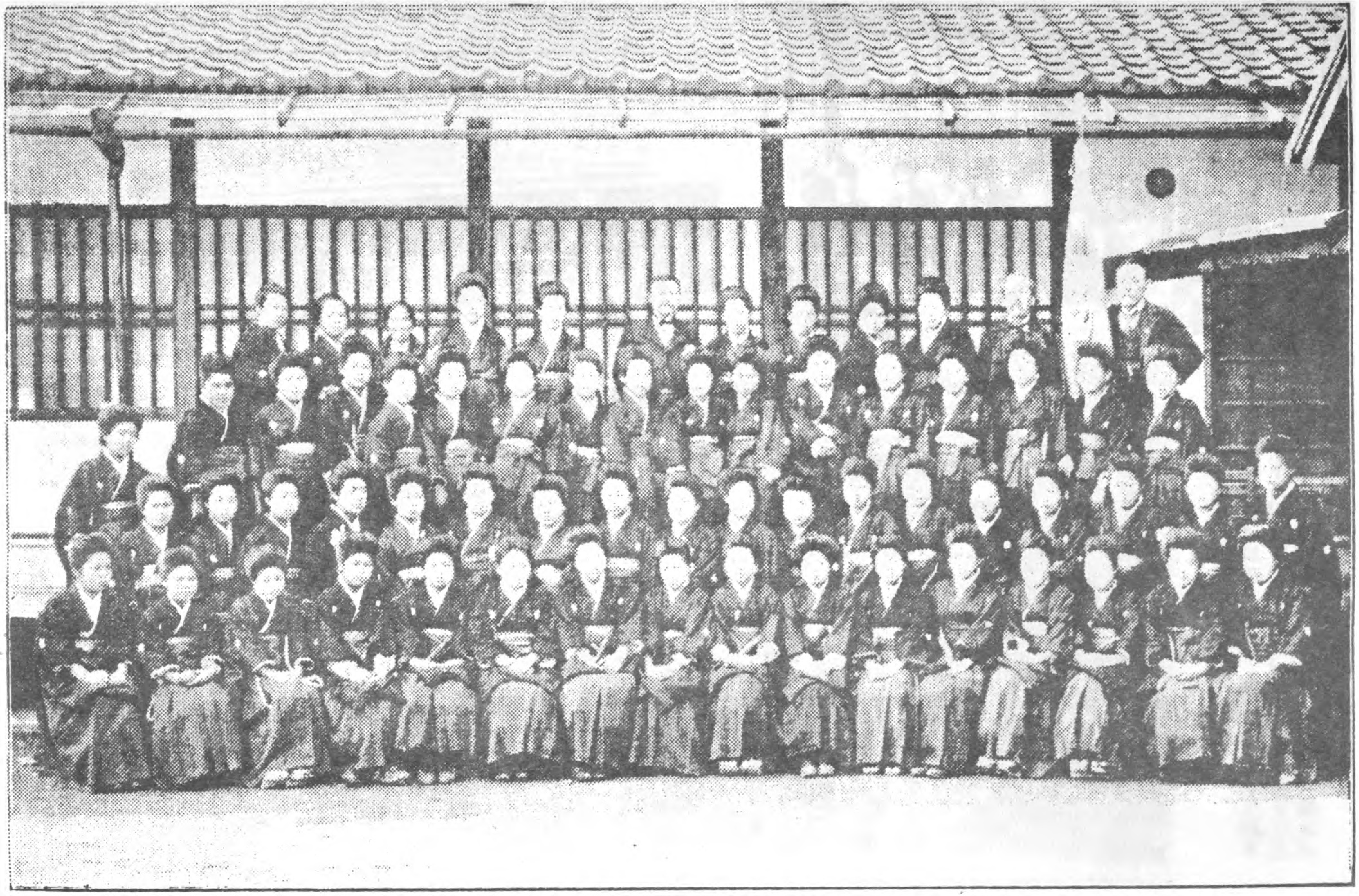
菊判總クロース美本

定價五十五錢郵稅八錢

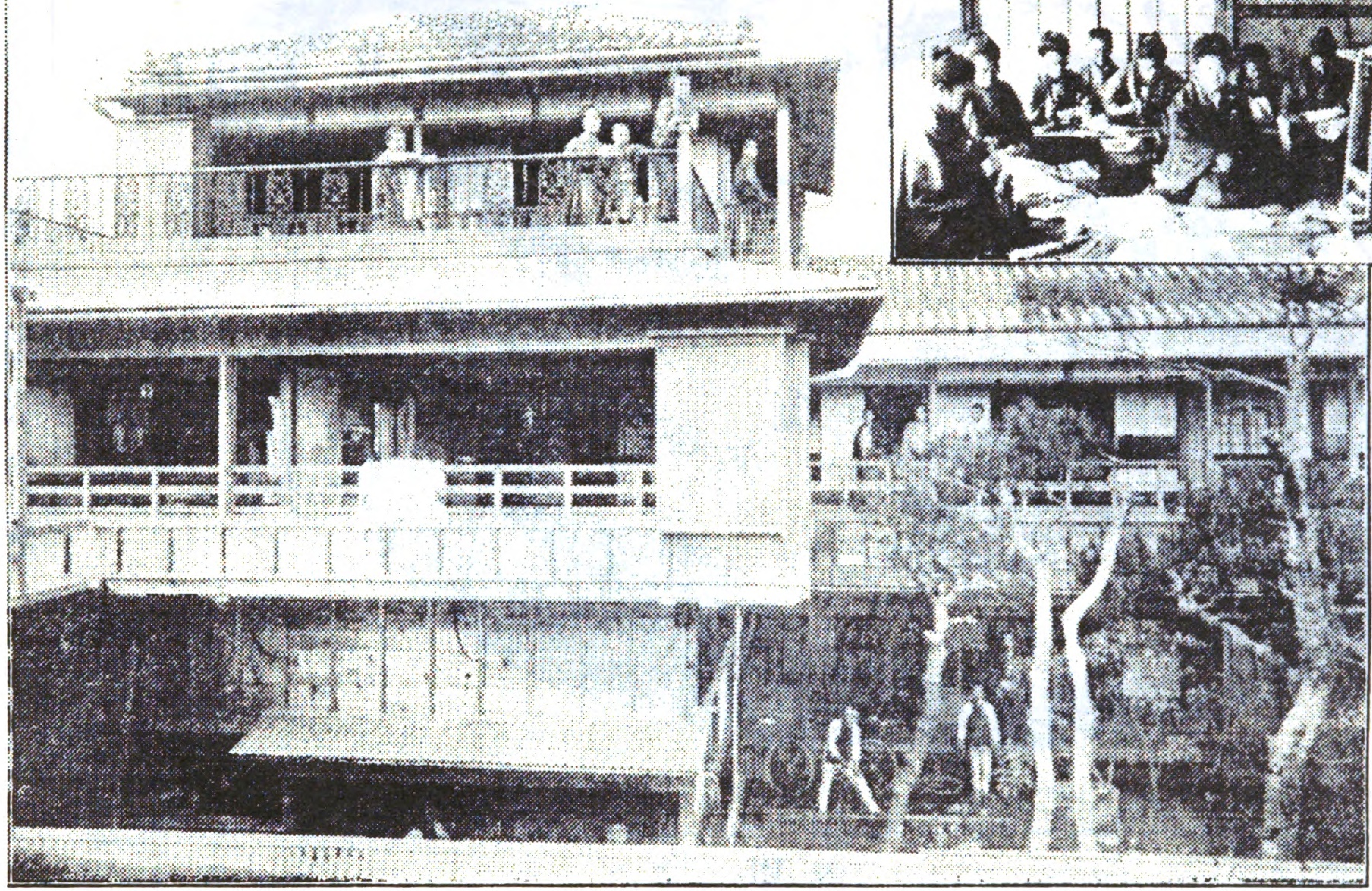
本書は、文典初步及文典の二冊を以て合本とし、中學程度の教科用に供せんとす。書中編述の事項は現今の普通文に向ひて直に之を應用せしむべき方法を以て各條を規定し併せて之を通俗言語と比較して其差異ある諸點をも會得せしめんと努めたり。其程度配置の如きは著者が授業上の經驗を以て基礎とすと雖もまた明治卅五年二月の發表の中學校教授要目にも準則すること勿論なり、委しくは本書を閲讀して知るべし

發兌元 東京築地 **國光社**

京都淑女學校第三回卒業生並職員



東京出獄人保護所本部並婦人作業室





こは原胤昭氏の經營するところにして婦人出獄人を收容す男子出獄人收容所は別に設置しあり去月十三日特別の御思召を以て　兩陛下より金千圓を下賜せらる原氏の意見は本號論說欄に揭げあり

女鑑投稿優等者



笠原牧子

林艶子

輕便一瓦斯の煮燒一德用

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮燒用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に人手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十八分にて炊くを得べし

○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用且便利なり

○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す

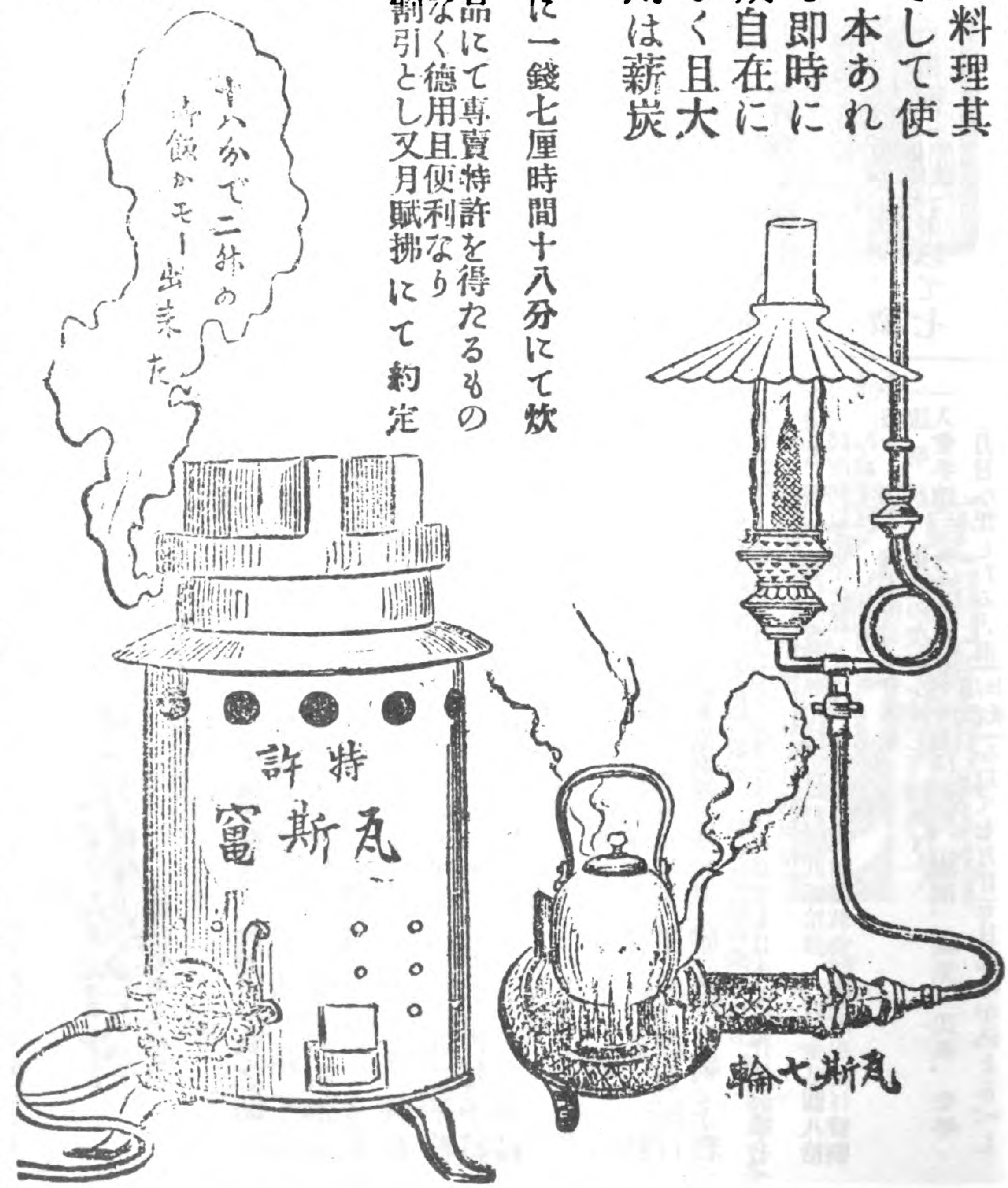
○臺所竈、七輪、湯沸、風呂、並煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

尙各種瓦斯器具は當社構内陳列所又は銀座所等へ陳列縱覽に供居候御立寄御一覧被下度候

神田區錦町三丁目

東京瓦斯株式會社

電話本局 一三番、五四八番 二三〇三番



◎講習生募集◎

本會は時勢の須要に鑑み學校教員又は教員たらんとする者の爲め特に左記學科に就き講習を開始するの必要を認め本年七月二十八日より夏季夜間講習會を開く講習志望の者（男女に拘らず）は至急本會事務所へ申込まるへし

明治三十八年五月

東京市神田橋外

東京府教育會（電話本局七八八）

夏季夜間講習會要項

一學科及講師

國定教科書に於ける法制經濟　法學士　島田俊雄君

國定教科書算術敎授法　文部省普通學務局長　澤柳政太郎君

　文學博士　井上圓了君

　文部書記官　松本順吉君

　文部省圖書審査官　吉岡郷甫君

一科外講義　講習生の爲め特に科外講義を課す其講師は講師委囑中

一講習期限　本年七月二十八日より同八月十七日まて毎日午後第六時より同八時まて

一講習料　一科金壹圓五拾錢二科貳圓貳拾錢（本會々員及附屬敎員傳習所生徒は壹割を減す）

一會場　神田橋外本會講堂

一證明狀　出席の度數を案して授與す

一入會手續　入會せんとするものは宿所、族稱、職業、氏名、生年月日を記したる書面（用紙半紙）を以て七月二十五日まてに申込まるへし

◎講習生募集◎

本會に於て教員たるに必須の學力を補充し兼て又一般女子の爲め新智識を得せしむるの目的を以て本年七月二十八日より左記要項に依り夏季女子講習會を開く講習志望の者は至急本會事務所へ申込まるへし

明治三十八年五月

東京市神田橋外

東京府教育會（電話本局七八八）

夏季女子講習會要項

一學科及講師

教育　東京高等師範學校教授　波多野貞之助君

國語　女子高等師範學校教授　佐方鎮子君

音樂　前東京高等師範學校教授　鈴木米次郎君

遊戲體操　女子高等師範學校教授　井口わくり君

家庭應用實踐化學　東京府立織染學校教諭　石川弘藏君

家事　前女子高等師範學校教諭　塚本はま子君

裁縫　女子高等師範學校教員　須藤さだ子君

裁縫教授法　東京府女子師範學校教諭　瀬下てつ子君

一科外講義　講習生の爲め特に科外講義を課す其講師は

　女子高等師範學校教授　文學士　下田次郎君

　文學博士　井上圓了君

　東京府女子師範學校長　林吾一君

　文部省普通學務局長　澤柳政太郎君

　東京高等女學校長　棚橋絢子君

右の外教育名家某々女史等數名へ科外講師を委囑せり

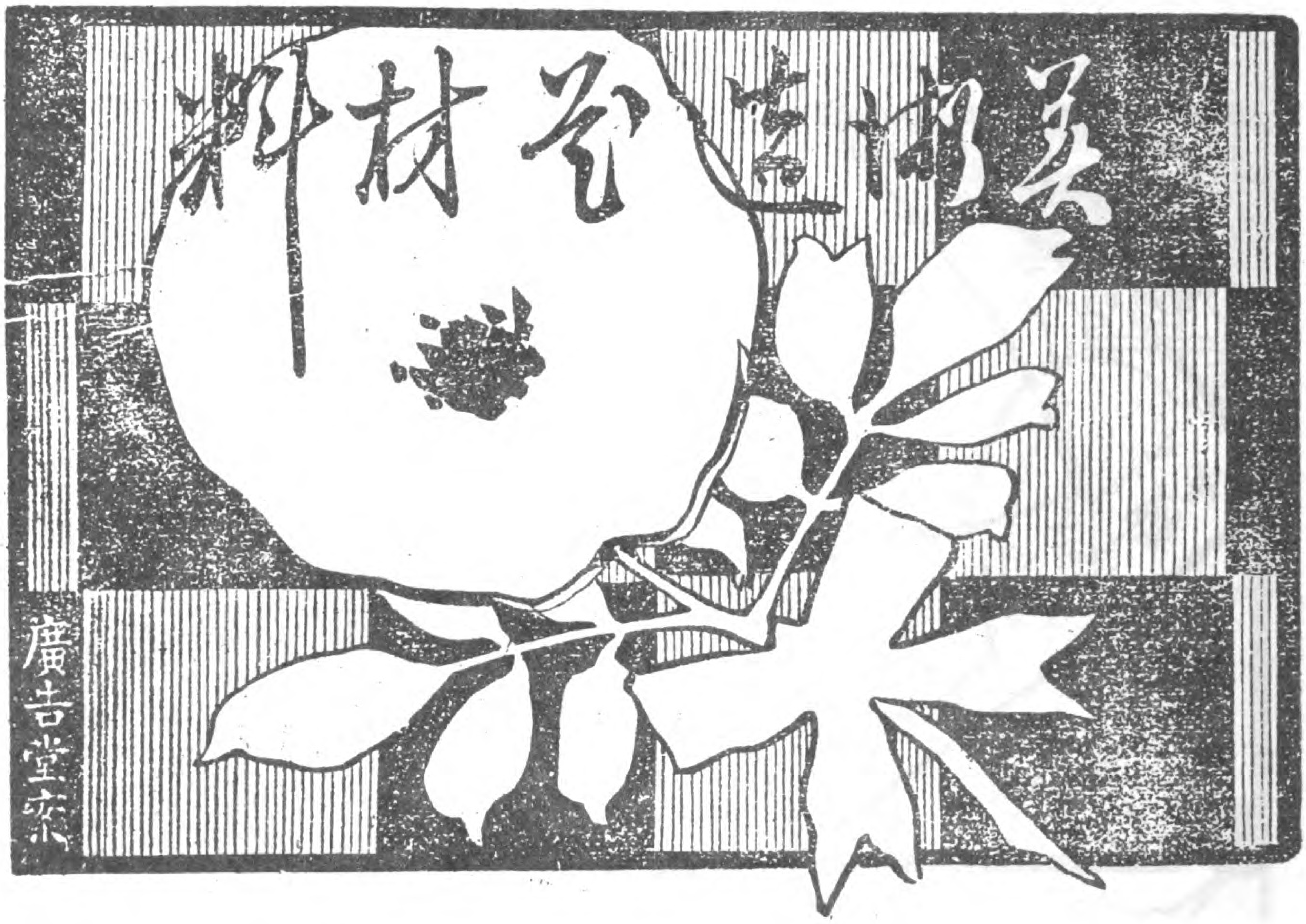
一講習期限　本年七月二十八日より同八月十七日まて毎日午前第七時より正午まて（及午後一時より同五時まて）

一講習料　一科金壹圓五拾錢　二科貳圓貳拾錢　三科金貳圓八拾錢四科以上金參圓五拾錢（本會々員及附屬教員傳習所生徒は壹割を減す）

一會場　神田橋外本會講堂

一證明狀　出席の度數を按じて授與す

一入會手續　入會せんとする者は宿所、族稱・職業、氏名、生年月日を記したる書面（用紙半紙）を以て七月廿五日迄に申込まるべし



夏期斬新材料

船來薄絹 **シホン** 各種

夏向きの造花材料として最も適當に且つ眼新しき本品を發賣致候へば御入用の方は本雜誌名を書き添へ郵券五錢を送られ度し見本及本品にて製作せる造花の寫眞版共進呈可仕候

日本女子大學校御用
共立女子職業學校御用
日本女子美術學校御用

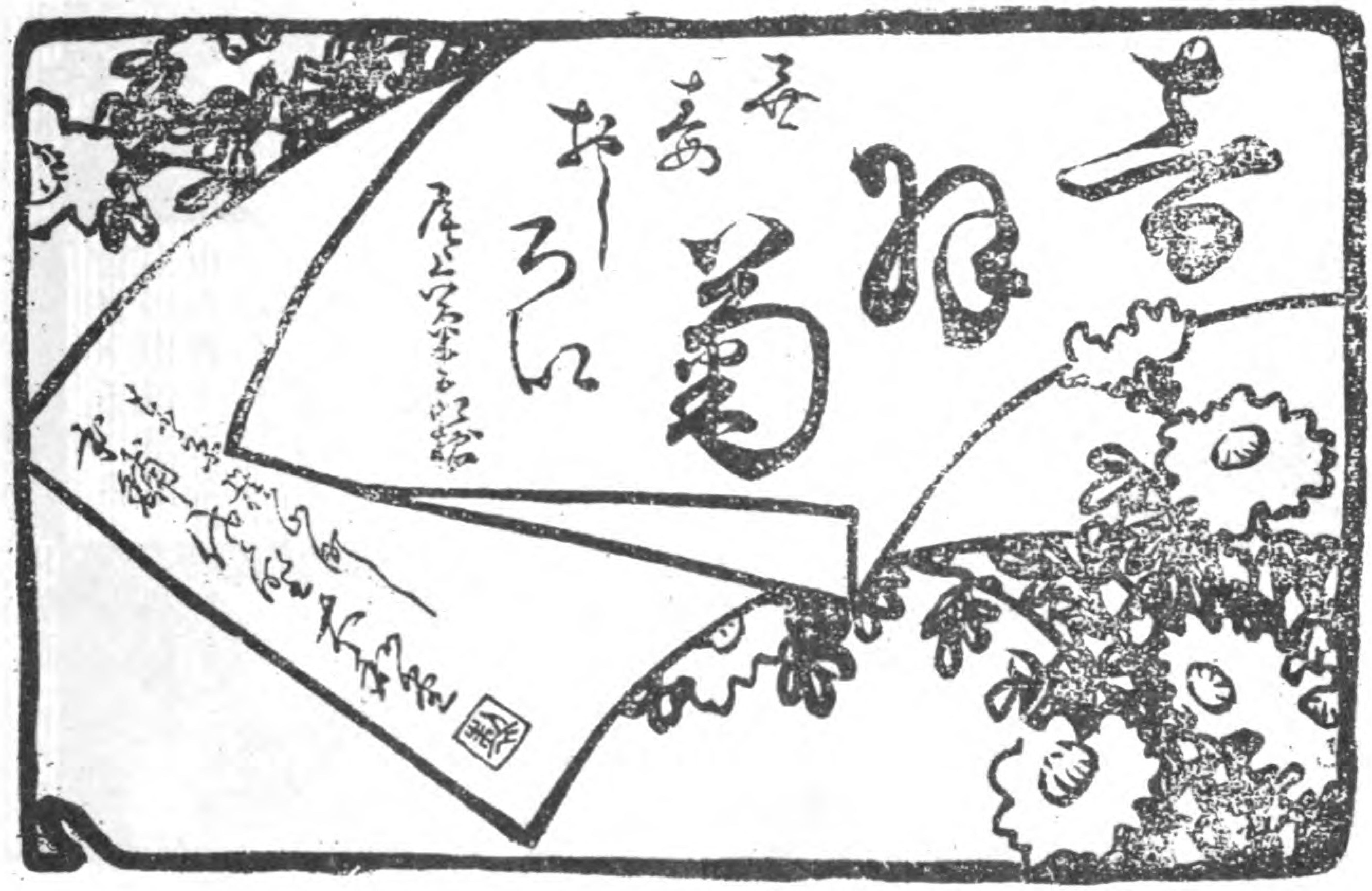
- 造花器械
- 造花用繪具各種
- 摘み細工原料
- 花簪原料
- 根掛原料
- 刺繡用金原平金類
- 和洋リボン各種

定價表御入用の方は往復はがきにて申込の事

東京日本橋區横山町
一丁目十六番地

天野卯兵衛商店

（特電話浪花一六四三）





定價•金五十錢•金廿五錢•金十五錢•金十二錢



第十五年第六號

日本海の大海戰と日本女子

平凡の言をいふものかな、と一概に輕んずることなかれ。去る五月廿七、廿八兩日の日本海大海戰に於て、敵の優勢なる三十餘隻、二十萬噸の軍艦を擊沈し捕獲して、空前の大功を樹て、世界の耳目を聳動して、感嘆頌讃措く能はざらしめたる我が聯合艦隊の勇將猛卒は、上、東郷大將より、下、火夫厨卒に至るまで、みな日本女子の胎内より産出したる健兒にあらざるなし。

されば日本女子が、この海戰の大捷報に接して、滿面に笑を湛へて、欣喜の情に堪へざると同時に、先づ念頭に浮ぶべきは、か

かゝる未曾有の大勳功を奏したる海軍々人は、寔に我等日本女子の產出し、哺乳し、鞠育したるものなりといふこと是れなり。是れ實にわが日本女子が既往の誇りとすべく、將來の戒めとするに於て、尤も適切にして價値あるものならざるを得ず。

それ生を此世に受くるもの、孰れか母の胎内より出でざるものあるべき。されど凡ての母が、多くは凡庸普通の人のみを生むに異なりて、特に卓越偉大なる人物を產したる母は、眞に敬すべく、又尊ぶべき高等なる品性を有するものと云はざるべからず。かゝる高等なる品性を有する母は、非凡偉大なる其兒と共に、凡ての人類より尊敬せらるべき權利を有するものなりといふも、強ち不遜の言にはあらざるべし。故に此の一事に於て、日本女子は、世界萬國の女生中に於て、特に敬すべく、尊ぶべく、又誇るに足るべき資格を備えたるものといふも決して過褒にはあらず。

回顧すれば、去年二月開戰の劈頭に於て、我が艦隊が、ワリヤグ、コレーツの二艦を仁川沖に擊沈せしより、忽ち旅順の夜襲となり、封鎖となり、遂に敵の東洋艦隊の殲滅を見るに至るまで、我が忠勇義烈なる將卒の行動は、殆んど人をして人間以上の技能あるを思はしめたり。而して事は之に止まらずして敵の艨艟數十隻が、其の同盟國の間接の友情的救助を受け、傲然萬里の波濤を蹴り、遠く來襲して、宿昔の仇讐を報せんとするに會し、之を迎へ擊ちて一擧にして全滅し、敵の提督をして、白旗を掲げて、降伏を請はしめ、數隻の敵艦を捕獲して吾有とし、六千の將士を生擒して捕虜とするに至りたるは、人力の爲し得べき限りを盡したるものといふべく、或は東郷提督の謂ゆる「歴代神霊の加護」あるを思はしむるにあ

らずや。されど神靈豈に愚將弱卒に倖を與へんや。忠勇義烈なる吾が海軍々人にして、始て神靈の加護あるの實に偶然ならざるを知るべきなり。勇悍無比のスパルダ人が、名譽を千歳の歴史に留むるは、スパルダの母の恩賚なり。胡元十萬の寇を一夜の間に鏖殺したる鎌倉武士の面目には、鎌倉婦人の面影の髣髴たるを偲ばざるを得ず。神靈の加護とまで思はるゝ吾が艦隊將士の脉管には、確かに日本女子の熱き血の通へるを認めざるを得ざるなり。

予輩は今更ならねど、記臆を新くして、轉た嘆賞に堪へざるは、上村中將が曩きに東郷大將と共に旋凱せられたるに當り、東京高等女學校に於て、講述せられたる談話の一節なり。上村中將は、東西分かぬ六歳の時に、早くも慈母に離れして、孤影煢然の身となり、僅に其の祖母の手に養育せられて、人となりたるなり。しかも其の祖母なる人の敎養に頼りて、よく今日あるに至りしは、中將の公衆に向ひて敢て自白せしところなり。中將の談話に曰く、(女鑑第十五年第二號百九十四頁及百九十五頁參看)

私は極めて幼少なる時分、僅か六歳の時に母親に離れましたので、子供心にも、是から後は何うなることかと、悲しいことに思ひましたが、此時私には一人の祖母がありまして、宜しい、母親はなくとも私の手で立派に育てゝあげるから、安心せよと言はれました、此の祖母は八十九歳で、座つたまゝに往生を遂げた人でありますが、私はたゞ一心に此の祖母に信頼しまして、其の熱心なる訓戒を神様のお言葉のやうに心得て居まして、それで斯くまでになつたのでありますから、父母又は祖母などの人々の敎訓には決して背かぬやうに、勉めて貰はねばなりませぬ。

と。此言に據れば、前には蔚山沖に浦鹽艦隊と會戰して、その一隻を擊沈し、他の三隻に大損害を與え、今又這回の大海戰に偉大の勳功を奏したる此の卓越非凡の英雄は、實にその祖母たる一女子を神として敬ひかしづきつ、其力によりて、今日あるを致せるなり。ア、眇たる一老嫗の力は、此の偉男子を作りたるに非ずや。

思ふに之れ啻に上村中將のみならで、仔細に尋ね來るときは、東鄕提督を始めとし、其他幾多の勇將猛卒も、みな一代の功業を擧げて、その母の力に歸せざるはなかるべし。たゞ生むといふ一事も、以て母に負ふところなかるべからず、況んや其の致せる鞠育と、その及ぼせる感化の力とは、よく一代を指導し、敎訓して、多大の影響を與ふるに於てをや。ワシントンの母は、ワシントンをして建國の大業を成さしめ、正行の母は、正行をして、南朝扶殖の大忠臣たらしむ。今や日本武士の母は、日本武士をして、世界を震盪するの大勳功を奏せしめたるなり。

記して玆に至れば、日本女子の力も亦寔に偉なりといふべし。されど日本女子の偉なるは、啻に今日のみならで、未來永遠に偉大ならざるべからず。今日の日本女子は、更に將來に於て、第二の東鄕提督を生まざるべからず、大山元帥を生まざるべからず、上村將軍を生まざるべからず、乃木大將を生まざるべからず。倘且つ之と同時に、平和の戰爭に於て、常に優者の位置を占むべき多くの人物をも作らざるべからざるなり。日本女子今後の責任もまた甚だ重からずや。



女學生に對する希望

文學博士　井上哲次郎氏述

近來女子教育の盛なるに從ひ、之に對する批難の聲も高まりたり、兎に角女子教育の盛なるは女學生の增加にて之を推するに足る、當局者の談によれば最近六年間に於て女子就學者の數百分の五十より九十迄進み或は百分の八十迄進みしともいふ、女子就學者の激增は寧ろ驚くに堪へたり、現に每日東京市中を往來する女學生の多きによるも如何に女子教育の盛になりしやを知るべきなり、而も余は女子教育を盛になりしといふ、就學者の數激增したりといふ、敢て女子教育の內容が進步せりとは言はざるべし、內容も幾分進みしに相違なからんも這は容易に斷ずべからざるなり、然るに此女子教育の勃興最中に於て之に對する批難の聲高きは憂ふるに餘りあり、往年女子教育勃興せんとする兆ありし時、偶々某高等女學校に於て男女の舞踏會を開きしが之により大に世間の批難を招き、從つて女子教育全體に對する打擊となり、其の結果一時の反動として女子教育の沈衰を致したり、今日女子教育の批難多きは折角盛ならんとするものが再び挫折せざるやと懸念せらる、而して其の批難せらるゝものは左程の事にあらず、或は女學生は生意氣なりと云ひ、ハイカラなりと云ひ、輕薄なり、不品行なりなどゝいふ、而も之れ女學生の數の多くなりしに伴ふ必然の現象なりとして妨

げず、多數の中には斯かる女學生あるも、不完全なる今日の社會に脫るべからざる所なりといふべし、且近來如何なる田舍の女子も東京に出で、高等の學問を修んなど〻野心を抱くもの多くなりしは女子敎育の隆になりし所以にして、此風潮につれて女學生に擬するもの多くなり、是等のもの〻行狀が世人の目に觸れて、女學生の全體が誤解せらる〻に至りし事實も否むべからざるが如し、而も多くの女學生の中には慥に世間の批難に値するもののあるも亦承認せざるを得ず、女學生たるものは是等の批難に對して十分警戒せざるべからず、余は更に身體、智識、道德の三方面より考察すべし、先づ身體に就て言へば、健康は言ふ迄もなく人生第一の基礎なり、如何に學問が大事なりとて健康なければ學問も用を爲すに堪へざるべし、道德が必要なりとて健康なき人は遂に其の本務を實行する能はざるべし、而して殊に我國の女子には健康の必要を說くべき理由を見る、我國の女子は必ずしも皆不健康なりといふべからざるも其の體格に於て歐洲の女子に比すれば大に見劣りせらる、多くの歐洲の女子は嘆美すべき體格を有す、而して之れ社會の習慣が女子の體格を發達せしむる條件を有するに由る、今日迄我國の習慣は女子の身體を發達せしむる條件を缺けり、而も今後は成るべく女子の身體をよくせざるべからず、或女子敎育家は我國の女學生にして健全なるは少しと言へり、若し其の言の如くんば大に注意を要すべし、西洋の女子にても其の健康の程度一樣にあらず、例へば獨乙の女子は極めて立派なる體格を有す、而して其の餘りに健康なるが爲に、老ゆるに從うて體格の肥滿を病むに至り、皆之を憂へて、バタやジャガ芋の如き滋養物を喰ふことを避く、其の肥滿の甚しきは馬車の入口一杯になり、後ろより人に押されて漸く入るを得るものあり、又汽車などに男子の二人分の場所を占むる大女を見ること稀ならず、且つ其の家屋は少くも五層六層なるを以て、斯かる大女は階子の昇降に苦み、自家に達するには中休みせざるべからずといふ、以て獨逸女子の健康を推すべ

し、佛の女子は廿才前後は一樣に瘦方のもの多きも、老人は肥えたるが多し、英の女子は丈高く其の老女は又多く肥えたり、斯の如く各國の女子多少の相違はあるも、概して其の體格の立派なるを認めざるを得ず、我國にても今日の女學生は袴を着け、靴をはき居るを以て運動に自由なれども、普通の女子は窮屈なる衣服を纏ひ、外出の時も內輪に步かざるを得ず、其の家居は多く身を屈めて、伸ること少きを以て、胃弱ならざらんとするも得ず、加之我國にては美人として、瘦せて細長きものを理想とするが如し、然して女子なるものは虛榮心の動物なるを以て、其の健康を犧牲としても美ならんことを欲せざるを得ず、乃ち將來は女子の體格を發達せしむる爲め、モ少し體格の立派なるを美人の理想とせざるべからず、さればとてお爨ドンの如く格好惡く肥滿するは感心せず、從來の婦人は餘りに不健全に傾きたり、女子は國民の母なり、國民の體格を發達せしめんとせば、女子の體格を發達せしめざるべからず。

女子の身體にして健康に次で必要なるは粧飾なり、自然界に於て櫻花の美はしくして、桃李の艶なるが如く、女子は人生の花なりといふべし、若し常盤木の如きものゝみならば自然美の見るべからざる如く、女子なくんば人間美も少かるべし、既に花ならば幾分の粧飾を要す、而して女子は自然に美はしからんことを欲する性情を有するものなり、年頃の娘にて粧飾を好まざるものはあらざるべし、而も之を增長せしむる時は奢靡に陷らざるを得ず、粧飾は必要なるも奢靡は忌むべし、奢靡は不可なるも殺伐も避くべし、女子も老人とならば次第に粧飾を廢すべし、お婆さんの白粉などは殊にいやなものなり、娘は娘らしく、老人は老人らしくして人生の秩序を紊すべからず、女學生も矢張女らしく粧飾すべし、唯西洋の女役者の如く燒鏝を當てゝ髮を縮らしたり、眉毛を書いたり、種々のアーチフシャルの手段を加ふるは宜しからず、之に反して一切の粧飾をすべて殺伐の風と爲すは好ましからず、又態度に就て言へば、女學生にして、肩

に風切りてエライ勢にて往來する者を見受くるも、是れは慥に心得違なりといふべし、男女各其の性能を異にす、男書生にても羽織の紐をリボンにし、甚しきは顔に白粉を塗るものありといふが、此の如き女性的男子の忌むべきと同時に、男性的女子も排せざるべからず、男子は男子らしくして其の職能を全うすべく、女子は女子らしくしてこそ其の天分を全うすべけれ、近來我國の婦人界にお轉婆なる米國婦人的風尚流行するを見るは嘆ずべし、若し外國を模倣するならば宜しく英獨の婦人を手本とすべし、英國のヒウス娘來りし時、英獨日本の女子が其風儀に於て世界の女子に冠たるものなりといひしが、之れ慥かに至言なりとす、英獨の婦人には我國の婦人の學ぶべき長所少からず、余の實見によるに西洋にては往來に見受くる女學生のつれが何れも足並揃へたり、我國の女學生は三四人にて歩くに互の肩ガチ合ひ、足並も揃はず、一寸したとなれど見苦しきものなり、之等は注意を要す。

次に女子に學問技藝の必要なるは言ふ迄もなし、獨乙のショウペンハウヘルは曰く、女子は遠い所が見えざるものなりと、思ふに女子は學問の方面にては概して男子に及ぶ能はず、其の遠い所が見えざる如き其の短所なるも之れやがて女子の女子たる所以なりといふべし、男子が遠い所を見て色々心配しつゝある時、女子が感情一方にて遠き慮もなきを以て能く男子を慰藉するを得べし、而も女子なりとて或程度迄は遠目が利くを要す、餘り感情の激しきも不可なり、學問の力にて之を制せざるべからず、之れ實に品性を高むるに必要なりといふべし、又學問は女子の容貌に影響すること少からず、男子は容貌など何でも關はぬものなれど、女子に取りて容貌は大事なり、美はしからざる女子は、女子として最も不幸なるものなり而して智識不十分の女は如何に顔の道具立が十分なるも、何處か間拔に見ゆるものなり、西洋にては美人の要素として眼を第一に擧ぐ、眼は人の精神を表現するものなればなり、而して知識ある女子は其の眼に

インテルゼンスの精神を表現す、眞に美人たらんと欲せば、智識を研磨して其の容貌にインテルゼンスの表現を爲すに至るを要するなり。

女子に取りて學問よりも一層必要なるは技藝なりといふべし、就中繪畫音樂等は最も女子に適する技藝なるが如し、女子にして十分其の長所を發揮せんとせば、之に向ふを可なりとす。

又美文なども女子に適するものならん、女子は其の天性に於て美的趣味に饒むものなれば、文學の方面に其の才を發揮せば成功するを得べし、昔より女子の文豪少からず、英のジョージ、エリオット佛のジョージ、サンド、我國の紫式部等其の重なるものに數ふべし、而も或種の學術例へば數學、工學、化學の如きは全然女子に適せざるは從來女子にして此種の學術に成功したるものなきにても之を知るべし、只其の除外例なきにあらず、二十世紀劈頭に於ける科學上の大發見たるラヂームの發見者がキウリー夫妻なることなり、此の發見に就てはキウリー夫人の力與かつて多きが如し、扨斯の如く技藝は女子に適切なる嗜みたるのみならず、其の獨立の爲めに必要なりといふべし、而も我國にては女子の獨立は容易ならず、而して女子の獨立せざるべからざる理由も少きに似たり、伊太利を除き他の歐洲各國にては女子の數男子よりも多し、其の比例は男千人に對して女千二十二人となる、佛蘭西も或は女子の數多きやも知れず、要するに西洋にては女子の方男子よりも多きが事實なり、而も生るゝ時は男子の數女子よりも多きなり、而して斯の如く女子の數多くなるものは男子は危險に遭遇すること多く、女子は其の生涯にモータルチー少ければなり、歐洲以外にては概して女子より男子の方多し、亞細亞にては女千人に對して男千四十六人の比例、亞弗利加、墺太利の比例も之と伯仲す、我國にても男子の方遙に女子よりも多し、三十四年の調査によれば、男子は二千二百三十三萬九千九百二十五人にして女子は二千一百九十三萬〇六百八十一人なり、

現今獨逸は最も女子の多き國なるが之れ獨逸が近年佛と戰ひ、デンマークと戰ひ、墺太利と戰ひ爲めに男子の死者多かりしが故なり、我國にては日露戰爭にて四十萬人以上の死者なき限り女子が男子より多くなることあらず、從つて女子の獨立せざるべからざる必要少し、若し女子にして男子より多しとせば、其の多き丈は餘りものとならん、而して顏の醜きものは最も餘りものとなり易し、斯かる婦人は早く將來の計を爲さざるべからず、而かも我が國にては女子の數少きを以て左程心配を要せず、從つて其の敎育も獨立の爲めとよりは嫁入を目的とするを要す、即ち賢母良妻主義をゼチラル、ルウルとせざるべからず、生れながら技藝の嗜あるものは例外として其の技藝を修めて獨立するを妨げざるべし、之が爲めに高等の學校備るなり、又女子なりとて大學に入ることも出來得ざるにあらず、帝國大學令に學生とあるは必ずしも男偏るなり、又女子なりとて大學に入ることも出來得ざるにあらず、帝國大學令に學生とあるは必ずしも男學生をのみ指すものと解釋すべからず、從來女子の入學志望者なかりし故に、此の問題起らざりしも、將來入學を志望するもののある時は必ず一問題となるべし、獨逸大學にても先年迄女子の入學を許さず、唯傍聽生として許したりしが、近來女子にても各大學に入るを得るに至れり、我國の女子は前述の如く男子より少きことなれば、大抵の醜婦も餘りものとなる虞なきも、天才あり、嗜味あるものは、高等の技藝學問を修めて獨立するも妨げざるべし、左なくも餘りものとなるべき事情あるものは、早く決心して獨立生活を圖るを要するは言ふ迄もなかるべし。

最後に女子の道德に就て述ぶる所あるべし、女子は情に厚きものなり、愛に深きものなり、從つて嫉妬心強きものなり、世に女子の團體程融和を缺ぐはあらざるべし、若し男子其の間にありて處理するあらば解難排紛易々たらんのみ、要するに嫉妬心強さは女子の特質なるも、若し其の人格を高めんとせば之を制するを要す、女學生の如きも兎角他學生の長所を明かに認容するを得ず、自己よりすぐれたる學生は之を

邪魔物視するに似たり、且つ女子は多く英語の所謂フランクチスを缺けり、下らぬことにても秘密を貴び其の心事を打明くることを避く、之れが爲めに聊かのことに怨を含む、之れ睚眦の怨も長く忘れず、其の融和を阻害する所以なり、男子にも嫉妬心なきにあらざるも、より多く淡泊なりといふべし、ハーンのゴーストリー、ジャパンに記せる物は最も能く我國の女子の執念深き方面を説明して餘蘊なきが如し、其の筋書を言へば、文政十二年或大名の奥方十年來の宿痾革まりて死に瀕したりしが、時方に陽春四月にして花後庭に咲けり、大名妻に向つて生前最後の望みを問ふ、奥方曰く妾今に及びて只一の望みあり、願はくは妾をして君の愛妾に脊負はれて後庭の櫻花を眺めしめよと、大名乃ち其の妾を招きて病床に侍せしむ、奥方大に喜び妾に向つて曰く今はに及び遠慮なくわが思ふ所を言はんに、汝はわが死後奥方となるを得ん、妾曰く、いかでさることあらむ、妾は固と下賤の身、斯かる非望を懷き侍らずと、やがて妾は奥方を負ひて後庭に連れ行かんとす、負はれたる奥方は双手を妾の袖下に入れて其の双乳を掴み、一種言ふべからざるイヤ味を帶びてニヤリト笑ひし儘絶命しぬ、衆驚いて死骸を妾の脊より去らんとするに、其の手は乳の肉と固着して離れず、餘儀なく蘭方醫によりて其の手首を切斷せしが、切斷せられし指頭は猶乳を離れずして夜な〳〵丑の刻に至れば指頭動きて妾を困めたり、妾乃ち無常を觀じて尼となりタツシツと稱して十七年間四方を遍歴し、後下野國川内郡田中村の野口傳太左衛門なるものゝ家に宿り、以上の話を爲して行方知れずになりきといふ物語にして、如何にも能く我國の女子の執念深き性質を書き表はせり、思ふに斯の如き執念深き點は之を西洋の女子に見るべからざるが如し、ハンニャの面などは我國の女子の嫉妬心をカラクトリスチックしたるものなりといふべし。

猶ほ女子の貞節の方面に就て言へば、貞節は容貌と淺からざる關係を見る、美はしき女子は醜きものよ

り多くの誘惑を蒙らざるを得ず、是の點より見れば美はしきもの丶貞節は容易ならざるに似たり、而も醜きものは其の心に弱點を有す、即ち彼女は其の醜なるを自覺するを以て少しく他より深切めかさる丶時は自分の如きものを斯く迄思ひ呉る丶は難有きことなりと感じて忽ち誘惑に乘せらる丶ことなきを保せず、然るに美はしきものは、其の美はしきを自覺して、心に一種の誇を有するを以て他にチヤホヤせられても毅然として誘惑を脱出することを得べきが如し、扨斯の貞節のことに就てゲーテのフアウスト第一篇に描けるマガレットは、最も能く西洋女子を代表せるものなり、マガレットは昔氣質の母の下に生ひ立てる無邪氣に美はしき娘なりき、母は常に之れを寺院に連れ行きて信心を篤うしき、誘惑はマガレットをして、節を破らしめたり、マガレット後一日井戸端に水を汲めり、近隣の娘等偶々他の娘が不行跡にして孕めるを噂す、マガレット此時已に身持となり居りしかば、此話を聞きて恰も己を噂せられし如く感じ、身も世もあられぬ思を爲し丶が、やがて往來の四辻に立てるマリヤの像下に、燃え立つ胸の思を懷いて慰安を求めんとせり、斯くの如くして憐むべきマガレットは、遂に狂するに至りしなり、千古の大詩人たるゲーテの筆は能く其の情欲、其の意思、其の墮落、其の煩悶を描きて遺憾なく活躍するを見るなり、余は是れに對比すべき物語を知れり、余が郷里筑前に昔節婦お政といふものありき、賴山陽は其の事を記したり、文は山陽遺稿三卷に見るべし、其の物語を略述せんに、筑前赤間宿に商人七平といふもの、家に多少の資財ありて子なし、其の娚に二女あり其の死に臨み遺言して曰く、長女は嘉右衛門に嫁ぎ、次女は長じて長次郎の妻たるべしと、斯くして長女を娶りし嘉右衛門なるもの其の家を襲ぎしが、放惰にして忽ち家産を傾けたり、次女名をお政といふ、長じて頗る美なり隣村勝浦村の庄屋赤間村の萬助なるもの丶言によりてお政の美を知り、之を其の息に娶らんとす、嘉右衛門大に喜びお政に語る、お政遺言を守りて肯はず、嘉

右衛門、萬助之を萬助の兄道善なるものに謀る、道善策を運らし、赤間の庄屋を媒とせば、事立どころに辦ぜんといふ、乃ち赤間の庄屋に乞ふて媒たらしめ、以てお政に説く、お政固く遺言を守りて肯はず、嘉右衛門責むるに長次郎と不義せるならんといふ、斯くて遂にお政を强制して婚儀を決行することゝなり其の夜酒宴を開きて前祝を爲す、然るに其の翌日よりお政は全く粧飾を廢し觀念する所あるに似たり、由て萬一を慮りて見張を爲さしめしが二三日後に至りて稍又粧飾に意を用うるに至りしを以て、見張を怠りしにお政遂に炭小屋に縊れて死す、遺書二あり、一は其の父に宛て不孝を詫び、一は其の許嫁の夫長次郎に宛て丶二夫に見えざらんが爲め死せるを明かにしたりき、嘉右衛門等之を發狂して死せりと稱し、事は秘密の中に葬られぬ、後十八年にして、お政の事蹟、黒田侯の知る所となり、詮義の末事明白となり、乃ち節婦お政を旌表して惡漢を所罰したり、思ふに斯の如き節婦を出せるは全く武士道教育の結果なりといふべく、當時は武家のみならず、一般の社會に武士道教育は浸染したりしなり、而して斯の如きは東洋婦人の模範ともいふべく、前記のマガレットと好箇の對比を爲すにあらずや、蓋しお政の如きは女子の品位を維持し高上する爲めに身を犧牲にせるものにして、女子全體の恩人として妨げざるべし、之をマガレットに比すれば其の高卑の差如何ばかりぞや、我國の女子は宜しく此の節婦お政の如きを理想とせざるべからざるなり。

（此一篇は井上博士が婦風社に於て演述せられたる演說の大意なり）



家庭と犯罪

（强賊山邊音槌と某華族の三男との例證）

原昭胤

家庭と犯罪との關係についてこゝに余が實驗上より得たる結果の一斑を述べて聊か世人の參考に供して見たいと思ふが、一體犯罪といふことについて關係することは範圍が極めて廣いのである。教育上、宗教上、法律上、政治上、經濟上、又生理上等種々な方面に行き渡つて居ることとであるが、此にはその中の家庭といふ一部分について愚見を話す積りである。

まづ犯罪といふことに就いて大要區別をせねばならぬ。犯罪といふものを學者の區別したのに據ると、宗教犯、政治犯、常事犯とこの三種類に別たれて居る。宗教犯といふのは、かの基督の刑せられた事の如きである。政治犯といふのは、政治上の事に關して犯罪となつた者。また常事犯といふのには、社會萬般のことに關係を有する各種の犯罪が網羅されて居るのである。こゝに予が陳ぶることは常事犯の中に入るのであるが、常事犯の種類といふのはその數も甚だ多い。まづこれを大別すれば、人命犯・放火犯、盜罪犯の三種となる。處ろが人命犯の中にもまた區別があつて、人を殺して物品を奪ふこともあり、また意趣意恨のために謀殺故殺を行ふものもある。是等を細に研究すると立派な一派の學問となる位で、此に殘らず說き盡すことは到底出來ない。

余が所謂人命犯といふのは、專ら人に對して恨み怒りといふやうな事からして殺人罪を犯したものを指稱

するのである。人を殺して物を盗むといふのは人命犯には屬せぬ。矢張り盗罪犯の種類に入る。強盗殺人といふものは、世人の眼には恐ろしい大惡人と映つるであらうけれども、細かに彼等の狀態を調べて見ると存外弱い奴である。その所爲に於ては勿論人を殺して物を取つたといふことになるけれども、彼等の目的は人を殺すといふのではない。物を盗まうといふのが目的である。然るに被害者の強くて、被害者のために防禦され、加害者が自分を氣遣つて鬪ふて殺したといふのであつて謀殺故殺とは性質上より考へても全く違ふ。この人命犯といふものは槪して病氣の作用であるらしく、大方は狂人である。故に再び犯罪をせぬやうに性情を變へて仕舞ふといふことは餘程困難である。また第二の放火犯も亦た瘋癲の類である。之は自分が他者に對して一種の怨恨を抱くといふことから其人の家屋へ火を放つが、其の害が何處まで及ぶかといふ所まで思慮の達しないものである。中には竊盗を目的としての放火犯がある。これは放火犯の部類に入れては研究は出來ぬ。寧ろ盗罪の中に入れなければならぬ。次は盗みに係る犯罪で、盗罪といふものは、詐僞取財なり、強盗なり、竊盗なり、總て人の財產に係つて物を取るものを總括した所の名稱である。

またこの盗罪犯を區別すると、偶發罪、病的罪、慣行罪の三種となる。偶發罪といふのは、前後に事なくして一時の事情によつて盗罪に陷つて居るものである。また病的罪といふのは、病氣のために始終盗みたい盗みたいといふ考を起す種類があるといふことだ。が余は未だ之に必適する者を見ない。性質に缺點あり、精神上より見て一の不具者といはなければならぬ者即ち獨立一己の人民として生活して行くことの出來ないものがある。この病的罪も細かに類別すると多數あるが此には省く。また慣行犯といふて習慣によつて起る犯罪があるが、これが最も研究を要することで、社會公衆もこの事につきては大に注意を拂はな

ければならぬことゝ思ふ。犯罪中常にその多きを占むるものはこの慣行犯である。これは犯罪をすることが習慣になつて仕舞つて法綱に觸るゝことを何とも思はないからである。この種類の犯罪者につきて何故に犯罪人になつて來たかといふ原因を調べて見ると、家庭の關係といふものが大なる勢力を爲して居ることが明らかである。依て予は主としてこの慣行罪と家庭との關係について所感の大要を述べて見る積りである。

家庭の生活にも上中下の區別があつて、最下級人民の家庭と犯罪とは最も深い關係を持つて居るものであるけれども、此に說かんとするのは專ら中流以上の家庭に關したことで、且つ理窟よりは寧ろ事實について研究を遂げて見やうと思ふ。此に引證とする犯罪者は近年の犯罪事項中に著名なる邯鄲師山邊音槌であるが、斯かる大罪人の出來たのも煎じ詰めて見ると七分は家庭の罪である事が別かる。山邊音槌は周防徳山のもので、十六歲の時より罪科を犯したものである。その父親といふものは昔し徳山藩の代官役を勤めて居つて勢力のあるものであつたが、不幸にして母親は當人が三歲の時に死んで、父は後妻を迎へたから當人は專ら繼母の手で育てられた。當人は三人兄弟で其上に二人の兄があつた、その長男といふものは隨分氣骨のある者であつたが、父の血統を受けて非常な飲酒者であつた、次男は左程不品行なこともない人であつた、處ろがその繼母は極温和な性質の人であつたので、子供三人の家庭に於ける敎育は全くその當を失ひ不規則に流れて了つた、父親は非常な大酒家であつて、家庭の事は萬端母親に打任せてあつたが、肝腎な母親は家庭を能く整理して行くことが出來なかつた。僕婢も數名使つて居たけれど効力がなかつた何分繼母繼子の間柄とて、表面平和を求めるのみで、眞實恩愛の情を以て子供等のために計るといふとはしなかつた、從つてその子供が成長すると共に漸々我儘が增長して來た。僕婢等は繼母だからといふので

斟酌をして一向事實を告げぬものだから、此儘時日を送つて來た、それ故に兒童等の我儘は益々增長して了つて、その中に年齡も七歲となり、八歲となり、成長すると共に漸々欲望も廣くなり餘計な金を使ふことを覺えて來た。また近邊の兒童等は群を成して來て、坊樣〳〵といふて餘計な財物を使はせるといふやうな惡習が起つたけれども、母親は緩慢にして家庭のことを顧みる人でなかつたから更に監督といふものをしない。何でもお坊樣といふ譯で勝手にさせ、百事放任して置いて取締のなかつたのが、この犯罪人の幼年時代に於ける第一の惡原因であつた。

自他の區別なく勝手次第な行爲をして居る近邊の兒童等は、坊樣を頭分として仰ぐから愈々金錢を使つて夫等を喜ばせたくなり、或は物品を買ふて與へ、或は一緒に連れて遊びに行くやうになつた。然るに其金は父母が許して與へたのではない。繼母の懷中にある金をいつの間にか窃取して行くのであるが、家政に不注意なる母親は一家の經濟にどの位な金額を支出して居るといふことを知らぬから、いつの間に何程の金を子供が竊んだといふことが母親には一向解らない。少しづゝ金を窃み出して友達と一緒に遊びに行き菓子を買ふとか玩具を買ふとかいふのは、この犯罪者が九歲か十歲頃のことであつた。處ろが追々年齡が增して大きくなるに從つて、金錢の使ひ道も廣くなり、母親の小使錢を窃むだけでは足らなくなつた。それで更に工夫を運らし、今度は父親が大醉して倒れて居るやうな時を見て、何時でもその側に往つて、父親の懷中にある金を窃取して居つた。父親は眼覺めて後金が尠ないやうなと思つても、大醉して居つて確と覺えぬからその儘打過ぎた。かゝる風で一年二年三年と經過して來たが、その父母は自分の子供に窃取されたといふことは夢にも知らず、僕婢等は或は知つて居つたかも知れぬけれども、繼母ゆゑにこれを告ぐることを遠慮してそのまゝ打過ぎた。

この不良少年が十三歳の時であつた、或日父親が子供の本箱を開けて書籍を引出して見ると、その書籍の間に紙幣が四五枚這入つて居つた。で父親はどうして此處に紙幣が這入つて居るかといふ事より始めて疑を起して、これは何でも自分のものを窃取したのに違ひないと考へた。母親もこれを聞いて始めて驚いたけれども、父母共にこれは自分等が今日まで子供の教養を等閑にして監督が行屆かなかつた結果であるといふことを覺らなかつた。併し父親は隨分激烈な性質の人であつたさうで、我が子の惡事を見るや非常に驚き、苛酷な糺責を加へ、お前のやうなものは迚も我家に置くことは出來ないといつて、直ちに放逐して了つた。

旅行の心得も何もない兒童が俄かに我家から放逐されて、何處へ行きやうもない所から、やつと願つて僅かな旅費を與へられて、その時分京都に居つた兄を賴つて行つた。然るに兄も中々快よく請入れて吳れない。お前のやうな者には衣食の世話をしてやる譯にゆかぬから、丁稚に這入るなり何なりして飯を食ふやうにするが宜い。一時は自分の許に置いても、快しとして置く譯ではないといつて、奉公人口入所へ賴んで奉公に出された。かゝる次第なれば、當人の心では一向兄の處置を有難いと感せず、從つて自ら悔ゆるといふ考へも起さなかつた。

奉公人口入所に於て無職無藝の浮浪者と數日間群居して居つた内に惡感化を受けて當人の心は餘程野卑になつて了つた。その後ある所へ雇はれて居た間にまた小遣錢を使ひ散らして、仲間のものより借金したといふやうな事で、何時何事が出來てはならぬといふて兄は到頭これを逐出して了つた。そこで外に方法なく、曾て京都で知己になつた朋友が神戸の學校へ這入つて居つたので、其處へ尋ねて行つた。然るに生憎その友人か學校に居らなかつた。その時當人は外に賴るべき知人もなく、勿論所持金も盡きて、如何と

もすることか出來なかつた。よつて事務員が席に居らぬ間を見て、少許りの書籍を竊み、飲食の資を得るためこれを書林へ賣りに行つた、處ろが學校の藏書判あるより、書林では屹度竊取して來た書籍だと思ふてそのまゝ留め置いて學校へ報じた。で、罪跡忽ち露はれて當人は直ちに警察署に拘引せられ、重禁錮二ヶ月の刑を受けて神戸の監獄へ入つた、これがこの惡少年の犯罪の最始であつた。

その後刑期滿ちて出獄することゝなりしより、監獄から鄕里の父親へ當人の引取方を言ふて遣つたけれども中々引取らないから神戸監獄の内に置いて監視執行を受けさせ、それが濟んで始めて自由の身となり獄外へ出たけれど何處へ行くといふ目的がない。また何で衣食しやうといふ方法も立たない。殊にその日は雨天で傘も持たず、且つ時候不釣合の衣服を着て居たから寒くて堪らない。仕方がないから或家の前にあつた傘と下駄を盜んだが、その傘には印か附けてあつたから、跡から追駈けられて直ぐに押へられた。而して今回は前回よりも重い刑罰を受くることゝなつた。

第二回の刑期滿つると共に監獄署より父親の許へ通知した所が今度は父親の方でも引取らうといふことになつて旅費を送つて來た。處ろが二度も監獄に入り、在獄中知己となつたものが多數出來たので、當人が出獄歸國する時分にこれを訪ねて見た。するとよく訪ねて來たといふので此處に引留められ、歸國の時間を失ひ、その間に種々な話が出來て、到頭そのまゝ歸鄕することを中止して了ひ、刑餘の惡漢等と一緒になつて、彌々益々惡事を働き、終に强盜罪を犯して有期徒刑十五年の刑を受くるほどの惡棍となつた。此所刑の後が愈よ進歩して逃走脫獄の銘人、最も精巧なる竊盜者、邯鄲師、有名なる山邊音槌とまて昇進したのである。

此種の犯罪者が恐るべき犯罪者となつた事情を探査して見ると、犯罪と家庭との間に餘程深い關係がある

全くその不取締なる家庭が彼をして犯罪を構成せしむる原因となつたのである。第一には父親が非常なる大酒家で、家政自から亂れ、兒童の教育など少しも顧みることなく、無教育なる氣性の鈍き母親にこれを一任し去り、一家の經濟などに就ても殆ど無頓着であつた。此等の事がたしかにこの犯罪者を作つた遠因である。即ち七八歳の時分より母の手許の金錢を少しづゝ竊取して來た習慣が憎むべきもので、その習慣力が遂に怖るべき重罪を犯さしむる主因となつたのだ。而して多勢友達を集めて、自分が頭分になつて金を使ひ物を呉れ、友達よりわい〳〵言はれるのを喜ぶのが彼の嗜好であつたが、それがどうも惡嗜好であつた。故に兒童を惡い朋友の中に入れて遊ばせるといふことは、家庭教育上深く注意を加ふべき一要件であらうと思ふ。從つてこれを防ぐには僕婢の人物までも注意して撰定し、成るべく惡い感化を與へぬやうにすることが必要である。

余は犯罪人の履歴について種々調べて居るが、偶發罪といふものは極めて尠ない。貧窮のために竊盜をするといつても、從來盜みをしたことのない者が偶然これを遣つたといふのは極稀れだ、殆んど皆無といつても宜い位ゐだ。他人の金品へ手を出して竊むといふのは、兒童の時分より幾分かその心があつて出來るのだ。人間の天性として突然竊盜をするといふことは出來るものでない。その出來べからざる所の行業を敢てするといふのは、旣にその腦裡に惡い習慣が宿つて居る結果で、これが所謂習慣犯といふものである。

次に上流社會の人の身上に就いて、不規律なる家庭が矢張罪惡の源をなすものであるといふ實例を示して見やう。有爵者の中でも最も高き有爵者の三男で、その若殿樣が墮落した事情も大に世人の誡めとなすに足るものである。長男は現に家を繼いで重き官職を勤めて居る。次男は操行修まらぬ人で微かな業務

に就いて居る。三男は即ちこゝに述ぶる犯罪者で、余が取扱つたときは既に二度目の犯罪で、詐欺取財といふ罪名であつた。よつてその所由を調べて見ると、第一父親が不品行であつた上に、長男も心根邪まに品行惡しく、家庭は華族たるに拘らず頗る紊れて居つた。三男はある財産家へ養子に行つた。然るにその養家の財産に對して實家より干渉して改革を試みた。而して實家及びこれに附隨して共謀したもの丶所爲は犯罪者自身のなした事よりも寧ろ數倍なる惡事であつた。三男が犯罪者で懲役の刑罰を受けたといふと大層惡漢のやうに見ゆるけれども、本人は唯だ表面刑法に觸れたといふだけのことで、その心情を酌み內實を探りて見ると、原因が却て他に存在するのである。語を換へていへば、家庭の惡習が三男を墮落せしめて遂に犯罪者としたのである。故に家庭の整理といふことは今日世人の最も注意を拂ふべき實地問題である。

前の山邊音槌なるもの丶邪徑に陷つたのも、後の華族の三男の墮落したのも、當人と家庭との關係は殆ど同じである。然れば身分の尊卑に係はらず家庭の整理といふことは大に注意せねばならぬ。一家內より不德犯法のもの丶出るといふことは、啻にその一家の不幸のみならず社會の害毒である。而してこの害毒は何が原因かといふと、畢竟家庭の不取締、不規律、家主たるもの丶不品行等より起るのであるが、この原因を學理的に分類すると、先天的と後天的との二種となり、先天的原因の中で着目すべきものは遺傳であつて、この遺傳といふものは非常なる勢力を有するものである。併し遺傳によつて生ずる所の犯罪者は改悛せしめることは出來ないかといふと、さうではない。感化並に保護の法その宜しきを得れば、大抵は矯正することが出來るものだ。また學者の言によると、遺傳以外にも種々なる性情の關係が犯罪者を作る原因となることがたしかにあるさうで、現に余が取扱つて居る犯罪人に就いて見ても、その性情並に犯罪

の状態は略ぼ揆を同うして居るが、これを分類するならば七八種になるやうに思ふ。されどその原因はいかに構成されて來ても、犯罪後の敎誨、懲罰並に出獄後の保護法等が、よく備はつて居るならば、病的作用によつて起るもの丶外は改悛せしむることが出來る。

遺傳なるものは種々の方面に影響を及ぼすものであるけれど、特に人の性質氣象の上に現はれて來るもので、血統の上より來る遺傳、母親の胎内に居る間の直接遺傳等は確かに存在するやうである。また非凡なる人物の子に非常なる惡者が出るといふ説があるが、これも決して論據のない説ではない。何となれば、非常に豪らい人物とか、非常に惡い人物とか、さういふ種類の人物はその腦力を片調子に働かせるからして子供の性質も自然偏頗に出來るからである。曾て非常にわるい過激な犯罪者があつたが、そのものが過激な犯罪をする時分には、狂氣の如くになつて向つて行き、總べて腦力が片調子に働いた、其子供がどうも父親の系統を引いて居るやうで、平常の遊戯などをするも動もすると片調子に陥り、一つの事を覺えるとそれを四日も五日も繰返へし〳〵やつて居るといふことであつた。また犯罪人の中に巧みに窃盜を爲すものがあつたが、それ等も畢竟腦力が偏頗に出來たので、若しその腦力を片調子に善事へ働かせたならば大人物となつたかも知れぬ。またある酷い盜犯者に向つて、余はお前はどの位のことまで犯罪が出來るかと問ふた所が、それはもう私はどんな物でも盜まうと思つたら盜まぬことはありませんといふ。けれども錠前または戸棚の前に人が寢て居て附き切りに番をして居たらどうするかと問ふと、それでも盜むことが出來ます、寢て居た番人を傍へ連れて來て物を取つて後を締めてまた番人を連れ歸して置きますといふ。それは如何にして出來るかと聞くと、まづ番人の寢る時間と十分寢入つた時間とを計つて遣ります、番人が寢て居ると一旦物音をさせて眼を覺まさせる。番人が怪しいと思つて周圍を見ても不思議がないから大丈夫

だと思ふて安心して眠る、十分眠入つた時分を見てこれを蒲團のまゝ傍へ引連れて行き、物を取つてまた元の通り引直して置きます、私はそれ位のことまでは致しましたと答へた。これ等は畢竟非常に腦力を働かせた結果で、普通の人には不思議なる魔術を行ふものゝやうに考へられる位だ。兎に角遺傳より來る血統の關係は人類の犯罪上に重大なる影響を與へるといふことは今更ら多言を要せぬことである。

また直接の遺傳即ち胎中の遺傳は、古來より胎敎と稱へて世人の重きを置いたことであるが、余は實驗上より益々世の婦人等の此事に注意されんことを望むのである。母親の持つて居る性質はどうしても胎兒に移る。獨り性質の移るのみならず形體までも移る。子供の胎内にあるときは火事を見るものでない、火事を見れば痣が出來るといふことを古來言傳へて居るが、精密に調べたならばさういふ事があるかも知れぬ獨逸では曾て左の如き裁判事件さへ起つたことがあつたさうだ。ある處に一人の姙婦があつて姙婦の隣家は寄宿舍であつた。然るにその寄宿舍の二階に風體の卑しげな氣味のわるい一人の書生が居つて、姙婦もその夫もみなこれを忌み嫌つて居つたが、どういふものか、その書生が夫婦の出入りする時分にいつも屹度窓から見て居る、その度每に顏が見える。此方では見たくない、氣味がわるいと思ひながらも、始終顏が見合はされるやうになつて居る處が月滿ちて小供が生れ、漸々生長して來ると不思議にも、その子供の容貌は、彼のいやだ〳〵と思ふて居た書生によく似て居つた。でその夫は妻は書生と姦通しはせぬかといふ疑を起して起訴に及んだといふことである。かゝる次第なれば、胎敎といふことは、余の架說するまでもなく、世人か自家の幸福のため特に留意すべきことである。

終りに余が切言せんと欲するのは、蓄妾のことである。蓄妾が犯罪上に非常なる關係を有して居るといふことである。中流以上の家庭に出來る犯罪者にはたしかに妾腹のものが多いやうだ。それは余の實驗上爭

ふべからざる事質であるが、現に前項に述べたる有爵者の三男の如きも妾腹であつた、長男は嫡子で、次男と三男は庶子であつた。且つその妾なるものは性質の極良くないもので、今尚ほ生存して居るさうだけれど、その屋敷へは出入りを禁ぜられてゐるといふことだ。どこの妾でも妾には立派な人物がないので、その血統を受くる子孫には尠なからぬ害毒を殘すものと思はれる。故に蓄妾といふことは家庭と社會の兩方より愼重なる警戒を加へねばならぬ。これを要するに、いかに法律を嚴密にしても、敎育を普及しても各人の家庭が純潔ならず不規則に流れ、子女の敎養に力を盡すことを怠るに於ては、根本より國家の犯罪者を減ずることは出來まいと思ふ。乞ふ社會を清めんと思はゞまづ家庭を清潔にして貰ひたい。

幼兒の答案

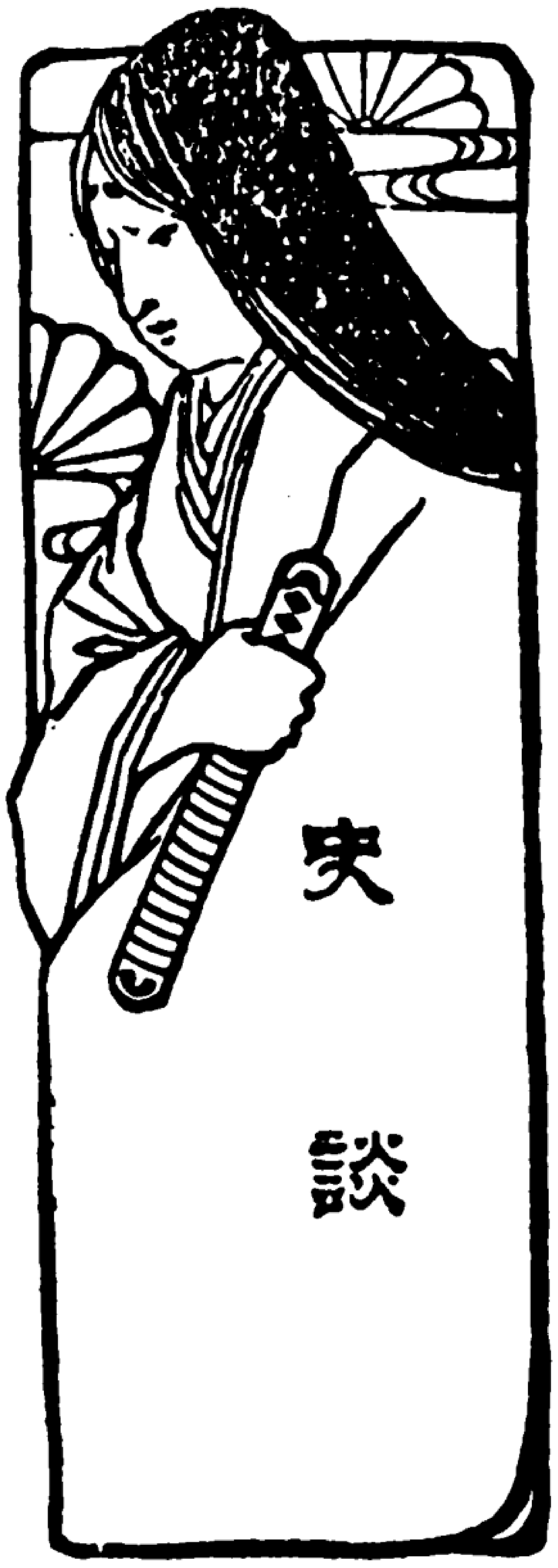
女子高等師範學校附屬の幼稚園にては兼て比較研究の爲め特に下等社會の幼兒を分室に入れて保育し居る事なるが數年前彼等に對して「大きくなつて何になりたいと思ひますか」と問ひし時男兒は八百屋、帽子屋、煎餅屋、人力車夫、牛肉屋、　女兒は髮屋、道具屋、烟草屋、吳服屋、　牛乳屋等と答へたりしよし然るに今度又試みに同室の幼兒」五十餘名に向ひ前の如き問を發したるに左の如き大同少異の答得たるよし亦以て彼等の理想の如何に變化した」るかを知るに足るべし

男兒の答

(一)初めに商賣人になつて兵隊に出て勳章を貰つて伊東大將になりたい
(二)吳服屋になつて兵隊に出て勳章を貰つてそれから大將になる
(三)大きくなつたら兵隊になつて働いて勳章を貰つて東鄉大將になつて露西亞人と戰をして提灯行列をする
(四)黑木大將になつて敵と戰つて勝つ

女兒の答

(一)赤十字になつて病人をなをしてあげる
(二)看護婦になつて怪我をした兵隊さんに藥を呑ましてあげる
(三)看護婦になつて兵隊さんをなをす



小楠公（二）

文學士　大町桂月

第二　櫻井驛

翌建武二年には、北條の遺臣時行等、亂を鎌倉に起しゝかば、八月尊氏に勅して之を討たしめ給ふ。尊氏乃ち征夷大將軍に任せられて、關東を管領せむことを請ひしも許されず。依て怒りて辭せずして闕を出で京を發し、弟直義と時行を駿河に討ち之を敗りしが、十月勅して師を返さしめむとすれども尊氏聞かず、そのまゝ鎌倉に據り、自ら僭して征夷大將軍と稱し、舊緣を糾合してはじめて反旗を飜へしぬ。不幸にして關東八州は、未だ王政に歸依するの色なく、忽ち風に隨ひて靡き、尊氏の根據立ろに成れり。

是に於て、正成京師を守り、義貞勅を承けて東征し、十一月には大に賊を箱根、竹下にやぶりしと雖、此時諸國、旗を擧げて賊に應ずるものあり、進んで鎌倉に追窮し難き勢となりしかば、まもなく義貞に詔して軍を返さしむるに至れり。尊氏乃ち直に追躡して西上し、書を正成に贈りて曰く、「某固より貳心なし。願はくば子と心を戮せ、共に亂臣義貞を誅し以て其頭を軍門に掛けむ。畿内六州は子其れ自ら之を取れ」と無禮を極むる言句を以てす。正成勿論之に答へず、直に其書を以て天皇に奏せしが、天皇大に之を義として嘉せられぬ。

越て延元元年、賊尊氏大兵を率ゐて京師に入寇す。正成は兵五千を以て宇治を禦ぎ、義貞は大渡を守りしが、共に利あらず、京師遂に陷りて、帝は延曆寺に幸し給ひぬ。正成は諸將と行在を護り、義貞以下とゝもに、下つて京師を攻めて恢復を圖るうち、正

成一策を講じて、一夕、寺僧數十人を戰場に派し、詐り泣て正成、義貞等の首を索めしめて、敵を欺き置き、翌夜炬火綿々、一隊を西に馳せしめて、官軍首領を亡ひて逃走する態を裝はしめければ、尊氏果して兵を遣はしてこれを途に要し、本陣の用意甚だ怠れる色あるを見定め、我兵大擧京師に入り、火を放つて掩擊したるに、敵軍脆くも驚き潰え、器甲を遺棄して西走するを、正成、義貞以下の諸將と、追擊して攝津に至り、累戰之を破りしかば、尊氏支へ得ず、直義と共に海に航して西の方筑紫に落ちぬ。

はじめ尊氏京師に入寇するや、豐後の大友貞宗、舟師三百隻を率ゐて來り援けしが、尊氏敗れて湊川に退くに及び、貞宗勸めて曰く、『少貳貞經等筑紫にあり、もとより夙に心を將軍に傾く。願はくは速に船に觸して去れ。然る後徐ろに九國の兵を招發して以て來らば、再勝期すべき也』と。尊氏即ちこの言に從ひしなり。洵に尊氏の大擧再來は智者を待たずして知るべければ、正成は直に逃ぐるを逐ひ、海を渡つて討滅ばさんと欲し、策して曰く、『機は失ふべからず、敵は舒ばむべからず。今勝に乘じて追躡せば、之を虜にせしむこと嚢中の鼠を探るが如けむのみ』と、義貞これを肯ぜず『賊已に窮迫せり、之を緩うするも何の害をか爲さむ。且わが師疲弊せり姑く士を休めて、然るのち之を討つも未だ晩しとせざるべし』といふ。正成更に進んで曰く、『方今官軍屢ば克つて勇氣百倍す。賊の兄弟敗亡の餘、膽落ち氣竭く、一擧にして殲すを得べし。今機を失して取らずば、彼必ずや九州を徇へ、勢復た振ひて、山陽南海、靡て之に從はむ。後に至りて臍を嚙むも及ばじ、願はくは將軍之を熟圖せよ』と、利害の岐るゝところ掌を指すが如く論爭せしも、義貞終に果さず。よつて諸將、兵を斂めて京師に歸りしが、神ならぬ身の、後事を卜して正成の言に耳を傾くるものゝあらざりしは、眞に痛恨に禁へざるところ、史を讀みて此處に至る、誰か慷慨切齒せざらむや。

果して夏五月に至り、尊氏は舟師五千隻を從へて

海より、直義は歩騎二十萬を具して陸より、相互んで東に攻め寄せたり。是より先き赤松則村、播磨の白旗城に叛旗を飜しければ、義貞これに赴き攻めしが、圍むこと久しくして城は未だ落ちず。其間に尊氏兄弟の大軍寄せ來れるにより、義貞は白旗城の圍を解きて兵庫に陣し、以て直義の陸軍に當らむことに決心せり。

さる程に京師大に震動し、正成に詔して往て義貞を助けて賊を防がしむ。正成が第二の建策空しく用ゐられず、竟に死を決せるは即ちこの時の事なりき曰く『賊九州の荒手を收め、大擧して來れり。軍勢思ふに必ず昌熾ならむ、わが疲兵を以てしては、恐らくは當ることかなふまじ。陛下宜しく義貞を召還したまひ、車駕暫く蹕を叡山に移して、賊をして擅まに京師に入らしめ置き、而して臣は河内に歸り、近畿三四國の兵を招聚して、河道を塞ぎ、糧道を絕ち、その疲弊を待ちて、然る後徐々に前後より齊しく進まば、當に一擧にして斃し得らるべく覺え候ふ臣秘かに義貞の計を揣るに、亦蓋し此に外ならじ。たゞ戰はずして退陣するは、物議に渉るが故に、輙く歸り來らざるのみ。夫れ戰ははじめ或は負くるありとも、もとより深く念とするに及ばず。唯終りに利あるをのみこれ欲すべくこそ候へ。且慮るに兵庫の地、平曠にして大軍を待つべき地勢にあらず。請ふ重ねて聖鑑あれ』と誠意色にあらはれて奏上しければ、居並ぶ公卿も、武事は宜しく帥臣に委ぬべしとて、敢て異議を挿むものあらざりしが、獨り參議藤原清忠、之を不可として奏すらく『王師東征より賊西走に至るまで、威靈の加はるところ、必ず寡を以て衆を制せざるはなし。これ惟みるに天助、戰略にはあらざる也。況や賊今率ゐる所、必ずしも前日東より來りしときの强盛なるに及ばず。未だ一鋒をも交ゆるを聞かざるに、陛下擧措を輕くし、遽かに京師を棄てなば、征討の將士も亦隨つて退思を生ぜむ。且今春既に一たび延曆寺に幸し給ふ。今復た倉皇蹕を彼に移さば、何によりてか、萬乘の重きを示

し候ふべき。速に正成を遣して、郊外に決戰せしめらるべし。天意の向ふところ、勝敗の數、既に明に候ふ。』と陳べけるに、帝正成の説を却けて、清忠の議を納れ、征討の詔勅再び降れり。正成今は申上ぐる詞もなく、天下の事唯一死あるのみと嘆じて退出し、即ち五百騎を以て道に上りぬ。まことに長袖者流の事を誤る、古今其揆を一にして、後世の志士をして悲憤にたへざらしむるものあり。史を讀むもの、此處に至りて再び扼腕して長大息を發せずむばあらざる也。

正成もとより正行の教育に力を盡して、その體軀の成長、思慮の發達をはかり、多くの合戰には、之を抱き之を肩にして、敵味方の懸引、物具の種類、打物の功用、糧水の備へ、點檢の方法に至るまで、あらゆる陳旅の生活に慣れしめて、能くわが後嗣の任に堪へしむべき資質を作らむとしぬ。此年正行は既に十一歳となりて、最早戰爭は見なれ聞きなれて深く興味を感じ、勝敗の岐るゝ所以、今や詳かに之を解することを得べし。乃ち今回もまた正成に從つて、兵庫に向ふ陣中に加はりたりしなり。

しかしながら正成は、此度こそは最後の合戰なれと期し居れば、之を伴ひ行くべきにあらず。途次、櫻井驛まで來りしとき、正行を膝下に呼びよせ、授くるに嘗て天皇より賜はりたる寶刀を以てして、徐ろに説き聞かせて曰く、『聞けよ正行、獅子兒を產みて三日を經ば、數千仞の絶壁より之を擲ちて、その勇を試みるに、敎へざれども中より跳ね返りて、死することあらずといへり。況や汝今や十歳に餘りぬ一言耳に留まらば、我敎誡に違ふことなかれ。今度の合戰は誠に天下安危の岐るゝところ、今生にて汝が顏を見むこと、是を限りと思ふなり。父既に討死しぬと聞えなば、天下は必ず尊氏の掌握に歸すと心得べし。然る上は、いかに誘はるゝと雖、父が多年の忠烈を捨てゝ降參することあるべからず。玉は碎くるも其白を改めず、竹は焚くるも其節を毀たずといへるを、汝よく〳〵思ふべし。降參不義の行跡あ

らば、大國のまたの主となりて、家富み榮ゆとも何かせむ。不義の富貴は大なる耻とせよ。我つら〳〵思ふに、天下は暫く尊氏の代となるとも、今より二十年を經なば、當に乘じて討滅すべき際を生ずべきこと疑を容れざる也。一族若黨のもの一人にても生き殘りてあらむ程は、金剛山の西に立籠りて、靜かに期を待ち、いざとならば、命を養由が矢さきに懸け、義を紀信が忠に比せむことを心がけよ。連枝のものどもとは水魚の思をなし、郎從を憐み扶助することは必ず父のする如くせよ。自身は富みて郎從に辛き目を見すべからず、郎從は主を恃みてこそ、天下の事には與るべけれ。八尾の僧正和田恩地をもて父と思ひ、何事も母に談じて之を惱ますことあるべからず。晝夜學文を怠るなかれ、年十五とならば、専ら義理を尋ね究めて、文字を識り語句を諳んずることに思を勞せざること肝要なり。この誡を守るこそ汝が第一の孝行なれ。」と理を説き義を明にして説き諭し〻と雖、子供ながらも父の死を捨て〻獨り故郷に歸るに忍びず、是非に伴ひてよとむつかるを、もとより叱つて寄せつけず。せん方泣く〳〵河内を指して、悄々と陣を出で行くいたいけなる後姿を、正成、見えぬまで眺めやりて眼をしばたゝけば、並居る郎黨も鎧の袖をぬらさぬものあらざりき。

やがて正成兵庫に着きて、義貞と謀を合せ、通夜の物語に數盃の興を添へて、暗に最後の別を告げ、明くれば五月二十五日、見渡せば煙波渺々たる海の面を、十四五里の程も漕ぎつらね、舳艫をならべて押寄せ來りぬ。陸はと見れば、須磨、鵯越のあたり旗四五百旒も立ち連りて、雲霞の如くに攻め上りぬ海陸の兵勢、おもひの外に夥し。

依りて部署を定めて、正成は手兵七百人を以て、湊川の西に陣して専ら陸軍を禦ぎ、脇屋義助は五千人を以て經島に、大舘氏明は三千人を以て燈爐堂南に陣して水軍に當り、義貞は即ち自ら二萬五千人に將として、和田岬に總本陣を搆へ、以て兩軍に當る。

程なく水軍の先鋒細川定禪、數百隻を從へて、經島に向ひ來るを、義助の兵擊ちやぶりしが、定禪は更に東して、官軍の後を絕たむと欲し、舟師を麾いて東の方紺邊浦に向ふ。義貞すなはち義助、氏明の總勢を殘らず引率し、舟を逐ひ岸に緣りて東に去り正成と相隔ること數里になりぬ。之を待ちて尊氏の本陣は、大艦數千艘をその間に寄せ、和田岬より上陸して、官軍の營地を取り繞り、正成の背後に出づ此時直義の步軍は既に須磨より迫り來り、孤軍正に腹背に敵を受けたり。

正成望み見て、即ち吾道の窮せるを知り、正季とともに先づ西、直義の陣に赴き、縱橫奮擊、殆んど直義を擒むとするに至りしかば、尊氏はその危急を見、義貞の方面を捨て丶、直に正成の軍後に肉薄し來りぬ、正成回戰、東を防ぎ西を伐つこと數次、七百の士卒最早殆んど殲き、正成躬らも亦十數創を蒙り、進退意の如くならざるに及びければ、今はとて弟正季の手を取り、退いて民家に入り、正季に向ひて曰く、『抑も最後の一念によりて、善惡の生を引くといへり。九界の間に何が御邊の願なるぞ。』と問へば、正季は打笑ひ『願はくは七度まで人間に生れて。朝敵を滅ぼさばやとこそ願ひ候へ。』と答ふ。正成よに嬉しげなる氣色にて、罪業深き惡念なれども我もかやうに思ふなり。いざさらば同じく生を替へて、此本懷を達せむと契り、兄弟共に刺し違ひて、同じ枕に斃れ臥す。續いて宗徒の一族十六人、隨ふつはもの五十餘人、思ひ〳〵に居並びて我後れじと割腹し、兩將の跡を追ひて自殺しぬ。

楠既に討死しければ、尊氏と直義とは兵を合して義貞の軍に迫る。義貞迎へ戰ひて、しばしは、ひるまず揉合ひしも、幾倍の大敵に、或は討たれ、或は落ち、味方の勢、最早殘りすくなく見え來りぬ。義貞も今は力落ちて、とても此度の戰はかなふまじとて、殘兵を收めて歸洛すれば、上下貴賤、周章狼狽亂麻の如くに騷擾すれども、今や策の施すべきなく空しく京師を立退きて、賊の蹂躙に委せざるべから

ざるも、而も絶て回復の望あるにあらず。噫また誰をか恨みむや。

第三　持佛堂

矢叫び鬨の聲こそ暫し收まりしかども、戰雲未だ暗澹として、血腥き風、人を襲ひ、伏屍縱横、餓狗徘徊する六條川原のほとり、此見よかしに梟されたるは問ふまでもなく楠判官の首なりけり。僞首をかけて敵を欺くこと、往々その頃の軍陣には流行しけれども、固よりこれなるは紛ふべくもあらぬ、敵にも味方にも夙に其相貌を知られたる正成の首なりければ、何者の陣中つれ〴〵の惡戲か、

うたがひは人によりてぞ殘りける
　まさしげなるは楠が首

と一首の狂歌を札に書きて立てたるものあり。流石の敵將尊氏も、目のあたりこの無慘なる梟首を見ては、そゞろに憫れを催し、朝家私日、親しく相交りし舊好をも思ひ出で、殘れる妻子の今一度、空しき貌を見まほしく思ふべき情をも察しやりて、卒にもたせて其首を河内の家まで送り屆けたり。

豫て思ひ設けたることながら、湊川の戰報を得ては、今更の如くにうち沈み、しばしば爲すことも知らず、西天を仰いで茫然たる夕まぐれ、夢の如くに包を受取り、ゆめの如くに之を開き見たる母と正行、さて夢ならざるを如何にせむ。眼塞がり色變じて、替りはてたる容貌に、喃我夫、喃父上とばかり、語も出でず、暫し正體もなく泣き伏しゝも理りなり。素より死を決しての御出陣、後の成行には御心を留められず、天晴勇ましき御最期をとて、送り參らししものゝ、さて今はの際の痛恨遺憾、天下の行末を思し召して、如何ばかりか無念の齒嚙を爲したまひけむと思ひやれば、妻たる身、何として靜かに後圖を考ふるの遑あるべき。正行教養の任をも忘れはて寧ろ此儘に御跡をとまでおもひつめぬ。

正行も劣らぬ覺悟、櫻井驛にわれを誡めて、別れたまひし御姿は忘れざるに、今ははやかく變りはてし事を思ひ、母の限りなき歎きの樣を見ては、徒ら

に泣きしずみて居らるべき場合にあらず。おもむろに泪を袖に抑へて、持佛堂の方へ立去りしを、母も是はと怪みて、妻戸の方より覗き見れば、こはいかに、父が櫻井驛にて形見に遺し給ひし恩賜の刀を、右の手に抜き持ち左の手にて袴の腰を押しさげて、すはや突き立てむと身構へせり。母は驚き走りよりて、正行の小腕に取縋りたれど、しばし語も出でざりしが、やゝありて言ひきかす樣『栴檀は二葉より芳しとかや、汝幼くとも父の子ならば、かばかりの理に迷ふべきやは。幼な心にもよく〳〵事のさまを思ひて見よ。父上兵庫へ向ひしとき、汝を櫻井の宿より返し留めしことは、腹を切らしめむ爲にもあらず、なき跡を弔はしめむ爲にもあらざりしならずや、父たとへ運命盡きて戰場に命を失ふとも、主上何處にも御座ありと承はらば、死殘れる一族若黨を扶持し置き、今一度軍を起し、朝敵を滅ぼして、御代に立てまいらせよと仰せられしことは、汝具さに聞き來りて、母にも語りしものを、何時のほどに忘れしぞ。かくては父の名をも失ひ果て、君の御用に合ひ進らせむことと思ひも寄らず』と泣く〳〵諫め留めて抜きたる刀を奪ひ取りぬ。正行實にもと悟りて、一言のいらへも爲し得ず、其儘母の膝に泣き倒れ、共に悲歎のなみだにくれたりき。

其後は正行、父の遺言、母の教訓を肝に銘して、須臾も心を天下の形勢と、我身の天職とより離さず、母また悲しき月日の間にも、子の生長を樂みとし、日常亡き人のこゝろを心として遺子の感化薫陶を怠らず。正行朝夕の戯れに、近傍の童子を集め、陣旅の眞似事をなすに、竹馬に鞭をあてゝ、是は朝敵を追ひかける處なりといひ、自ら大將株となり、突進して他の首を伐る樣をなし、こは尊氏の首を捕るところなりといひて、餘念もなく騷ぎまはる態を見ては、母はよろこび微笑みて之を勵ますを常とせしが、かゝる姿を見るにつけては、思ふともなく世の味氣なき移りかはりに思ひを及ぼし、人知れず顧みて、眼を拭ふこともありき。雨の日、月の夜は、長幼の

子を膝側に招き寄せ、忠孝仁義の道は更なり、古今史乘の大要をかたり聞かせ、殊に鎌倉の順逆、足利の反覆より、畏くも一天萬乘の御災厄に至りては説くもの聞くもの、共に屢ばなみだに咽び、正成戰陣の奇計妙策を聞かしむるに至りては、等しく手を擧げて快哉を叫びたりしなり。

扨も正成戰没し、義貞敗績してより、尊氏はもはや向ふところ敵なく、長驅して京師に馳せ向ひしかば、帝は避けて叡山に幸し、義貞等諸將、之を守護して尊氏を拒ぐにつとめたり。正成地下の感慨果して如何なるべき。攻守たがひに勝敗ありて、敵方にては高師重死に、味方にては名和長年死にしが、尊氏は毫も疲弊の色なく、間もなく光明帝を擁立して北朝の基を開き、着々策略をめぐらし、先づ兵を以て諸路を扼し、官軍の糧道を斷ちぬ。而して行在の飢窘、日に甚しくなり來りしを見すまして、使を遣はし誓書を上りて、歸順の意を表し、我罪を恕して一日も速に車駕の還幸あらむことを請ひしが、帝幸に之を聽し給ひしかば、尊氏は手を拍て、我術成るを喜び、更に從駕諸將に書を贈りて招慰しぬ。是に於て義貞は皇太子を奉じて、北の方越前に奔れり而して車駕京に還り來るを待ちて、尊氏は得たりかしこしと、直に花山院に幽閉し奉り、兵を置て監護し、且從駕公卿の官位を剝奪して、甚しきは之を殺し、一歩を進めて、神器を新主に傳へられむことを迫り請ふに至りぬ。帝即ち止むなく僞器を授け給ひ夜潜に神器を奉じ、花山院を出で丶吉野に幸せられければ、正行幼年ながらも、郎黨を引具して參内し天機を伺ひ奉りぬ。

以上は即ち正成戰死の年の暮までの出來事にしてもし正成の計略が、初めに用ひられしならば、か丶る變亂には決して立至らざりしなるべく、後世の志士をして、長へに悲憤の淚を流さしむ。

斯る亂れの中に延元元年は暮れ、あくれば延元二年、賊軍は越前金崎に義貞の一族を攻むるに力を盡し丶が、城つゐに陷りて皇太子は虜にせられ、尊良

親王を初めとし、新田義顯、里見時義以下戰沒して南軍益々非運に向ひ、源顯家詔命を承けて、各地を攻略すれども、殆んど大勢を挽回するに由なく、義貞は再び越前杣山に籠りしまゝ年を送り延元三年を迎へしも、官軍の旗色、日に益す衰へて、主上の宸慮は増すのみなり。春の半ば、義貞、越前府城を拔き、北陸響應して官軍稍振ひしも、暫時の夢、四月には尊氏、恒良、成良の兩皇子を鴆殺して、愈よ暴戻を恣まにし、顯家は五月に名和長高と共に高師直を攻めて敗死し、加ふるに新田義貞は、七月に藤島城を攻むるうち、流矢に中り、正成の跡を逐ふに至りぬ。第二の正成義貞は夫れ何處にかある。何れの日にか赫々たる天日を拜するの機に際會するを見む。

南朝の不幸はこゝに止らず。翌る興國元年八月九日といふに、天皇御不豫の事あり。次第に重らせ給ひて、耆婆扁鵲が靈藥も、施すに其驗を表はさず。御脉既にかはらせ給ひ、晏駕の期遠からぬやう見えたれば、典藥頭の注進に、大塔の僧正忠雲馳せ參じ御枕に近づき、泪をおさへて奏すらく『さても神路山の花再び開き、石淸水の流れ遂に澄むまでは、佛神三寶も捨てまゐらすること、よもわらじと存じつるに、今はたこの御態を如何にせむ。今は唯ひとへに十善の天位を捨てゝ、三明の覺路に趣かせ給ふ御事をのみ、思召し定められ候ふべし。最期の一念によりて三界に生を引くと、經文にも説かれて候へば現世の御事、よろづ叡慮にかゝり候はむ事をば、悉く仰せ置かれ給ひて、後生善所の望をのみ、御心にはかけられ候ふべし。』と奏上すれば、主上苦しげなる御息を吐かせ給ひて、『妻子、珍寶、王位が身に隨はざることは如來の金言、朕之を體す。たゞ生々世々の忘念となるべきは、朝敵を滅ぼし盡して、四海を泰平にせむと希ふのみ。朕が亡き後は、第七の皇子を位に即けて、賢士忠臣、事を謀り、正成、義貞等の子孫を股肱として天下を鎭めよ。骨は縱令南山の苔に埋るとも、魂魄は常に北闕の天を望まむと欲

す。ゆめ命にそむき、義を輕んずるなかれ。』と最後の綸言を遺されて、右の御手に御劔を按じ、左の御手に法華經五卷を持たせ給ひて、月の十六日遂に崩御あらせられぬ。漢土西邦は知らず、本朝に在てはかくばかり限りなき御無念、御憤怨の裡に世を去り給ひし天皇は、此を外にしては殆んど在らせられず史をみるもの此處に至りて、泫然として涙下り、憤然として髮逆立たずんばあらず。御葬儀は遺勅に從ひ、御臨終の服御を更へず、御座を正しくし、棺槨を厚くして、吉野山麓に地を相し、北向に葬り奉りぬ。滿山寂寞として、日は既に暮れたるころ、舊臣后妃、一經涙盡きて、憂愁いまだつきず。恨を天上の月に訴へて、幾度か御墓前に逮夜しけむ、推し測るもなみだ也。

即ち後村上天皇、十二の幼齡を以て踐祚し給ひたれど、中流船覆りて激浪に漂ひ、暗夜燈消えて驟雨に逢ふが如く、數多き卿相雲客、唯浮雲の思をなして、疾くも魔魅の世に變らむとするを憂ひ、思ひ〳〵に身の隱家を索めむが爲に動搖し居たるが、楠正行時に歲十四、常ならば東西も分かぬ年歯ながら、つとに先帝御不豫の事より、崩御に至る消息を詳かにして、いかでか座して途方に暮るべき。直に從弟和田正朝と共に、兵二千を率ゐて、急ぎ吉野に詣で、行在警護の任に當り、諸臣の動搖を鎭撫して、しづかに時機を待ちて北軍討伐に努力すべきことを知らしめ、大に士氣を鼓舞して、一條の光明を諒闇の世に繫ぎけり。

のみならず、先帝の喪に會して、近畿の民叛旗を飜して、竊かに款を足利氏に通ずるもの少からぬ樣子あるを、正行探り聽きて、苦々しき事におもひ、或は容易ならざる大事に至らざるやと憂ひ、ひそかに策を案じ、轉瞬の間に間諜を十餘所に配置して、嚴に動靜を偵察し、報ずるところ怪むべきものあるに會へば、則ち之を誘ひ寄せて途中に要擊し、遠近また一異類なく、暫く枕を高くするを得べきに至れるを確かめて、闕に詣で、伏奏し、然る後還て之を

母に告げぬ、斯る大事を母に諮らず、自ら謀り、自ら案じて、迅雷疾風の如く決行するを見ては、母は莞爾として之を悦び、更に厲色して未來の大功を勵まし丶が、顧みて規摸狹小ながらも、建策用兵の神速なる、先人に髣髴たるものあるを憶ひ出しては、またおのづから涙を催す種ともなりしなり。

正行は尙も天下の擾亂を憂ひて、片時も心休まず仁王經を書寫して吉野の社に奏納せしこと、左の遺墨によりて知るを得べし。

今度仁王經法施し奉る旨趣者、

先帝崩じ給ひしより、日毎に朝憲おとろへ、恰も水の卑につき、或は氷上に太陽の臨むがごとし。臣等　主上のおゝむために、しば〳〵龍鬚を撫し虎尾を踐むて、胸を冷すといへども、まぬがれむことを欲せず。しかはあれ、今　朝のかくおとろへさせ給ふうへは、人力の及ぶ所にあらざれば、謹で此聖經を書寫し、永く寶前に納め奉り、神明の照鑒によりて、天下泰平ならしめ、速に宸襟をやすんじたてまつらむ事をねがふものなり。

いはし水清きながれのたえせずば
昔しにかへせ君の御代をば

興國二年辛巳五月十日　正行花押

（つゞく）

女子大學寄宿舍の献立

家庭的料理の模範と持囃されし同大學最近一週間の献立を聞き得たれば臺所の参考として此に掲ぐ

	朝	晝	夕
月	福神漬	油揚げ、昆布、干瓢のすまし汁うらくす	鶏卵味附麩の煮つけ
火	筍の胡麻汁	牛蒡と蓮の白あえ	焼鮭
水	海老、わかめのすまし汁	ちやいんけんのにつけ	パン、筍の煮つけ、サラド（ホテトー海老）
木	筍、椎茸飯菜ひたしに花かつを	千切大根油揚げ	麺類
金	豆腐のすまし汁菜ひたし	めざし	照燒、筍の甘煮
土	筍、わかめ、煮つけ	鮪刺と煎豆腐	パン、ベークトソ井ツシユ、サラド（菜、玉子）フリヤソーブ、チコレート、夏蜜柑、カツフ井ー

東關紀行（六）

文學士　境野天華

その外由比の浦と云ふ所に、阿彌陀佛の大佛を作り奉るよし語る人あり。やがて誘ひてまゐりたれば尊く有難し。

〔通解〕昔からの由緒ある寺社の數は斯く數へ立てられぬほどであるが、此の頃になりても、此の外に由比の浦と云ふ所に阿彌陀如來佛の大きな御佛體を作りかけてゐる噂をして聞かした人があつたので、自分は其人を誘ふて往つて見たが、實に尊くもまた有難く拜がまれた。

事のおこりを尋ぬるに、本は遠江の國の人淨光上人といふものあり。過ぎにし延應の頃より關東の高き賤しきを勸めて佛像を造り堂舍を建てたり。其のみぎり既に三が二に及ぶ。烏瑟高く現はれて半天の雲に入り、白毫新に磨きて滿月の光を灼かす。佛はすなはち兩三年の功速に成り、堂は十二樓の構へ望むに高し。

●烏瑟、髻、佛頂。●白毫、佛の眉間にある白き毫毛。

〔通解〕此の大佛の抑もの緣起と云ふはこうである本は遠江の國の人で淨光上人と云はれた出家があつた。去る延應年間の頃から關東地方の貴人と云はず、賤者と云はず、說き勸めて一基の大佛像を作り、其の佛像を安置すべき御堂を建立したのが、此の大佛のはじめて、其の際已に三が二丈は出來上りてゐたのである。今日見奉れば、大佛の頂は高く高く空に聳えて眉間の白毫の光は滿月の光りを見せてゐる尊とさ、二年三年の長い年月を費やして、此の大佛は成就したのであるが、其の

大佛を納めてある堂は幾棟（十二樓とは單に建物の多きことを云つたもの）となく空に高く聳えてゐる。實に何とも云へぬありがたさ。

彼の東大寺の本尊は聖武天皇の制作、金銅十丈餘の盧舍那佛なり。天竺震旦にも類なき佛像とこそ聞ゆれ。此の阿彌陀は八丈の御たけなれば、彼の大佛の半よりも進めり。金銅木像のかはりこそあれども、末代にとりてはこれも不思議といひつべし。佛法東漸のみぎりにあたりて權化の力を加ふるかとありがたく覺ゆ。

●●權化。佛、衆生濟度の目的を以て姿を變へ、相を異にして各所に出現するを云ふ。

（通解）彼の奈良東大寺の本尊になりてゐる大佛は聖武天皇の制し作らせ玉ふ所で、其の盧舍那佛の身の丈は十丈から出ておゐでになる。此のやうに

大きい佛樣は天竺（印度）にも震旦（支那）にも絕えて見られないと云ふことである。それに此の阿彌陀佛は其の身長八丈に及んでゐられる即ち奈良の大佛に比べても半分よりもずつと高い。奈良の大佛と此の鎌倉の大佛とは銅製と木造との區別差異はあるにしても末世の今日にありて不可思議甚深の次第で、印度傳來の佛教が次第に東漸して此の國まで擴まり、茲にまた佛の力を表はしてゐるのであらうと實に有難いことに覺へた。

かやうの事ども見聞くにも心留らずしもなけれども文にも暗く、武にも缺けてつひに住みはつべきよすがもなき數ならぬ身なれば、日を經るまゝにたゞ都のみぞこひしき。歸るべきほどと思ひしも空しくすぎゆきて、秋より冬になりぬ。

（通解）このやうにして見もし、聞きもする事につけて心が引きつけられるのではあつたが、元來文

事の嗜みもなければ武藝の心得もない自分の事、何處を據所に永く此の鎌倉の地に定住（すみはつべき）されやう斯くも云ひ甲斐ない身を以て日一日と送りて見た揚句はまた故郷の都が只管らに戀しくなりて來て、いつは歸京しやうと心に其の期を樂しみにしてゐたが、それもまた故障が出來て空しき望みとなり、月日は過ぎ去りて疾く、何時しか秋も暮れて寂しい冬の時節となつた。

蘇武が漢を別れし十九年の旅の憂へ、李陵が胡に入りし三千里の道の思ひ、身に知らる心地す。聞きなれし蟲の音もやゝよはりはてゝ松吹く峰の嵐のみぞいとゞはげしくなりまされる。

●蘇武、●李陵、共に前漢孝武帝の時の人、蘇武曾つて匈奴に使し、匈奴の擒となりて抑留せらるゝこと十九年にして還りた。李陵は蘇武の友人匈奴を征して胡地に入り、しば／＼功を立てたが後ち敗れて匈奴に降りた。

（通解）昔漢の蘇武が國を離れて十九年の長い年月の間、匈奴のえびすの國に物憂き旅の身を送つた時の心の中、李陵が三千里の遠き路を經て胡國に入りた時の胸の中はどうであつたらうかと自分の今の境遇から察して略こうもあつたらうかと想像される。秋の頃しきりと聞きなれてゐた蟲の聲々も冬になるにつれて次第に弱り行き遂には全く絶え果つるのが極めて心細い。それに引き換へて松の梢を吹き越して行く冬の木枯らしは寂しい空に下層物凄く日々とふき募りて烈しくなりてゐる。

懷土の心に催されて、つく／＼と都の方を眺めやるをりしも一行の雁空に消えゆくもあはれなり。

かへるべき春をたのむのかりがねも
　鳴きてや旅の空にいでにし

（通解）故郷の戀しさが堪へきれないで思はず眺め

らるゝ都の空、しげ／＼と眺めて居ると丁度行儀正しい一連の雁が其方の空を飛びゆくあはれさ、其の影が次第に消えてしまつて何も殘らなくなつた時の寂しい心と云つたら。

あゝ今彼方に消え去りた雁の一連それもまた來ん春までとそれを頼みにして泣くなくも旅の空に出で來たのであらうか、さうであるとすれば如何にも自分の身の上に似て居るのである。あゝ自分も今故郷の方へと思ふ心は夜となくひるとなく持つてゐても思ふやうに自由には行かぬ。さうすれば鳥の方が自分よりは増しかしらむ。

かゝるほどに神無月の二十日あまりの頃、はからざるにとみの事ありて都へかへるべきになりぬ。其の心の中水茎の跡にも書きながしがたし。錦を着る榮えはもとより望む所にあらねども故郷に歸るよろこびは朱買臣に相似たる心地す。

ふるさとに歸る山路の木からしに
　おもはぬ外の錦をや着ん

●●●朱買臣。前漢孝武帝に仕へた人、嘗つて其の故郷の會稽の大守となつて赴んとする時、帝、買臣に向つて云はるゝには、富貴にして故郷に歸らぬのは丁度錦繡の立派な衣裳を着けて夜行するやうなものだ。と云ふことを云はれた。（即ち故郷には錦を飾れの意）

（通解）此のやうな具合でどつちともつかず日を送りて來たが、神無月（十月）の二十何日と云ふ時になりて思も設けず偶然の事からして都の方へ還ると云ふことになつた。其の時の自分の心の中には何とも云はれぬ感情が溢れてゐて、其の感情は筆にも文にも盡くされることではない。もとより自分は彼の昔の朱買臣のやうに故郷に錦を飾りて花花しく還ると云ふさう云ふ有難い身分ではないが唯故郷へ還る心の中の喜びは決して其の朱買臣に

も劣りはするまいと思はれた。故鄕に還る道すがらの山道を通る時、冬のことであるから吹き下ろす木枯らしは木々の梢の霜枯れの葉を吹き拂ふことであらう、錦を着て還ることの出來ぬ自分の身に意外思もよらぬ錦を被せることであらう。

十月二十三日の曉、旣に鎌倉を立ちて都へおもむくに、宿の障子に書きつく。

なれぬれば都をいそぐけさなれど
さすが名殘の惜しき宿かな

（通解）十月二十三日の明け方に愈々鎌倉を辭して故鄕の京都へ向けて出發しやうと云ふ時になりて長らく宿をしてゐた家のあるから紙（襖）に一首の歌を書き殘した。

今日からは愈々故鄕の都へ還ると思ふと心が先きに馳せてそは〳〵として落付かぬ此の朝になりていよ〳〵此の宿をも振り棄てゝ行くことゝ思ふと流石にまた名殘が惜しい。人間の心ほど譯の分らぬものはない。（をはり）

漢文講義

阿井笛村

鑄工龜（角田簡）

龜、長崎人、其父業レ鑄二香爐一、世稱二絕巧一、無二男子一、傳二法其女龜一、龜爲レ人豪放好レ酒、常與二丈夫一遊、其家單乏、然未三肯急二意於治生一也、或有二好事者一、先納二數十金一乞レ之、則先買二酒肴一、招二隣里一酣飲數日、而後就レ工、竟顯二其名一、奉行嘗承二執政之意一、使レ龜製二香爐一、踰二半歲一不レ成、奉行任滿將レ還、乃使二鄕吏一促レ之、期僅而成、猶未二肯進一、鄕吏懼、遣二卒數人一守二其家一、而督責嚴急、龜不二以

措ニ意矣、一日置ニ其所ㇾ製于案上一、踞ㇾ牀、持ニ大管ㇾ吹ㇾ烟、熟視數刻、風致不ㇾ愜ㇾ意、乃擧ニ大斧一一喝打碎、迨ニ奉行東上一、香爐竟不ㇾ隨矣

(讀方)鑄は長崎の人なり、其の父香爐を鑄るを業とし、世々絶好と稱せらる、男子なし、法を其の女鑄に傳へぬ、鑄人と爲り豪放にして酒を好み、常に丈夫と遊ぶ、其家單乏なれども、未だ肯て意を生を治ることに急がざるなり、或は好事の者ありて、先づ數十金を納れて之を乞ふときは、則先づ酒肴を買ひ、隣里を招きて酣飲數日し、而して後工に就きぬ、竟に其の名を顯はせり、奉行あり嘗て執政の意を承け、之をして香爐を製らしめき半歳を踰ゆれども成らず、奉行任滿ちて將さに還らんとす、乃ち鄕吏をして之を促さしめ、期僅にし成れり、猶未だ肯て進めず、鄕吏懼れて、卒數人を遣し其の家を守らしめ、而して督責嚴急なり

鑄以て意を措かざるなり、一日其の製する所のものを案上に置き、牀に踞して大管を持し烟を吹き熟視すること數刻なりしが、風致意に叶はず、乃ち大斧を擧げて一喝打碎せり、奉行の東上するに迨べども、香爐竟に隨はざりき

(譯解)本文鑄女の話は貞婦とか烈女とか云ふものと異なりて、奇女子の奇行に係はるものでありま す、鑄女は長崎の人でありまして、其父業ㇾ鑄ニ香爐一其の父なる人は香爐を鑄るのを業として居ました、世稱ニ絶巧一＝此の家は先祖以來それが職業でありまして、世々絶れたる巧と稱されて居ました、無ニ男子一傳ニ法其女鑄一＝然るに父の代に至りまして、男の子が有りませぬ故に、仕方がないから女の鑄女に其の家傳の法を傳へました、鑄爲ㇾ人豪放好ㇾ酒常與ニ丈夫一遊＝鑄女は女ながらも、父祖にも愧ぢぬ名人ではありましたが、其の人と爲りは女らしき所少しもなく、至て豪放で酒好きでありまして、常に丈夫とばかり交り遊んで居ま

した、其家單乏然未三肯急二意於治生一也＝そう云ふ風でありますから其の家はいつも單乏でありますけれども、龜は未だ肯に意を治生の方に急ぐ様なこともありませぬ、或有二好事者一先納二數十金一乞レ之＝或は好事者がありまして、香爐の注文をして前以て手附金として、數十金を納れて之を乞む者がありましたときには、則先買二酒肴一招二隣里一酣飲數日而後就レ工、先以て酒肴を買調へて隣里の人々を招き集めて、數日の間毎日々々酣飲をして、而後に工に就るといふ風でありました竟顯二其名一＝それ故世の人々が誠に奇しぎな女子であると評判して、竟に其の名が顯れました、奉行嘗承二執政之意一使三之製二香爐一＝長崎奉行の某が嘗き幕府の執政の意を承りまして、（幕府の執政は今の大臣の如く奉行は知事の如きものにて、舊幕時代は今と違ひ上官の言付は例ひ私事にても公事と同様に取扱はねばならぬ風習なりしと知るべし）龜女に申付て香爐を製ることを注文しまし

た、踰二半歳一不レ成＝ところが半年を踰へても成りませぬ、奉行任滿將レ還乃使二鄕吏促一レ之＝此の頃の奉行は一つの場所に勤むる年限が定めてありましたから、此の奉行も長崎詰の任の年限が滿ちまして、將ら江戸に還らねばならぬこととなりました故に、鄕吏に賴みまして催促をさせました、期僅而成猶未二肯進一＝それで漸とのこと奉行の出立の期から僅かの日數前に至りて、成きることはできましたが、未だ肯て進すことを仕ませね、鄕吏懼遣二卒數人一守二其家一而督責嚴急＝鄕吏は氣が氣でなく、若し之が間に合ぬ日には如何なる落度とならんも知れずと、懼を抱きまして卒（今ならば巡査の如きもの）數人を遣はして、若しや龜女が逃げはせぬかと其の用心の爲め、其の家を守らせ張番をさせて而して督責る事が嚴急くありました、龜不レ措レ意矣＝すると龜女の方では平氣なもので、少しもそんな事は意に措めませぬ、一日置二其所製于案上一踞レ牀持二大管一吹レ烟熟視數刻＝

一日其の娶へ上げたる所の香爐をば案の上に置きまして、自分は牀几に踞けて、大きやかなる烟管を持ちて、すぱり〳〵と烟草を吹かしながら數刻の間熟視て居ましたが、風致不レ愜意擧二大斧一喝打碎＝どうしてどこか風致が氣に愜らぬ所があると見へて、そこらにありたる大なる斧を取り擧ぐるが否、喝と一聲かけたるまゝこつぱ微塵に打碎ひて仕まいました、奉行追二東上一、香爐竟不レ隨矣＝そこで奉行はいよ〳〵出立して東に上る時に迫りましたけれども、竟に香爐を携へて還へることが出來ませなんだ。

記阿辰磯吉事　（大岡忠時）

山内磯右、住二大阪朝日街一、妻曰二阿夏一、年四十九、長女曰二阿辰一、年十二、次子曰二磯吉一年九、季女曰二阿春一、年七、家貧無二恒産一、常傭二於人一、及二夫妻共臥一レ病、窮困益甚、阿辰磯吉深憂レ之、阿辰賣二餅於市一、磯吉鬻二温飩於街一、以保二養之一、既父死、母亦尋死、無二親戚可一レ依、隣人憫而葬レ之、戸正謂二二子一曰、爾等幼弱、未レ能レ保二家矣、故宜下爲二婢僕一以營上レ生、而稚女與二他人一以鞠育上也、二子對曰今逢二斯不天一、無二身可一レ依、心悽神悲、今又兄弟離散、焉可レ堪哉、況廢二父母之祀一、棄二幼女於他人一、誠所レ不レ忍也、願就二居此家一、如故、賣二餅飩一、以事レ死養レ生、戸正大感許レ之、人咸感歎、莫レ不レ揮レ涙者、既而後二人早出賣二餅飩一、暮歸祈二冥福一、暇則習二字讀一書、聞者感賞惠二米錢一、儘多、家貲較富二於父母在時一云

（讀方）山内磯右、大阪朝日街に住す、妻を阿夏と曰ふ、年四十九、長女を阿辰と曰ひ年十二、次子を磯吉と曰ひ、年九、季女を阿春と曰ひ年七なりき、家貧しくして恒産なく、常に人に傭はる、夫

妻共に病に臥すに及ひ、窮困益々甚だし、阿辰磯吉深く之を憂へ、阿辰は餅を市に賣り、磯吉は溫飩を街に鬻ぎ、以て之を保養せり、既にして父死し、母も亦尋ぎて死し、親戚の依る可き無く、隣人憫みて而して之を葬りぬ、戸正二子に謂て曰く爾等幼弱にして、未だ家を保つこと能はず、故に宜しく婢僕と爲りて以て生を營、而して稚女は他人に與へて以て鞠育せしむ可き也と、二子對へて曰く、今斯の不天に逢ひ、身の依るべき無し、心悽み神悲む、今又兄弟離散するは、焉ぞ堪ふ可けん哉、況や父母の祀を廢し、幼女を他人に棄つるをや、誠に忍びざる所也、願くば此の家に僦居すること故の如くにして、餅飩を賣りて、以て死に事へ生を養はんことをと、戸正大に感じ之を許す人咸な感歎し、涙を揮はざる者莫し、既にして而して後二人早く出で餅飩を賣り、暮に歸りて冥福を祈り、暇あれば則ち字を習ひ書を讀む、聞く者感賞し、米錢を惠むもの儘多く、家貲較々父母の在りし時よりも富みぬと云ふ。

（譯解）山内磯右門と云ふ者がありまして大阪の朝日街と云ふ所に住居して居ました、妻の名を阿夏と曰ひまして年が四十九、長女の阿辰と曰ふのが十二歳で、次の子が磯吉と曰ふ男の子で九歳になり、季が阿春と曰ふ女の子で七歳にてありました家貧無㆓恒產㆒＝其の家は貧乏で恒つた財産とてもなき故に、常に人に傭はれて其日稼ぎの生活をして居ましたが、不幸にも夫妻諸共に病の床に打臥す身となりまして、窮困ることが益々甚だしく成て來ました、阿辰磯吉は深く其れを憂してから阿辰は餅を市に賣り行き又磯吉は溫飩を賣り廻りて、聊かづゝの錢を取り兩親を保養つて居ました、既而父死母亦尋死＝既而に父もとう〱死くなりまして、母も亦尋で死にました、跡は子供斗りで親戚の者の依りとすべきものもありませぬから、隣人憫而葬㆑之＝隣近所の人々が憐と思ひまして、父母の死骸を葬りて遣りました、戸正謂㆓

二子曰爾等幼弱未能保家矣＝葬式も濟でから戸正が阿辰磯吉の二人の子に謂ひ聞かせますには爾等は未だ年端も行かぬ弱きものである故に、迚も此の先き子供斗りで家を保てて行くことは能きぬ、故宜爲婢僕以營生而稚女與他人以鞠育也＝それ故に二人は人の内に奉公をして、婢僕と爲り、以して營生をして、而から稚き女は他人に與りて鞠ひ育てゝ貰ふことに仕たが宜しからうと曰ひますと、二人の子は之に對へまして、今逢斯不天無身可依心悽神悲今又兄弟離散焉可堪哉＝御尤なる仰ではありますけれども、私等は今斯樣な不仕合に出逢まして、只さへ心悽く神悲しくあります處に、此の上兄弟離散に成りましては焉も堪へられるものではありませぬ、況廢父之祀棄幼女他人誠所不忍也＝況してや亡き父母の祀りをすることも廢めねばならず、幼き此の女をば他人の所に棄て仕舞ふ樣なことは誠に情として忍びられぬ所であります、願欲居此家如故賣餅飩以事死養生＝どうぞ願くば如故り此の家をお欲り申て居て、餅や温飩を賣り行ひて一つには亡き父母にもお事へ申し二つには幼き妹を養ひ育ててやりたいと思ひますと、一樣に曰ひましたれば戸正は大そう感じ入りまして二人の願ひの通りに許してやりました、之を傳へ聞きたる人々は咸感歎莫不揮涙者＝咸な一樣に感じ歎めて涙を揮ばさぬ者とてはありませぬ既而後二人早出賣餅飩暮歸祈冥福＝既而後と云ふものは二人の者は朝は早く出て、餅や温飩を賣り行き、毎日の暮れかたに歸て來て神や佛に冥福を祈り、毎日々々少しも怠らず、そうして暇さへあれば字を習つたり、書を讀んだりして勉強しました、其の事を人々が聞き傳へて大に感じ賞めて惠米錢者僅多＝米とか錢とか云ふ樣なものを惠むものが僅に多くありました、家貲較富於父母在時云＝夫故に家の貲が較て父母の世に在りし時よりも富かに成たと云ふことであります。

英文雜録

宮森麻太郎

MISCELLANY IN ENGLISH AND JAPANESE.

I. Conversation.

About Flowers. 花に就ての話

An Englishman. What flower is most admired in Japan?

英國人。日本では何の花を一番に賞美しますか

A Japanese. The cherry blossom is considered the King of Japanese flowers. The feudal Japan had the proverb:—

As the cherry blossom is among flowers, so is the samurai among men.

日本人。日本では櫻花を花中の王とします。封建時代の諺に花は櫻、人は武士と言ひました。

E. What is the next most beautiful Japanese flower?

其次さに最も美しい花は何ですか

J. Next comes the plum blossom. Though it is not so beautiful as the cherry blossom, yet it is more fragrant and elegant.

次さは梅の花です梅花は櫻花の如く美しくはないけれども櫻花よりも香ひが高くて且一層上品です

E. Please tell me about some other beautiful flowers.

其外の美しい花の事を御話し下さい

J. The peony, the peonia albiflora, the chrysanthemum and the lily are highly admired. A Japanese poet has compared a beautiful woman to these flowers as follws:—

Standing, she is a peonia albiflora,
Seated, she is a peony;
And the charm of her figure in walking is the charm of a lily.

牡丹、芍薬、菊、百合等も大層賞美します日本の詩人は美人を是等の花に喩へて斯樣に言ひました

立ては芍薬
坐はれは牡丹
歩るく姿が
百合の花

Is the cherry blossom as beautiful in Europe and America as it is in Japan?

歐米の櫻花は日本の櫻花の様に美しいですか

No, it is not; but in the West the cherry is very large and tastes very nice.

否そんなに美しくないしかし西洋の櫻の實は大層大きくて又一層うまいです

Yes, American cherries are imported to Japan. By the way, what is the most beautiful flower in the West?

左様ですね米國の櫻の實は日本に輸入します。時に西洋で一番美しい花は何ですか

Europeans and Americans like the rose best and the violet is also highly appreciated by them. Our violet has a very sweet odour and is much prettier than the Japanese one.

歐米人は薔薇を一番好みます而して菫も大層賞美します。西洋のスミレは匂ひか高くて且日本のスミレよりも遙に美しいです

II. Exercise in Translation from Japanese into English.

前號の和文英譯課題の解答

1. How many universities for girls are there in Tokyo?
2. There is only one.
3. Where is it located and what is it called?
4. It is in Koishikawa and its name is the Joshi Daigaku or Girls' University.
5. Mr. Jinzo Naruse is the President of the Joshi Daigaku.
6. How many years ago was the university established?
7. It was established seven or eight years ago.
8. Most of the prfessors are women.
9. Does President Naruse teach any subject?
10. Yes, he teaches ethics and Japanese history.

女　德

女子に最尊ぶべきものは美貌にある乎。否、昨日の紅顔は今日の白頭なり。何ぞ恃みとするに足らん。さらば才藝にある乎。否、凡そ才藝は金錢以て之を買ひ機械以て之に代ふるを得るものにして、唯用をなすと云ふも尊しと言ふべからず。然れども女德に至りては女性に缺ぐべからざる資格にして若し之なければ肉體は女子なりとも女子として見るに足らざるものなり。

〔三輪田氏著女子の本分の一節〕

FEMALE VIRTUES.

Is personal beauty the most precious thing about a woman? No, it is too transient to be relied upon. A flowery face with rosy cheeks will soon become full of wrinkles. Are,then, accomplishments to be most

appreciated in a woman? No, they can be bought for money or substituted by instruments. They are only of use and do not command respect. Unlike these things, virtues are qualities essential to womanhood. Therefore, without virtues, a woman can not be called a woman, though she has the body of a woman. Yes, virtues are the most appreciable in a woman.

III. Letters.

Inviting a Friend to a Card Party.

Friday.

My dear Miss Tanaka:—

You are most cordially invited to be present at a card party to be held at my house to-morrow evening. I hope you will come with your brother at 5 o'clock.

I remain,

Always your sincere friend,

Tami Toda.

歌留多會に友人を招く文

拜呈明晩私方にて歌留多會相催候間何卒御令弟御同伴五時より御光來被下度此段御案内申上候

Accepting the Above Invitation.

My dear Mrs. Toda:—

Thank you for your kind invitation. My brother and I shall come at the appointed time. I hope you will allow me to take with us my friend Miss Yamada.

Yours most faithfully,

A. Tanaka.

右案内に應ずる文

拜復歌留多會に御案内被下難有奉存候私も舍弟も御指定の時刻に參上可仕候尚友人山田孃御連れ申度候間何卒御差許被下度願上候

IV. News of the Day.

The "Almaz."

According to a St. Petersburg telegram published by the Paris *Journal* of may 31, the Russian cruiser *Almaz*, the hospital ship *Orel* and a destroyer, have arrived at Vladivostock.

アルマヅ艦

五月三十一日發巴里ジュルナル新聞の發表せる聖ピータースバーグ電報によれば露國巡洋艦アルマヅ病院船オーレル及一隻の驅逐艇は浦鹽斯德に到着せりと云ふ

PRESIDENT ROOSEVELT.

Washington, May 12.—President Roosevelt has returned to this city, having travelled six thousand miles.

ルーズヴエルト大統領

華盛頓五月十二日發、—大統領ルーズヴエルト氏は六千哩の旅行を畢へて當市へ歸着せり

FRANCE AND THE RUSSIAN DEFEAT.

The hopes of peace have been strengthened by the earnest advocacy of the French newspapers.

佛國と露國敗北

佛國新聞紙の熱心なる主張に依て平和の望は益强まれり

THE KAISER AND PRINCE ARISUGAWA.

The Kaiser has conferred the order of the Black Eagle on Prince Arisugawa and the Red Cross medal of the first class on Princess Arisugawa.

獨帝と有栖川親王

獨逸皇帝は有栖川親王に黑鷲勳章を同妃殿には一等赤十字章を贈られたり

BRITISH PRESS.

British papers state that the Japanese victory equals Nelson's victory off Trafalgar.

英國新聞紙

英國諸新聞紙は日本の勝利はトラファルガ沖に於けるネルソンの勝利に匹敵するものなりと言へり

ADMIRAL NEBOGATOFF

Rear-Admiral Nebogatoff, Commader-in-Chief of the Russian Third Squadron, and 168 other prisoners of war, were brought to Sasebo on May 30.

ネボガトフ少將

露國第三艦隊司令長官ネボガトフ少將及其他百六十八名の捕虜は五月三十日佐世保に連れ來れり

A RUSSIAN TORPEDO-BOAT NEAR WOOSUNG.

A Shanghai despatch dated May 31 states that a Chinese warship reports having observed a Russian torpedo-boat outside Woosung at 2 a. m. on the 31 st ult.

呉淞附近の露國水雷艇

五月三十一日發上海通信に依れば淸國軍艦は先月三十一日午前二時呉淞港外に於て一隻の露國水雷艇を見たりと報告したりと云ふ



中川文部視學官夫人を訪ふ

女記者

▲お住居

昨日の春も、いつしか單衣に脱ぎ更へられて、大分夏めいてまゐりました景色の、御門の周圍の木立は茂り合つて、青々と心持のよき、楓、紅葉、青桐が頭を蔽ひまして、敷石までも緑に見えます上を踏んで、玄關の左手のベルを押しました。

庭下駄の音がはた〳〵と聞えまして、お庭の境の竹垣の蔭から、應對振りの質朴な、お女中が顯れまして、小腰を屈められながら、『此間は失禮ばかり申上げました。夕方奥樣がお歸りになりまして、御名刺を御覽に入れましたら、どうも御存じ申さないお方だが、多分お間違ひではないか、との御話で御座いましたが……。』との口上に、左樣では有りませぬとの事を、呉々も陳べて、是非ともお目に掛り度い由を申しまするど、又お女中の影は彼方に隱れました。

梢を渡る青嵐、此處に、彼處に、春の名殘を謡つて居ります。門内の左右の、大樹の櫻は一對、見仰る程高く聳えまして、幹はいづれも、美しい姫蔦に蔓まれて、秋には、さこそと忍ばれます。

▲お座敷

『それでは、どうぞ。』との御案内に、墨繪の鐘馗の屏風が立てられてあります三疊の玄關を通つて、青青とした、まだ新しい香のする六疊のお座敷に通りました。

正面の床には、月の夜に辨才天が巖に座して居れる、圓形の皿のやうな、白地に墨繪の、陶器の額、又椽の方にも、牡丹に蝶の、これは彩色の麗しい、矢張り圓形の、陶器の額が懸つて居ります。其他支那の古い繪の額が二對、これは賛の少さいのと且つ古びて居りますので畫心のない私には分りかねましたが、多分何々大家の筆に成つた物で御座いませう。

床には花鳥畫の一幅、なほ淡泊した六枚屏風も、立てられてありました。

▲花束のお庭

此のお庭の作り方は、餘り數の少ない、且いかにも奇麗で、無論、女學校の家政で習ふ中には、御座いますまいと存じます。

鏡のやうに光澤のよい、椽の直ぐ先から、一尺位の丈のもみぢが、畑のやうに頭を並べまして、其間間には、末になつた躑躅の幾本、又其間に、少し高く拔いて居ります、そして、先へ行く程土地は高くなりまして、築山位の高さの所迄で、なしとこ菖蒲が、紫かゝつて白く咲いて居ります。又所々にこんもりとなつて居ります松の緑の下に、赤、白、薄赤などの牡丹花があつて、周圍は躑躅の青葉、もみぢなどに取りかこまれ、實に華麗な眺望！、花壇のお庭と申すよりも、花束のお庭と申した方が適當で御座いませう。

▲家庭

願くは、曙染のお振袖を召した、お孃さんに、此の大きな花束の中で、羽衣の曲でも舞うて、戴きたいものと思ひました。

扨て夫人はお出ましに成りまして、いろ〳〵お話を承はりました。京都とは申しますもの丶、私は極

く片田舎の山の中で、成長つたので御座いますから皆様のお宅のやうに、なにかゞ分らないので御座います、それに私が教育ちました時分は、女學校も御座いましたが、まだ〳〵世が開けませんので、只今とは違つて、高等女學校へでも、入學致す女は、お轉婆だとか、生意氣だとか、それこそ嫌はれ者で御座いまして、女は裁縫が達者で、料理でもよく出來ますれば、それで澤山だと申して居つたので御座います。

▲中等教育について

此頃は、女學校、女學校と申まして、大概のお家の方は、高等女學校にお這入りになるやうで御座いますが……、私共の娘なども、大きい方は十八歳になりまして、此四月迄は、竹早町の第二高等女學校に通つて居りましたが、只今ではお茶の水の、專攻科に參つて居りますが、お茶の水の方は、上流のお孃さん方が多いやうで御座いますから、自然に種種の事が上等で御座いますが、竹早町の女學校等でも、何うも私共には、少と、總べての事が貴すぎはしないかと存じます。

▲高等女學校の割烹について

料理なども、種々習ふやうで御座いますが、總てのものが、どうも私共の臺所などには適き兼ねまして、復習させると云ふ事も出來ないので御座います、それに女學校では、お菓子等を、隨分製造へるやうで、先づ餘り實用には、適かないやうで御座います。然しおんな事を致しまして、一生を送れますならば、幸福で御座いますが、なか〳〵さうは參りませんし、又私共等では、そんな立派な所へ、嫁らせやうとも思ひませんし、皆さんは、外交官とか軍人とか、種々なお望みがおありになりまして、選つて被居るさうですが、左樣な事は些と如何かと存じます。

▲家政學について

四季の食物の献立、家計簿記、家屋の建築などについても、種々と學ぶやうですが、どうも一體に、

程度が高過ぎまして、普通の家には、役を爲ないだらうと存じます。家屋の建築とか、諸室の配置とかそんな事を知りましても、東京の樣な所では致し方がないと存じます、又家を建築致します時などは、一生に一度位のもので御座いますから、まあそんな事は、男のお方にお任せ申して、女の方は女の方で裁縫とか、洗濯とか、張物とか、調理とかを、一心におやりになつたらよくはないかと存じます。

▲令孃の割烹

私方の女なども學校から歸つてまゐりますと、直ぐに用を云ひ付けるので御座います。家の夕方の調理などは、嚴格しく申して爲せるので御座います、私が若い時などは、隨分驚く程働いたもので御座いますが……、其代り只今は身體を惡く致しまして二三年此方は、少し何か致しますと頭痛が致します眩暈が致します、とんと仕方がないので御座いますよ、然し娘達は、何うも役に立ちません事それでも只今迄に、仕込みますには使ふ方でもなか〳〵骨折で御座いましたよ。

▲土曜日

平生でも肌襦袢などは注意して、ちよく〳〵と洗はせますが、少し大物は、土曜日曜にさせやうと存じて居りますが、半日位はごた〳〵と暮して終ひますので、片付物などを致させますと、つひ〳〵日が暮れて終ふので御座います。

▲日曜日

袷の洗張りとか、綿入の洗濯とか申しますものは時間が費りますので、平生の日は出來ませんから、日曜にさせるので御座います。一體、斯樣な事は、さう〳〵嚴格しく申して、させなくとも、それよりも他の藝でもさせました方が宜しいやうでは御座いますが……。

▲自ら仕事をするの必用

……洗濯も人に爲せ、張物も人に爲せ、縫ひますのも人に爲せまして、出來上つてちやんとしたのばかりを着て居りますと、人の苦勞を知りませんか

ら、平氣で汚しますが、これが自分で洗つて、自分で張つて、自分で縫ひ上げまして、手を通しますと自然に物の有難味を感じまして、大切に致し、五日で着られなくなりますものならば、十日位は清潔に保つので御座います。そればかりではなく、自分で張つて見ますと、成程洗濯は鄭寧にしなければならない、と云ふ考へが起りますし、又自分で縫ひますと、張物は曲らないやうにしないと、縫ひにくいものだ、と云ふ事も自然に覺えるので御座います。

▲女學生上りのお嫁さん

は、どうも年寄には氣に入らないやうで御座います。最も一つは、時代の違ふ故で、お好みや、お考へが、別々なからでも御座いませうが、それはもう只今の方は、昔の者とは違ひまして、學問もお出來になりますし、又敎育もお有りになりますし、技藝もよくお出來になりますが……、年寄りの心では矢張り女は女らしい、何處迄も柔順な……、家をよく治めて、子供の敎育でもしてもらへば……、まあ、左樣云ふ風な、お嫁さんが望みなので御座います。

▲一般老夫人の言

四十から五十位の、奥樣のお話で、よく伺ひますが、女學生上りのお嫁さんを娶ひますと、家政の事は、洗濯、裁縫、割烹に至るまで、新に仕込まなければなりませんので、全で娘を一人生んだやうな者で御座います。と、被仰いますが、それは、家々によつて、家風も違ひますからでも御座いませうが、家庭として女がなすべき役目は、同じで御座います……。

▲家庭見習ひ

にやりますのは、大變によい事と存じます、私共の娘等も、家庭のよい奥樣の確乎した、立派なお家が御座いましたならば、御一家の皆さんの、美しい御氣象を受けまして、それをお見習ひ申すやうに、何れへかお賴み申して置きたいと存じましたが、思ふやうな處も、御座いませんので、致方なしに學校

へ出しましたやうな事情で御座います。

▲女學生の袴について

私共では、第一宅が海老茶袴は大嫌ひで御座いましたが、どうも時の一般の常習で御座いまして、それに風の日などには、都合の良いもので御座いますから、矢つ張り許しましたので、いつも、親が子供に負けたと申しては笑ひます。

▲日本髪と束髪とについて

髪も結ひました所は、どう致しても、日本髪の、島田とか桃割れとかゞ優美でお品がよいやうで御座いますが、時間が不經濟で、それに髪結等を家庭に出入させましては、餘り宜しく無やうに存じます。

▲遊藝

みなさんは、琴だの、ピアノだの、ヴアイオリンだの、お茶だの、と種々遊ばすやうですが、私共では無益と存じまして、左樣な事は致させません。無論舅姑の揃つて居ります所へ嫁りたいと存じますから、左樣な遊藝などよりも、按摩でも習はせた方がよくはないかと存じます。然し必用な事が出來ましての上ならば、自分の心を慰めますのも、よい事と存じますが、人間は限りが御座いますから、さうさう何も角にもと申すわけにはまゐらないだらうと存じます。

▲芝居、寄席

芝居はなか〳〵、面白いさうですから、一度見度いなど、娘達も申して居りますが、味を知りませんから行かうとも致さないので御座います。寄席も矢張其通りで聞きたいとも申しません。

この時お客樣が、お出でになりましたやうでしたから、記者はこれでお暇申さうと存じまして、令孃の花のやうなお寫眞を、拜借致たい旨を申上ますと『小供の時のしか御座いませんから、寫す寫すと一昨年から申して居りまして、昨年の一月寫すつもりで御座いましたが戰爭の爲に、つい見合せましたので戰爭でも終みましたならばと申して居ります。』此お言葉を以ても如何に愛國心に富んで居られるかが知られます。

大塚文學博士夫人

琴仲女史

△文壇の華

其名を想ひ起すさへ、そゞろ尊敬の念に堪へぬ一葉女史も、流星のやうにピカリと異彩を放ちました斗りで、桐の一葉と散つて終はれましたし、又薄氷女史も、其名のやうに春の氷と果敢なく消えて、さしも盛んであつた明治の閨秀文壇も、一時は火の消えたやうでしたが、此時に當りまして、花のやうな美しい妙齢の佳人が、玉のやうな筆を揮はれまして、淋しい文壇を丁度春景色のやうに華麗に裝を添へたので御座います。が、そも此方は何方でせう？即ち才色共に勝れ、夫人中の賢夫人として有名な大塚楠緒子女史！、それで御座います。

五月廿二日、暑いと云ひましても、用捨のない照日の神は、じり〳〵と射しつけます午後の二時頃、本郷は西片町なるお宅を訪れました。

兼ねて御樣子は承つて居りましたが、種々と胸に想像しながら、御案内につれて八疊のお座敷に通りました。

△私の家庭

夫人は滴らん斗りの愛嬌ある口元に微笑さへ浮べられまして、

矢つ張り家庭の方を……、左樣で御座いますか？、宅などは折角お尋ねになりましても、私が家庭等には、全で心を用ゐませんので、これと申すやうな事も御座いません。

△小說

ハイ、……小說は子供の時から……さうで御座いますね―十歲位の時から、もう三度の食事よりも好で御座いまして、それこそ毎日々々讀んで居つたので御座います。一體身體が餘り健康では御座いませんので、もう氣儘に致して置かれましたから、つひ〳〵一人で部屋に引き籠りましては

小說を讀んで居つたので御座います。

▲お茶の水の女學校

それから少し成長ぐなりましてからは、お茶の水の附屬に參つて居りましたが、其頃は未だ學校でも、唯今のやうに小說等を讀みますのについて、かれこれとやかましく申しませんので、皆樣が見て被居つたので御座います。……ハイ、その頃愛讀した小說ですか？、さうですね、まあ、何れと云ふこともなく、紅葉さんのも、露伴さんのもいろ〳〵とあさつた方ですが、……露伴さんの緣外の緣といふのがございませう、私し、あれが大好で御座いまして、丁度お茶の水に居りました頃には、それこそ二度も三度も繰り返し〳〵讀みました。私ばかりでございません、私の同窓の方々も大騷ぎをなさいまして、讀んで被居しやいましたよ。それで、私も其後一度露伴さんに、お目に係りたいと存じて居りましたが、ついその機會が御座いませんので、……乾度、お目にかゝつたらお話の面白い、豪傑肌の御方だらうと存じて居ますの。

▲明治女學校

その後、明治女學校に入學致しました。ハイ、若松賤子さんの、……さうで御座います。此頃では、もう英文の小說を見ますのには、字典の御厄介に斗りならなければなりませんから、つい〳〵億劫になりまして、どうも家庭を作りましては駄目で御座います、別段これと申して用事も御座いませんが、人樣がなさいます事なら、これもしやう、あれも仕度いと存じまして、種々な眞似を致すので御座います。なんでも嚙つて斗り居りまして優れて出來るものは御座いません。刺繡を習はふと存じまして、一橋の職業學校へも通つたので御座います。

▲繪畫

又繪も好で御座いまして、跡見玉枝さんにつきまして學びますし、橋本雅邦さんを先生と致しまし

て、丁度……五六年も稽古しましたが、少しは格好も出來るやうになりましたが、これも中止で矢つ張り成功は致しません。

私が夫人の玉手になつた繪をおねだりしますと、夫人は、嫣然なさいまして、

・ホヽヽ繪ですか、もう一枚も御座いませんの、何うか出來ましたのは、人樣に上げて終ひましたし、書き損じは紙屑籠に入れて終ひますし、それに此頃では、筆を執りませんものですから……。

▲琴

ハイ、琴ですか幼い時に少し斗り習ひましたが、餘り好きじやあ御座いませんので、これも止めて終ひました。

▲執筆

ホヽヽ作るのなんのと申しましたつて、出來や致しませんので御座いますから、仕方は御座いませんが、幾時とはきまらず、自分の氣の向いた時に書くので御座います、皆さんのお話を伺ひますのに、小說の話を一個お考へになりますと、大分かゝつてお練りになりまして、又それをお書きになります時は、一日に一回位づゝお作りになるさうで御座いますが、私はどうも、……最も大編物などを作りました事は御座いませんが、……私は今考て今作りましたものが、自分も宜しいやうな氣が致しますし、又先生（佐々木信綱氏）にお目に掛けましても、良く出來たと被仰いますのは、矢つ張り二三時間、又は一日位で作りましたもので御座います。

▲閨秀作家

どうも婦人は、家に斗り居りまして、交際は狹う御座いますし、經驗は御座いませんし、つまり世間見ずで御座いますから、男子の方のやうに、何でもかんでも作るなど丶言ふ事は出來ませんのでございます。我等も心がけては居りますが、矢つ張りお孃さん藝で、書生とか女學生とか、又は中流の人上流の事などは書けますが、其他の事は何

うも分明り兼ますので、人樣の小說で成程さうかと知る位で御座います。矢つ張り相當の家の、お孃樣方が遊したら、私と同じ事だらうと存じますが、何う云ふもので御座いますか……。

▲一葉女史

などは、それこそ天才で居らつしやいましたから私等とは全で別で御座いますが、一つは境遇が爲せたと云ふ事もあらうかと存じますね、あの『竹くらべ』などは、何う致したつて經驗といふのも……お可笑う御座いますが、あの塲所の事情に通じて居りませんではね、然しなにしろ、豪い方ですねえ。

▲裁縫

裁縫は好では御座いませんが、小說などを作るから、裁縫が出來ないと、申されるのは殘念と存じまして、お茶の水に通つて居ります時分から、皆さんは厭やがつてよく怠たつて被居いましたが、私は口惜しいが一杯で、一心に致したもので御座います。今でも新しい反物を裁つて縫ひますのは宜しう御座いますが、剝いだり綴いだりなぞは、大嫌ひで致した事は御座いません。ですから足袋の繕綴などは、みんな女中に任せるので御座います。其代り裁縫は滅多に致しませんが、始めますと一日位で縫ひ上げますか、さもなくば、夜が更ても、何時迄かゝつても縫ひ上なければ、心持が悪いので御座います。

▲自由

自由などゝ申しますと、厭やに女學生のやうですが、一體が束縛されるのは、もう……幼い時から大嫌ひで御座いまして、規則的に時間を制限致しましたり、厭やでもなんでも仕事を致しましたり、重箱の隅を楊枝で穿くるやうな事は……それに宅では、少しも干渉致しませんから、家の事を始め、何んでも自分の思ふが儘に致して居ります。どうも私は、我儘な性質で困ります……

▲お子達

子供は女の子が二人御座いますが、私の乳が足りませんので、どれも皆乳母をつけて居ります。大きい方はもう十一になりまして、誠之小學校に通つて居ります……。

▲進取の氣象

、、、どうも、私は呑氣な故でも御座いませうか、皆樣は御子樣のお一人もお在りになりますと、微細になつて、それこそお婆さんのやうになつてお終ひなさいますが、私はまだ〳〵どうして、なか〳〵若い氣で御座いまして、子供の事などよりも、自分の前途に望みを抱いて、どうかそれに向つて進みたいと、始終勉强致して居るので御座います。つまり餘り進取の氣象に富み過ぎて居るので御座いませう、どうもこんな母親を持ちましては、子供も因果で御座います。

▲洋行

こんな呑氣な心地で御座いますから、どうぞ人間と生れた甲斐には、外國に參りまして、見物して來る計りでも良うございますから、英吉利とか獨逸とか佛蘭西とか有名な所に行きたいと、始終心がけて居るので御座います。

▲音樂

音樂は良いもので御座いますね、はい、上野の音樂會へも隨分參ります。私もピアノを先生につきまして學びましたが、此頃では破壞れて終ひまして變な音が出ますから、別に直しも致さず、其儘投つて御座います。

▲芝居

芝居は大好で、演劇會の御座いました頃は、良い脚本の時は、必ず參りましたが、さう〳〵行きましては、世間體が餘り良く御座いませんから、まあ三度に一度位に致して置きます。

▲寄席

義太夫などは、好で、、、ちよく〳〵まゐります。

▲交際

交際などは別に致しません、たゞ、、、すみれ會の時、

皆樣にお目にかゝる位です。

▲すみれ會

ハイ、この會も、始めは奥樣方が、種々な事を研究なさいまして、お話し遊ばす筈で御座いましたが、なか〳〵それも思ふやうには參りませんし、お忙しい方も御座いますので、つひ、お話は旦那樣の方に、お任せ申すやうになつて終つたので御座います。

▲女學生

夫人は嬋妍なる櫻色の頬に、筆には盡されぬ、麗しい、愛らしい、靨をお顯しになりまして、違ひ棚の上にあるゲーテの石膏の置物を、凝然と張りのある艶麗なお眼で御覧なさいましたが、

……………

らね……。

▲藝妓

……………

海老茶袴に、庇髮、私はあれが大嫌ひで御座いますよ。私が學校に通つて居ります頃は、文金の高島田を、品よく黑々とした髮で結ひなして、帶をちやんと締めまして嫺かに女らしく歩いて參りましたので、外を歩きながら御遇ひ申しても、まことに優美なもので御座いましたが、此頃では美しいお孃さんなどには、全でお出逢致した事が御座いません、それも其筈で花の盛りを白粉も塗らず、髮は油もつけない赤い毛で、詩的でない束髮、第一女學生等は、着物も滿足には着られないので御座いますか

花嫁の期節判斷（西洋）

（正月）の花嫁は氣質正しく世話女房たるべし
（二月）の花嫁は妻としては貞節に且つ愛情深く母として慈愛に富む
（三月）の花嫁は饒舌にして爭を好む
（四月）の花嫁は容色十人並なるも貞操堅固ならず且つ餘り智慧ある方ならず
（五月）の花嫁は愛らしく概して多幸なる一生を送る
（六月）の花嫁は短氣なるも宏量なり
（七月）の花嫁は艶麗にして怜悧なるも稍氣早なるの恨みあり
（八月）の花嫁は可憐にして沈着なり
（九月）の花嫁は思慮深く溫和にして人に愛せらる
（十月）の花嫁は容姿嬋娟花の如く人をして恍惚たらしむされど妬心深きを免れず
（十一月）の花嫁は性情粗野なるも宏量にして且つ親切なり
（十二月）の花嫁は身體の工合よく出來事物の新奇を好み人を娛ましむるの長あるも多く奢侈に流る

夫人は雪のやうな、白いお手にきらりと輝くダイヤモンド入の指環は、一入品を持たせて、華奢な、柳のやうな肩から、頸もとの邊り、水際たつて、おたいしなみの程が知られます。紫紺色の襦袢の襟をきちんと直されまして、又膝に兩手をちやんとお重ねになりましたが、

それと違ひまして藝妓などは、一寸見ましても、氣持が良う御座いますこと、顏は華麗ですし、着物なども配合よく、垢拔けて着て居りますし、職業こそは賤しう御座いますが、其意氣地などに至りましては、どんなに學問を致した女學生でも、到底足もとにも及びは致しません。………然し、惜い哉、教育が御座いませんので………。

▲理想の婦人

……ですから、まあ、私が思ひますのには、近松の心中天の網島の小春の意氣地と美しさに、今の女學生の學問と教育とを添へたなら、それこそ立派な、理想的な婦人が出來やうと、斯う思ひますが、なか〲お誂へが大變で御座いますからね……。

夫人は何う拜見致しましても、打見たところせい〲廿三四位で被居しやいますやうで、まことに、艶麗な、お聲の爽かな、お目に係りました丈でも、心地よいお方で厶います。

今日の女流小説家及び文學者としては、何れの方面から觀ても、先づ夫人を第一流に推さねばなりませぬ、昨今賣出しの菫文學者や、ハイカラ小説家も少なくない樣で厶りますけれども、兎ても三年五年の勉强では夫人に及ぶことは出來ますまひと存じます私しはかく迄、夫人をお慕ひ申して居ますので、お暇乞ひの際に是非ともお寫眞を拜借致しまして諸嬢に御紹介致したいと存じましたが、生憎一枚もお手元にお有りなさらぬさうで、殘念ながらお寫眞は其内、御紹介致す事としました。(をはり)

こぼれては常の水なり紅の露　千代尼



皇孫殿下の御媬姆

（足立孝子の平生）

畏くも　皇孫殿下の御媬姆として數ある中より、今回選拔の命を忝ふしたる足立孝子の光榮を祝さん爲め、記者此程孃の寄寓せる小石川原町十番地川井方を訪ねしに、「一時間許り前に青山御所へ上りました」との答へ、見れば讀書室のまだ取片付られず孃が愛好せし修飾の扁額も其儘であつた、扨此無上なる榮を以つて迎へられし孃の平生に溯れば、温然玉の如き胸底に、堅き意志の通つて居るので、薄弱なる當世女子の模範として記すべき事柄が多い。

▲大決心を起す

孝子が媬姆となつて、畢生の業となさんと思ひ起せしは、横濱在住の頃で、其頃神奈川の或る小學校で幼稚園を受持つて居つたが、頑是なき幼兒等は心の底から慈愛の溢れ出づる孃の薫陶には、誠に善く感化せられ、先生〳〵と云つて慕はれて居つた、玆に於て一層媬姆の面白味を感じ、女子師範學校へ入學して、高等なる敎育を受けんものと漸く兩親の承諾を得て希望を容れられたのは十九歳の時であつた、

學校は三ヶ年で卒業したれど、、斯る大決心を抱く身であれば、成績も至つて宜しく、毎時も首席を占めて居た。

▲雨が降つても

先づ媬姆としての資格も備はり、此上は實地に就て充分伎倆を振はんものとて、其の頃同學校女子部に幼稚園を創立されしを幸ひ、直に此處に教鞭を執り慈悲の手をもつて愛撫した孃の成績は、忽ちに顯はれ、受持の幼兒は雨の降る日など、親達が今日はお休みと云つても、學校へ往きたいと泣きせがむ程であつた、之れは全く薫育の宜しきを得たる徴で、兒童を入園せしめし家庭に於ては、孰れも此の良教員を得たるを喜ばぬものはなかつた。

▲張合のある事

兒童は此の通り良くなつくし、教へても張合のある事なれば、孃は益々奮勵し、學校は退けても尚ほ責任を帶べる校務を整理し、夕近くなる迄勉勵して事務を取り、餘暇あれば泰西媬姆の研究をなし、築地なる英人の許に通つたのである、殊に音樂は兒童感化の上に一種玄妙なる働きがある事とて、音樂の修養も怠らず、バイオリンは尤も特意として美しく唄ふ聲は鶯の春を告ぐるが如く、兒童を率ひて教室に立てば、何時も春風堂に滿ちて、先生モ一ツ唱歌を謠ひませうと、生徒の方から、早くも手拍子を取つて迎へるのが常であつた。

▲忠實なる教訓

終日兒童を訓へて宅へ歸ると、先一番に咄すのは幼兒の事である、「子供達は眞實に可愛くて〳〵」と人は芝居を見て歸り、面白きくさ〴〵を語る如く、愉快氣に終日の疲れもなく、實に幼稚園に在る間は宛然樂天鄕に在るの思ひをなし、其熱心なる志は忠實なる教訓を垂るゝに至るのである、或時家人等は孃に「大勢の子供の中には惡戯ものもあるだらうし云ふ事を聞かぬものもあらうが、よく面倒でないねと尋ねしに、孃は嫣然笑ひ「云ふ事を聞かぬ兒童もあるから、張合にもなるのです」と、斯くてこそ媬

姆の職分を全うされるものである。

▲着物は入りません

年頃の娘になれば、自ら進んで脂粉を施し、流行の衣服など競つて之れを新調する當時の風潮にも係はらず、孝子は一向に容貌を飾らないから、仲間の女學生などに、ナカ〳〵お洒麗をする者があつて「足立さんは何故那んなに身裝りを搆はないだらう、少し變り者だよ」と密に噂をする者さへあり夫が孃の耳へも入つたが、孝子は己れに大決心のあつて、保姆の大業を成功したいと一意専心之れに斗り熱中して居つた故、友達が人の噂を聞兼て注意を與へても「着物杯入りませんから」と他を顧る事がなかつた、而かも此當時は妙麗なる時代で人は紅脂、白粉、着物などに憂身を窶す年頃であつた。

▲白粉と品格

女子師範學校を卒業して後、親戚なる川井家に寄宿し、此處から幼稚園に通つて居たけれど少しも女學生時代と變る事なく、身邊の修飾には全く無頓着で束髮も引詰めた儘に結ひ、流行の庇髮など大嫌ひであつた、殊に白粉一ツ塗るではなし、唯幼兒敎訓の外餘念がないので、川井家の夫人は之れを見兼ねて「孝子さん、餘り搆はないにも程がありませう、女學生時代なら兎も角もモー先生となつて、兒童の上に立ち敎育をする御身分ではありませんか、少しは白粉もお付けなさい、洒麗る譯ではないが、流行の着物は一枚二枚あつてもソー奢りと云ふでもありますまい、婦女の身だしなみは詰り品格を付けるのですよ」と頻りに勸めたから「成程爾うでした品格を落すやうでは」と之れより少しつゞ白粉など付けしも慣れぬ化粧とて最初は上手に付かず、處々斑點ありて、家人の笑ひを買ひし事が多かつた。

▲殊勝なる心

孃の兩親は目下横濱に住を搆へ、同胞の多くも此處にあれば、毎月一二回宛必ず歸宅し親兄弟と睦じく語り合ふを樂しみにし、明日は訪ねんと思ふ前夜の如き、孝子は土產物の調進に思ひを凝して、銘々に

土産を携へて往き、又俸給など受取りし時も、其の幾許を割きて、同胞等に好める物を購ひ贈るを、此上なき喜びとなせしなど、誠に殊勝なる心懸けであつた。

▲精力と勉强

時間を徒費する事は最も堅く身に禁じ、一秒時も有益なる事に費さんと心懸けられた、校務を畢へて歸宅すると、家人は茶など入れ、終日の勞を犒らふに孝子は斯る時でさへ、必ず徒手では出て來ない、毛糸を持ちて編物をなすか、左もなくば愛讀の書物など携へて、此の團欒に入り、世間咄しなどの折は手を休めずに編物をするし、咄しがなければ、書物を離さず見て居るのが常であつた、孃や今年二十三歳斯くの如く精力を盡して勉强された結果は、遂に香ばしき花となつて、玆に貴き御方を御媬育申上る事となられたのである。（報知新聞）

つりそめし蚊帳の匂ひや二三日　涙化

德川時代の婚姻

林　恒山

戰國時代遺風の政略

慶長偃武以降四海昇平となり、百般の制度文物も玆に大成を見んとするの時に至り、風俗習慣も隨つて漸く定まらんとす、此時に當つて婚姻に關する法度も習慣も、古來よりの遺風によりて始めて後世に久しく行はるゝの例を開くに至れり、今德川幕府の初め頃に於ける所謂武家法度なるものゝ婚姻に關する箇條を見るに、元和元年の同法度には私に婚姻を結ぶべからずといへる一箇條あり、是れ戰國時代に於ける結婚政畧といふものゝ未全く脫すると能はざるものなるのみならず、同法度の上より見れば亦止むべからざりしものならんか、即諸侯に於て相婚嫁を結ばんとするには先づ之を幕府に屆出でゝ、其許可を得たる後に、始めて行ふことを得る事とし、是れ

諸侯のみならず、所謂旗下の士に於ても亦然りしなり、又彼公家法度といへるものに於ても、公家の公卿方と諸侯との間に結婚の行はるゝ時も、同じく許可を得ざるべからず、且つ既に許可を得て相婚嫁を通せるものに於ても、公家より武家に對して金銀等の無心を相愼むべき事と定めたり、是等も當時の政略上に缺くべからざりしものなるべく、其後昇平久しき時代に於ては、さまで必要ならざりし如くなるも、若し歴史上より考究せば、之に關して少なからざる興味の含まれ居ることは見逃すこと能はざるべきか、徳川家康が豊臣氏の末路に於いて諸將と婚嫁を通せしは彼石田三成等の家康を攻撃せるの口實たりし事は、史上に顯著なる事實にして家康が諸將を籠絡して己が手足と爲さんが爲めにせるの一政略たりしこと明なり池田輝政、淺野幸長の室は家康の女にして、前田利常、京極忠高の室は秀忠の女なり(池田輝政の室は初め北條氏直に、淺野幸長の室は初め蒲生秀行に嫁せり) 尚ほ己に嫁すべきの女無れば臣下等の女を養ふて己の女とし、以て諸將に嫁せしめたり、水野忠重の女を養ふて加藤清正に、牧野康成の女を養ふて福島正則に、保科正直の女を養ふて黒田長政に、久松定勝の女を養ふて山内忠義に、小笠原秀政の女を養ふて蜂須賀至鎭に、本多忠勝の女を養ふて眞田信之に嫁せしめ、秀忠も亦小笠原秀政の女を養ふて細川忠利に、奥平家昌の女を養ふて堀尾忠晴に、榊原康政の女を養ふて池田利隆に、又池田輝政の女を養ふて伊達忠宗に、松平秀康の女を養ふて毛利秀就に嫁せしめ、斯くの如くにして諸將は皆徳川氏の親族となれり、是等の類尚ほ多くして所謂外藩の諸侯も漸次懷柔せられたるものなり、尚茲に一言すべきは徳川氏が皇室と婚嫁を通せんとせるの一事なり、秀忠の女は初め皇家の拒絶に逢ひたるにも拘らず、遂に入りて中宮となり、東福門院と稱せられ靈元院天皇の皇女吉子内親王は、七代將軍家繼に降嫁の事に決し居りしに、將軍夭せるを以て行はれざりしが、維新前に至りて、仁孝天皇の皇女

親子内親王は、遂に十四代將軍家茂に降嫁せらる丶に至れり、其外代々將軍の室は鷹司、近衛、一條等の攝家にわらざれば、伏見、有栖川、閑院等の宮方なりしなり、獨十一代將軍家齊の室は近衛經熙公の養女として、島津重豪の女なりしこと、是れ亦歴史家の少からざる興味を感ずる所なり、今是等に就き詳細に叙述すること能はずして、徒に列擧するは讀者を厭嫌せしむるのみなれば、是等の事は一先づ此に止め直に婚嫁の風俗習慣に移りて、其大略を記述すべし。

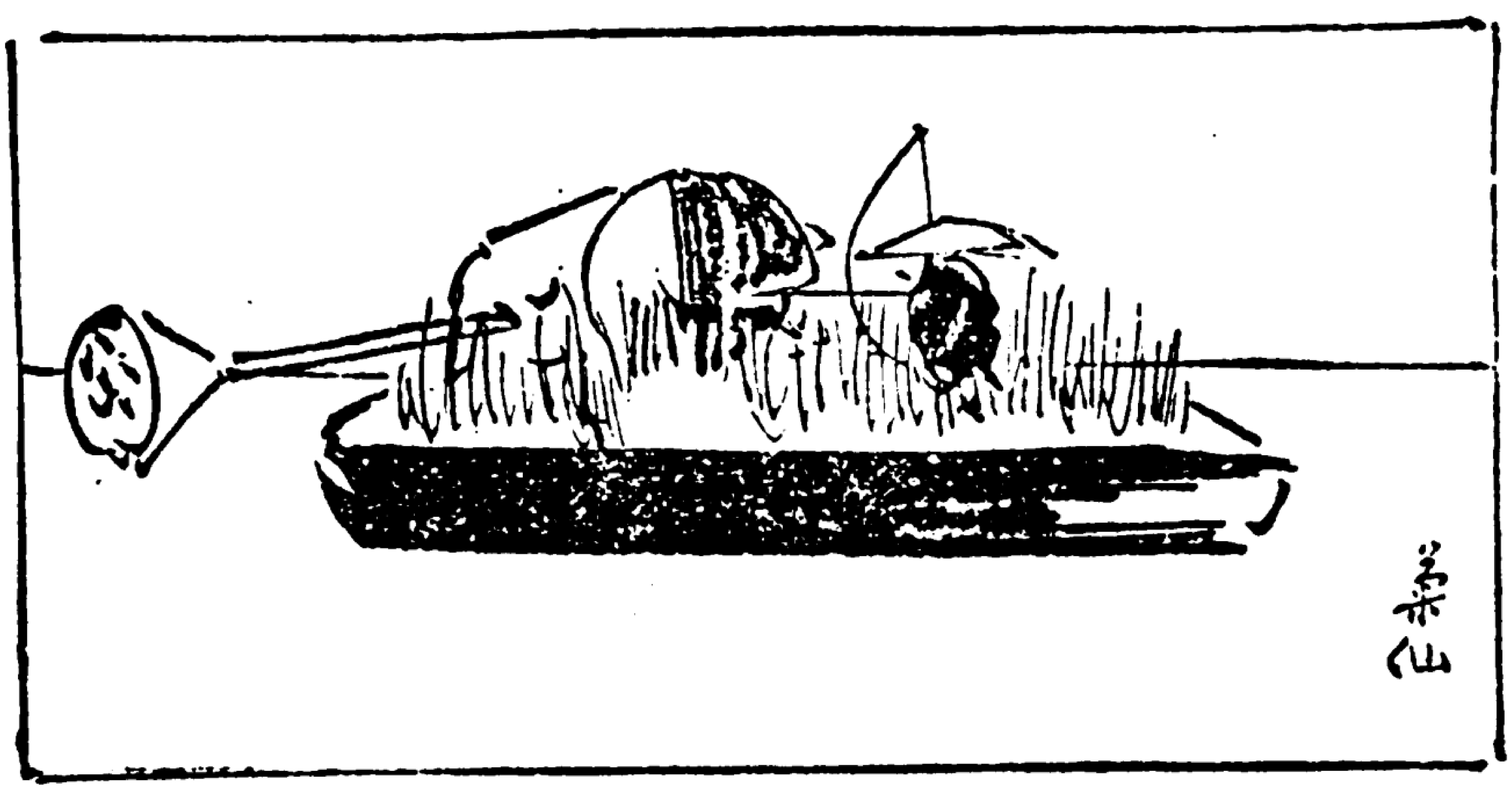
婚姻に於ける習慣と作法

一　婚禮前に於ける事及結納　婚姻に於ける作法及び習慣等は、上下貴賤によりて異同あるは、いふ迄もなく、今中等の諸侯に行はれて、遂に、下々までの模範となれるものを見るに、結婚の相談双方とも異議なく調ひたる後、即ち下方に於ては媒妁人の周旋によりて、双方共承知の上、扨改めて先づ嫁方より特使を立て丶書狀及び音信物を送り、聟方よりも同じく特使を以て其答禮を爲す、此時嫁方にては嫁の兩親特使に對面して酒肴を饗するを例とし、結納の日時等をも下相談を爲す、愈々其日も決すれば、此度は聟方より特使を立て丶其品々を送る、下方にては其品の揃ひたる上親類並に媒妁人を饗して之を見せ、其目錄には夫々認方ありて、三種、五種、七種九種と身分によりてすれども、九種よりは多からず大抵小袖代、帶代其外酒肴等とす、文字の書方も亦頗る注意せるものなり、今九種の例を見るに鯛一折帶一筋、緋鹿子一表、白綾一表、紅絹一疋、綿一把昆布一折、引飽一折、御樽一荷、以上とし、五種の例は可希鯛一折、壽留女一折、古ん婦一折、帶一筋家内喜多留一荷、以上とす、下方にては媒妁人同道するを例とす、嫁方にて之を受取りて座敷に飾り置き、此時も兩親使者に對面して酒飯を饗し、終りて結納領收狀を出す、是れも書様ありて幾久敷目出度祝納むる旨を記し、此時使者の歸らんとする言葉に暇乞などの詞を忌みたり、引續き嫁方より特使を

以て之が答禮を爲すも、此時には何の贈物をも爲さずして口上のみなり、其後又吉日を撰みて、婚方より使者を附して嫁の調度の品々を聟の家に送る、此時嫁方より簞笥、長持、其他品々を書き認めて持參せしめ、聟方にては其終りに右之通慥に受取申候と、月日姓名とを記入するを例とす、此時に聟又は聟の兩親使者に對面して酒肴の饗を爲す、總て婚禮に關する斯る場合には、忌言葉とて、去る、のく、はなる、別るゝ、きるゝ、かへす、もどす、きらふ、飽く、うらむ、又々、重ねて、返す〴〵、うすきなどいふ詞を避くべく、衣裝にも紫、桔梗、藤色、鼠の縞類茶かへし、うめかへし等を忌みたり、されば祝言の祝狀などにもかへす〴〵とは書かぬ事と爲したり、序故に記す。

二　婚禮當日の事及入輿　彌々吉日となり、婚禮の當日に至れば、嫁方より聟を始め聟方の一族及親戚等に土產物を贈る、或は之を當日の前日を以てするものあり、此時聟には小袖、裃、帶、扇子等結納の品に相當する程の物を以てす、又然るべき人を賴みて金漿親として、嫁の齒を染めしめ、其髪は年齡によりて小異あるも、中人以上は大抵下髪とし、綿帽子とて丸綿を冠れり、衣裝は袷單とも白綸子、白紗綾の類にて身分に應じて白無垢を着せり、聟の家にては當日親戚の人々打ち集り、薄暮ともなれば門前及び玄關に紋章を附けたる挑灯を立てゝ、嫁の入輿を待つ、さて此入輿の時刻に就きては、後には晝を以てするものあるに至りて、挑灯も必要なき事となれるが、大抵薄暮より初夜の事と爲したるにより、此に奇妙なる考への出で來るありて、嫁方にて早く嫁の輿を出すは聟方に追從するの所爲なりと爲せる事是れなり、聟方にては成るべく早く入輿を望み、一刻にても早からんことを欲し、其早きを以て家の名譽とし、遲きを恥辱とす、左れば最早薄暮となれば聟方にて急ぎ出し、用人家老の輩をして、入輿を促すこと一再に止まらず、尙來らざれば親戚の中にて然るべき人、自身に嫁方に行きて之を促すを

例とせり、之を輿迎へといひ、斯く輿迎たる人は相當の人物を要せるより、其供廻り等中々急には手廻らずして、次第に時刻後れ、遂に後夜にも及ぶに至ることあり、彌々嫁の輿出で丶、其行列にも定例あり、身分によりて差あること勿論にして、夜の事なれば輿の前後に白張無紋の挑灯を靑竹の棹に釣り、其數も亦身分によりて、多少あり、之は聟方の門前に至りて打消すなり、聟方にては入輿の時迎火といへるを燒き、輿の受取渡濟みて、聟方のもの輿を舁きて、緣廊下に上げて据え置く、此時聟出で丶輿に手をかけ奥に入る、待上臈直に輿の前に跪きて其戸を開け嫁を出して、先づ化粧の間に案内し、化粧を直し裝束衣紋を調へて婚禮の座に案内す、此夜聟方よりは小袖一重を襟と襟とを合せ、糸にてとぢて袖をか



へさずして遣す、之を迎小袖といひ、嫁方よりは前にいふ土産物を此時に出すもあり、以上は諸侯方の作法なるが、大抵は玄關にて嫁を渡し送り行きたるもの其時聟方より一杯の水を杯或は茶碗に貰ひ受け、打破り溢す事あり、是れ彼太公望が故事より此に當はめられたるなるべし。

三　婚禮儀式の事　婚禮の時の儀式を述んには、先づ床飾は饗膳二重、瓶子三組杯、手掛、銚子、蓬萊臺、高砂臺置鳥、置鯛等にして、儀式の席は聟は客位、嫁は主位に着き、少しく斜に座せしむ、局は先づ手掛を出し、待上臈二人に搗栗、昆布、熨斗を進め、此時女房二人床の間の瓶子を一ッ宛とりて下座に着き、酌に立つ女房二人銚子、提子をとりて同じく下座に着き、酒を銚子にうつす、盃の世話する婦人出で丶先づ嫁の前

に置く、嫁一獻を受けて飲み、更に銚子に酒を加へて又一獻を受け、又加へて一獻を受く、終りて盃を元の如く置き、聟の方に進めて三獻を飲むと前の如くし、其盃を下に廻し置き、中の盃をとりて更に三獻を飲みて、嫁の方に進め、嫁は三獻を受けて、其盃を下に廻して、更に大なる盃に三獻を受けて、聟の方に進め、聟三獻を飲みて盃を下に置く是れにて盃事の儀式終る、之を世に三々九度といふ、終りて聟座を立ちて退く、此時酌人の立廻り大事にて、兩人の間に立たざる樣注意すべし、是れ嫁の丸綿を冠り居りて、見え難ければなりといふ、此綿帽子は元は聟着座の時にとりたるを、後には三々九度の時も冠り居る事となれり、又此盃事の時に熨斗ど共に吸物を出し、之には哈貝を以てするもあり、是れ貝桶より來れるなるべく、是れより待女臈嫁を誘ひて舅姑に見參せしむ、此時も盃事あり、くど〳〵しければ略す、終つて嫁奥に入りて衣裝を改め、之を色直しといふ、或は色直しを爲して後舅姑及び聟の兄弟姉妹等に初對面の盃事を爲すもあり、右の舅姑盃事終りて、別座敷にて更に聟嫁及び待女臈の三人に雜煮、吸物を出し盃事あり、此時聟の兄弟姉妹等の盃事あるもあり、次で饗膳菓子等出で、酒宴となり本膳、二膳等身分により酬酌あり、待女臈宜しき時を見許ひて床盃を爲さしむ、此夜賓客は深更まで祝杯を擧げ、小謠をうたふを例とす、所謂高砂やといふは是れなり、總て婚禮に用ゐる銚子、提子の飾り、取扱方、酌の仕樣、酒宴の時の禮儀等夫々作法あり、流儀といふもありて、中々六ケ敷事多けれど、何れも皆是等の事を記せるものに讓るより外なし。

四　婚姻後に於ける事及里開　婚姻の事首尾能く濟みたる明日には、先づ嫁は文を認めて里方へ贈るを例とす、又婚姻の晩々親戚知友等の饗宴引續き數日に及ぶもあり、是等も身分或は人柄によりてなるは云ふまでもなく、大抵三日目に至れば之を三ッ目と稱して、聟方及び嫁方双方より使者を立て、鳥

子餠或は略して赤飯、生魚を取交す事あり、其後兩家の都合をはかりて、日を卜めて里開きの式を行ふ里開には先づ嫁のみ兩親の家に來り、後に聟を始め舅姑、小舅（聟の兄弟等）、其他親戚の人々を招きて饗應するなり、此時聟より里方の一族及び親戚に又聟方の親戚等よりは里方に、何れも婚姻の時贈られし品に相應して、土産物を贈るを例とす、此里開きは里方に於ける第一の饗宴にして、費用を惜まずして其禮を盡したり、此時も聟と嫁と兩親より双方の親戚等 盃 事の儀式あり。

婚禮等の華奢を禁ず

凡て太平の世には、物事の華奢に流れ易きは自然の勢なり、故に婚禮に關する諸道具より贈答の品々饗宴の器具酒肴等は、聟に於ても、嫁に於ても、婚姻は實に人世一代の大禮、終身の禍福、吉凶・安危憂樂の繫る所、是を以て聟、嫁自身はいふまでもなく、双方の兩親に於ても充分に心を用ゐ、人世の幸福を全からしめんが爲なりといふに於ては、其費用の如きは自ら顧みるに遑あらずとするは、是れ亦人情の然らしむる所なり、然れども人の世に處する、各々其身分即貴賤貧富の別、俸祿多少の差、或は所謂家柄と稱するもの、或は人柄を稱するもの等ありて、上下尊卑一ならず、是によりて何事も己が身分を顧みて、華奢を戒め氣隨を抑へ、以て己の德を完うせざるべからず、殊に德川時代に於ては世々節儉主義を以て、政道の一とせるより、屢々華奢を戒飾し、放恣を禁じたり、偃武以降未久しからざる寛永年中に於て既に、嫁娶之儀式近年小身之輩に至る迄甚しく及二華麗一、向後諸道具以下、分に過たる結構不レ致可レ用二儉約一、たとへ大身たりと云ふ共、長柄、釣輿三十挺、長持五十棹に過ぐ可らず、總て應二分限一、可二沙汰一事 又「振舞之膳、木具並盃臺、金銀彩色停二止之一、但高貴人珍客には、木具不レ苦、或は晴之會合、或は嫁娶之時は、金銀之土器籠足可レ 爲二其意次第一、總て振舞之儀輕く致、酒不レ耳レ及二亂醉一事云々」の令あり、其後尙ほ次第に奢侈の風を爲すに及び、元

禄年中に至りては、奢を禁じ約を勸むると同時に、婚姻其外振舞之料理、一汁、五菜に限るの令を下し享保年間に至りては、結納之儀小袖一重、帶二筋、二種一荷を限り、以上は大諸侯に於けるの制限にして、以下夫々身分によりて、之に准ずるものなり天保に至りては、貧富之身元に不レ寄、一統に一汁一菜、所ニ有合一之野菜肴二種限りと令するに至れり是に至りては、或は嚴に過ぐるが如きも、是れ有名なる松平越中守定信が節儉主義の政略によれるものなり。

一夫一婦及び側女

徳川幕府時代は全く一夫一婦の制となりたるも、眞の一夫一婦は、中等以下の社會に行はれ、中等以上に於ては、勢之を守ること能はざるに至れり、其大原因は諸侯を始め士分に於ても、嗣子なければ其封士俸祿を沒收せらるゝ事是れなり、諸侯にして嗣子なきの故を以て、封土を沒收せられ、家人の所謂浪人と爲れるの例甚多し、是を以て諸侯は正室あるも、萬一其子の未生れざるに於て、己の死せんことを憂慮し、或は其子ありて封祿を襲ぐも又夭せば則ち嗣子なからんことを恐る、此を以て一人の正室に止むると能はずして、側或は侍女を置きて、唯々其子の多からんことを祈る、其子數人を得て始めて安心すべし、是れ一夫多婦の已むべからざる所以にして、又當時早婚の行はれたるも職として之に由れり且つ諸侯は正室を江戸に置きて質とす、故に其封國には側室を置くを例とす、是れ亦身分により數人を置くものあり、世敢て之を咎めず、又之を怪まず下のもの之に倣ふものあり、上下風を爲す、殊に當時に行はれたる所謂七去といへる内にも、子なければ去るといふあり、正妻子なし、即ち妾を蓄ふ、正妻に於ては去らるゝより、寧ろ妾を置かんことを欲するものあり、是に於て彼正妻の嫉妬の如きは、婦人として第一の嗜となし、當時制度風習の勢に於て之を許さず、婦人も亦之に甘せざるを得ず、又實に甘じて敢て之を訴ふるものなかりし、其之あるは

下等社會の俸祿の何物なるを知らざるの徒に見るのみなりし、其後漸次封土沒收の制を寛にし、子なくして女あるものは聟養子を以て其家を嗣がしめ、子女共になきも養子女をして其家を嗣がしむるを得たるも、人誰か子女なきを甘ずるものあらん、遂に慣習の久しきと共に上下一般に一夫一婦たること能はずして維新の際に至れり、今日婚姻の事、人々其意に從ひ、殊に男尊女卑を訴ふるものあり、男女交際の事を論ずるものあり、予が我國古來婚姻に關せる事を記述せるものは、亦是等の參考に供せんとするの微意のみ。

化學と洗濯

梅の舎

追々暑さに向ひまして、コヽ暫くは、洗濯の多忙を告げる時節に相なりました。此洗濯の方法には、物理的方法と化學的方法とがムいますが、コヽには化學の上より見て、特に進步した方法で、然かもソレが手輕に爲し得るものを撰んで、お話し申すのでムいます。

▲洗滌油

化學上に於て、洗滌油に有力なものが二種あります其一つは、ドナタも御承知の揮發油で、他の一つは「ベンゾール」と云ふものであります。何れも洋服の襟とか、着物の襟とか、半襟とか云ふ部分の洗濯に使ふのであります。揮發油は、普く世に用ひられて居りますが、「ベンゾール」を使はれるお方は、極めて少なからふと思ひますから、先づ

▲ベンゾールの性質

より、序を追うて研究いたしませう。「ベンゾール」は無色の液躰であります。アルコールには溶け易いものでありますが、水には中々溶解いたしません。一種快美な香を持つて居りますゆゑ、之を取扱ふ時にも、揮發油のやうに厭な臭がありませんから、立派なお部屋の中でも、奥さんやお孃さん方が、お慰み

になされても、決して疊を汚したり、指先を粗すやうな氣遣は厶いません。特に洗滌の品は、直樣お召し遊ばして御氣分を傷ふやうな臭やら濕潤やらが無いのみならず、却てかぐはしい香水の薫を嗅ぐやうな快い感じを覺へるものであります。かやうな善い香のものゆゑ、定めて香高き美しい花からでも製したものゝ如くに思はれますが、案外にも甚だ臭の宜しからぬ、石炭や石油の中から拵へ出されたもので厶いますから、若し火を點けると、忽ち煤煙を上げて盛んに燃え出しますが、其の原料なる本元の石炭とか、石油とか云ふ至つて燃え易い物質であることを思へば、成程尤もなりと御首肯が出來るでありませう。かゝる燃燒物ゆゑ、火の用心を大事に致しませぬと、危險の恐れが無いにも限りません。ソレに甚だ揮發し易いことは、丁度揮發油の通りでありますから、貯へ方を忽せにしてはなりません。シテ此揮發し易い性質と其價が、シャボンやソーダに比して少々お高いので、ナミ〳〵と盥などに湛えて、大仕掛に洗濯の用に供へることの出來ませんのが、遺憾ながら此物の一つの缺點と云ふべきでありませう。

▲コールタール

「ベンゾール」の如何なるものかを知らふと思ふには先づ「コールタール」の如何なるものかを知らねばなりません。彼の大工や屋根屋等が、木材や鐵ブリツキなどに塗りて、其腐敗を拒ぎ酸化を抑えるために用ゆる、トロ〳〵とした黒い色の液は、即ち此コールタールなのであります。今石炭を鐵製「レトルト」の中に入れて、下より之を強熱すれば、可燃性の氣體を放出いたします。此氣體は、主に水素や、メタンや、エチレンなどから成り立つて、外に少しばかりの硫化水素、無水炭酸、酸化炭素、窒素等を含んで居ります。此酸化炭素は、無水炭酸を除去するために、「レトルト」の管端に、他の曲管を連續して水中を通過せしめ、更に石灰、酸化鐵末などの間を輸送せしむる時は、大いに其可燃性を増進して一

段の光炎を發するものであります。所謂燈火や工業などに用ふる炭酸ガスは、即ち是れであります。此炭酸瓦斯を拵へる時、「レトルト」の管に曲管を連續して水中を通過させましたが、後で其水底を驗べて見ると、ドロ〳〵した黒い液の沈澱して居るを認めます。即ち之が「コールタール」なので、炭酸ガスの管が水を通ずる折に滲出したもので厶います。シテ本題たる

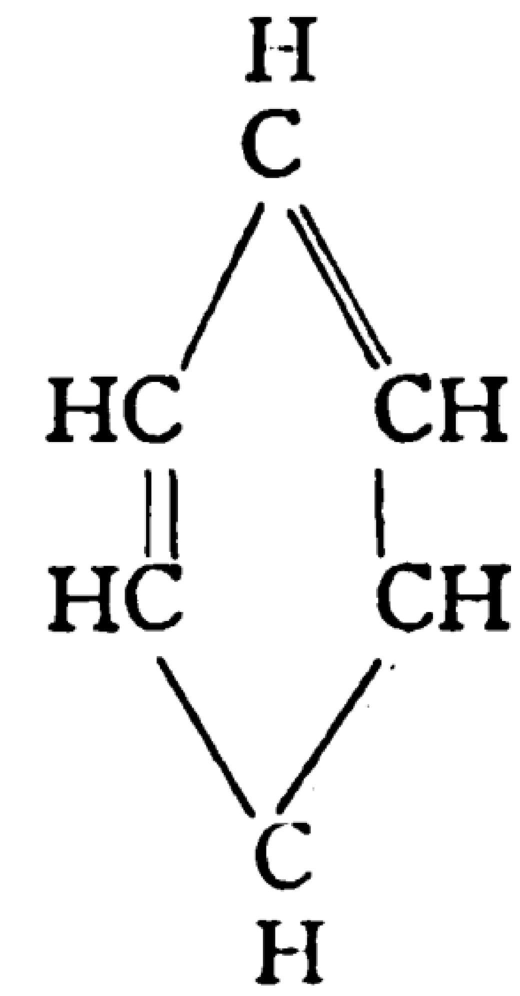
▲ベンゾール

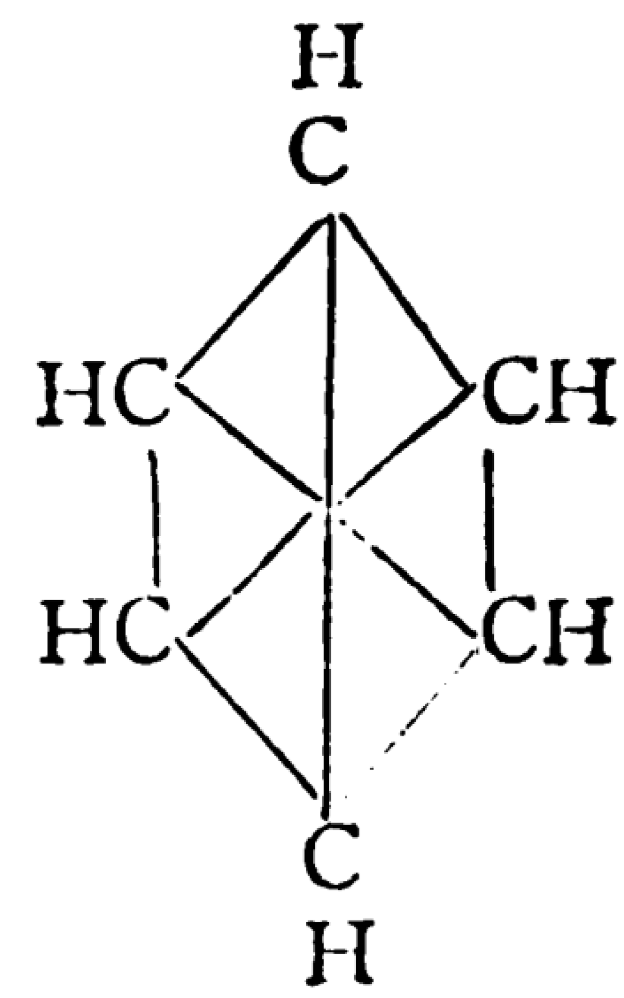
の正體もイヨ〳〵ハツキリするやうな順序になりました。ソコで、此コールタールを、改めて蒸餾器に移し、一定の温度に熱しさせますれば、器中の液の揮發し易い部分が「ガス」となつて蒸餾いたします。此時其「ガス」を捕へて冷却器（平均温度を保たせてガスを冷却せしむべき器）に導きますと、其「ガス」を冷されて液と變りますから、之を受器（液を受ける器）の中に貯へるのです。此貯へられた液が、所謂「ベンゾール」であります。元來石炭が惡臭であるのみならず、「コールタール」も甚だ臭の善くないものでありながら、獨り「ベンゾール」のみ芳香を有するのは、泥中の蓮とでも申しませうか。



▲化學的成分

は水素と炭素との二つの元素が各々六つづ、配合されて有りまして、之を化學式で表はしますれば、C_6H_6と云やうに記すのであります。即ち「ベンゾール」は、C_6H_6なる化學式を有する炭化水素と云ふ意味で、其式の構造が丁度環狀に示されますゆゑ、他の炭化水素と區別して環狀炭化水素（又芳香族炭化水素）と申します。





かやうな規則正しい構造式は、誠に珍らしいことで化學の如き無味乾燥な學問にも、亦こんな面白い事柄に出逢はぬとも限りません。ソハ兎も角、「ベンゾール」は實用上に於て如何なる

▲効用

を爲すものでありますか。今もし垢染みたる半襟の一掛を取り、先づ「ベンゾール」をジャブ〳〵するほど注ぎかけて、兩方の手の平で少しく揉みたる後之を左右に廣げ息を吹きかけながら、パン〳〵と二三度も引き延す時は、スッカリ垢抜けて布皺の跡も止めず、全く眞新らしい襟に變ります。其洗滌力の著しいことは、トテモ、揮發油などの及ぶところではありません。脂垢と「ベンゾール」とは、ドンナ

作用をなしますのかと申すに、脂や垢は至つて「ベンゾール」に溶解し易いものにて、恰も砂糖や食鹽が水に出逢ふと其跡方のないほどに溶けるのと同じ有樣で、其溶されたものは、直に「ベンゾール」の揮發につれて空氣中に放散して了うので厶います、コヽに一寸御注意を申し上げたいのは、砂糖や鹽が水に溶ける働きの物理的なると同じく、脂垢が「ベンゾール」に溶解するのも、矢張り化學的變化を起すのでなくて、物理的作用に依るのであることを忘れてはなりません。近頃は、揮發油では十分洗滌の効力がないので、其信用も次第々々に薄くなりましたのは、畢竟効力が薄弱なからであります。注意して「ベンゾール」をお用ゐになれば、必らす御滿足なさることと存します。

尤も前にも申しました通り「ベンゾール」は、揮發油に比べますと、價格が餘程高く厶いますから、容易く用ゐることは、出來ますまいが、効用から申しますと、是非之を用ゐねばなりませぬ。

二種の流行

岡野知十

最近の流行が二つあります、いづれも家庭と青年の清き娯樂の上に基いて居ます、(一)は繪葉書(二)は家庭園藝です。

繪ハガキの流行を來したのは、確かに中小學に於る繪畫科の進歩からでありましよう。ひとしきり尋常中學には短歌俳句の會が流行ましたが、彩畫の流行と共に近頃はスケッチ會が流行して誰も彼も一寸と水彩を塗るのを樂しみとして來ました。一方戰爭で政府が繪ハガキを發行する、世界流行の氣運は流れこむ、トいふが八方から落合つた結果でありましよう。元來都會の市民衣食住の上に一種の趣味を養成し發達する自然の力のあるもので江戸時代にはこれが絶頂に達したが、維新の改革で田舍もの丶ために一時蹂躪せられた。それが三十餘年のこ丶に再び芽をふき出して江戸趣味と西洋趣味と合しての東京趣味が今起りか丶つて來たのです。『錦繪』は江戸市民が趣味のもとに發達した名物であつたのが、こ丶に形をかへて『繪ハガキ』となつて新東京の趣味を彩色したものです。御覧なさい、忽ち繪ハガキ屋は到るところに起り、丁度むかしの錦繪屋と匹敵する勢ひで、中には美なる顔の人物を店頭に座せしめるなどこれもふるき繪草紙屋に似て居ります、俗間の趣味はこういふやうな簡易な輕妙なものでなければなりませぬ。園藝は一寸オックウさうなものですに近來各新聞にもこれが記事をしるさぬものはありません、これは大隈伯などの園藝の好みが流れる。一方には造花等で西洋花の束髪さしなどが流行する、隨つて洋趣味の花卉が痛く珍重される。元來一坪でも庭をもつ家の且活花に緣日ものに、花に對しての嗜好はふるくから養成せられて居る市民は、忽ちこの新趣味をむかへて手を下すことになつたものでありましよう。まだ〲それは前途どんなに發達してゆきますか、知友間には繪ハガキを贈答する如く、

花を贈答するやうにもなり、花言葉、花ばなし、これが青年間に面白く用ゐられるやうになる時代も來るでありましよう。公園の喫茶の椅子によつて、花娘の賣りに來る花を、とつて、頭にかざす胸にはさむといふやうな時代も左程遠くはありますまい。兎に角今度ます／＼こういつた西俗都會時代趣味に加えて來てまだ／＼盛な流行を呼ぶだらうと思ひます。

傳染病其他諸種の疾病

醫學士　淺間烈夫

▲傳染病發生と徵候　傳染病中最も主なる者は腸窒扶斯、痘瘡、痲疹、痢病、虎列刺、實扶垤里亞、猩紅熱及びペストの八種です。都て傳染病は吾人の肉眼にては見え得ざる位な各種の病毒質即ち一種の生活物たるバクテリアが人の身體の中に侵入するに因て發する者で、呼吸に隨て肺臟から發するのもあるし或は飲食物と共に胃腸に入り次で血中に達するものゆゑ、水、空氣、土地、及食物等に就いて充分な豫防をなさねばならぬ。で、病毒殊に傳染病毒は一個の病人よりして他の健康人に傳染し漸く蔓延して即ち社會に及ぼすものですから、若しかゝる兆候の素人にても、少しでもあると思ふ時は直に醫士に報知して診察を乞はなければならぬ。傳染病の主なる兆候は初め發熱して起り或は始終熱症を存するに在るのです。而して熱症を發するの數日前より、身肢、倦怠、頭痛、食氣缺乏等の兆があつて、俄に惡寒がしたりして戰へるからと思ふと、又全身焦げるやうに熱が出で、汗が又流れ、渴が來る胸惡く舌に苔が現はれ、小便不利、頭重くなる、而して、斯樣な時には脈搏も疾くなるから、普通の病氣ではないと思つて、直に醫士に報知せねばなりませぬ。脈搏が増して體温が昇るのは熱症に於て必らず發す

るものであつて、常人の脈搏は一分時間に七十二動位ですが、それが九十から百二十動以上になることがあります。又體温は平常攝氏三十七度半（前述の如く）なれども更に一度半か二度昇る時は、矢張り熱症に伴ふ徴候なのです。

▲腸窒扶斯　これの前兆は夜眠安らず身肢倦く、頭重く及び眩暈を發する等、或は全身不和を覺え、次で惡寒發熱して皮膚が燥き、體温四十度位に昇り脈搏疾くなつて、食氣全く缺乏するのです。而して多くは下痢すれども便秘することもあるのです。此の如き容體の者なる時は直に醫士を頼まねばならぬ。而して、前額に冷罨法を施し、且つ冷水位を飲用せしめておいて醫士の來訪を待つべきものです。此病の傳染を防ぐには、速に病者を一定の室に移し殊に兩便を一々注意して消毒を行ふて、深く地中に埋むるのです。

▲痢病　これは一種の流行性に發する者であつて一種の病毒皮膚或は腸に感染するに因て起る者です晩夏初秋暑冷の變り目に於て、雨露を侵したり、或は感冒したり、或は又未熟な果實を食うて起るものです。

徴候は下痢烈しく、殊に腹痛し、疼痛ある便意を催し、腹部を抑へても疼痛を感じ、身肢倦怠なるのです。而して初めは水の如き便で、次は粘氣ある血縷あるものが出で、後には純血を漏らすものです。此徴候ある時は可成速く他人と別居せしめて、輕軟なる布片で以て腹部を温保して安臥せしめるのです飲食物などは勿論醫士の命に從ふのです。此病の蔓延を防せぐ爲めには便所を別にするのが一番肝心です。可成は一々便器に取つて、消毒して地に埋めるのが宜しいのです。又病者の襯衣及び褥裾等を洗濯するにも最も注意せねばならぬのです。

▲虎列剌病　この病の徴候は下痢が烈しうて、其量が多く、且つ至つて稀釋いもので、初めは糞汁のやうなものなれど、次第に米の泔汁のやうなものとなり、殆ど臭氣のないものが出る、顏色が青くなつ

て、眼球が凹み、皮膚が冷えて、脈搏が衰へるやうになるのです。腹痛が烈しうて、初めは食物を吐出して、小便が澁り閉るやうになるのです。而して身體が冷えて、腓腸及び上肢に於て疼痛性の大痙攣を起し・終に全身に汚靑色の斑を生じ、僅かに數時間で死するものです。此病の徴候ある時は疾く醫士の來診を乞はねばならぬ。

大便小便は勿論嚴に消毒法を行はねばならぬ。近隣及び一家の者は極めて攝生に注意し、決して不消化物や下利を起すやうなものを食べてはならぬ。而して毛布の腹卷及び足袋を用ゐて、腹と足の冷えぬやうにするのです。

▲實扶的里亞　この病は咽頭及び其兩側にある扁桃線の腫脹から、起るもので、其表面に灰白色の皮膜を附着し、且つ多くは顎下に瘰癧を生じ、兼ねて大熱を發して、嚥下の際劇痛を覺えるものです。此徴候ある時は速に醫士の來診を乞はねばならぬ。又病者の咯出物は最も傳染性の劇しきものですから看護者は大に注意すべきものです。

▲痘瘡と痲疹　兩方とも容體甚だ相似てゐるもので、共に初めは大熱を起し、次で皮膚に發疹を生じ傳染性强くして、多くは流行性をなすものです。痘瘡は初め偶然に發熱し、兼ねて多くは四肢拘攣、眩暈、頭痛及び腰痛を覺え、次に皮膚に疹を發するものです。而して、初めは先づ顏色に赤色の小點を生じ、次でそれが中心陷凹せる小疱となり速に頸部軀體及び四肢に蔓延し、同時に口內咽喉及び眼中にも出來るのです。

痲疹も亦發熱を以て初まり、涙液又鼻涕を流し、兼ねて乾咳を發し、次で米大或は豆大にして黄色或は褐色の發斑を生ずるもので、それも面部から初まるものです。

痘瘡及び痲疹の前兆ある者及び眞に之を發する者は嚴に隔離法を行ふて他人と別居せしめねばならぬ。而して室內の空氣、衣服等嚴重に消毒せねばならぬ。そして、痘瘡を豫防するには種痘より外に良法はな

ひのです。

▲日常多き病

▲眼炎　これは眼中發赤、腫起し、羞明、痒痛、或は刺痛を發し、涙涕增多し、或は粘稠の液を流すものです。

此病に罹る時は窓戸を閉ぢ日光を遮る樣にせねばならぬ。そして、砂塵や睫毛などが眼中に入る時は冷水を以て徐に洗滌するのです。そして、此病には往々膿樣の液を漏して甚だ傳染し易きものがあるから、患者に使用するものは決して他の患者に用ゐてはならぬ。殊に小兒は此患者の病室に入つてはならぬ程甚だ傳染し易いものです。

▲耳中異物　耳の病は耳中に異物が入つたり、或は耳聹が溜つて、耳道を塞いだりして起るものが多いやうです。則ちそれが爲めに耳聾、耳鳴を起し、或は劇しき耳炎となつて、疼痛を發することがあるのです。

耳中の異物を除去するには、最も簡法ともいふべきは先づ一手に耳輪を撮み、後上方へ曳き、他手に水節を取つて微溫湯を耳中に劇射するのです。さすれば容易く除去することが出來るのです。

小虫の耳中に入る時は徐に頭首を傾けて微溫の油を耳中に滿注するのです。小虫が浮上して自づと出ます。又夜中に在つては暗所で、急に燭火を耳前に觸接すれば火を慕うて小虫が出て來ます。

耳聹の凝固して耳中を塞ぐ者は二三日間頻りに微溫湯を耳中に注入するのです。

▲齒病　齒病中最も普通なるは齒痛齲齒及び齒根膿潰です。

齒痛は齒牙の外形異常なくして起ることもありますが多くは齲齒に因つて齒帽敗崩るのです。

齲齒は元より其人の禀性に因るけれども、飮食及び齒牙攝養の宜しきを失ふ爲めに起ることが多いから、常に齒牙を淸潔にせねばならぬ。

齒痛を發する時は、頰に芥子油を擦入て、棉花を以て被ひ、或は耳後に芥子泥を貼り、且つ旁ら微溫湯若

くは「カミルレ」浸を以て數々含漱するのです。齒痛ある時は口中を視査し、若し齲齒の孔あれば綿塊を以て孔内を可成清潔にし、そして更に別の綿塊に石炭酸水（百分中五分を含む者）を浸して孔内に塡實するのです、痛みは早く止るものです。

▲衄血　衄血は逆上甚しき時、或は夏日炎天を犯して劇しき勞働をなす時に多いものです。これは淸冷な處に安座せしめて冷水を鼻より吸ひ込ませ、前額及び顳顬に灌かけるのです。而して、又冷水を飲用させれば、やがて止るものです、或は又綿塊を鼻の孔へ栓塞して功の有ることもあります。



▲咽喉炎　これを發する時は、嚥下するに方て疼痛を覺え、言語に鼻聲を帶るやうになるものです。又口中を窺へば軟口蓋に赤色を發し、懸壅が延びて大きくなつて、扁桃腺が腫れ上るのです。此症には明礬水（明礬一匙に水五合餘）を以て數々含漱せしめ兼ねて發汗法を行はしめ、或は冷水を布片に浸したるを頸へ纏ひ付け、更に油紙で以て其上を包む時は、皮膚に濕氣を生じて頗る良効なものです。

▲鼻感冒及び咳嗽　鼻感冒は一に鼻カタルと云うて鼻中赤色にして腫れ、鼻道壅塞して、鼻根及び眉間の深部に乾燥腫起するが如きを覺え、噴嚔を催し

而して多量の稀粥を漓し、漸く變じて稠厚膿のやうなものが出るのです。

薄荷葉の浸劑、温乳汁或は温湯を服せしめ一二時間發汗せしめて常に温保し、又咽喉燥痒及び咳嗽ある者は頭に冷水罨法を施すのです。

△咯血及び吐血　過劇の勞働をなす時は肺臟中に出血を起し、咳嗽に乘じて鮮紅にして流動する泡沫を交ゆる血液を咯出することがある、或は咳嗽なくして卒然多少の血液を咯出することがあるが、かやうに肺血を出すを咯血といふのです。

咯血の前兆は通例胸內の深部に充滿壓迫緊張及び温暖を覺へ、呼吸困難心悸亢進、喉頭に灼熱、肉癢を覺える等あるが、是等の時に速に察知して適當な法を施せば大に病勢の增進を防ぐことが出來るのです而して是等の前兆ある時は、速に衣服の緊迫を寛め上身を高くして安臥せしめ、冷水を胸部に灌ぎ或は冷罨法を行ひ、一二包の沸騰散を服せしめ、或は一匙の食鹽に少許の水を加へて嚥下せしめ、次で冷水を飲ましめるのです。而して病者には言語を戒めるのです。

吐血とは胃及び食道より出る血を吐き出すのをいふのです。可成褥中に安臥せしめ、上身を稍高くし、心窩に冷罨法を施し、極冷なる水又は氷片を少しづゝ嚥下せしめるのです。

咯血も吐血も無論早速醫士に來診を乞うて、其命令通りに看護せねばならぬ。

△下利及び腹痛　下利とは通例稀薄流動の大便を下し、兼ねて腹痛を發するものをいふのです。而して、此症ある者には温かなる粘滑飲料例へば大麥煎汁葛湯等を與へて、腸の運動を靜止し、發汗を促し且つ常に温保すべきものです。病勢は輕くても醫士の來診を乞ふを良とす。

腹痛に胃痙と疝痛との二種ある、胃痙とは胃部即ち心窩に於て劇痛を發し、病者煩悶苦痛するもので往往嘔吐を發するものです。次に疝痛とは腸に發する疼痛で、前者に比すれば多くは下部に在つて稍之よ

りは輕いものです。

胃痙及び疝痛共に芥子紙或は芥子泥を患部に貼り軟輕の被衾を被うて腹部を温保し、温湯或は温乳汁を與へるのです。尚ほ疼痛止まない時は、温湯を以て灌腸を行ふのです。

▲癲癇　癲癇は卒然癡仆して痙攣を起し、身體の諸部劇しく屈曲し或は伸展し、精神及び知覺頓に廢絶し眼球うはづつて、瞳孔が明暗に應せずして開らき口を確かり閉ぢて自ら舌を嚙むものです。そして面貌が惡く膨れて青赤色を呈し、呼吸が困難なるやうになり、口に泡沫を生じ、其他手指緊握して、開くことの出來ないやうになるのです。而して、やがて少時にして痙攣も歇み、四肢却て軟癡するやうになつて、意識回復するやうになるが、病中の事は全く記臆しないのです。

此病者を救ふには、先づ頭部及び上身を高くして、安臥せしめ、衣帶の緊迫する者は悉く之を解去り痙攣甚しきものは靜に身體を押へて鎭靜するのです。（面部に冷水を撒り灌けてもよい）併し、此發作ある時は直に醫士に報知すべきものです。

▲癤腫　これは皮膚の一部硬結焮腫れるもので、遂に膿を持つものです。而して赤色硬結の所の中央が稍々黄色になつた時には膿潰たる徴です。これが出來た時は、通例温罨法、或は巴布を貼けるのが一番宜しいけれども速に鍼で破つて膿血を漏らし、そして、清潔に維持する時は速に癒えるものです。が、若し其周圍などに膿汁が附いた時は又其處に出來るものですから注意せねばならぬ。

▲瘭疽　瘭疽とは指及び手掌に發する烈しき焮衝にして、多くは皸等の如き、甚だ微細な創傷に汚物が入つて起るものです。初めはさ程烈しいものでないけれども乍ち峻烈なる疼痛を發して來て、遂に膿潰するものです。速に救助の策を講じなければ、病勢骨に及んで、指節脫落し、或は膿潰蔓延して前膊に及び遂に熱症を發して生命にも係るとがありますから注意せねばならぬ。

疼痛を緩解するには、温湯或は石鹸水中に數々浸し患部を可成高位に保持すべきものです。これは早速醫士に報じて適當な治療を受けねばならぬのです。

▲疥癬　これは疥癬蟲と名くる一種の小蟲か表皮の下に捿息するに因て發する所の皮疹であります。而して、これは專ら指間、腕關節、肘關節の前面、腋窩の前部、臍圍及び膝膕等の如く皮膚の軟弱なる表皮下に出來るものです。

これを治するには疥癬蟲殘らずを殺すやうにせねばならぬ。則ち醫士に就て適當なる擦劑を請ひ、之を皮膚に擦入して温かにし、翌朝石鹸にて全身を洗ふのです。而してこれは極めて傳染し易きものですから嚴重な消毒法を行はねばならぬ。

凡て病氣は、罹り初めに當り、大切に注意すれば、大概速かに平癒るものでありますから、何の病氣によらず、怠らず、治療を加うるのが、肝要でムいます、ひどくなつてからは、急に狼狽へても中々取返しのつかぬものであることを平日心にかけて置かねばなりませぬ。

平凡なる家庭生活

吉田光子

▲金滿家の妻

にならねば、幸福は得られますまいか、勿論或る程度までは、金の勢力でもつて、快樂を買うことも出來ますが、それは多くは一時の事で、決して永く續くものではありません、況て神聖なる家庭の幸福といふものが、どうして金で求むることが出來ませうか、金で得らるゝのは、衣服です、指環です、頭髮の飾物です、お美い喰物です、こんなものは一時眼をよろこばすると口を娯ますとに過ぎません、若い時には、金滿家の若嫁や、娘たちが、上から下まで立派な衣裳に包まつて、寶石の指環を二つも三つも篏めて、頭髮の飾物にも、大分金目をかけて、これ見よと言はぬ許りに、車に乘つて、威勢よく衆人環視の中でも通るのを見ると、自分もあんな風をして、

人に羨ませて見たいなどと思ふものです、人情から申しますと、決して無理とはいへますまいが、其心が遂に『金さへあれば』といふことになつて了いますので、男子なら一番大奮發をして、刻苦忍耐、大財産家にならうといふ志を起すのでありますが、女子は手つ取り早く、『金滿家に嫁入つたならば』といふことになるのですから、其が大に一生の幸不幸の岐るゝところとなるのであります、かう申しますと、金滿家に嫁くのは、全く惡いやうにも聞へますが、決してさういふのではありませぬ、金を目的とするのが、善くないと申すので厶います、金の勢力は衣服其他の粧飾品を自由にすることゝ、金の爲に人に頭を下げさせたり、諂諛を言はせたりする位のものでありまして、衣服や、粧飾品や、諂諛などは、家庭の幸福とは、何等の關係もないでは厶いませぬか、然らば

▲當世流の紳士の妻

になつたら、何で厶いませう、立廻りが旨くて、辯舌が巧みで、人に取入ることが上手で、人中に出しても幅のきく、萬事に拔目のない男は、一寸見ると中々賴母しく思はるゝものです、それに談話が得意で、人の氣を察することが感心する程鋭いものですから、若しこんな手合と一寸言葉を交すが最後、向ふから此方の氣を吞込で、氣に入るやうに、旨い調子で持かけられますから、遂知らず此方も乘氣になつて、其人の容貌體度までが、引立て見へるものですさうして其の結果が、こんな人の妻となつたら、朝も晩も、今日も明日も、面白ろおかしく幸福に暮して行くことが出來やうと考へるものです、併し『當世紳士を夫にする』といふことが、必ずして幸福な家庭を作る爲の必要條件とは申されません、當世紳士の容子の好いの程、當にならぬものは少ないと存じます、立廻りの旨いのは、輕薄なので、辯舌に巧みなのは、心に確信の乏しい證據で、萬事に拔目ない裏面には、往々穴だらけの缺點のおほいものです、

輕卒と此な人に結婚するものでは厶いません、この類の人に限つて、結婚前にはよく見へた事が、必ず結婚後日を經るに隨つて、次第に惡く見へるやうになるものです、詰りは結婚前に立廻りの旨いのが、結婚後には輕薄となり、辯舌に巧みなのが、心の變り易いホンの口前許りとなり、萬事に拔目のなかつたのが、却つて缺點勝の穴だらけといふことになるのです、故に當世紳士も金と同樣で、決して幸福なる家庭和樂の必要條件では厶いませぬ。

以上陳べた二つの者とは正反對に、金滿家でない人則ち孰れかと申せば貧乏な人と、當世才子でない人則ち頑固な方の人は何うであるか、これも研究して見る價があらうと思ひます。

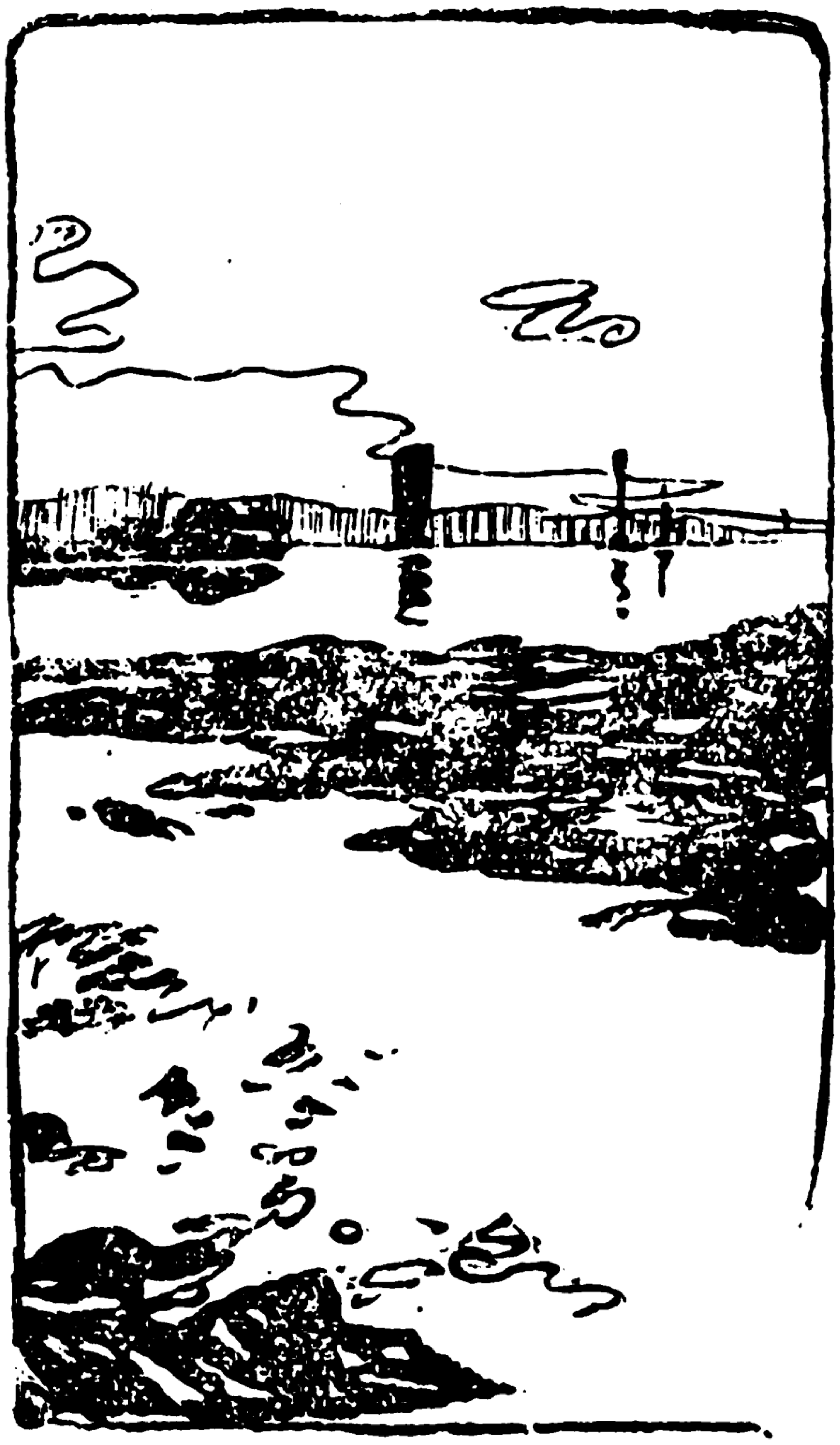
▲貧乏な家の妻

になるのは、必ず不幸で厶いませうが、尤も貧乏と申しますにも、程度のあることで、一概には參りませぬが、こゝに申しますのはかの赤貧洗うが如しとか、釜甑塵を生ずとかいふて、朝夕の食事も、自由ならず、夏冬の衣類も着のみ、着のまゝといふやうなのではなくて、儉約さへすれば、衣食に事を缺くことのない位なのを指したので厶います、さてこの位の程度の貧乏であつて見ますと、下婢を使うなどは思ひも寄らぬことでありますから、襷がけで炊事も爲なくてはなりませぬ、裾褰げて洗濯も爲なくてはなりませぬが、その換りには、他人入らずに夫と差向にて氣の置けぬ生活をすることが出來ます、お友達に誘はれて、芝居の、花見遊散のと、浮かれる譯には參りませぬが、一寸出るのに、お修飾をするの、着換るのといふ煩い事は厶いません、終日骨身惜まず働らいて、お芋の煮付や豆腐のお汁でも、勤先きから今歸つて來た夫と差向つて、その日一日の勞苦を忘れて、箸を取るときの樂みは、七味八珍とやらの御膳に向つたよりも、心の愉快を覺えますまいか、それに三月に一度でも、半年に一度でも、夫に拉れられて心おきなく、日比谷にでも上野にでも

芝の公園にでも、散歩をして小奇麗な處で、淡泊りと御飯を喫べるなどは如何で厶いませう、若又た夫が何等か奮發して、一事業起さうとか、立身出世をしやうとかいふ望を抱いて居る人であつたなら、それを援けて、其志を遂げしむることに努力するのは、金滿家や紳士の家庭の知ら奴樂みではありますまひか。

△頑固な人の妻

頑固と申しますと、何だか天保年間にでも生れた人か、但しは偏一方な世にも人にも容れられない變手古な人のやうに聞ます、こゝにいふ頑固といふは、當世紳士と全く反對して居るのを指した　でのこ　で



立廻りもうまくなく、辯舌も巧みでなく、お諂諛などは一向出來ない人をいふので厶りますが、こんな人に限つて、意志の餘程堅固なものです、外觀からは、愚鈍なやうで、又難物屋のやうで、何だか幅のきかない氣のきかない嫌やな人のやうでありますけれども、執着力が強くて、勇氣があつて存外優しいところもあつて交際わへば交際わふ程、味のでるものです、初め逢つたときには、變氣痴な人とばかし見えますが二度が、三度となる内には、男らしくて、何となう氣高いところが見えて參りますから、次第に心底から頼もしい感じか起ります、こんな人を夫に致しま

すれば、飛立つやうな面白いとはありますまいが、自分で非望をさへ起さなくて、分に安んじて居りますれば、波風なく、不平なく年月を過ごすことのできるものです、そうして斯ういふ人は、邊幅をかざらずして、心を或一事に集注するものでありますから、往々成功して、立派な人物となることがあるものです、當世紳士の飛揚りを夫にするよりも、安全であつて、永い歳月を嫌氣さゝずに送つて、其上前途が有望であらうと思ひます。

▲金滿家と當世紳士の家庭

一概には申されませぬが、金滿家や當世紳士と申しますと、至つて聞えは宜しう厶いますが、其の家庭は決して思ふ程、幸福なものでは厶いませぬ、金の有る家は存外に煩累いとの多いものです、又當世紳士には、却々油斷の出來ぬ方が少なくありません、早いお話が、お友達の何子さんは、あんな好いお衣裳を召して入らつしやるから、自分もそれ、若くばそれ以上のものを作らなければ、今度の會には出られない、何子さんのやうな寶石入りの指環と金時計がなくては、人樣の中には、行かれないなどといふやうなことは、金滿家には有勝のことで、これが一方ならぬ苦痛であることは、貧乏な家で、明日の米代がない、今日着る衣類がないと困るよりも一層甚いのです、お小間使や、仲働きや、おさんどんや、又は玄關番の書生などの取締りもしなければなりませぬから、隨分心配なことが多いのです、それにお交際は多いし、盆暮の贈物、附屆けの世話も、大抵では厶いません。

又た當世紳士の方になりますと、イヤにハイカラ風を吹かすのと、豪傑風を氣取るのとの兩方が厶いますやうです、ハイカラ風を吹かす人は、コスメチックを塗つたり、白粉で薄化粧をしたりする程あつて妻君を大切に可愛がりまして、一寸の言葉遣ひも丁寧であります、奥さんとか、令閨とか言ひたいところを、サスガにさうも言かねて、何子さんですま

して『アナタ何うなさいます、私し今夜はもう臥りたいです』といふのです、豪傑風を氣取る人になりますと、之とは正反對で、『コラ何うしたんだ、早くお酌をしないか』といふ調子です、が、其の内幕を見ますと、まあ似たり寄つたりの間でありまして、交際だからといつては、いかゞはしい處に出入りをする、宿ることもある、泥ん醉に醉つて、闇夜に歸ることもある、それを少しく諫言だてを致しますれば、ハイカラの方は、一夫一婦の持論に對しても、弱り込むだ風を致しますが、心の内では何にこの位のことは爲なくては、コスメチックや白粉の手前に對して相濟まぬと笑つて居るのです、豪傑の方では、何に小癪なと一言で叱り飛ばして了います、其癖兩方とも成る丈け内には分らない樣に、狐鼠々々隱密にするのは、同じです、ですから、何れにしても其妻君は悔しいこと、哀しいこと、腹の立つことが多くて、心の不平といふものが始終起りますから、不愉快なのが先づ常といつても宜しいのです、小說を見ましても、紳士の家庭といふものは、どうも不自然な、亂調子なことが多いではムいませんか、それに上等な紳士になればなる程、其の内部の品行は壞れて居つて、申すも嫌やな氣持が致しますが、妻君の外に第二第三の妻君を有つて居る人が決して稀らしくはありませぬ、今の大紳士の家庭では、この一事に辛抱が出來ぬやうでは、一日も其家の妻君たることは出來ないのでムいます。

斯う云つて見ますると、金滿家の妻君、紳士の令閨も餘り羨ましくないではムいませむか、併し金滿家の内にも立派な家庭もムいますし、當世紳士にもまた清い生活をして居らつしやるのもムいますから、必らず私しの申すやうな方許りとは限りません、前に申した通りに唯だ金とか容子とかに身を任せることが惡いと申すのみでムいますから、意味を取違へぬやうに願ひます。

▲平凡なる生活

平凡と申しますと、至つて下らない感服しないことのやうに思はれますが、決してさうでは厶いませぬ平凡とは、非常とか、非凡とかいふ語の反對でありますから、先づ非常でない、非凡でないことは、みな平凡でありますので、大財産家か、大紳士といはるゝ人の家庭の外は、多くは平凡なる生活をして居るので厶います、而して此の平凡なといふ中には、幸福も、快樂も含むで居ますので、大學校の教師でも、中學小學の教員でも、高等官でも、判任官でも銀行會社の重役でも、事務員でも、新聞雜誌の記者でも、文學者でも、大贅澤や、大奢侈をせない人の家庭はこゝにいふ平凡の生活ですから、平凡といふことを氣にするには及びませせぬ。

さて此の平凡な生活といふ内にも、勿論いろ／＼ありますが、今の日本の生活程度から割出して考へますれば、都會と地方とを通じて、先づ一ヶ月の收入が、三拾圓から五拾圓まで位の間の家が、尤も多數であらうと存じます、人間の生活は、上を觀ても限りがなく、下を瞰ても限りのないもので、例へば平凡な生活の内にも、五六百圓以上の月收の人もあれば、十圓か二十圓の人も厶いませうが、普通卅圓五十圓の人が一番多いと申すのは、官吏でも、會社員でも、この位の處でして、又實際の働らきを致して居ますのも此位の人方にあるので厶います、それゆへ今日の普通學をされる女子の多數は、先づ此の位の處に嫁がれる方が、比較的に多數であると判斷致しましても、決して間違は厶いますまゐ、そこで

▲月收參拾五圓

の家庭を引受ける主婦となつた積りで、これ丈の收入でだうしたら家庭の趣味が得らるゝであらうか、尤も家庭の趣味といふことは、決して金錢で得らるるものではありませぬが、併し或る場合に於て金錢は、家庭の平和と快樂との關係を有つものに相違厶いませぬ、若し主婦の不心得の為に月々の收入と支出とが、償なはぬときは、一家は決して丸く治ま

るものではありませぬ、收入の一定して居る家で、支出に對して收入が不足するやうでは、其の責任は主婦の上に歸するのは勿論でありますから、主婦の不行屆は決して免かれませんのみならず、その爲に家内に不和合といふことが生じて參りますのは必定で厶います、そこで私の考へには假りに參拾五圓の收入のある家で、家族が主人と其母と、一人の子供と、主婦との四人であると致しましたところで、どう豫算を立てたならば、面白く生活をして行くことが出來ませうかといふことを、考へて見ますると、何よりも多少に拘らず、貯蓄と申すことは必要で厶いますから、先づ五圓を預けるとして、これは決して引出さぬものとせねばなりませぬ、それから家賃が六圓、米代が六圓、副食物が一日一人平均五錢として六圓、味噌醬油代が二圓、雜費が參圓として計貳拾參圓外に主人の小使を參圓と致しますれば、貳拾六圓で厶いますから、殘りの四圓を、衣服やら醫藥やら不時の料としなければなりませぬ、隨分苦しい切詰めた豫算では厶いますが、これでも遣り樣一つでは、立派に家庭の趣味といふものを味うことは充分に出來るのであります、芝居見物に行くとか、料理屋にでも行つて御馳走でも喫ることは却却出來ますまいが、時として清き家庭の快樂を一同に共受いたしまして、それが金錢で買へない、則ち芝居見物などを以て最上の快樂と心得て居る人達の知らない愉快を盡すことが必定厶います。

中等社會に於ける普通の生活と申すのは、則ち以上述べたところにあるので、先づ普通女子の目的とすべきは、こゝにあるものとしたらば、洵に確實なもので將來失望するといふやうな憂は決してありませすまいと存じます。

▲現今女子理想の家庭

然るに今日の女學生の理想されて居る家庭と申すのをおり〳〵噂さ話に承まはりますと、餘程高尚で、高等の英學などを修業して入らつしやる方などは、

揃ひも揃ふて、何方も外交官を夫に持つか、左もなくば羽振のよい高等官だとか、大會社の課長以上の方だとかでなければ、決してお嫁には行かぬ、それ以下のものに行く位ならば、寧そ獨身生活をすると仰しやる方が、多數だそうで厶いますが、成程目下御修業盛りの御身にして見れば、かゝる高い理想を抱いて居らつしやるのも、强ち御無理とは申しませぬが、さてこの理想と申すが、實際達せられる程御運の好いお方は百人にお一人も厶いませうか、九十九人までは、先づ理想と實際とが衝突して、最初の志といふものが、全く空望となつて了うので厶います、さうなりますと、遂には失望といふとになり落膽といふとになり、又不平といふことになりまして、世を味氣なく暮すことになるので厶います。理想も餘りに高過ぎましては、結局は其身の不幸になるものでは厶いますまいか。

この頃三輪田眞佐子刀自が、『日本の家庭』に理想と空想と題して、論せられました一篇は、如何にも面白く一讀いたしましたが、殊に其中左の一節は尤も感服いたしたところで厶います。

眞に幸福なる家庭を作らんとするならば先づ足ることを知らざるべからず。例えは一旦嫁ぎし以上たとひ良人平凡なりといへども、不平を告げずしてこれを敬愛せよ、されば自から家庭的一種の趣味を生ずるに至るべし、また夜に電氣燈あり、晝は電話器あり、厨にはガス管あり、生活費は無限の巨額に上るも可なりと云ふ家庭を以て、淨土界と空想するは、やがて不幸の源なり、反之、月もる賤の伏屋に居ながらも、良人とわが力行とを恃みて、淸き樂しき家庭を作らん道を講ぜよ、これ眞に幸福の基ならんかし。

要するに女子敎育の目的は常識を養成するにあり決して虚榮心を増長せしめんためにあらず、また忍耐力を修養せんためなり、必ず不平と衝突との因を作る・めにあらず、或は親の門地高きとて、一寸の効なき子孫などがこれを恃み、奢侈を營む

べきものならんや、果して奢侈に流れずは、理想の家庭を作る能はざると考ふるものは大なる誤なり、今日教育ある主婦が、往々樂しき家庭を作る能力なきを世人に認めらるゝは、全く空想を以て理想とする弊害より起らんか、左れば空想に耽らんよりも、默して汝等の心と手を働かしめよ、幸福はこの兩者の外より來らさるべし、これ無上の最大理想なり。

流石に刀自が、六十餘年の生活上の經驗より推論されたもので、寔に今日の女學生の爲に親切な丁寧な忠告と申すべきで厶います、此心と此行とを以て、世に立つことを心がくるのが、女子の勤めであつて、また實際に家庭の幸福と、心の平安とを得る道であると信じます。

七夕又星祭

廣瀬美子

昔は七月七日は、タナバタといひ、五節句の一として、家々五色の紙を剪りて短册とし、之に古歌などを書き、笹の葉に結ひつけ、或は種々の形に裁てる紙を飾とし、此竹竿を高く屋上に出せり、其樣中々に美しく、夜は種々の供物を星に供へて之を祭るを例とせしが、今は五節供は廢せられたるより、此七月七日は殊に淋しくなりて、三月三日や五月五日の節供の名殘り行はるゝには、比ぶべき方なき程となれり、左れど此七夕は兒女の敎にも關り、殊に女子にも係ることの多ければ、昔の事なれど、心得置くも宜しかるべきか、今其あらましをいはんに、

▲七夕の名稱

七月七日は其夜牽牛、織女の二星を祭ることなれば之を七夕といふなり、又此祭を乞巧奠ともいへり、此七夕をタナバタと訓ますることは、何より起れることなるべきや、萬葉集にはナヌカの夜と咏みありて、此頃にはいまだタナバタといふは稱へざりしがごとし、左ればタナバタといふは、後の世の俗稱にして、其理なしといへる人もあり、併し俗稱なりとするも、

何かのより所あるべく、倭名抄に織女をタナバタと訓み、萬葉にも同じく織女と訓めり、タナバタは棚機にて、機織る事をいふなり、之より機織の女工をタナバタツメといひ(ツは助語なり)、よりて織女星をもタナバタツメといへり、斯くタナバタは織女より織女星となり、遂に七日の夜の事即ち七夕をもいふに至れるなるべく、いはゞ餘りに轉じ過ぎたるなるべきか、是れはタナバタを織女といふ訓にせるよりの説なるが、又たなとは空といふ事なり、たな雲といふも、天の曇れるなり、然れば空の機おる姫といふこゝろにて、家の棚も空にあるものゆえに俗にたなといふともいへり、八雲御抄に、和歌の題には七夕とも書き、歌には織女と書くべきよしを記したまへり、是は心得置くべき事なり、又此星祭を乞巧奠といふことは、支那より來れるにて、人々其業に於ける技の巧ならんことを祈るよりの事なるべし、女子の針仕事の巧ならんことを祈りて供ふる糸針を願の糸、乞巧針などいへり。

▲兩星の會合

七月七日の夜、牽牛星と織女星と天の川に於て相會すといふ、之を星合とも、星の契ともいふ、但し此事は經史を尋るも出處とすべきなく、唯々詩經に睆たる彼牽牛、跂たる彼織女とありて、牽牛星と織女星と對して、其名のみあれど、天の川にて一年に一度相會ふといふことは、何れの書にも見えず、此事は畢竟俗説妄誕に過ぎずと、古人も云はれたるが、詩歌連歌俳諧等の道に於ては、浪説なりとて、用ゐるも苦しからずともいへり、此一年に一度天の川を渡りて、兩星相會ふといへるより、此事を年の渡ともいへり。

▲我邦の習俗

我邦にて、此七月七日の事につきて、歴史に見えたるは、持統天皇五年七月七日公卿を宴して朝服を賜ふとあるを始めとし、此星祭の事は朝廷に於ても上代より行はれ當日掃部寮より葉薦を清涼殿の東庭に鋪き、其上に長筵を鋪き、机を其上に立て、之に燈

臺九本を置き、内藏寮より御燈明を供す、机に菓子香爐等をすえ、箏の琴をもたて、(此箏の琴は十三絃の琴にて、仁明天皇の時、遣唐大使たりし藤原朝臣貞敏が、唐より傳へたる名器を用ゐらるゝを例とす)机上の香爐は終夜空燒とし、琴は三の樣ありて常は盤涉調とて、水音にて半呂半律、秋の調子なりといへり、七月七日七いろ御たむけとて、御歌御鞠、御碁、御花、御貝および御揚弓、御香を供へられ、御硯七面、御筆七對、梶葉七枚、梶皮七條を



飾りて、其梶葉に御咏を御染筆あるなり、又梶の葉七枚をかさね、内へしんて、いもの子を入れ、さうめんにてくゝり、御湯殿の屋根へ上るともいへり、此星夕の御硯水は、江州山邊里星の井の水を用ゐ、七月初旬に女房の官人下向して採り來るといふ、是れにて上代には此祭も中々重き儀式のありたるを知るべし、又此星祭を乞巧奠といふも、もろこしよりの事にして、一事を祈に三年のうちに必叶ふといひ、箏の琴をたつるも、琴の巧ならんことを乞ひ、

ふみをおくも、其巧を祈り、五色の糸をかくるも、糸の事の巧を願ふ意にて、後世の五色の短冊を用ゐるは、此五色の糸よりなるべく、徳川幕府時代に至りては、此日諸大名は、何れも白帷子にて登城して御祝儀を述べらるゝの式あり、市中の各戸にては、前にも記せる如く、竹竿に短冊其他種々の飾を凝らして結びつけ、之を高く揭げて看物として種々の供物を星に供へ、其中瓜を庭に陳ねて、針を之にさし蜘蛛の瓜に網するあれば、巧を得たりとて喜べり、又此日索麪を食し、或は之を贈答するをも例とせり此蜘蛛の糸の事も、唐より來れる事にして、蜘蛛の糸の精巧緻密なるよりの事なるべく、索麪も糸の形に似たるよりなるべしと云へり、又之を支那の索餅の遺意なるべしともいふ、索餅の事は、昔高辛氏の女子、七月七日死し、其靈鬼神となりて、人に瘧を病ましむ、其女子麥餅を好めり、故に索餅を以て之を祭る、後人みな索餅をくらへば、瘧疾を患へずと云ひ傳へたり、古は斯る事も信せられしより、行はれたるものか、

▲習俗の來由

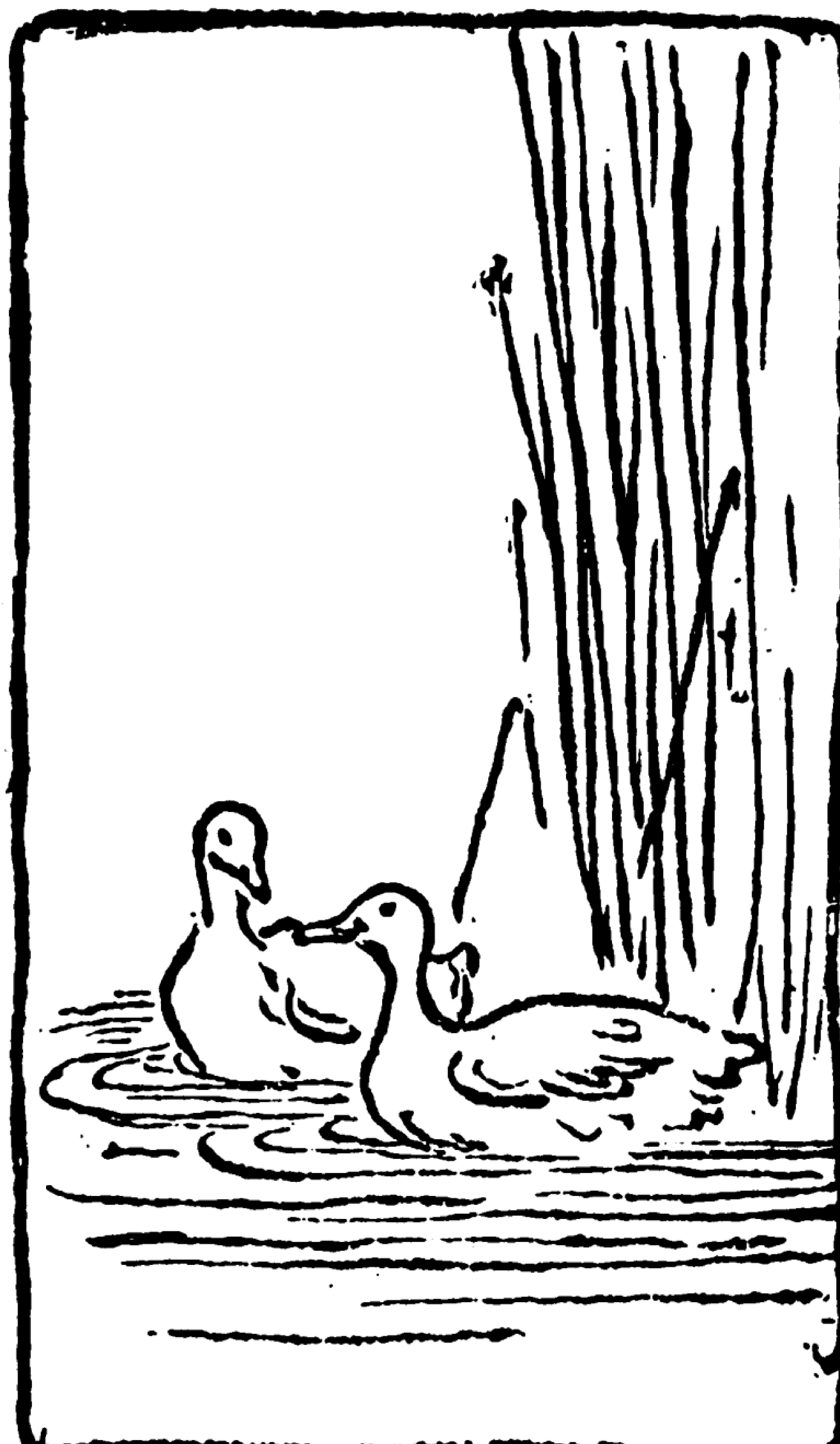
此七月七日に於ける、我邦の習俗は、支那より傳はれるもの多きことは、前にもいひたるが、今其出處の一斑を述べんに、此七月七日の夜に、庭を掃除して、筵をしき机を立て、酒肴果物などを供へ、香を燒き、牽牛、織女の兩星相會する時、人々願をかくることあり、此時天河の中を見るに、奕々せる眞白の氣ありて、之が五色の輝を現はすを見れば、之にて己が願のかなひし徵とし、富を乞ふものあり、壽を乞ふものあり、又子なきものは子を乞ふものあり、併し唯一を乞ふことを得て、幾ツも一度に乞ふことを得ず、三年の間は之を他人に話しするを得ずといひ、又天の河の東に織女あり、天帝の子にして機を織り日々勞役して、其容をとゝのふるに、遑あらず、天帝其獨り居ることを憐みて、河西の牽牛に嫁せしめられたるが、さて織女が牽牛に嫁したる後は、一切女の業たる機織を廢めたり、そこで天帝大

にその不都合を責めて、再び河東に歸らしめ、唯々一年に一度相會することを許されたりといふ事を傳へ、又桂陽といへる地に、成武丁といふ仙人を學ぶ人ありしが、或日其弟に向ひて、七月七日には織女河を渡るべく、其日には諸仙人何れも其居處に歸るといひ、弟問ふには織女の河を渡るは何の爲めなりやと、武丁答へて織女の暫く牽牛の處に詣るなりと是より世人は織女が牽牛に嫁せりなどいひ傳へたり又唐の玄宗皇帝が、七月七日に至る毎に、華淸宮に在りて楊貴妃と遊宴せられ、其時宮女達は瓜果物などを陳べ、又酒肴を庭に列ねて、牽牛織女の兩星に祈り、又各々蜘蛛を捉へて小さき函の中に入れ、曉に至りて之を開き、蜘蛛の網のかけ樣を見て、其多少によりて願の如く、巧を得たるの候と爲せしが、是より民間にても之に倣ひて行へりといひ、又或は五色の糸を結び、七本の鍼に通して供へ、瓜を列らねて之に蜘蛛の網をかくることあれば、巧を與へられたりとせりともいへり、是等は皆我邦に於ける習俗の出處來由ともすべきものなり。

▲兩星の異名

和歌俳諧などには、兩星の異名を以て詠めるもの多し、秋去姫、朝顔姫、糸織姫、薫物姫、さゝがに姫百子姫、梶の葉姫をたなばたの七姫といへり、秋去姫は秋の來るといふ意なるべく、朝顔姫は蕣花の好時節なるよりいひ、此花を牽牛花とかくも、星の名よりせるならん、糸織姫は機織女の名より來り、薫物姫は香花をたきて供ふるよりいひ、さゝがに姫はさゝがには蜘蛛にて、前にいへる蜘蛛の網よりなるべし、百子姫とは天の川を百子の池ともいふ、此日銀盤ともいひて、大盥に水を入れて、空の星を移すことあり、七箇の盥を用ゐるより、之を七箇の池ともいふ、百子の池といふは、婦人の子多きを祈りて百子といひしなるべく、之より天の川ともいひ、織女星の名ともなりしなるべし、百箇の盥を用ゐるよりいへりとの說あるも、餘りに多く過ぐれば信じがたしと古人も云はれたり、梶の葉姫とは梶の葉を星

祭に用ゐるよりの稱なり、朗詠抄に　昔余吾の湖に天人下り、羽衣を獵師に盜まれ、獵師の妻となりて羽衣を取て天上し、再び人界に下りて、獵師と共に天上し、牽牛、織女となる、其再び天上する時、梶の木の上より糸をおろし是に取付て登る、故に二星の手向に用ゐ、願の糸とて、五色の糸を用ゐる事淡海志に見えたりとあるが、餘りに荒唐にして信じがたし、和漢三才圖會に、此皮にて昔は木綿を織り今も祭祀に木綿の襷をかく、上古の衣服を象るか、今星祭に詩歌を其葉にかくも、木綿の義に象るかとあり、此説宜しかるべく思はる、此外、ともゝし妻ともいふ、乏しの義にて、あふことの稀なるよりいふなるべきが、是は異名にはあらずといへり、



牽牛星は彦星、犬飼星といふ、ひこは男子の美稱にして、織女の夫とするより、男星といふ意なるべく犬飼星は、いゝぬの反うなれば、此のいゝぬは牛に同じといへり、牛飼の意とすれば、牽牛といへるより來れるなるべし、又天の川も種々に書けり、天漢、雲漢、銀漢、銀河星河、銀灣、靈源、天漢、牛渚など多し。

▲烏鵲の橋

七夕に烏鵲の橋と紅葉の橋といふ事あり、烏鵲の橋の事は、もと淮南子に、烏鵲河を塡めて橋と成し織女を渡すとあり、此事は昔瓊といふ地に夫婦あり、夫を遊子といひ、婦を伯陽といふ、遊子十六歳、伯陽十二歳にして、夫婦となりて、互にこゝろざし切なり、ともに月を愛すること限りなく、夕

には月の出るをまちて里にゆき、暁には月の入るを惜みて高き峰に登る、伯陽九十九にして死す、遊子ふかく歎きて、月を形見と見る程に、或夜伯陽鵲に乘りて空を飛行しければ、遊子殊になげきて、百三歳にして死せり、遂に天の星となりて、烏にのりて天を飛行し、夫妻銀河を隔てたり、されども帝釋毎日この川にて水を浴たまふゆえに、水穢ありて渡ることを許されず、然れども七月七日は帝釋善法堂へ御參りの日なれば、水を浴たまはずして、渡ることを許されぬ、年に一度といへども、人間の爲には一日一夜なり、この時烏と鵲と羽を双べ橋となりて、牽牛、織女を通すなり、これを烏鵲の橋といふ、これより和歌或は漢詩などに此烏鵲を咏めるもの多し、

かさゝぎのわたせる橋におく霜の
　しろきを見れば夜ぞふけにける

あまの川うき丶は人にかさゝぎの
　はしにわがためいきわたりなん

雲霞帳卷風消息
　烏鵲橋連浪往來

等倘多し。

▲二星の屋形と星のかし物

二星の屋形は、是れも支那に行はれ唐の天寶中には殊に壯大を極め、錦綵を結びて樓殿を成し、高さ百丈、數十人を容るべく、花果酒炙を陳ね、以て二星をまつれりといふ、我邦にても、七ッの棚を作り、之に花果を備へ、香を燒くを、星の屋形といへり、又星のかし物とは、此日衣裳等を曝すを星にかすといひ、又かし小袖ともいふ、書籍をも曝すこと是れも亦支那より來れるなり、此に一寸面白き話あり、昔郝隆といへる人あり、七月七日に諸人の衣を晒し書を曝せるを見て、己も之に倣はんに、家貧しければ晒すほどの物とてなし、よつて庭に出で丶、仰向きて臥し居たり、人之を見て其故を尋ねたるに、我腹の中には多くの書籍入り居れり、それを晒すなりと答へたりと、又竹林の七賢人の一人となりし阮咸といへる人、未幼なかりし時、阮氏の一族は何れも

富家なりしより、衣類を晒すに何れも見事の品多かりしが、阮咸の家は獨貧しくして晒すべきほどの物なかりしが、何思ひけん長き竿の先に、大布の犢鼻褌を釣りて、庭に立てたり、人の問ひに答へて、未俗を免るゝこと能はずして、聊眞似たるばかりなりと云へり、後に七賢人に數へられたるほどの人丈に其仕業の尋常の人に離れ居たるを見るべく、共に笑の種となるべし。

▲七夕の歌詩

前に云へる、短冊にかきて、手習の巧ならんことを祈るに用ゐられし和歌詩句等は、當時普く世に行はれたる百人一首などに記せり、今其二三を擧げんに

としごとにあふとはすれど七夕の
　ぬるよのかずぞすくなかりける
あまの川とふきわたりにあらねども
　きみがふなではとしにこそまて
一とせにひとよと思へたなばたの
　あひみんあきのかぎりなきかな
めぐりあふ七夕ひめのたまかづら
　けふかけそふるあきのはつかせ

憶得少年長乞巧
　竹竿頭上願絲多
風從二昨夜一聲彌怨
　露及二明朝一淚不レ禁

此外多けれど略す。

實用洋食調理法

加賀見大一述
すみれ女史記

割烹は主婦の任務の内でも殊に大切な仕事でありますが、我國の習慣で、少し位置あり身分ある婦人はどういふものか、これに手を下すことを嫌ふ風がありまして、手を下すどころか、臺所せゝりをするのでも、恥の樣に思ふ人が多いやうです、米の相場や薪炭の直段を知て居るのは、成り上りの女だと云はれはせぬか、鷹揚なことか奥床しいとか思ひ僻めて

知つて居ながら知らぬ風を裝ふと云ふ、つまらぬ外見を張る傾きがあるのは、實に嘆かはしき事で御座ります、西洋の婦人などは、決して然樣な迂潤な事は御座りませぬ、如何なる財産家の夫人でも、必ず庖厨の事は自ら手を下すか、臺所に出て指圖を致すのが常です、歐羅巴の婦人が一家の經濟が巧みであると申しまするは、これ等の事を見ても知ることが出來ます、我國でも徳川氏の始め迄は、決して然樣な事は御座りませぬ、高貴な御方でも時には隨分自ら手を下して、調理なされた事のあるので西園寺實氏公の御娘の東二條の院へ伺候された時に、御湯殿の上のくろみ棚の上に、雁が御座りましたのを見て後にかやうの物をそのすがたの儘で、御手許にお置きなさるゝのはよろしからぬと申し遣された事などは、昔は高貴の方でも手づから割烹と云ふ事をなされた證據で、御湯殿とは御手許御料理所の事で御座ります、其他斯樣な話は幾許も御座ります、元來割烹は、衞生にも、經濟にも至大な關係を有つて居るもので、方法を誤る時は美味なるものも不味に食することに成る計でなく、甚しきは一家の健康を害ふ樣な大變なことにも成ります、それに何分日々の事で御座りますから、其方法の善ひと惡るいとに由て同し食物でも、高價にも廉價にも調ふることが出來るので御座りまして、一日に二錢づゝの違ひでも、一ケ月には六十錢の違ひになり、一年には三圓六十錢、十年には三十六圓……元金のみでもこれ程の相違を生じます、そして一日に二錢三錢の事は何でも無いので、少し大勢暮しの家では一日十錢十六錢位は容易に剩し得らるゝと云ふことを知らねばなりませぬ、夫も一切の品を半切にするとか、二杯のものを一杯にすると云ふのではなく、一寸した注意一つで、同じ品で、同じ分量を、廉價に調ふるのでありますから經濟の點から考へても、是非この割烹上の智識を要すべきとは、申すまでも無ひことですそれ計りでは御座いませぬ、其調理の方法に由りましては、色の取り合せ、形の配合など云ふ割烹美術

の側から見ましても、其方法の巧拙に由て味の上に大なる相違を生ずることも又爭はれぬ所で、これは意匠と云ふ方に屬する事で御座りますが、之又決して忽には出來ぬ事で、一寸した例を擧げて見ますれば、洋食の方で用ひます彼のコロケーで御座います如何にも其形、姿が可笑う御座います、コロッケーと云ふものが、若しどうしても彼の形で無くて成らぬ物で御座りますれば、致方も御座りませぬが、實を申せば、形は何の樣でも構はぬ、要は其料理法にあるので御座りますから、彼を小判形にでも致しますとか、然樣でなければ海苔卷のおすもじの形の樣にでも切りて、皿に盛ると云ふ樣な事に致しまして附合せにも、此節で御座りますれば、胡瓜か、はしり生姜でも盛り合すと云ふ風に致しますれば、何程美味しく戴かれるか知れませぬ、如何に洋風其儘が好いと申して、彼の姿では、美術國を以て誇る日本人の意匠としては、餘り活用が無さ過ぎるでは御座いませぬか、之等も誠に些細の事では御座りますが、割烹の智識が無くては出來ぬことで御座ります、前置が餘り長くなりましたが、茲に先づ簡短に何人にも出來る、實用的の洋食の調理法を聊か申述ぶることに致します。

△西洋料理に用ゆべき器具

一口に西洋料理と申しますれば大變に種々な器具が要る樣に思召す方も御座いませうが、簡短に實用向の料理には、ほんの二三種の鍋類と、天火の一つもあれば、大概の事はさしつかへなく出來るので御座います、夫は先づフライ鍋、ソース鍋、シチウ鍋、スープ鍋、夫に暖爐があれば十分ですが、無くとも天火さへありますればよいので御座います、天火も大中小とありますが、其中の小で、充分で御座います、そして日本料理に使用致す砂糖とか、味淋とか松魚節とか云ふ樣な材料が少々要るのです、夫は先づバタ、鹽、胡椒、米利堅粉、ウスタソース、芥子葡萄酒或はセリ酒、砂糖の外、牛乳鷄卵などを備へ

置かねばなりませぬ、以上の器具と、材料さへあれば、家庭的洋食の調理は大要差支はありません。

△ランステツキの調理法

厚さ凡そ一寸位の肉の兩面を庖刀で充分打きまして夫に先づサラダ油をかけ、夫より鹽と胡椒を適宜にふりかけ、凡そ一時間ばかり其まヽに放置し、然る後之を燒鍋に入れて、バタにて半燒に致すので御座います、一斤の肉で凡そ三人前程に調理致しますとよろしう御座います、之は普通のビーフステツキと同じ樣に、切り口から血の出る位なのが、料理通の方では喜ぶのですが、日本人殊に婦人客などには、やはり充分に燒く方がよいので御座います、初めから、各々の皿に盛つて出しましてもかまひませんが大抵は大皿に盛りまして、主人が客の前にて切つて出す方が、よひと申すことで御座います。

△ホークフーリメンチ

これは豚か又は鳥のサヽ身、、抱き身を取りて、之に鹽胡椒をかけ、味を付け、天盤の内に葱を一寸ほどに切り、敷き詰め、其上に前の肉を並べて之にセリ酒とスープを少々づヽかけて、別に小牛又は豚のひき肉を裏漉にかけ、適宜の牛乳と鷄卵を入れ、其内へ少許のトリフを入れ、夫に鹽を少し入れて味をつけ、それを前のセリ酒に浸せし肉の上にコッテリと塗りて、天火の内へ入れ、凡そ三十分間程燒くのです、此燒上りました時に、適宜ソースをかけて出すのです、さヽ身は一人前に一つづヽの割合ですから、丁度一羽で四人前出來ます、鳥を用ひずして豚を代用する時には、ロースの所を用ひねばなりません。

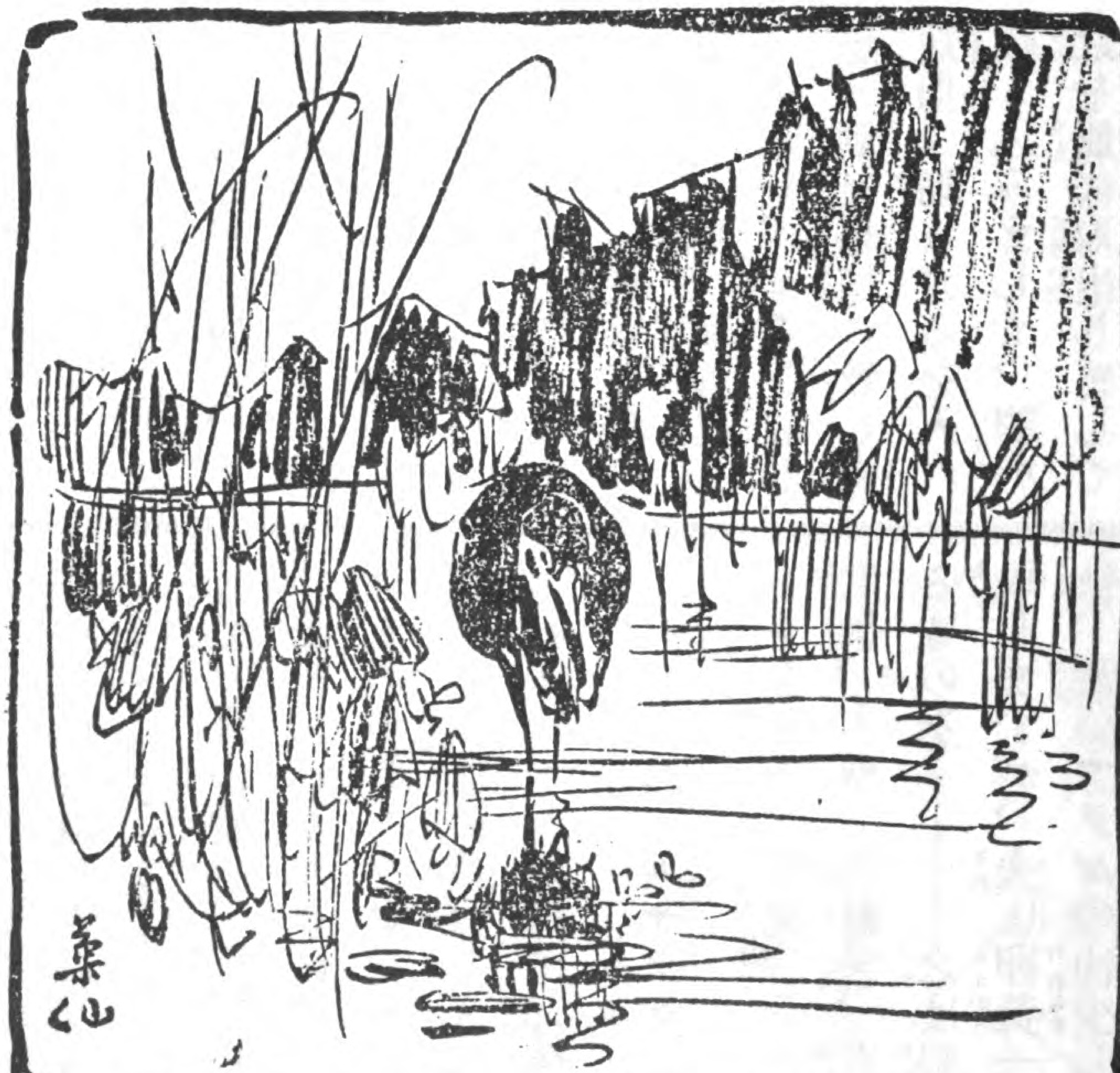
△ポテートカスター（菓子）

馬鈴薯を水から茹でまして之を裏漉にかけ、砂糖卵黄肉ヅキを入れ、夫に若し出來れば、少許の香料を加へれば殊によひのです、之を充分に混合しまして燒形の内面にバタを塗り、夫に凡そ五分程の厚さに

塗りて火にかけ、一寸焼きたる後之をぬき取り、其肉にカスタを入れて、鶏卵の白味を泡立器にて泡立てて、砂糖を加へて、一寸上にかけるのです、カスタは牛乳二合に鶏卵三個の割合にて混合し、湯煎にしてとろ〱になるまで煮るのですが、可成はコンフラか又は葛の類を極めて少許入れて凝固めるのです。

△フーカデン

之は調理の為し易きと外見の好き為に尤も多く行はるるもので御座います、先づ牛肉にても、豚肉にても、或は牛豚肉半々に交へたるものにても宜しう御座います、充分細く切りまして丁度擂鉢で擂つた程になし、夫に麺麭四半斤に前の肉二百目程の割合にして、麺麭を細くして混ぜ更に鶏卵二個、白葡萄酒或はセリ酒の少許を加へ鹽、胡椒等にて味をつけ之に極少量の牛乳を加へ充分に攪き混ぜて、之を天盤に入れ、三四寸四方の扁平状の切餅の如き形状に致します、そして其肉餅の内へ、松簟、或はうで玉子を入れ、其上へ殘りの肉を置き、丁度蒲鉾形に致しまして、夫にバタを載せて、天火の内へ入れて、凡そ四十分間位焼きまして、之を小口切



にして皿に盛りて出します、切口は丁度國旗の様に見へまして、時節柄大層氣の利いた、料理で御座います。

附合せにはサラダの様なものが可いので、普通用ひますのは、馬鈴薯、人參などを、賽の目に切り、ざつとうで、酢、胡椒などを散布して用ひます。

△ボイルドフイツシユ

之も随分多く行はるゝ御料理で御座りまして、本邦の如き魚類を多く用ひます國では、殊に適當な品の様に思はれます、先づ、鯛、比目魚、鰆、鮭などを一寸鹽にいたしまして、大鍋（蒸鍋を用ふるを宜しとす）の内へ入れ、其中へ玉葱一個を輪切に致しまして、夫れに人參を一寸程の短册に切りたるを入れレモン汁、或は柚汁を少許り絞り込みまして、聊かセリ酒を入れて煮上げます、之を皿に取出しまして掛けソースをかけて出します、掛ソースは白でも赤でも黄でも随意で宜しう御座います。

序に一寸申上ますは、掛けソースの事で御座いますが、之は随分用途の廣いもので御座いますから、其製法を心得置かねばなりませぬ、白のソースは、鍋の内へ、バタとメリケン粉と牛乳と、夫にスープを混じて、火に懸け、攪拌しながら食鹽少許を入れ、辛味を付けるために胡椒を聊か加へまして、よく混ぜるのであります、黄色のソースを製しますには、最後に玉子の黄身を入れ、赤色のソースを製しますにはトマスを入れて赤色と致すので厶います。

△ハムサラダ

ハムを凡そ二時間程うで、其外皮を剝ぎ去りて冷し置き、人參、馬鈴薯、靑豆などの、鹽うでになしたるものを……之は料理の方では、マシドアンと申しますが、夫に卵黄一つを入れて、芥子、鹽、砂糖、及びサラダの油少し許を入れて掻きませて居りますと段々固まります、其時酢を少々加へ、更にサラダ油を入れますと再び凝固致しますから、又酢を

加へ段々容積を多くして、マシドアンを交せる迄の容量に爲し、夫に前に茹でたるハムを適度の大さに薄く切りて付け合せ皿に盛るので御座います。

△フォークロールフライ

牛肉を適宜の大さに切りて、更に夫を薄く二つに庖刀を入れて丁度二枚折の屏風の様な形状に爲して、一寸鹽、胡椒を掛け置きて、又別に牛肉或は豚肉を微塵に切りて鍋に入れ、夫にバタを加へ煎り上げて鹽、胡椒、セリ酒、米利堅粉を入れて能く攪き交せ牛乳を加へて冷却して凝固いたさせます、そして之を前の屏風形に切りましたる肉の中へ入れて包み、玉子の白身を以て付け合せて外面に更にメリケン粉を付け、其上を又玉子の溶したるので包みまして、又其上にパン粉をつけてヘットで焼き上げて、掛ソースをかけまして皿に盛ります、附合は芋の裏漉しにしたるものを種々の形状になしたるものを用ひます。

△カフイゼリー

先づ最初に、上等なる珈琲を煮出して、之を能く冷却しまして、其内へ牛乳、砂糖、卵黄を入れます、珈琲の煮沸したるものが二合なれば、卵黄を四つ位の割合でよろしう御座います、之にゼリチンを一合に一枚の割合に溶します、夫が溶けましたれば、初に取除け置きました卵の白身を泡立器で泡立てまして、之を前の煮汁の内へ加へまして、充分に混合して、レモン汁少許を滴下して、形の内へ入れて放冷して凝固さするので御座ります。

△ライスプーチング

極小形の茶碗に一杯ほどの飯を牛乳で煮て、粥の様に致しまして、其内へレモンの皮の摺りおろしたるものを少し入れまして裏漉しにかけ、夫にバタを大匙に一杯、鶏卵三個……………勿論黄身も白身も共に入れます、そして之に適度の砂糖を加へて味を付

け牛乳凡そ二合程を入れて充分に攪拌し、丼か何か深き器へ移して天火にかけ、凡そ四十五分間程焼きますと出來上ります、之に其上へ一寸砂糖をかけて出します、此分量で製しましたものは大抵四人前に分けて可いので御座います。

△ロールスパンチー

砂糖三十匁、玉子三個(但し黄身ばかり)之を擂鉢の内へ入れまして、バタを大匙に一杯程加へて能くすります、夫から牛乳を二勺程加へて、更に能く混せ合せて前の玉子の白身三箇を泡立器又は茶筅でよく泡立てまして、前の擂鉢の内へ入れ、メリケン粉を四十匁と、夫にベーキンパウダ(膨粉)を珈琲匙に一杯程入れまして、能く攪き廻して、好みの燒形の内へ入れまして、天火の内で凡そ三十五分程燒きます、天火の火は可成トロ火が宜しいので御座います、火が強いと好く出來ませぬ。

△ライスカレー

玉葱と牛肉、或は鳥肉を適宜に切り、バタにて煎り(玉葱の狐色となる位に煎る)更に林檎の皮を去り眞をとりて煮たるものを裏漉にかけて、前の肉の中へ入れ、スープ三合とカレー粉を一匙入れ、之に馬鈴薯をワサビおろしにておろしトロ〳〵になるまで入れ、之に鹽味をつけ、最後に牛乳二勺位を入れ、之に又生姜をおろしてすり入れ、之を鉢に入れて飯と共に出すので御座います。

△ボイルドビーフ

イチボ肉(二斤半)を一時間半ばかり微火にて煮、之れと共に人參、玉葱、キャベツ、蕪の如き、野菜を共に鹽味にて煮まして他に移し置き(但し長く野菜を煮る時は煮くづれる故程よく煮えたる時之を取出し置くをよしとす)小形の出皿の中央に肉を盛り前の野菜を周圍に格好よく飾りて煮汁をかけて之に掛ソースを別の器に入れて添へ出す、但し掛ソースは黄にても白にても色どりよきを擇むのです。

小兒保育談

醫學博士　三輪信太郎氏演說



記者曰く、此編は去月三日神田一ツ橋通の女子職業學校内に於て、開催せられたる大日本婦人衛生會例會の席上に、三輪博士が演說せられたるものゝ大要なり、若し記事の相違、語句に妥當を缺く等の事あらば、そは記者の誤りにて、決して博士の責に非す、讀者幸にせられんことを

總裁宮妃殿下を御始めとして、多くの貴婦人方の御前で、聊か卑見を申述べまするのは、私の最も光榮とする所であります、私の演題は茲に小兒保育談として掲げてありますが、これは私が始終持合せの演題で殊に熱心に研究しつゝある所のものでありますから、私も喜んで皆樣の御清聽を煩はす次第で御座ります、併し今度新に歐州から御歸朝なされました岡田君が、斬新な實歷談と、種々興味の深い御話の有りま

した後で、無趣味な私の御話などは、却て御遠慮申さねばならぬかも存じませんが、マア簡短に御話をして見ませう、全體小兒保育など丶申すことは、元來私共の受持つて居ることですから、二時間や三時間位で、却々御話し盡せる譯のものではありません、其所で私は寧ろ小兒保育といふことを廣く申上ぐるよりは、却て保育法が若しも世の人より誤られたならば、如何なる結果を來たすであらうかといふことに就きまして、御注意の爲に御話し致さうかと思ひます、扨て私が茲に申しまする小兒といふことは、即ち生れてから一年以内の小兒を指すことでありまして、其一年以内に於ける小兒の保育法といふことは、却々面倒なる事でありまして、若し其方法を誤つたならば、其結果は實に悲慘なものでありまして、例へば尋常に發達すべき小兒も、遂には是れが爲に、彼の恐るべき萎縮症に、陥ひるやうな事になるのであります、是等の小兒といふものは何の罪もありませぬのに父さんや母さんの止むを得ない境遇、及び父さんや母さんの畢竟其子を保育する、方法の誤まれるから起ることでありまして、遂に其れが爲に小兒を充分に發達せしむることが、出來ぬやうになるのでありますから、其結果は實に悲慘の極といはねばなりません、私は毎日是等の保育を誤られた小兒に接しまして、其憐れなる氣の毒なる狀態を見ます度に、何んとも言へぬ惻隱の情に驅られまして、どうかして是等の小兒の爲に、救助の方法を講ぜねばならぬと、日夜苦心して之が研究に精神を注いで居るやうな譯で御座ります、其所で私は是等の小兒の爲に、世間多くの父さんや母さん、乃至慈悲深き皆樣に御訴へ申して、此御話を申し上げまするこ とは、實に私の責任であらうかと思はれます。

先づ第一に此小兒保育法を誤れるが爲に、起るべき自然の結果として、私共の最も悲慘に思ひまするのは、乃ち此小兒萎縮病でありまして、是は餘程注意せねばならぬ事であります。

凡そ小兒といふものは、若しも保育法其宜しきを得ましたならば、其父母たる者は申す迄もなく、他人の御方ですらも、充分に發達した壯健の小兒を見ますれば、何んともいへぬ愉快な羨ましいやうな、可愛いやうな念が起るものでありまして、例へば繪で見る金時のやうに、赤々として完全に發達した小兒を見ますれば、實に其子の幸福を想像されまするけれど、之に反して萎縮症に罹つた小兒は、若し花でありまするならば、切角の蕾も十分に開くことが出來ずに、早く既に萎んで了つた有樣と、少しも選ぶことがないのであります、そして世の中には、斯ゝる憐れむべき境遇に在る小兒の數が、決して鮮くないのでありまして、國家社會の發達上、非常に弊害のあるものと、私は確く信じて居るのであります、近來は又結核だとか或ひは梅毒だとか、之を社會的疾病とか申しまして、大層世間の人も注意するやうに成つて來ましたので、之れが豫防救濟の方法に怠りがないのみならず、支那や朝鮮などにても、近來頻りに西洋醫術の供給を仰ぐやうになりまして、朝野の贊同を得て組成られました、同仁會などいふものが出來、猶之ればかりでなく衞生機關の追々發達するに拘はらず、獨り此憐れなる小兒の爲に、社會が何等の施設も致しませんのは、私共の大に遺憾に思ふことで御座ります。

斯くの如く恐るべき小兒の萎縮症が、結核とか梅毒とかいふものゝ爲に、起るといふことは先づ度外と致しまして、多くの場合に萎縮症を起すべき原因と申しまするると、單純に營養の障害、即ち健全に發達すべき小兒が、之を保育すべき母の乳、若しくは之に代るべき諸種の營養法が、其當を失するからでありまして、先づ卑近の例を擧げて申しまするると、或ひは營養の不足であるとか、又は營養物が不良であるとか、種々其保育の方法を誤るからでありまして、私が嘗て伯林大學に居つて、ホイブチル教授の助手をして居りました頃に、實に忌ま忌ましい言葉が、此小兒萎縮症の小供の上に記るされてありました、夫れはウン

エヘリヒト、キンドといふ言葉でありまして、之を日本の意義に譯しますると、正當の結婚に依らずに出來た小兒、といふ事になるのであります、畢竟不正の結婚が、即ち萎縮症の小兒などの出來る原因でありまして、從つて世間の同情も少ないのみならず、其親でさへも強いて此ゝる小兒には充分の療養を加へやうともせず、至て愛情が薄いやうにも思はれます、先づ人情ならば弱體の小兒に對しては、寧ろ強壯の小兒よりも、多くの愛慈を垂れて強壯の體に恢復せしめ、そして自分の膝元で初めの愉快なる顔色を見ることを樂しみとする筈でございますのに、何んと淺しい悲しき事では御座いませんか。

皆さんも御存じの通り、歐州は、大層人權を重んずる國柄でありますが、日本と比較して如何で御座いませうか、日本では雇人に下の字を附けまして、例へば下男であるとか、下女であるとか稱へまして、甚だしく尊卑の區別がありますが、彼地では個人としての人格が重んぜらるゝと同樣に、矢張下女下男を呼びまするのに、何さん〳〵と云ふて、雇人でも乳母でも之に伴ふ黄白の利益が多いものですから、自分の小兒には失當の營養法をして、他人の乳母となるやうな、迷ひものが間々有りまするのは、文明を以て誇る歐州の奇異な現象であります、そうして彼地では生活程度の高い所から、從つて結婚が容易く行はれませんので、勢ひ不正當な結婚が多くありまして、其結果は遂に萎縮症の小兒が、澤山出來るといふやうな有樣を來たすのであります、日本では貧富の懸隔が夫れ程甚しくはありませんけれど、此差は追々年と共に増加するの傾きが見へます、併し日本の今日の生活の程度では、比較的容易く正當な結婚が行はれますので、小兒の萎縮症も從つて少く思はれますが、先づ細民社會の事は除外例として、縦へ結婚が正當に行はれましたにせよ、收入額の餘りに多からざる所からして、其出來ました小兒に、適當の保育をする事が出來ないなどといふことは、如何にも憐れなる狀態と申さねばなりません、日本でも此乳を飲ますべき母

が、他へ働きに出まして生活費を助けるといふやうな人にあつては初生兒に飲まするに、何を代用するかと申しまするど、其れは外でもない彼の牛乳とか何んとかいふものに依らなければなりませんけれど、是等は貧乏人に取りましては甚だ困難の事であります、例へば牛乳を以て母乳に代へるとしました所で、牛乳一合の代價は廉く積りまして、先づ三錢は致します、猶緻密の勘定をする樣ですけれど、若殺菌牛乳を用ひますれば、一合五錢は致しまするから、一日平均四合は要するものとしますれば即ち廿錢、若し六合と致しますれば三十錢ですから、僅かな日當で糊口を繋ぐ所の勞働者では、到底其餘裕がないばかりでなく、其負擔に堪へらるゝものではありません。

私共が大學に於ける外來患者の狀態によりて考へまするに、小兒萎縮症なるものが、どれも〳〵生計の不如意から來る、保育法の不當に原因せないものはありません、夫れですから牛乳は斯くの如く充分に與へんければならぬといふことを、如何程敎へてやりましても、決して命令を履行せないばかりでなく、事實上到底履行し得られんので、又已むを得ざる次第であります、其所で入院を命じますと、病院の營養法が良いので、忽ちの間に肥え太つて來て、全然で活き返へつたやうに成つて退院するのでありますが、併し之は一部分の適例で、到底此の廣い東京の澤山の萎縮病者に對して、病院で救濟することは事情が許さないばかりでなく、却々經費が許しませんから、之を一般に及ぼすといふことは出來ぬのであります。

歐州諸國に於きましては、是等の救濟法が大に備はりまして、盛に其道を講ぜられて居ますが殘念ながら我國には、是等の設備が一つも立てられて在りません、私は此事に就きまして、多年考へて居りまする事もあり、且つ斯樣の病兒に對しまするど、何時も同情の淚に堪へられんのであります、私は曩にも日本醫學會で御話も申しましたが、是非何んとかして之に對する救濟策を講じたいものであります、切めて同志

の徒が五人もありますれば、何んとか仕樣もあらうかと存じます、皆さんも是非御考へ下すつて、一臂の御助力を願ひたいものであります、結核であるとか或は梅毒であるとか申して、其他の餘病で斃れますものは、已むを得ませんと致しましても、主に生活上の困難から來ます所の萎縮症の如きものを、單に貧乏人の許に産れました小兒の、不運不幸とのみ見まして、之を愍みませんのは到底人情の堪へ得ることであるまいと私は思ひます。

ソコデ小兒萎縮症といふものが、何故に斯樣に憫むべく、そして又畏るべきものであつて、其結果終に如何なる慘憺の狀態に陷るべきかに就て、御參考の爲に一つ御話して置きたいと思ひます、元來此萎縮症の症候即ち始はどんな工合に症狀を呈して來るかといふに、之に就きましては私の師匠のホイプチルといふ人の復た師匠で、ヘノッホ先生と申すのが、其流暢な筆と温かき同情を以ちまして、其著書中の小兒科學といふ本に書かれてありますが、其本を御覽になりますと何誰でも同感の涙に咽ばぬものは恐らく無からうかと思はれます。

萎縮症の小兒を抱いて居ります世間の母さん達は、先づ其の子を冷たい風に逢せたくないとの考へと、そして枯槁した容貌を人に見するに勝へないとの念より、布で頭を覆ひまして醫者の所へ參りますが、私の處へ參りますものは直に其の布を取らせますから、私は何時もその容貌を視て惻隱の情に堪へないのであります、前にも申しました通り、若しも尋常發育の宜しい小兒であるならば、其容貌は實に圓滿な何となく邪氣のない、如何にも喜悅の狀を現はして居りますので、鬼のやうな心を持て居ります者にまで、可愛さ觀念を起さしむるものでありますのに、萎縮症の小兒に在りましては、肉が落ち骨が現はれて鋭角を爲す程に瘠せ衰へ、彼の大顋門とか小顋門とか申しまする所は、(顋門と申しまする所は、顱頂骨が左右互に合

ひまして、其前後の內隅に在る骨が、まだ化骨せざる爲に空洞を生じて居る所でありまして、前者は菱角後者は三角形を爲して居ります、此所は元來腦內の水壓に依りまして、常に搏動を示して居りますが、若しも或る病氣の爲に腦內の壓が高まつて來ます塲合には、此顖門も著しく高くなつて參ります、俗に此所をヒヨメキと申します）非常に陷沒して居るのであります、又其顱頂骨などは啻に能く化骨することが出來ないのみならず、腦の內壓の減少の爲に相重なり合ひまして、頭蓋に於てさへも圓滿の樣を存しては居らないので在ります、眼の圍り口元の周りなどは憐れにも皺びて居りまして、眼窩は恐ろしき迄に凹み、眼は大きく開いて何にか苦しみ訴ふるが如く見へるのであります、そして顏はと申せば、土のやうな蒼白い色で、何んとも譬へやうのない、厭な色を呈して居るのであります、是等を土灰色とでも申しませうかコウいふ汚穢しい色でありますから、彼の艶々しい紅色などは、此萎縮症の小兒に限つて少しも見られんのであります、若しも之を骨相家などに言はしたならば、老人顏とでも申しませうか、其顏は實に老人のやうな皺じみた容貌で、頸の圍りの皮膚などは萎びて音聲は嗄がれ、その泣く聲は最も憐れに聞ゆるのであります。

如上申述べましたる事は、只これ序幕にしか過ぎないで、例へば頸部以上の直に人の眼に觸るゝ所のみですが、更に是等の小兒を裸體と致しまして、細に其全身に就て診査しましたならば、其憐れなことは一入增して、轉た人の情を惹くに足るの有樣で御座います、そこで其全身の症狀に就て申しますると、全然で皺ばかりで骨立ち、肋骨などは明に其數を數ふることが出來まして、臀部、腋下、股部の外皮などはダラリとして、指で摘まめば容易に摘み揚ぐることが出來るのみならず、虎列剌患者の皮膚と同じく、彈力に甚だ缺乏して居ります、手先趾尖などに於きましては、甚しく冷却して知覺が至て鈍痲であります、只

大きいのは御腹ばかりで、一見醜きまでに膨滿を起して居りますが、之を腹肉の肥へて居るものと誤解してはなりませぬ、之は畢竟腹腔に在ります腸管が、平生一定の緊張力を備へて居るものなのに、此病氣の爲に消化器の働きが鈍ぶつて來て、之が爲に大層腸管に瓦斯を醸して來ますので、腸管の即ち緊括りが弛み、所謂皷腸といふものを起して、外面から見ましても腹部が大層大きくなつて見へるのであります、其所で腹部の皮膚は皮下組織の痩削の爲に、非常に薄くなつて、其膨れた腸管が外部からも透き通つて見ゆる位ゐでありますのみならず、腹部は一帶に靜脈が怒張して參りまして、皮下に青筋を張て居ります。

併し乍ら此腹部の膨滿は或る程度迄で丶ありまして、更に病症が一層の高度に進んで行きますと、腹壁は全く陷沒弛緩して參りまして、後腹壁の方に接觸するかのやうになつて來るのみならず、此邊の皮膚も亦穢い黃土色を呈して參ります、是ればかりでなく俗に弱り目に祟り目とか申しまするやうに、此丶る弱點を持ちました小兒などには、又種々の病氣が襲つて來るものでありまして、就中彼のフルンケンなどいふ腫物は、斯ういふ小兒に至て出來易いものでありまして、其外には股間だとか頸部だとか申しまする部分の皺襞には、多く糜爛症などを起して參るもので、小兒は之れが爲に膿毒症を惹起すとか、乃至は又肺炎、急性腸炎などいふ病氣をも伴ふて、種々の病氣を合發し易いものであります、そして追々雪の消ゆるやうに、遂に衰弱の慘狀を極めて、果敢なくも死の轉歸をとることに陷るのです。

今迄も申しました如く、萎縮症に罹れる小兒の、骨立稜嶒として全身の皮膚が、實に醜きまで皺じみて居りますのは、重に脂肪といふもの丶缺乏して行くからでありまして、是れが營養の足らない何よりの證據であります、元來此脂肪といふものは、例へば御婦人方などに美といへる相貌を與へる所のものでありま

して、萎縮症に罹れる小兒の、いと醜い憫れなさまとなるのも、皆其脂肪といふもの丶缺乏から起ることでありますす、ホールミルレンと云ふ人の調べました所では、全身脂肪の九〇、九布仙までは必ず失ふといふことでありますす、又蛋白質は如何程減ずるかと申しまするに、三十分の九を此萎縮症に依て減ずるといふことで御座います、加之全身の筋肉も削瘦して參りまして、腓腸筋（俗に足のツトといふ）などは硬くペツタリとなつて仕舞ひます、其所で全身の皮膚は如何と申しまするど、甚しい程弛緩しまして稍々しくなりますから、丁度父さんのマンテルを着た小兒のやうに、ダブ〳〵として見ゆると一般の狀態に陷るのでありますす、斯樣の小兒は恨めしさうな目附と、恰も悟り顔する老人の容貌とを現はしまして、私共が之を診察して居りましても、何か恨みを訴ふるかのやうに、父さんや母さんの過を戒しめて下さいと言はぬばかりに思はる丶のでありますす、嗚呼か丶る慘憺なる光景を一度でも目擊したものは、どうしても之が救濟法を立てずに居られないので、私は何か名案はあるまいかと、種々苦心もして居りますが、如何にせん自分の力で足らず、世間の同情を惹き起さんにも、好き機會に運り遭ひませず、獨り私に焦慮しつ丶ありますが、切めて私の母でも存命で在られたならば、私は之に就て大層な助力を得るであらうと、今更愚痴を繰ぼしても見たりするのでありますす。

近頃は動物虐待防止などゝいふ問題が、頻に世間に喋々せらる丶やうになりましたが、何故に人間の小供に對しては、斯くも慘憺たる有樣を等閑に附するでありませうか、私は甚だ怪訝に堪へぬのみならず、其理由を發見するに困難いたすのでありますす、私は決して斯ることを誰にも賴まれました譯ではありませんが、平生職業上斯る小兒を取扱つて居りまして、其の顔を見るに付けましても、どうかして是非其不幸を救ひたい、之を救濟することは何だか自分に其使命を授けられたかのやうに、私は常にこう感じて居るの

であります、私が今日御來會の貴婦人方の前で、此御話を致しまするのも、畢竟は二度と遭遇することの出來ない好機會だと信じまするし、又一つは此機會を得ましたのは、私に取りて非常の幸運だと思ひまするから、至て無趣味の御話しで御座いまするけれども、強て御清聽を願ひました次第で御座います。

近來慈善事業といふものが、非常に發達して參りまして、種々の結社が雨後の菌の如く出來まするので却つて他人の憐みを受くるに當らないもの迄が、終に慈善會の恩澤に浴するやうな始末で、隨分世間には推しの強い人もあります、然るに貧乏人は如何で御座りませうか、縱へ正直に眞面目に働いて居りましても日々收入する僅少な賃金では、到底可愛い小供を充分に保育することが出來ない、こういふものは世間に其數が夥しい程ありまして、此分で推して行つたならば實に國家の消長にも關することになりはしますまいか、私は彼を思ひ此を念ふと實に寒心の至に堪へられません。

扨て其れから此萎縮症に次ぎまして、恐るべきは彼の先天的梅毒で、之は古來胎毒などゝ申しまして、初生兒の最も畏るべきものゝ一つで御座りますが、之こそ全く親の不品行から、其結果が子に迄傳へられたものでありまして、畢竟親の罰が何の罪もない子に報ひて來るのですが、之れ迚も單純な萎縮と同樣に醫師の力又攝生の方法宜しきに從ひまして、若しも其當を失はなかつたならば、大抵は健全な發達を遂げしむることが、出來るものでありますのに、之も亦親の不行屆の爲に、遂に悲慘の中に生涯を終らせるやうな事になるのであります、私は之を萎縮症の小兒と共に、大に國家社會の爲に、世の猛省を乞はねばならぬ事と存じます、然らば之を救濟する設備は、多大の費用を要するかといふに、決して左樣な譯ではありません、夫れは玆に御來會なされた御方々や、有志諸君の御同情に依りまして、僅か一投足一擧手の御奔走を得ましたならば、容易く成立することが出來るであらうと私は信じます、其所で私は彼の憐れなる小兒等に代りまして、御訴へ申した次第でありますから、何卒御諒察あらんことを希ひます。

リチアドソン夫人と語る

在廣島　法學士　藤田雪涙

英國篤志看護婦リチャードソン夫人は昨年櫻花爛熳たる四月、萬里の波濤を越へて來朝せられたお方である、其後東京豫備病院の澁谷分院に看護の勞を執られて居つたが、本年二月廿八日より廣島豫備病院に於ける重き戰傷患者を是非看護して見たいと云ふ精神から同院に勤務する事になつたのである、又同夫人の勤務の有樣と申したなら實に感心なもので、日本の看護婦と一寸も變らぬ樣に患者の抱き起しや、寢臺の整理や、其他雜役に至るまで甲斐々々しく働いて殊に其働き方が親切であるから、患者は孰れも同夫人に對し感泣して居るとの事である、同夫人は過般戰地視察に行きましたが、此の程無事歸廣したので、予は同夫人を訪問した、所が同夫人は嫣然たる愛嬌を滿面に湛へつゝ快く予を其居室に導きて、例の謙讓の言葉を以て談話をせられましたから、其談話の大要を左に紹介する事に致しました。

△婦人の働きは親切に限ります

態々御來訪を受けまして誠に難有存じます、唯今妾が救護の勤務上の事に就きまして、鄭重なる御言葉に預りましたが、妾は決して之に當るものではありません、妾の夫は三年前に彼世に歸天ました、が幸ひ二人の男子が既に成長して夫の遺産を相續して居りますし、又其二人とも何に不自由なく生活して居

りますから、妾は寸毫も我が家庭の事は氣に懸りません、唯妾の一生涯の希望と致して居りまする事は婦人は婦人としての働きを出來得る限り、爲して見たいと思ふて居るのであります、而して其働きが可成世間に知れないやうに靜かに爲したいと思ひます元來婦人の働きは靜かに且親切に爲すのに限りますそれで妾は妾の是迄に爲したる仕事や、是から爲さうとする仕事は、自から世に發表すると云ふことは深く望みません。

△強き軍人を產みし母は誰ですか

妾は昨年四月始めて日本へ來たのですが、旣や一年有餘になりました、恰ど本月が歸國する豫定の期日に當るので、追々歸國の準備に取懸らねばならぬと思ふて居ります、又國元の伜からも早く歸國して吳れとの手紙が屢々到來するので、未だ期日は確かり分りませんが、孰れ遠からず歸國の途に就く筈であります、日本に滯在して今日に至るまで、東京の

婦人は勿論、廣島の婦人の方々にも段々交際が出來まして、日本婦人の親切叮嚀と且優美なことには實に感心致しました、之が強き軍人を產みました母かと思ひまして、一層同情に堪へぬのであります、併し妾は日本婦人の働き振を見ますのに、能く知りませぬが、餘り外に出て仕事を爲し過る嫌ひなきかと心窃に思ふて居ります、勿論今日は戰爭の場合でありますから、一槪には申されませぬが、兎に角日本婦人(上流婦人を指す)は幾多婦人の團體に成る各婦人會に對して、手を伸ばし且之に關係して働いて居る樣に見えます、是は誠に結構な事には相違ありませぬが、之が爲に萬一家庭の事を打棄て置く樣なことがあつてはならぬと考へます。

△家庭の本は婦人に在り

そこで妾が婦人に對しての考へは、女子には娘の時代に於て出來る丈それ丈敎育を施し、旣に嫁に行つたならば、可成家庭にありて、內を見ると云ふこと

が第一の要務であらうかと信じます、併し内を見たる後餘力があらば、外に向つて充分の働きを爲すべきは素より望む所であります、元來國家の基は家庭に在るので、又家庭の本は婦人にあるのでありますから、其家庭の本たるべき婦人が、外の働きのみに心を奪はれて、肝腎な家庭を明け放しに爲て置くやうなことがありましては、倏ち其家庭は不整理となる計りでなく、それこそ將來に於る日本婦人社會に取りましても、又國家に取りましても、甚だ憂ふべき事に至りはせぬかと思ふて居ります、要するに妾は家庭と婦人とは、一種相離るべからざる關係を有して居るものと堅く信じて居ります、之と同時に婦人方は可成家庭の方に一層重きを措く樣に願ひたい、言葉を換へて申しますれば良妻賢母と云ふ事に付て今少しく意を用ゐて貰ひたい、しかし之は唯だ妾の老婆心に過ぬのであります。

△日本軍人は寔に忠實であります

前にもお話し申した通り、日本婦人方には是迄お目にかゝる機會は度々ありました、が、一般の男子方には、餘りお目にかゝらないのであります、又格別お目にかゝる必要も感じません、そこで日本に於ける一般の男子方の動作は、更に知らないのであります、併し妾は救護の勤務上からして日本軍人殊に士官には日々お目にかゝります、それで士官方の働き振りは多少存じて居るのであります、即ち士官方は仕事に對して忠實であり、且能く紀律を重んずる事には驚きました、而かも青年士官などは割合に外國語が話せるお方が多くあるやうに見受けられます妾は青年士官と語ることは非常に樂みなのです、之は妾に二人の青年がありまする點から、青年士官に逢ふは、恰もわが子に會ふたやうな心持が致しまして何やら嬉しいからであります、妾が平生思ひますに今日の青年は可成外國語に通じて居らなければ、イザと云ふ場合に物の役に立ちません、妾も獨逸、佛蘭西の國語は研究したことがありました、兎に角日

本の青年が、益々外國語を研究すると云ふ事は洵に必要なことであらうと信じます。

△夫人の戰地視察と各病院

妾は先月(四月)廿八日宇品から病院船博愛丸に乘組まして、大連から旅順の各病院其他を慰問旁々視察に行きました、所が往復とも仕合なのは、海上至極無事で一度も船暈に冒さるゝ樣な憂ひもなく、去ぬる十日病院船弘濟丸で此廣島へ歸りましたのであります、又往復とも十一二時間計り船中から日本瀨戸内海の景色を眺めましたが、其山水風光の佳いのには實に驚きました、最初大連に船が着きまして、同所から更に四時間を經ると旅順に到着したのです、旅順には三日半計り滯在して居りました、同地滯在中は伊知地(少將)さんが、妾を大變に御親切になし呉れ、又妾の爲に晩餐會をも開いて下さいました、日本が旅順を占領してから今日まで、婦人の身として殊に外國婦人の身として、同地の視察に行きましたのは妾が嚆矢であります、先づ同地の病院を慰問しましたが、占領日尙淺きにも拘はらず、何から何まで中々整頓して居ります、又醫官のお方々も頗る親切で、且職務に對し實に忠實であるかの樣に見受けられました、昨今では其收容患者も餘程減少して居ります。

△日本人にあらずんば英國人ならん

次て砲臺、沈沒船艦、市街等をも一通り見物致しました、あんな堅固な砲臺を有ちながら、占領されるとは洵に露國人の意氣地の無い確かな證據です、そこで妾の考へましたのは、少しも隱れ場所の無い、進軍に取りては容易ならぬ困難の中をも顧みず、日本軍が斯やうな大成功を遂げ得たのは、全世界に於て誇り計りでなく、此の勇敢な働きを爲し得る國は世界の强國にて之を求めなば、日本人にあらずんば英國人より外にはないと思ひます、又同地の市街も漸次整頓しつゝある樣です、妾は同地で露國看護婦

五六名を見ましたが、支那婦人は格別見受けませんでした、夫から旅順を去つて大連の病院を慰問して見ましたが、其救護の事業が何に不足なく整頓して居ります、妾は大連に二日間滯在して居りましたから、序に奉天まで行きて見やうと思ひましたが、都合に依りて止めました、大連は旅順の樣に場所が廣くて且後方に突兀たる山はありません、併し此地の病院は一寸大仕掛でありますが、收容患者は是又昨今非常に減少して居ります。

△赤十字社病院船の患者救護方法

又妾の感心した事は日本赤十字社の病院船(博愛丸弘濟丸の二隻)であります、即ち患者に對する船中の設備とか、或は醫官とか、看護婦とか、其他の船員の方々が、既や一年有餘の經驗を、積んで居られまするから、中々痒き處に手の屆く樣に立ち働きて居ると同時に、患者に對して餘程親切であります、兎に角船中に於ける患者救護の方法は、遺憾なく發揮されて居ると思ひます、妾は大連から二百九十餘名の患者と共に、弘濟丸に乘組みまして歸廣したのですが、其船中の患者は重に輕傷者ですから、別に之と云ふ救護の仕事はありませんので、妾は只管其患者に對して色々な慰藉をして見ました、船中では須尾看護長と申す人が、妾に向つて絶えず中々親切にして下さいました。

△日英同盟は繼續させたいものです

妾は時々倫敦タイムスを讀んで居りますが、日本軍の勝利を書いてありますと、何やら愉快で堪りません、又妾の家から寄越す手紙の中にも、折々日本軍の連捷の事を書いてあります、又妾は日本に滯在して今日に至るまで、日本武士の勇敢なる働きと戰捷の報を聞く毎に、實に嬉しくてたまらぬのであります、次に日英同盟は一定の期間があるさうですが、妾は是非永久まで繼續させたいものと思ひます、現に倫敦で發行する新聞にも、日英同盟は益々確固に

且永久に繼續せねばならぬと主張した記事が掲げてあるさうです、兎に角日英同盟と云ふ事は妾に取りまして、如何計り愉快であるかはお話にならないので、此強き日本に對しては非常の同情を持ちて居るものであります、之を要するに日本が有形無形に長足の進歩發達を致しました事は、今更妾の申上る必要は厶りません、妾は此の愛すべき日本を辭して遠からず歸國せねばならぬかと思ひますと、心細くなる樣な感じがするのでございます。

簪の花（御伽噺）

佐藤紅緑

（一）

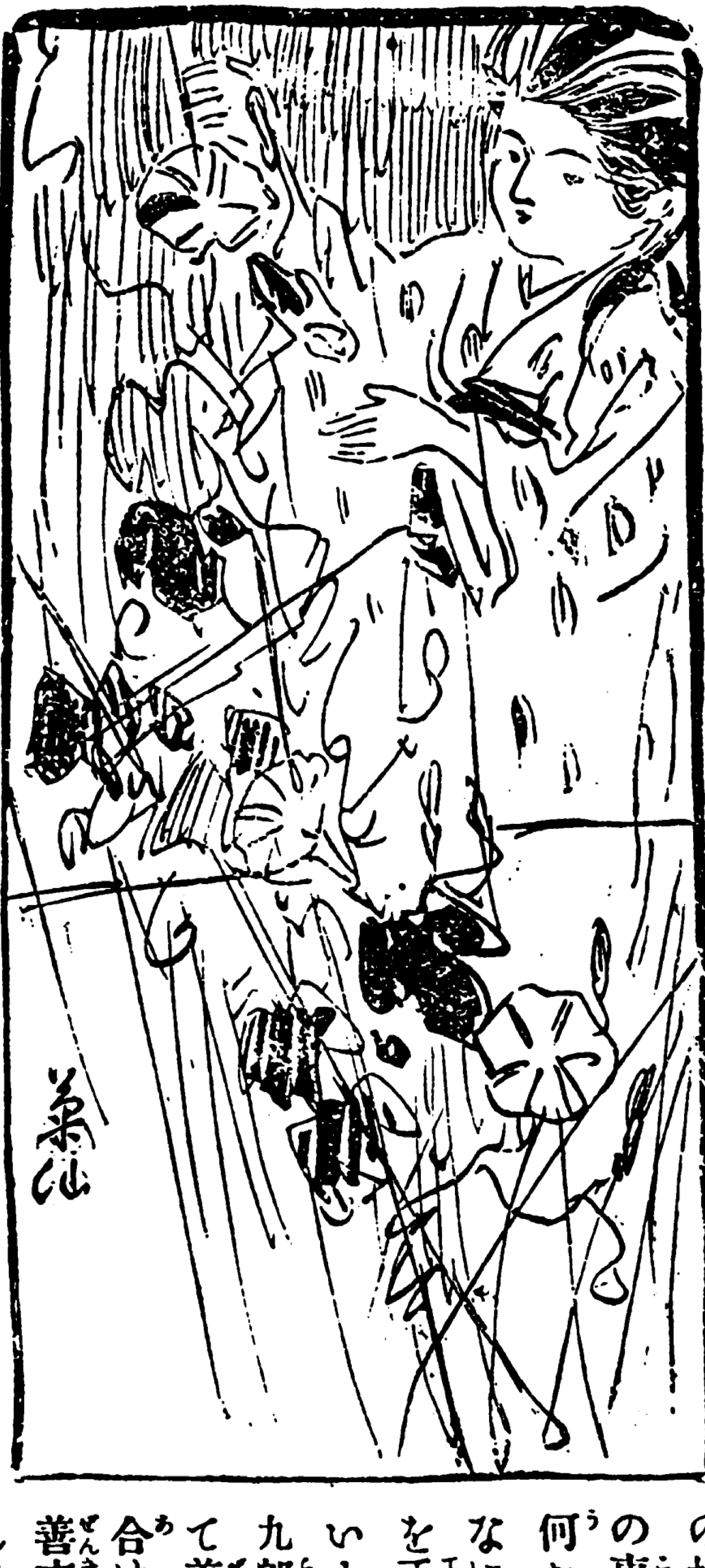
昔々或土地に振袖村といふ村がありました、此村の中央に一つの山がありまして、此山から東を東振袖村と申し、山から西を西振袖村と申しました、畢竟此の村は衣服の袖の樣に兩方に別れて居ますから振袖村と名付けたのださうです。

然るに此山の上に一軒の牛小屋がありました、牛小屋の主人は善吉といふ至て性質の宜しい御爺さんで御爺樣の財産といふたら、肥つた牝牛一頭と大きな白犬一頭丈けです、而して御爺樣には今年で十一歳になる御芳樣といふ娘がありまして小さい時から母親に先立たれ、御父樣の手一つで育てられたのですが行儀が良く又た容貌も大變に美いので御父樣はほく〱喜び、讀書抔を教えましたが物覺えが大變に宜しく、第一御芳樣は唱歌が一番上手でした、母親の形見であつた一挺の提琴を彈て歌ふ時は空飛ぶ鳥が皆んな小屋の周圍に集まつて翥きせずに聞て居ました。

善吉爺は毎朝牝牛から乳を搾り、其れを罐に詰めて白犬の背に載せ、東の町から西の町まで乳を賣りに廻り、日暮頃までに御金を儲けて山へ歸つて來るのであります。

牝牛も犬も御芳樣とは大の仲好で、御芳樣が例の提琴を彈くと、二頭は轉んだり跳ねたり、重さうな足

を擧げて其處中驅け廻はつたりして喜びます、中にも白犬は其眞白な雪の樣な毛を惜氣もなく地の上に轉がつて四つの足を宙に上げて見せます、是れが犬の一番嬉しい時にする藝でした、御芳樣は牝牛の方を「黑」と呼び犬の方を「四郎」と呼んで居ました凡そ昔から此の四郎程立派な犬はありますまい、耳が大きく垂れて丈が高く、足踏が確乎として首から尻までの勾配が能く締つて、其れに其の眼といつたら何とも譬へ樣のない程可愛らしく、身體の大きい割合に種々な藝をするので、村中の評判となりました。



世の中に他人の幸福を嫉んだり、又他人の物を欲しがつたりする心程卑劣しい心はありません、種々な間違は大抵此の心から出て來るのであります。東村の村長は四郎の事を聞き如何かして其んなに立派な犬を手に入れたいと家來の三九郎を遣はして善吉爺に掛合はせました善吉爺は如何して大事の犬事の四郎をば手離しませうぞ、黄金を山の樣に積で來られても此丈ばかりは差上げられませぬと斷はりました、之を聞た東の村長は大に怒り、此上は是非

に及ばず腕力づくでも犬を牽て來いと彼の三九郎に四五人の家來を添け、鎗、刀、つく棒、叉などを持たして山の上へ遣はしました、然るに西の村長も四郎の事を聞きまして、之れも急に欲しくなり、家來の六太夫といふを遣はして掛合はせましたが、東の村長にも斷はりましたので、是も又た明瞭と斷はりましたので、西の村長も大に怒り、其んなら腕力づくでも牽て來いと、件の六太夫に四五人の家來を添け手ん手に利器を持たして差遣はしました。

（二）

或日の夕方でした、御爺樣は一日の家業を了つて、庭の眞中に涼臺を出し、其處に花茣蓙を敷き、煙草を二三服パクリ〳〵と喫しながら御芳樣を對手に御話をして居ました、是れが御爺樣の無上の樂で、此の一時間の樂みに一日一ぱいの苦しみを忘れるのです、御芳樣は小兒ながらも怜巧ですから御爺樣を團扇で扇いだり肩を拍てあげたりして居ます、軈て御芳樣は例の提琴を取出して彈き始めました。

「しーろよ來い〳〵琴彈かう
　御前の好きな琴彈かう
　向ふの御山に星が出て
　此方の御山に月が出て
　草に涼しい風が吹く
　しーろよ來い〳〵黑も來い
　御前の好きな琴彈かう」

可愛い聲で斯う謠ひますと、今まで庭下駄に頤を載せて居睡をして居た四郎はムックと起きて一目散に御芳樣の周圍を廻り出し、一つクン〳〵嚔をして次ぎの唱歌の出るのを待て居ます、すると柵の彼方から牝牛の「黑」が鼻背めずりをしながらノコ〳〵と遣つて來ました。

御芳樣は再び琴を抱上げて彈き出さうとする折柄

「やあい、此處だ〳〵、逃がしちやいけないぞ、皆んなで取卷け」

と怒鳴りながら這入て來たのは東村の三九郎、其れ

に從ふ者共は扭ぢ鉢卷で襷懸、「四郎を出せ〳〵出さなければ殺して持て行くぞ」と四邊を取卷きました御芳樣と御爺樣は呆氣に取られて言句も出ずに居りますると、軈て西の方から上つて來る五六人の人があります

「やあ、東村の者に取られては大變だ、何でも早く犬を曳き出せ」

といふて現れたのは西村の六太夫其他であります。此有樣を見ると、四郎は早や自分の事だと覺つたと見えて凉臺の下に首を突入れ猖々叫んで居ます、善吉爺は靜に進んで百方宥めましたけれど、三九郎も六太夫も中々聽きません、無理に四郎を縛らうと致します、此時小屋の背後から提琴の音が聞えまして

「しーろよ來い〳〵舞はう
草は綠りの絨毯に
花の模樣が珍らしや
鳥が來て鳴く衆鳥が
一羽が飛べば二羽が飛ぶ
三羽の鳥が皆な立つて
天鵞絨の空美くしい」

と御芳が謠ひました、此聲を聞くと、四郎は自分の身の危ふさをも忘れて臺の下から跳び出し庭の眞中で踊つたり跳ねたり種々な眞似を致しますと、之れに引込まれて三九郎も六太夫も其他の人も何時の間にか浮かれ出し、鎗、刀、棍棒、叉扠を捨てゝ其處中踊り廻りましたので、四郎は其隙を窺て此塲を逃げ出しました。

（三）

踊てる中に四郎に逃げられ、後で悔んだけれども詮方がありません、三九郎も六太夫も村へ歸つてから村長へ申譯の致し樣がありませんので、惡計を考へ出し四郎といふ犬は狂犬で、其れを捕へやうとした爲めに、皆なが此んなに嚙まれましたと、手ん手に茨の刺で自分の手を破つたり、又た痛くない處に繃帶をしたりして、銘々村長に申出しました、東の村

長も西の村長も是れには呆れて犬の事は思ひ切りましたが、其れにしても憎い爺だと、村の者に御觸を出して善吉から牛乳を買ふてはならぬと申渡しました。

翌日善吉は例の如く四郎の背に牛乳の罐を付け、先づ東村から

「牛乳でござい、牛乳を買ひませんか」

と呼び廻はりましたれども一人も買ふ者がありません、のみならず路行く人は平常莞爾々々もので話しをする人まで、此日に限つて氣味惡さうに近寄らない樣にして居ります、善吉は怪みながらも、今度は西村の方に參りまして「牛乳でござい、牛乳を買ひませんか」

と呼び廻りましたが、此處も矢張り同じでございます、段々に暑くなるし、牛乳は殘らず腐りかけるし一合も賣れませんので、四郎は自分の晝飯代もありませんから、飢じくて／＼堪らなくなりました、御爺樣は兎も角も四郎は畜生の事ですから堪へきれず其邊を蹌踉しながら食物を搜しに徘徊いて居ます、丁度此時此國の王樣が振袖村を御巡幸に成らせられ今ま歸路の處なので、役人共に路先をきらせ行列嚴めしく御通りでした、善吉は路傍に畏まつて居ましたが、四郎は行列の勢に恐れ逃度を失つて路先を横斷りましたので、役人共は直ちに棍棒を以て四郎を叩き伏せ之を嚴しく縛りました。

善吉は魂魄身に添はず恐る／＼俯伏して四郎の命乞を致しますと、中々御赦免はなく、遂には善吉をも縛めて四郎と共に王樣の都へ引き行かれました、振袖村から都までは百三十里も離れて居ります。

是は皆な東と西の村長が、四郎を手に入れる事が出來なかつた腹癒せの爲めに、態と王樣に入智惠をしたのでございます。

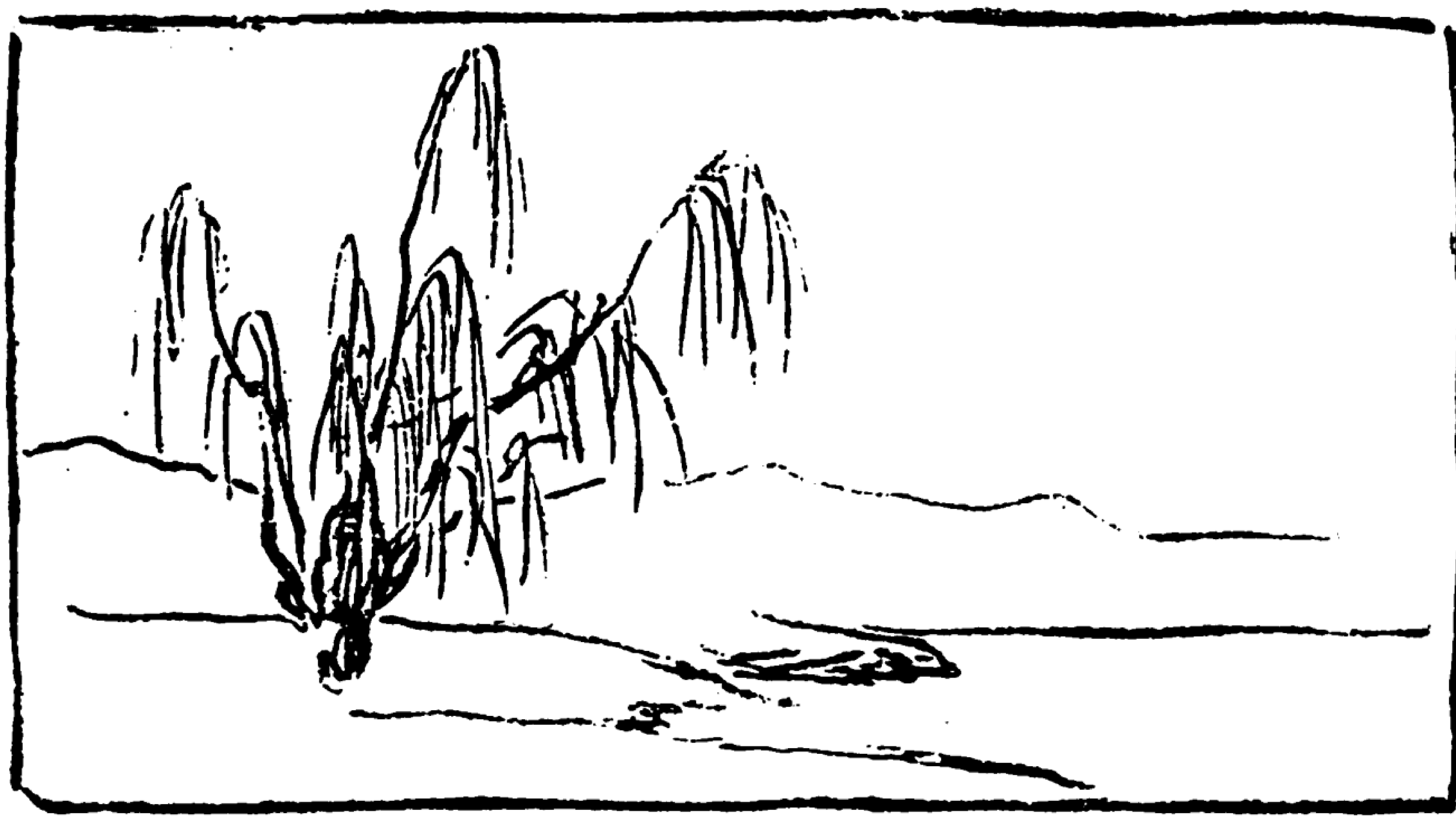
・　・　・　・　・　・

可愛さうなは娘の阿芳樣です、最早御父樣が歸つて來さうなものと、小兒ながらも庭の凉臺に花莚座を敷いたり、煙草盆を出したり何かして待て居ました

けれども、歸つて來ません、何時ならば四郎が向ふの阪を上るや否や直ぐに鼻を鳴らし、喉をゴロ〳〵させながら、御芳を目駈けて飛で來るのですか、其れすら影も形も見へません、其中に段々日が暮れて來る、四邊が淋しくなります、御芳は何だか悲しくなりまして、御父樣々々と叫んで見ましたけれども、山彥の聲ばかりで答ふるものもありません、此んな時には天の神樣に祈るより他には無いと、小さい時から聞いて居ますので、阿芳樣は其の可愛い美くしい手を組んで、一心に神樣に祈禱を致しました。

（四）

段々に夏も秋となり、秋も末になりましたけれども御父樣は歸りません、最初の中は明日歸るか、明後日歸るかと待ちましたけれども今は其の望もなくなりました。



十月小春といふて、十月頃は丁度春の樣に快晴が續きます、山の上の木は殘らず紅葉して、銀杏や櫨などは黃色に其中を染め拔いて居ます、御芳樣の家の四圍は言ふに言はれぬ好い景色になりました、或日御芳樣は椽側に出て、頻りに御父樣や四郎の事を思ひ出し、例の提琴を取て泣きながら歌ひました。

「雁は御國へ歸るぞよ
鍵になつたり掉になり
高く飛では低く延し
雁は御國へ歸るぞよ」
「雁が歸るに父樣は
何故に歸らぬ遠近の
御山が皆んな白くなる

雁は御國へ歸るぞよ」

此う謡つて居りますと、御庭の椋の木の枝に眞紅な小鳥が一羽來まして、靜と聞ひて居ます、眞紅といふても此んなに紅い奇麗な鳥はありますまい、其れに嘴は眞珠の様に光つて頭の眞中には長い〱眞白な細長い羽根が二本あつて、其の末の方は眞綿の様にふわ〱と風に揺れて居ます、オヤ大變に奇麗な鳥だと、御芳様が涙を拭いて見て居ますと、軈て此鳥が謡ひ出しました。

「何を御泣きやる御孃様
御父様が御留守でも
神はいつでも見て居ます
何を御泣きやる御孃様
ひやう〱ほろ〱ほうろほろ」

「暮るれば夜の暗くとも
明くれば朝の面白い
御待ちなされや東雲を
何を御泣きやる御孃様
ひやう〱ほろ〱ほうろほろ」

其の聲の好いといふたら如何な音樂でも、是には敵ふまいと思ふ程で、此を聞てる中に御芳様は恍惚となり、大變に樂しい氣がして吾知らず提琴を彈て之に合はせますと、其れは〱調子も的確と合ひまして、何とも言へぬ好い心持になりました。

毎日此んなにして御芳様が悲しくなりますと、例の鳥が來まして謡つて慰めてくれます、然るに其中秋も終になり、冬の初になりますと雪が降り出します、すると例の小鳥は如何いふ譯か一向來なくなりました、一日二日三日と待てども來ず、御芳様は痛く悲んで居ました處へ、七日目に例の白い冠の様な羽根をふわ〱動かして嬉しさうに飛で來まして謡ひました。

「落ちたる種子の萠ゆる時
奇しき綾花匂ふ時
玉の簪を飾る時
黄金の露の垂るゝ時」

斯ういふて嘴に啣へて來ました草の實を雪の上に落して去りました。

（五）

さうすると此草の實は見て居る中に段々と長びまして藍色の葉が出て、軈て蕾を持ちました、不思議な草もあるものだと思つてる中に、パッといふ音がして、其れは／＼美事な紫の花が瓔珞の樣に聯なつて光り眩ゆき程燦爛致しました、之を見た御芳樣は只だ吃驚して、世の中に此んな奇麗なものはありますまいと思ひました、此花が咲きましてからも、例の小鳥は不相替日に一度宛やつて來まして、いろ／＼な面白い歌を御芳樣に敎へました。

話頭が更りまして茲に彼の善吉爺樣と四郎は王樣に連れ込まれて都へ行き、村長共の讒言で遂と牢に入れられて隨分苛い目に遇はせられましたが、娘の御芳は此んな事とも知らず嘸泣て居るだらう、自分は如何でも宜いが、只だ御芳に苦勞させるのが可哀さうだと毎日々々牢の窓に凭れて泣て居ます、すると例の四郎は窓の外から鼻を鳴らし、鐵の格子を前足で引掻いたりして、善吉の掌を舐り又た種々の戯をして慰めてくれます、どんなに寒い夜でも四郎は牢の外に張番をして居ない事はありません。

然るに此國の王樣は其の位を太子に讓る事となり、即位式を行るといふので、國中は狂氣の樣に浮かれて騷いで居ます、處ろが此に困つた事といふのは、即位式の時、王妃が御用になる金冠に必らず紫の生花を着けなければならぬといふ國の古典になつて居ます、其れで宮廷では八方に人を遣はして搜させましたけれども、何にせよ此國は冬は非常に寒く、且つ雪が大變に降る土地ですから、紫の花などのあらう筈がありませんので、此れが無ければ式を延ばさねばならず、王樣も酷く弱つて居りました、此時誰がいふとなく振袖村の牛小屋の庭に雪の上に生えた大變に美くしい紫の花があるといふ事が、王樣の耳に聞へました、其れを直ぐに持て來いといふので、

例の村長共が御芳様の庭に踏み込み、無理無體に花を根扱きにして持て行かうと致しました、すると、花は見て居る中にジミ〳〵と消えて了ひます、是は大變と狼狽して居ります處に、例の紅い鳥が來て謠ひますと、又たすーつと延びて舊との奇麗な花に復ります、又た扱かうとすると又萎むといふ工合なので、根氣が誌きて村長共は其趣を王様に訴へました、王妃は之を聞ていかさま此は仔細のある事だらうと思はれまして、其れでは其娘に持たして上京させよと仰せられました。之を聞た御芳の喜は大方ならず、直ぐ件の花を鉢に植えて出立しましたが、道中は一切例の小鳥が先觸になつて參りました、都へ着きまして、王妃に御目に懸り逐一の話を申上げますと、王妃から早速王様に申上げ、遂と御父様も四郎も赦して貰ひ、大變に御褒美を戴いて、立派な家屋敷を給はりました、之れと同時に彼の村長共は人を嫉み讒言などした科で永く牢に入れられました。

即位式の時、御殿に行はれた餘興の中で、一番に面白かつたのは、紅の小鳥の謠に、御芳様が合奏して四郎が曲藝を演つた事でした。

（をはり）

米國の婦人記者

米國文學博士　山下彌七郎

當時米國に於ける小説家又は著者として名高き婦人方を紹介して其略傳を附け加へましたならば幾許か讀者に向つて、興味を與ふることゝ考へまして、著名な婦人記者六人を御紹介致します。

(一)ターベル孃

當時の米國婦人界に斯程迄名高き婦人は少かろうと思ひます、夫れは決して文章の仕組か宜しいとか又はスタイルが丁度讀者を引く丈けに上手であるとかでなく、全く文章の體裁が、古代の名文に似てゐる

といふ點と又孃の個人格か立派な記者として立つべき說を持て居るからと云ふことであります、孃が嘗てマクルアーの雜誌に書かれたる「スタンダート、オイル、カンパニー」の歷史なるものは確かに孃が抱持して居られる說が能く分り又孃が記者としての立場が立派に分るのである、即ち信用組合法若しくは獨占法などに反對せる意思が能く分るのであります孃が「スタンダート、オイル、カムパニー」の歷史を書かれた以前、時々同雜誌にナポレオンボナパートの生活及びローランド夫人の歷史を揭げて、大に世評を博したが、それから二年經て、彼の尤も名高きエブラハム、リンコルンの傳記を書ひて殆んどニコレイ及びヘイの著述したる大冊のリンコルン傳記と對立するに至りました事は、誠に異常であるので御座ります。

孃が讀者に向て斯る好評を得た重なる原因は

一、時機に投する書き振

二、自分の意見を陳る代りに事實を揭ぐる事

三、讀者の尤も聽かんとするものに向つて調査を遂げ、已を讀者の位地に立て丶、其の要求を滿足せしむるの祕決を知る事

等である樣であります、若し夫れ孃か學歷に至りては隨分種々複雜の事も御座りますから、先づ其要を摘むで御話し致したい、孃は一千八百五十七年ペンシルヴハンヤ州のフツー郡に生れタイタスヴヰル高等學校を卒業し、次でアレゲニー大學を終へ、一千八百八十三年即ち二十六才の時に、チヤタクワン誌の主筆となり、八年の間其地位を保たれ、秀才としての英名を擧けられました、其後志を立て、遠くパリスに出でソーボン大學に入學し、時々米國の新聞雜誌に寄稿し居られましたが、當時マクルアー氏の注意する處となり、氏自ら孃に同雜誌の記者たるを求められたるを幸ひ、快く受合ひて一千八百九十四年以來筆を同雜誌に執らる丶ことになつたのであります、記者としての孃は、熱心で誠實で爲すべき事務をゆるがせにしない、非常な勉强家である、夫

れが爲め一時は醫者に勸告されて執筆の害を說かれましたが、聞き入れないで今日迄來られました、嘗て同雜誌の持主なる、エス、エス、マクルーア氏の話に私か一代の中に尤も誇るべき事柄が二つある、其一つは今の吾雜誌は私か造り出せし者であるといふ事と、第二はターベル孃を見出したといふ事であります、と言つたさうですが、此言葉は實に孃の價値を定むる極適當なものであると思ひます。

(二)ライス夫人

今日の文章家として僅かの間に非常の評判を得た夫人を米國の貴女社會に求めたならば、私は第一に此アリスヒーガン、ライス夫人であると申度ひ、夫人が最初書かれたものは、極く若き御孃さん時代であつて、卽ち「キヤベイチ畑のウキッグス夫人」と申す短篇小說であつた、併し其當時は素より出版する積りで書いたものではなくて、先づ言はゞ徒ら書きであつたのであります、然るに或日友達が遊びに來たついでに、不圖した事から、此短篇小說を示されました、ところが此友人がその出來の非凡なのに驚いて、直ぐ出版する樣にと注告しました、併し孃は、左程迄思ひもしなかつたので、その友人が自身に出版の事に盡力した、早速それをセンチユリー會社と申す大きな出版所に持つて行て示すことに致しました、左樣すると其係員の方でも最初は左程迄求めなかつたのでありましたが、終ひに彼係員此係員と云ふ樣な工合に吟味に吟味を重ねて、漸くの事雜誌の內に掲載することになりました、出版されて以來の讀者の評判は仲々のものでありまして、雜誌の方計りでは、間に合はぬといふ次第で、それから早速會社の方で「ウキッグス夫人」といふ書籍にして發行致しました、引續き增刊から增刊で每週幾千といふ樣な工合に盛んに賣れました今日でも矢張り大評判でありまして、米國での最も評判よき本の一となりて居ります、又此外に「愛らしきメリー」といふ小說が夫人の手に成つて殆んど「ウキクグス夫人」と

優劣なきまでに歡迎されました。是等の著者に對して、讀者の嗜好に投ずる最大の條件を申しますれば、第一に人間の性質を能く描き出し、第二には、自分の會得して居る人間の性質を人にも能く見せしめ得るといふことである、餘り能く人間を解釋し得た結果として、或る時は滑稽に過ぎ又他の場合には人情の欠陥まで顯はし過てあるといふ批評家もありますが、これは酷評ではないかと思ふ、何故となれば夫人は自からが、至極樂天の眼を以て樂天の地位にウキッグス夫人とメリー孃とを書き出せしものですから、或は一般に我々が考ふるよりも、一層面白き方のみに趣味を有たせ過ぎたる譯もあろうと思ひます、去年來紐育市を初めとし其他各地の大都會に於て此書の戯曲は又殆んど演藝社間の評判となりて居る次第である、夫人の履歷として別に書くべき事も御座りませんが、唯一千八百七十年にケンタッキー州のセルビヴキルに生れ同州イスヴキル市のハムプトン大學を卒業したのみである、夫人の夫に當る、ケール、ヤング、ライス氏は當時米國に於て名高き詩人の一人であります。



(三)エリサベスステピンス孃

ラピンス孃が小說家として名高くなる前に、「イプセン」の婦人として演劇上に秀でたる才能を有ておりました、其時孃は即ち此「イプセン」を演ずることが尤も長所でありまして、名優エドウヰン、ブースと仲間でありました、其故諸處の都會にて非常の評判を受けまして、或批評家は此孃を呼んでイプセンと稱する位で御座りました、其後シー、シー、レイモンドと云ふ匿名又は筆名を以て「美の恩惠」「チョルチ、マンデヴヰルドの夫」及び「新月」なる三つの小說を著はされた、此等の新書の出刊せられし迄は左迄の評判もなかつたが、一千八百九十八年に「公開問題」と申す小册誌の出てから、急かに評判となりて隨分はげしき批評が始まりました、固より其筆法の正しきと、勢力があるとの評は、世上一般に同一でありましたが、所々面白くない文句があるといふので、惡く言た人もありましたが、兎も角も孃が小說の內で、一番よい點は、確かに人間の性質を能く寫すと云ふことである、孃が前きに「クロンダイク」といふて、亞米利加が嘗て露西亞から買ひ取た金の出る名高き所で御座りますが、甚處へ旅をせられた時、人間の性質を寫さん爲め「魔力ある北國」といふ本を出されましたが、其性質の能く寫されて居ることは、實に古今獨步だとの話で御座ります、孃は人を寫すこととに余程妙を得居る人で、又自分にも餘程苦心して其方面に專ら研究して居るやうです其の證據には即ち態々この「クロンダイク」は寒氣の嚴しいところであるのに、單身此地に旅行して實地を調べたなぞは誠に男も及ばぬ程の勇氣である、此勇氣と熱心とがあるから、確かに孃の作を持てはやすもの丶多いのであろうと思ひます、孃の履歷は極單純なもので、ケンタッキー州のルイスヴイル市に生れオハヨー州のザネスヴイルに於て教育を受け若き時に役者のパークスに嫁しましたけれども暫くにして死別れ、夫からロンドンにゆき八年間の內に

貴女社會に出入し傍ら小說著作に力を籠めて遂に今日の如き、評判を博せられたのであります、若し世を趣味深く思つて少しの悲觀を持たぬ人を求めたならば、孃程の樂天家は居るまひとの評である、孃の常の口癖としての言語は「世は美なり」との數語であります。

(四)アナワナー孃

別名をフレンチ夫人といひ、米國の讀書世界に於て有名なる「スーサン、クレッグ」の著者でありまして、マーク、ツウエンに次ぐ評判の話家で御座ります、此著者の嘗て世紀雜誌に載せられた時は多くの讀者は、之は女の書いたものでないとの評であつた、併し段々夫れが眞に婦人の作と知れて、婦人社會の持てはやしものとなつたので御座ります、此「スーサン、クレッグ」の他の種々なる名作に異なつて居る所は、只何だか讀むで、面白いといふ點であります、つまり人を笑はせると云ふ事が主である

彼の「ウキッグス夫人」は眞面なる樂天家として評判されたが、此「スーサン、クレッグ」は、普通「滑稽話」といふ樣なもの丶立派な標本となつて評判されたのである、此の本の出刊されたのは、丁度二年前即ち一千九百三年の六月でありましたが、其外以前の著作物で世に知られて居るものが一千九百一年に「生命」といふ雜誌に出た小說である、それと又外に次の年著しました小說、「結婚後の女皇」等で御座りましたが、此本の名に付ては、隨分本屋の方で好いとか惡いとかの批評が始まりて、終に書店の方から「婦人の心」と直しては如何との要求が出まして其の通りの名に替へました、孃は幼時より天性文才に富んで作文が上手でありました、敎育は極く低いもので極端に言はゞ全く學問が無いと云ふて宜しい、併し母堂の家庭敎育と其外旅行の經驗上に依て、充分學問した人以上の力を得た事は、丁度孃が九つの時に書いたる短き物語によりても分ります、其物語りは「常に分配せよ」といふ題で御座ります、今其一節

を書き抜いて見ましよう
一ツの小さな雛鷄が一つの大きな肥つた蟲を見出して、非常に喜びて鷄小屋の方の小陰に持ち行て他の一匹の兄弟に隱して食べ樣とした、併し折角の骨折も無沙となりて、終ひに他の兄弟から見付けられた、其れから其兄弟が云ふには、自分計りで食べ樣とは餘り殘酷である、如何となれば母鷄が兼ねて私共に言ひ聞せるには、何でも得物のある時は、御互ひに分配せよと申したでないか、其れで私は、母鷄には云いつけないから私へ分配しなさいと迫りました、丁度其時母鷄が來て其蟲を私に與へよと申まして、終に母鷄が甘々とそれを食べて了いました、そうして言ふには、此事は最早や言ふべき事もないが、又話す必要もないから默つて居なさいと申して、小供等は、少しも分配を受けなかつた、
といふ此話は吾々が考へましても、何となく、題にあはない不充分に思ふ所がありますが、併し文章の中に一寸其意を含ませてある所が九才の子供としては如何にも興味のある樣に思はれます、之れで孃が秀才の程度が分るので御座ります。

(五)ミラケリー孃及び
マーチン夫人

此二人は彼の紐育市の名高き醫者ケリーの女である彼等は、素アイルランドに生れ永き間紐育市に居つて勉强し、小學時代から殆んど書く事を以て名を擧げました、併し左程文章を以て世に立つといふ考へもなく、ケリー孃は、小學及び中學を經てから敎師の養成所に這入て、暫く紐育市のブルードウエイ街にある小學校の敎員でありました、併し身體の不健康からして其職を罷めて文學上の興味を捜ぐる事に身を委ねました、文學上の研究と自然の天才の結び付きが終ひに「センチユリー」と「マクルーアー」なる雜誌に投稿せらるゝ樣になりて、夫れからは、高く評判せられました、其作の內で尤も優りしもの

は「小兒の國民」である、之れは孃が敎師としての經驗と學問とを紹介したものであつて、實に兒童敎育家の愛讀すべきものであると思ひます、又孃は實に廣く眼を文學の方面に配すると同時に、能く來るべき未來の文學の趣勢を豫想する機敏の識があるやうです、夫れが爲め自然多くの愛讀者を得ることになるのであろうと思ひます。

マーチン夫人は當時米國に於て子供に向つての話物を書く事に尤も能く知られたる人で御座りますが、彼の「エミー、ルーの讀書と其心」なるものは非常に小兒世界に歡迎されて居るので、今日に於ても矢張り「マクルーア」の雜誌へ不絕書ひて居ます。

(六)マックラックン孃

米國に於て當時尤も謹勉で又尤も骨折りて婦人社會の改良を主張し、又絕ず其事を研究する人は誰かと申せば實に此マックラックン孃であると思ひます、孃は元來面白き「滑稽話」をかく事が上手でありますが、併し尤も眞面目なる事を論ずるのも長所である彼れが紐育市の長屋に住むで居つた若き時代、非常に其長屋生活に付きて改良を主張し又適當なる管理者を得ることの必要を說いた、其說は實に時勢に適應したものであることが一般の評判となりました、今孃は此長屋問題若しくは婦人社會の改良を土臺として米國を巡回し其實際の境遇を取調べつゝありますが、其取調の結果は常に「アトランチック」といふ月刊雜誌と「アウト、ルック」といふ名高き週刊雜誌に絕ず掲載せられますが、其說の卓絕なことは、大に婦人界又は凡ての讀者間の評判となつて居ります。

孃は、一千八百七十六年にニューオーリーンスに生れ十才の時には、已に文章を能くすることに妙を得て居られた、一千八百九十四年孃の嚴父は「エビスコーパル」寺院の牧師として、子ブラスカ州のオマハ市に、呼ばれたので、家族と一所に其處に引移られました、孃は遂に其處のブラヲウンチル、ホール

の高等女學校を卒業されたのであつて、斯迄有名なる女子社會改良主義の唱者となり、又同時に其方面に於ける名高き著者となられたのは、實に一個の女傑であるといふべきであります。

泰西名家の婦女觀

こしのみね

◎若し婦人が自分の眼に美しひと思はれんが爲に粉飾するならば、お好み次第に粉飾するがよい、誰も其の粉飾法をとがめぬ、乍然若も男子の氣に入らんが爲に粉飾するのであると云ふならば、余は天下大多數の男子の意見を代表して斯く判斷を下さうと思ふ、曰く白粉は婦人をお化にし、男子をして嘔吐を催さしむるのである。

◎若し天性美ならば、粉飾で假るの必要はない、醜ならば、粉飾しても決して美とはならぬ、天の定めた美醜は、人之を奈何とするとは出來ぬ。

◎女は意中の男の爲に容を作るが、意中の男にして一たび實の良人となるや、多くはお化粧を廢するやうになる、由見觀之、お化粧は男を釣る好餌に過ぎぬと思はれる。

◎歲月と共に愛の減少する女を不幸抱の女と云ひ、漸次愛を他の男に移す女を輕薄の女と云ひ、愛の有無を感ぜぬやうになりたる女を無感覺の女と云ふ、隨分世には此種類の女が少なくない。

◎女は極端な者である、男より善くなければ、男より屹度惡いものと、昔より一種の定理となつて居るのである。

◎女には主義と云ふものがない、心即主義である、換言すれば、心によつて動くものにして、其の座作進退多くは其の心に愛し慕うて居る人に繫つて居る、

◎愛情に於ては女が男に優り、友愛に於ては男が女に優つて居る、此は天下の通理である。

◎婦人同志の相愛せざるに至るは、其原因多く男に在る、此點に於て男は罪の深ひものである。

◎男は自分の秘密よりも人の秘密を守るに忠實であ

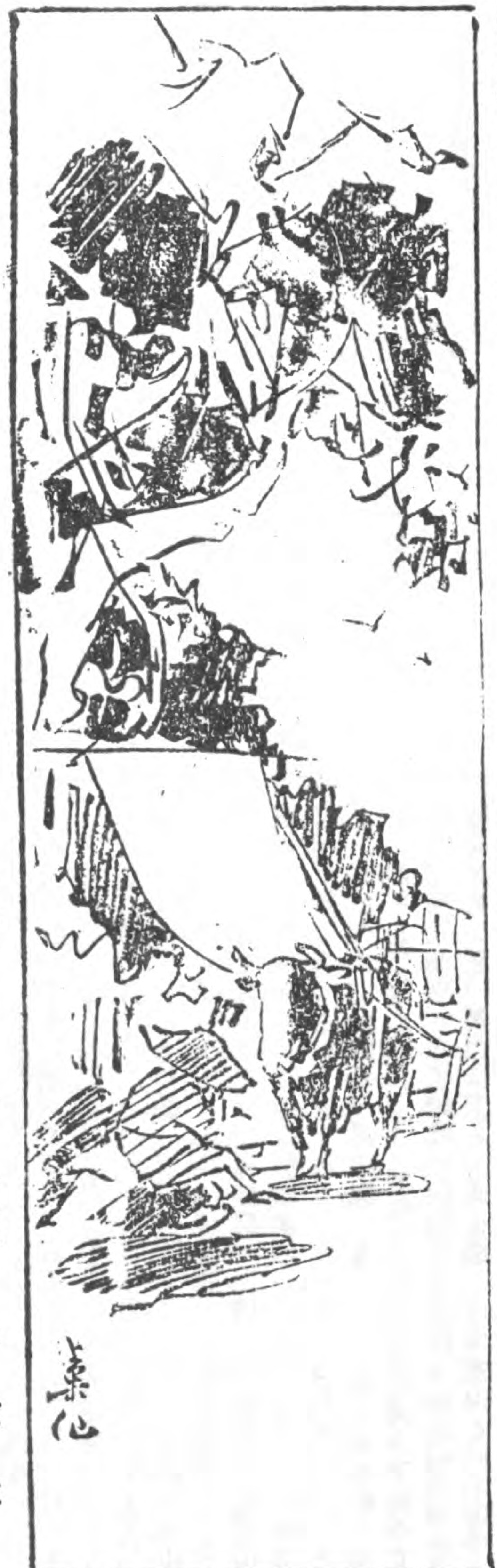
るが、女は人の秘密よりも己の秘密を守るに忠實である。

◎乍然概して言へば、秘密は女に取りて擔ひきれぬ重荷である、『貴女には内々ですが』を切り口上として、直に其の重荷をおろして了う。

◎女は男に有る愛情を隠して居るが、男は女に無き愛情を装ふことがある。

◎女は男の心に於て己に對する愛のあるを認むるや最早や生涯ふりすてること出來ぬ女になつて了う。

◎男は己を愛せざる妻に對して烈火の如く怒るけれども、直に自ら慰めて晴天となつて了う、女は良人



から見捨られても、餘り八釜敷くは言はぬが、永久締がつかずに嘆ひて居る。

◎天下には人の妻となつて、良人に一生涯一度も後悔させぬ程完全な女は恐くは一人もあるまい、滔々たる天下の婦人、良人をして『妻にしなければよかつた』と云ふ嘆を吐かしむる者比比皆然りである。

◎愛情がないと云ふ婦人は、未だ曾て愛すべき男に接した例がないと云ふ婦人である、女にして愛情なきは既に女でない。

◎悋氣は女の愼むべき所であると云ふが、然し多少正義の點がある、我が所有を決して人にはやらぬと

云ふ點に於て。

◎饒舌は婦人の痼疾である、之を癒すは、愛の最大奇蹟である。

◎悋氣は必ず愛と共に生れるが、必ずしも愛と共に死すると限らぬ。

◎悋氣は悋氣を起させた人に對しては殘忍極まるものである、此點に於て人生の最大禍害と謂ふ可きである。

◎悋氣は疑より起り、疑を共に繼ぎ、疑晴れると共に消えるものである、故に悋氣は疑を食として養はれて居るものと云ふ可きである。

◎美貌と貞操とは常に仲の惡いものである、美人に賢婦人尠なきも是が爲である。

◎女は愛情よりも寧ろ弱點の爲に尙一層早く虜となるものである。

◎旨く女を制御するは、甚だ困難である、不平も小言もなく女を御し行く程の人には、一國の政治を任せても立派にやるに相違ない。

八日の旅（つゞき）

二十日栗林公園屋島上り

松林歌子

晴天　六時起床土産物として土地の名産柚餅子を一行李あがない、用意を整へ九時五十一分發の高松行の列車に乘り込む、右に琴平線左に海岸はるかに見渡しゆくに、數百坪の鹽田あり、右に讃岐の小富士そびへたり、丸龜驛を過ぐれば右に路店左に瓦燒場あり、右方山手に石垣の城のごと見渡さるゝは、舊城趾にてもあらむか十五分にしてウタヅ驛に着く、稻のたり穗の間々に大根葱等色美はしく、そばの花白花にほころびぬ、坂出驛にて上り下り列車の行き合ひ、鴨川驛を過ぎ、八時四十分國分驛に着す、此あたり小さき圓錐形の山々所々に散在し、國分驛の左側なる池に姿を寫せる樣の恰かも小さき田子の浦にさか富士見ろ樣なり、鬼無驛の近傍杉桃柿等の苗澤山にて鹽田數多あり、内海の諸沿岸は製鹽業のいと盛なれば、この地方の人々には鹽田等も珍らしからざられど、九州人なる我々にはいと目新らしく感ぜられぬ、九時過ぎ高松驛に着く、すぐ俥人車を驅り栗林公園をこゝろざしてゆくに、左には讃岐保育會高等尋常小學校市立眼科病院右には高松高等女學校讃岐織物株式會社縣立病院稻荷神社等あり、十時前栗林公園の裏門に至る、此公園には紫雲山といふ山の東麓にありて、面積十四萬八千九百餘坪に及ぶとなり、この園は舊藩主の別墅にして五世賴桓公の時、儒臣に命じて六拾餘の勝景を撰ばしめこのおもかげを園内に築造して、吟詠等の娛樂の資にせられしと云へり、裏門を入りて少しく左に又右に折るれば、左手にあたり芙蓉池と云ふあり、こは東海道大井川の景を取りしものとなり、左に博物館あり、道の兩側には老松生ひ榮え又梅園茶園等あり、掬月亭と呼ぶ、茶店の前に梅林橋と云ふ小さきあけの橋あり、所々に池連なりて小さき橋の數多し梅林橋を渡りて右は藥園と呼び、日暮亭五重の塔見ゆ、又石

の橋を渡れば右は石花園なり、そこなる迴春橋の先には櫻山あり、此後方に飛米峯とて富士山をかたどれるあり、冠松閣臥龍梅といふを過ぎ、楓亭といふに暫時休息す、此處の名物栗饅頭いと美味なり、此前なる池を南湖と呼び大小の島々三つ四つありていとながめよし、それより右方に廻りて又梅林橋を渡り、屏風松といふ松の間を通れば左に茶店ありて、鶯鶯一番いと睦ましげに遊び居たり、美術館の前より芙蓉池といふ池に出で裏門に至りしは十時半なりき、園内奇石怪巖いと多く、又天然を主とせる庭造りのいと趣味深く覺えられぬ、これより源平古戰場たる屋島山に向ふに、市中いと繁華なり、松島通とか呼ぶ町の四丁目邊より、次第〳〵に鄙道に入る二三の橋を渡り、十一時半頃山の麓に至りつきぬ、こゝはいと小さき百姓家めき茶店めきし家の一二軒あるのみにて草履四五足軒端につるしあり、暫時此處にて休らはむと内に入るに、やがて五十の坂に間もなかるべしと見ゆる老夫婦あり、時しも晝食に近く山上に至るには一時間を要すとの事なり、山上にて高松よりの出張茶店ありて食事等の用意も整ふ由なれど、今朝は朝食早くすまし且つ運動後空腹を覺えたれば、此處にて晝食を、まさんと飯だけをと相談するに、稍暫くして粗末なる膳に芋の味噌汁と魚の干物とを持て出ぬ、米の黑きは更なり、少しぬかの香さへ打交れれどたきたての暖かく、又芋は地より堀りて間もなきもの丶如く、新らしくしていとやはらかなれば皆々空腹の際とて快よく食へぬ、休らふ事五十分、草履を求め紐もて之を足に結び附け、車夫一人を案内者として、十二時二十分より上り初むるに、道路は近頃工事を終へしなりとて、道巾一間半餘にして平坦なれど、いと急なれば近頃あまり歩行になれざる身にはいと苦しく、皆ば四五間行きては立ちどまり、七八間登りては松の根方に休らひつゝ登るに、まだ晝の事とて太陽は心なくも頭上より直射し、兩側は青松生ひ榮ゆれど、僅かばかりの影だになくいと困難なり、弘法大師の加持水と云ふありて清水流れたり、一掬して上る、中腹に至りて見返れば、紫雲山は右方はるかに見え、又高松市街鹽田潟元村其他田畑は眼前に見渡され、稻の垂穗の黄金色なる中に緣したる松の森散在し、小さくならぶ山々は恰かも築山の如く點々たる池は金魚養ふ泉水にもたとふべく、田と田との間に長く引きたる小川のながれの白銀の線の如く見ゆるなど、實に一大庭園を眼下に見下すの觀あり、八分斗りの處に弘法大師の不食の梨と云ふあり、一時十五分漸くにして山上に達す、前坂十八町と云へど我等が足には一里近くも上りし如く覺えていと苦し、此屋嶋神社は德川家康公の靈を奉祀せるものにて今は元の國主松平賴重公をも合祀すとなり、初め此處に城を築きしは、天智天皇御宇三韓大に亂れしを以て、大和國と此屋島に城を築きて夷襲來の備となせしなりとぞ、此屋島は元名の如く島にして、相引の海と云ふは屋嶋と陸地との間の海にして、此處東西より汐滿ちて又東西に引くに依り相引の名ありとか、今はいと狹くなりて小さき橋を渡して相引の橋と云ふ、又源平の古戰場にして「壽永二年平家都を落ちて此屋嶋に止まり、阿波の民部が計らひにて內裏を立て西國を攻め從へ、攝津の國一の谷迄攻め上りて、三河守義經の爲に攻め落され再び屋嶋に來る、元曆二年二月義經渡部福嶋より河洲勝浦に渡り、不意に屋嶋へ押寄せて內裏を燒拂ひ此處に平家を追落す、平家夫より長門の檀の浦に至りて、三月二十四日一門不殘亡び果てたりと或記錄に見えたり、本堂は五間四面弘法大師一家建立と云ふ、當山は南面山千光院屋嶋寺と號する由にて、源平軍の寶物ありと、一間半位の額面に「廣大智慧觀」の五字美はしく赤き合天井あり、相生の松は社の右前にありて雌雄より成れりとかや、廿本余の柱をたてられていと年へたる老松なり、み堂の左に小さき門あり、此處をいでゝ六つの石段を下れば十坪余の白き粘土質の地あり、これを雪の庭とか云ふ、堂の右に小さき殿舍と直徑二尺余のつき鐘堂とあり此處に第二の鳥井あり、東に折るれば山道にて二十間餘を行きて左に血の池と云ふあり、中央に三坪位の島あり、こは元瑠璃の寶池と云ひ、天下りたる十六文字の額面を埋めし池にて、其後源平合戰の時武者共大刀長刀を洗ひ、爲めに池赤くなりしを以て血の池と稱ふる由なり、少し左手の方に進むに、丈高からぬ松の林ありて向ふを望めば八栗山といふ山あ

り、八栗山と屋嶋山との間は檀の浦にて、東は相引の海の入口なり、右方を望めば一つの松の森ありて大墓と呼び、當時の戰死者を埋めし地なりといふ、此あたり鹽田いと多し、壇の浦は平家立陣の處にて、海岸を距ること僅かにしていたくにごれる小さき池ありて、その左手なる松の森は頼常信の墓地、又其右方十間餘なる松のしげみは安德天皇の御社にて、内裏屋數と呼ぶなりとぞ、八栗山海の邊八反斗りの海中に、下野國那須與市宗高平家方より出しゝ日の出かゞやく扇の的をものゝ見事に射通して、敵味方をおどろかしける折に、駒を立てきと云ふ岩あり。

今はた靡びく旗すゝき鼓のおとかまの風か浦浪高く立ちさわぐ、壇の浦の入口にマジ村と云ふあり人家多し、浦の外には小豆島其他大小の島々横はりていともながめよし、白帆あげたる釣舟ども遠く近く三つ五つ見えたり、それより左へ／＼と行くにメギ、チギの兩嶋あり、此處丈にあまる草木のおほひかゝりし小さき道をわけ行くに、右手に毎日高松一廻渡海す一人前七錢との木札ありこは潟元村より渡海すなりとぞ。ゆき／＼ていとも風景に富める三四の茶店ある處に至りつきぬ、我等は高松可祝旅館の出張店に休息するに、時二時十五分いたく渇を覺えしまゝ一杯の水を所望するに、やがて砂糖水を持ち來る、其冷やかにして美味なる實に命延ぶべく覺えたり、右にはメギ、チギの島々左に高松市街あり、見下す處にはいと廣やかなる鹽田あり、小蒸汽は波上に一筋の白き布を引はへ、黑き煙をあとにして勇ましげに西に向ひ、心のどやかにゆきかふ小舟のさまなど、そゞろに風 波とに送られてと歌ひいでまほしき心地して、秋の哀れも身のうさも忘れられて、身は仙境にさまよひたらんやうにおもほえて、實に三伏の堪へがたき頃しもこのたとへなき景色をながめたらむには、いかに汗つめたき心地やせんとおぼゆ。此處に獅子の靈巖と云ふ四尺四方位の岩あり、こは弘法大師一夜建立の際少し日足らざりしかば、此岩に上りて日の丸の扇を上げて大日如來を招き上げて、遂に一夜建立を成就せりと云ひ傳ふるとぞ、二時四拾分茶店をいづれば右に可正櫻と呼ぶあり、傍に高札ありて

此櫻寛永五年三月舊高松藩士松平半左衞門可正の植ふる處なり此櫻花初め淺紅色にして盛時變じて白となり後又薄藍色となる可正自詠の和歌

此寺の庭に櫻を植置くは其後の世の花かたみなり前の時人の來りて若しも問ひなば可正櫻と名を知らせてよ

うつせみのからはいづくに埋むとも
名をはやしまの峯におくなり

第二の鳥居の西にいでゝ、こゝより元來し道に下るに、初め登山の折は一時間餘をつひやしゝも此度は其半ばかりにて、下なる家に歸り着きぬ、坂急なれば降りは一しほ足に力入りて、途中よりは歩行しがたきまでに覺えたり、暫時休息して高松市なる可祝旅館に向ふ、此處を去る僅かにして巾一間半長さ二三間位の橋あり、これを大橋と呼ぶ、四時半宿につくに此あたりいと賑やかなり、今日は商船會社の内海航路天龍川丸此地を發して上る筈なれば、其發船の時間を問ひ合するに七時との事なり、湯浴みしていさゝか疲れを醫し、食事をすまし、六時半頃より商船會社出張店田中廻漕店といふにゆく、此處は旅館兼蒸滊問屋なり、源氏餅はこの地の名産にして其味は岡山の吉備團子にいとよく似たり、暫らく二階に上り大阪迄の切符を求め船の來るを待ち合するに、半時ばかりにして滊笛の聲勇ましく入港せり、此港以前は海岸淺くして、近く巨船を容るゝ能はず、上下一に端舟に依賴せしかば、風波の日はいたく困難を感ぜし由なれど、先年築港ありて埠頭遠く海中に築き出でたれば、大船巨舶も直ちに岸に接近するを得て、其便利なる事實に元の比にあらずなり、天龍川丸も埠頭に横つけとなれり、乘客一同檢疫あり、此船大田川丸より大いにして、喫烟室の左側より昇降段ありて上等室の上に廣き運動場あり、八時に出帆すこの時いまだ月いでず、高松港を遠ざかるに從ひ家々はぬばたまの闇にうづもれ果て、只かゝげし燈火のみ赤く中に電燈の色白きもみえてみ空の星と光をあらそへり、チギ島のほとりに來て、十九日斗りの

月影の二分餘りもかゞげたるが次第〳〵にさしのぼりて、今を我世と照すなり、九時過ぐる頃室に入るに何となく足おもし。

二十一日午前大阪着奈良行

午前一時頃父上の程なく神戸につく頃なりと起させ給ふに、打いで見れば光り薄れたる影いと物さびし、はるかあなたに白く赤く或は青色にかゞやきしは、近づくまゝに錨をおろせる多くの船にかゞげし檣燈とは知られたり、神戸町の有樣は夜目に見渡しがたく、只闇間に燈電打交りて點々たるのみ、此處に停泊する事いと長し、六時半頃夢破るればはや太陽は己がゆく手にほゝゑめり、大阪川口に入りてより一時間にして、我船は住友銀行川口支店建築場前の棧橋に横づけとなれり、七時半過ぐる頃上陸す、大阪見物は見合せとして、直に湊町停車場に赴き、九時發の關西鐵道奈良行列車に乘り込む、此地さすが我國第一の商業地とて諸工場の烟筒は其數を知らず、黑烟天になみなぎり種々の商店は何れも客の應對に忙がはしげに、人車荷車の往來頻繁なり、途中幾多の女學生に行き逢ふに、小さきは多くは髮はおさげにて筒袖袴なり、十二三才よりは前髮大きく取りて束髮にせる樣に見受けたり、又一般婦人の風俗を見るに至て華美にして卑俗に見え、萬づ高尙の點をかゞげる樣覺ゆるは、商業の地なればなるべし、湊町驛を過ぎて今の宮驛に至る間葱胡蘿蔔美はしくて、恰かもワサビロウドの如くふさやかに生ひ榮え、又大根畑いと多し、天王寺驛の左手に當りいとも廣やかなるかこひの内に、宏大美麗なる建築幾棟となく並立てるは、博覽會場なり、八尾驛の左に村井かたん糸製造所八尾製油所あり、何處も綿の木澤山にして所々眞白き花の美はしく、二三の男女一つ〳〵につみ取れる樣見るにつけても、あはれ僅か一斤の綿を得むにも如何程の辛勞ぞと思へば、實に小さき綿の一片だにもかりそめにすべからず、いとも身にしみて覺えけり。筑紫は一般に綿の產出いとまれなれば、從て綿の木見し人も少なかるべく、我等も漸く高等小學の折植物標本として僅かに見知れるのみ、柏原驛より平尾山松茸狩の場所迄、東八丁此處にて下る人多し、又柏原驛と王寺驛間に五分間余を要する墜道二つあり、王寺にて櫻井線乘替へとの驛夫の呼びかふを聞きては、そゞろ楠公の昔忍びいだされ。

時しあらばとはましものを楠の
萬代かをる櫻井の驛

日數かされる旅路のおもふにまかさぬこそうらみなれ、我列車は櫻井線を右に名殘り惜しみつゝ進むに、法隆寺近傍梨の畑幾丁となく連なれり、大坂にては朝飼の仕度する暇なかりければ、途中にて辨當求めむと心くばりしかども、遂に奈良に至る迄辨當賣りし驛なく、僅かたづさへたりし栗を飯に、梨りんごを菜にかへてうゑを凌ぐ、十一時奈良驛着、車中より三笠山を望むに高からぬはげ山にて、其名の如く恰かも菅笠を三段に並べたらむが如くなるは、實に奇しきながめと云ふべし菊水樓といふ旅館に心ざす驛より左にゆき少し右に折れて眞すぐに行くに、左右の家は多くは旅館飲食店なり、左手に南圓堂と記し、石燈籠ある所より少し上り坂となる、右にさのみ大いならぬ半月形の池あり、此邊よりはゝや奈良公園地にして、道中四五間にて菊水館に至る、この館は春日神社第一鳥井の右側に在り、眺望に富める部屋をとのぞみて、二階なる東南北に見晴らしたる座敷に案內せらる、東には三笠山博物館大佛堂、北には師範學校木々の間よりほの見え、南には小さき池ありて荒池と名づくとなり、後にて聞けば始め通りし小さき池は、これ即ちかの名高き猿澤の池との事にて、實に意外の感あり若し人にきく能はざりせば地理にうとき我等には遂に此名ある池をも知らで過しなるべしと思へば、いとも汗あゆる心地せり、今日は先に記し如く、遂に朝飼を食べざれば稍積腹を覺えけるまゝ宿に着きて後、直に朝飼兼晝飼の膳に向ひぬ、南面の淺茅は青々として、毛布敷きつめたらむが如き園內には、師範學校生徒の晝食後の運動や白と赤との帽子かぶりて、各々組を分かち勇ましく「ベースボール」の勝敗を爭ふ見ゆ。

（未完）



雲のわかれ

さち雄

（上）木挽

東海道の下り列車を、相摸松田の停車場にて下り、田舍道を右へ〳〵とゴム靴輕げに辿り行く女學生あり。

秋の天は拭はれたるやうに晴渡りて、鳶高く舞ひ、鴉森に飛びて、半ば落葉したる鴨脚樹の頂きには百舌鳥頻りに囀れり。袷の背に日暖く汗の出ぬほどに靜かに歩みを運ばすれば、途、林に入る毎に金風面を吹いて、涼氣水に似たり。

旅ならば、いかに詩情を動かすことならむ、詩人ならば、いかに吟腸を絞ることならむ、旅にもあらず、逍遙にもあらず、三枝てい子は今日の日曜を幸ひに、此邊なる友の家を訪問ん爲に東京より來りしなりき。

てい子の友と云へるは、八幡村の豪農、横田の三女はつ子なりき。八幡村は貞子にも亦故鄕にして、貞子の一家が東京に出る迄は、初子と貞子とは、同じ村に育ちたりき。初子に別れたるは十五の春にして、今

は四星霜を經たり。其間屢々東京に迎へ、八幡に來りて互の交情は篤かりき。いつも初子は都の富豪を羨やみ、貞子は學問の貴きを說けり。其志ざす處は右と左ほどの相違はありしにせよ、兩個の仲は睦まじかりき。

半歳程以前より、初子の音信ハタと絕えて、幾度手紙を出しても返しはなし、さればとて東京に遊びにも來ず、腹立たせし覺もなきに餘りと云へば冷淡なと、一度は恨みもせしが、これには何か仔細あらんと、半ば危ぶみながら、今日しも貞子は東京より訪ね來りしなりき。

記憶ある途とは云へ、同じやうなる田の畦に幾度も迷ひ入りて、漸く八幡村近くになりぬ、たしかに彼の杜を拔けて半町ほど左へ行けば其村ならんとは思ひながら、道は二つに別れて孰へ行かば捷徑か、四邊に尋ぬる人もなく、暫くは小川の縁に咲く野菊の花を眺めて、佇み居たりしが、習々と音するに、人もや來しと顧眄れば、人の丈ほど伸びて穗に出たる薄の靡くのみ、水の音寂かなり。

少し冒險ながら、彼の杜にさへ着けば、後は分る道なりと、無暗に草に埋れたる細道を分け行きぬ。細道は少しづゝ廣くなりゆきて、人の通れる程は草も生へず、嬉れしや、出られる事ぞと、靴踏辷らさじと下方許り向きて步み行きしが、俄に道盡きたり、見れば藁葺の一軒家にて、道は此家へ通いたるなりき。軒の下には肌脫たる男ありて、木を挽けり、大きさ三尺にも餘らん鋸を休めて、不審さうに此方を眺めぬ。貞子は自分ながら極惡く、今更同じ道を引返さんも愚に近し、外に道は見えず、立往生の姿なりしが、思ひ切つて男に向ひ

「あのう、鳥渡お伺ひいたしますが、八幡村へは何う參つて可でございますか、暫く參りませんので、ワイ

道を取違へまして

「八幡村？、八幡なら直ぐ其處じやが、飛んだ道へお出なすつた、此處からは駄目だ、何しても後へ戻つて、今越えてお出なすつたらうが彼の小さな川に沿つて左へ行く、すると板の橋が架つて居るから其れを渡れば一筋道ですよ

「ハ、難有うございます、では彼處を左へ參りますと

「左樣サ、左へ行きなさりや今云つた橋があつてからね、直ぐでがすよ、氣を附けてお出なさらぬと此道は危險がすせ、



木挽の男は、更に貞子の姿をつく〴〵と見て「東京からですかい田舎へ來やうと云ふには大體じや。申します

木挽は驚いた擧動で「横田さん、ヘー横田さんを尋ねて東京から入らつしやつたの、それは何もと云さして氣の毒さうに



ありますまい八幡は何處へ入らつしやる「私の參ります許？「卿のお出なさる家です「横田さんと

「まだ何も御存知ないのですか
「横田さんは何かなさいましたか
「もう居りません、八幡には
貞子は此一語に喫驚して、行かんとせし歩を止めて、木挽の顔を凝視たり。
「二月も前でせう、静岡の方へ移りました、今は違ふ人が住つてますが、折角東京から尋ねてでさらつしやつたのに、家が移つて了つた後じやあ、詰りませんネ、どうも飛んだ事ですネ
「何して静岡へ移られたのでせうか知ら、眞個に少しも那樣事は知りませんものですから
「私も詳しいことは知りませんが、沼津へ紙の會社を立てたのが失策の原因だとも云ひますネ、何でも大變な損で、山も田も賣つて了つてもまだ借金が何千圓とか殘るつて云ひましたつけ。御覧なさい、今私の挽いて居る木も此間までは横田さんの、裏の森にあつた樫の樹なんですが、買手は早く金にしたいんでせうあの森もどん／＼伐出して了ひました
「全く大變ですネ、娘さん達も皆諸共に静岡の方へ行かれたんですか
「行たでせうが、あの三番目のお嬢樣は、容貌も佳し、藝もあると云ふので、藝妓にしたと云ふ事です。主人が失策うと後の者が憫然でさア
「何してまあ、そんな事になつたのでせうネ、
獨語の如く言ひつて、貞子は懐中の物を失ひし思ひに。啞然として後には詞なかりき。
「まあ行つてごらんなさい、態々此處迄來た。序に

然り、兎も角行つて見ん、餘り長く語りて木を挽く手を止めんも氣の毒なりと、貞子は、篤く禮を述べて此を去りぬ、半ば挽かれたる太き槲の樹を見返りがちに。
今來し時とは違ひて、脚下も力なげに、ともすれば草の蔓に搦まれんとするを、僅に踏分けて、以前の小川の畔に出でぬ、敎へられたる如く、小川に沿ひて左へ行けば、形ばかりの板橋あり、渡りて行くこと四五丁、木立がくれに草屋根見えて、白き煙は梢を這ひ、一縷絲の如く空に上れり。馬のいなゝき鷄犬の聲昔の儘の古里には、吾影を見て懷き欣ぶ友やあらむ、椽に走り出づる懷かしの君やあらむ、行け、など吾歩みの遲々として進まざる。

（中）追懷

母屋は大きなる萱葺にして、瓦屋根の離坐敷あり、牛小舍あり、物置は三棟あり、庭は廣々として、廻らすに築地を以てせり、裏庭は更に廣く、花多く、樹茂りて林に續けり。記臆ある門の外に佇みし時は、片頰に笑窪ありて眼の愛らしき初子の顏、華やかなる聲、其母が「貞ちやんですか、よくまア」と、云ひつゝ首を傾ける癖、迎ふる人の其處に在るらん心地して、貞子は欣ばしげに門の傍の柿の樹を仰ぎぬ。
さりながら、欣ばしき影の眼に浮びたるは僅に一瞬間なりき。彼の木挽は吾に殊更の僞言を構へしとも思はれず、僞言ならずば此家の主は變れるなり、初子の姿も、母の顏も見るによしなからむ、見るによしなき人の、猶戀しさ勝りて、貞子は其門を入るに躊躇せり、異なれる主人に見えんよりは、寧ろ其人の家に來て、會はで歸りしと思做さんか。

決心して一歩門の中に入りぬ、庭の片隅に藁を干せる女あり、知らぬ顔なり、じろりと此方を見るに先づ胸打たれて、言葉の出でかぬるを、わざと励まして

「横田さんは此方でございましたか

と慇懃に尋ね掛けたり、藁干せる女は怪訝なる顔して、手を休めしが、袴穿きたる姿に怖ぢてか、應答はせで、勝手口より

「お客様だア

と濁りたる聲高く、家の人に告げぬ。

勝手口の障子を開けて現れしは、眉の間に嫌な曇ある、一見して餘り意地の好さゝうにも思はれぬ四十五六の婦女にして、片襷して拂塵を携へたり。貞子は此れが主人の妻かと思ひながら、小腰を屈め

「私は東京から參つた者でございますが、以前此家に住んで居られました横田さんと云ふ方は何地へお移りになりましたでせうか、此地にお住居とばかり思つて參りましたのに、お在がございませんで、とんと容子が分りませんが、御存知で入らつしやいますなら、何か仰つて頂きたいものでございます

「ハイ、ハイ、横田さん、此家にお在になつたには相違ございませんが、方々へ迷惑をかけて何地へか行つて了つたのです、ハイ、何地へ參りましたか

「移られた先は分りますまいか、今、靜岡？とも鳥渡聞ましたが

「卿の方が能く御存知だ、靜岡、左樣、靜岡とも云ひますが沼津とも云ひますし、彼云ふ人の行つた先は何地が何地だか、目的なんてあるもんじやありません。お梅や、お前そんな處へ藁を干すんじやないよ、

地が濡れてるじやないか、氣をお附けよ。
客ありとも思はず、傭女をはしたなく叱るなりき。貞子は、斯る處に長居は無用と
「何も飛んだお邪魔を致しました、難有うございました。
會釋して出で行く後に、家の中には何事をか聲高に笑へり。なまじひに尋立てして却つて不快の念を増しし事よと、再びは來らざるべき友の家を、見返りもせずに立出ぬ。

村を外れて、此まゝ松田に引返さんかと思ひしが、全然不知案内の土地にもあらねば、好き散歩にもなる事なり、國府津迄田舍道を歩いて行かばやと、緩みたる袴を締直して、秋の野を急ぐともなく辿り行けり。落穗拾ふて居たりし五六十羽もあらむ群雀の、何に驚いてか一度にパッと飛立ちて、木の葉の如く枯枝に止りぬ、稻は半苅られて、鳴子の繩は切れ、案山子は衣破れて倒れたり、野はこれより日に日に淋しからんとす。

貞子は、初めの中こそ秋の野の淋しき樣にも心は慰みたれ、今は只、變り行く人の身の上に心は移りて、昔の事を胸に繰返すのみ。初子と吾とは屢々斯る秋晴れたる日に、椎の實栗の實などを拾ひに近き山の裾までも遊びに行きて、短き日を恨みし事もありき。初子は常に田舍の淋しく、趣きなく、單調なるを嫌がりて、早く東京に行きたしと語りぬ、學問は初めより好まざる樣子なりしが、さりとて無教育と云ふ程にもあらず、婦女普通の心得はありて、其上性質怜悧に、氣勝ちたればなか〳〵吾如く、毎も人の後にのみ從かざりき。言葉花やかに、面白味ありて、少しも邪氣の無き處は吾最も服して親しむ點なりき。彼如き邪氣無き優しき少女の、いかにして藝妓とはなりたる、父の意か、母の勸誘か、否々、父も母もいかで可

愛し吾子を好んでさる賤しき業には就かすべき、皆人の世の運命なり。ある時初子は吾に云ひぬ、人間の一生は花やかに暮すと、寂しく暮すと、譬へば都に住んで、時めく人の奥様になりて苦勞すると、猿の聲を軒端に聞いて、暢氣に山住居すると、孰が樂しと思ひ給ふやと。其時吾は、苦し樂しは其人の心々にあらむ、一升徳利提げ、て所天の寢酒買ひに行くより外に能なき女房も、聞けば樂しき事もあるべく、峠の茶屋に旅の客を送り迎へて、峰の雲に其日々々を暮して行く茶汲少女にも、人知れぬ苦悶は袖にや裹まれたらむ。凡そ人と生れては、孰れ大いなる運命の船に乗れる身の、傾くも流るゝも、人ならぬ神の手に操さされては、わせるとも思ふ岸には繋がれじ。君は花やかなるを好みて、寂しき境に殘り、吾は寂しきを愛して、賑かなる都に出づ、是皆吾等が好んで爲しゝ方法にあらず、自然の勢なり、世の力なり、さ思さずやと云へば、さても六かしき講釋かな、私には學問の力なければ、左程の道理は辨へねど、只田舍には住み飽きたり、早く都に出たしと云ひ給へり。吾は重ねて、其心得の聊か誤れるにあらずやと云ひぬ、都に出たしと思ひ給ふは、君が性の花やかなる處より起る空想なるべけれど、若き思は屢々一夜の中にも變ることあり、偶々都に出でゝ美しき車や、大いなる構や、良き衣や、賑かなる巷やを見れば、或は左る感も起らむ、吾は思ふ、都は永く住むべき土地にあらず、脆弱き女の、人に揉まれ、世に摺れて、成行く果は危ふからずや、それよりは、田舍に歸りて、手づから桑を摘みて蠶を養ひ、秋は實の稻を苅りて庭に積む君見たまはずや、古今東西の繪師、平和の題目に田園を選まざる者やある、都の家庭は整ひたれども餘裕なし、外觀は花やからしくして、内部の冷かなることいつも冬枯の如きもの多し、吾は何處までも田園生活の淸く美しきを好むなりと、眞面目過るほどに論じゆけば、初子の君は、手にしたる栗の實を落して、

ホヽと笑ひ出し、それ程田舍が好くば何故歸りたまはぬにや、速く學問を廢して引込みたまへと、一本きめつけられしに、吾ながら、成程學問は都のこと、普通學び終らば歸りて又君と共に野山の景色を賞へなむそれ迄は、都に住むことを許し給へと云ひしが、思へば其れも一時なりき。

初子の君は思ふ通りに都に出たり、靜岡と云へど、此地より見れば都會なり、沼津と云へど此地より見れば繁華なり、必ずしも東京の土は踏まずとも、都の手ぶり、此後の初子に傳はらむは早かるべし。

藝妓と云へば、言ふ迄もなく人に媚るが商賣なり、初子は、生れながらに容貌美く、藝能優れ、殊に花やかなる性質なれば、一度彼等の仲間に染まりては、紫の白地に歸る日は無からむ。あはれ何地にか、鼓の緒締むるに器用なる子一人增えて、吾は花やかに邪氣無き一人の友を失へり。音信せざりしは面目なくてか、但しは我を疎んじてか、縱へ君、二尺の袖の花模樣のけば〳〵しかるとも、昔の心知れる吾の、などか移らふ花の色をあはれと見ざらむ、今一度逢はまほしさよ、髮の結ひやうは變るとも、心の鏡だに曇らざりせば、友として斯くまで慕ふ吾心の映らでやあるべき。吾に言葉なくて、八幡を去りたまひしは返す返すも恨みなり。

「ヤ、逃たぞ〳〵

耳元で子供の大聲揚げしに、貞子は驚いて吾に歸りぬ、追懷の跡を辿りて、知らず〳〵幾町をか來りけむ此處には小川流れ、行手には村落あり、左は低き山續きの、黄に、紅に、梢は梢色づけり。

聲揚げたる里の子は、川狩にや來りし、五六人連にて、皆泥足に驅廻りて、筒袖の前は胸まで露出なり。今しも捕り得て、バケツに入れ置きたる鰻の、何時の間にか逃出したるにて、彼等は皆其邊りに集り、大騷ぎして鰻の行方を探しぬ。

里の子が無心の樣の、自然に近きを眺めて、貞子も往昔は、友達と云へば、只遊ぶことの代名詞たりし時代の、疑問もなく、空想もなく、極めて清淨なりしを偲びて、暫くは幼な心に彼等の爲す樣を見つゝありき。而かも逃終せたる鰻は遂に童の手に返らざりき。

（下）舞扇

貞子は文學を修めぬ、性來物の哀れを知る質なれば、文學を修むるは、至極貞子に適當しき事にて、自ら得意とし、好んで學校に通ひ、兩親も其成蹟の擧れるを見て、潛かに欣び居たりき。

然るに此頃、貞子の通へる女子文學院は、品行の修まらざる生徒多しとて、某々二三の新聞は、筆を極めて痛罵せり。文學などを修むる女子には、碌な女は一人もなしと、毒筆を振ひて、文學院の全體を攻撃せり。されば二三の意志弱き女子が、男子と云へる天魔の舌に魅せられてより他の品行正しき女學生までが犧牲となりて、攻撃の矢傷を受けぬ。貞子は忌はしき事に思ひ、文學院全體に大改革を斷行されんことを望みしが、あはれや此頃の學校にて、改革などを行れば、忽ち生徒の數を減じて、財政の上より存立覺束なしと云ふ有樣に陷ること明かなるより、優柔不斷、勵しき改革も行はず、其中に噂は噂を生みて、父の耳にも入り、左樣な不取締りな學校には入れて置くこと出來ずと、貞子に退學を命じぬ。半途にして停學することは如何にも心外なりとは思ひながら、父の云ふ處も至當なれば、遂に校舍に通はずなりぬ。

女子なりとて學問して惡き理由はあらじ、只學ぶべき方法の不完全なるが爲に、心ある者は次第に海老茶袴の生活を厭ふやうになりぬ。貞子もかゝる際に、なまじひ東京に居て、人中を步けばこそ、種々の噂も立てらるれ、田舍に引籠りて會心の書を讀まば、却つて大いに得る處あらんかと、自ら覺りて、父にはま

だ其れと明言さねど、今日横田初子を問ひしは、全く其相談の爲もありき。さりながら友は汚濁に投じたり、今は救はんとするも吾力の及ぶ處にあらず、小禽の如く喜んで翔る間に鷹の餌食とならむか、羊の如く悄れて牧場に飼はるゝか、其孰れかは疑はしと雖も、今は彼と吾と、大路を行くと、裏町を通ふほどの相違あり。其間には越ゆべからざる溝あり。貞子は初子を斯る境に陥落れたることの、尙一半は吾扶導の足らざりし故かとも思はれて、何か一つの罪を犯せし如く、心穩かならざりき。

右手は相摸灘洋々として波平かに、海風松の梢を吹いて、白露砂上に落つ。白帆二三、座するが如く、秋凪ぎたる日なり。

貞子は國府津の停車場に入りて、勞れし心と疲れし身體を休めぬ。夏とは違ひて待合の客も少く、銃獵者と見えて獵銃を傍に置いたる鳥打帽の靑年と、新聞記者らしき五つ紋附たる薄鬚の男と、頻りに何事かを語り續けて興に入る聲の、四邊の靜かさを破るのみ。新橋行は旣に出たる後なり、此次に神戸行が着いて、それからでなくば上りは來らず。

貞子は携へ來れる新しき人の詩集を默讀せんとしたれど、心此に在らねば、何の意味か更に讀んでも興に入らず。外に出て、松林を逍遙ふたり、貝を拾ふたりする間に、囂然たる響地を動かして神戸行は着きぬ。

プラットホームの柵に凭れて、降りし人を見れば、官吏あり、學生あり、お内儀あり、仕事師あり、人さまざまの中に、二等客車より下りし女連の一群あり。前に立つて行くは金縁の眼鏡に細身のステッキ、髯の痕まだ靑き若紳士にして、其れに隨へるは、茶屋の女中頭とも見ゆる氣轉の利さうな女、雛妓一人、藝妓二人、合せて五人の同勢に賑かなること一車を空うして來りしが如し。貞子は摺れ違ひさま、麝香の匂

鼻を撲つに、常ならば靴音高く他へ避ける處なれど、今日は藝妓と云ふ者に就いて、一方ならず感情を動かしたる折とて、顧盼りて彼等の姿を見ぬ、其時、桃色のハンケチ持てる丸顔の方が、何やら地上へ落せしを知らずに行く様子なり。見れば小形の雛扇なり

「卿、何か落ちましたよ

貞子は、注意して呼はりたれど、夢中になりて饒舌りつゝある彼等の耳には入らざりき、其間に早四五間行過たれば、貞子は扇を拾ひて、後ろより小走りに

「卿、モシ此は卿のじやありませんか

漸く氣附いて顧盼りぬ、吾落したる扇と知りて

「何うも難有うござんす、失禮

と云つて藝妓は扇を受取りぬ、他の連は皆口々に笑ふめり。

「何してそんなに恍惚てるの

「箱根に行かないうちは、お化も出る氣遣はないから、しつかりお爲よ

「だつて私、知らなかつたのよ

「あら、それをそんなに麁末にしても可の、いゝ氣ね、

若紳士は此事ありしを知らざるべし、今しも電車鐵道の前にて彼等を待りて。

貞子は暫く見送りて内に入りぬ。

新橋行の切符は、既に賣出せり。

（完）

文林

姫松ものがたり（つゞき）

佐々木濱子

えびらの梅附飛梅

としかはりて、この池どのゝ庭に、小松多く、おひいでたるに、子の日のあそびをぞ、もよほされける、うぐひすの、はつねの、けふときゝて、梅どもまゐりたり、まづ先がけはえびら梅、ことにうるはしき、梅が枝を、えびらにさしたる花々しき、若武者のすがたにて、いできたり、いく田の森にいく春の、むかしわすれぬ、名將の古跡より、うつされたる、香もいさぎよく、梶原源太景季、をまねび、あまたある、小松が中に、根づよきを引て、高名せんとひかへたり、次に、京極入道中納言の、京極の屋の、南向に、二本ある梅、ことにおちつきたる、薫大將にも、よそへつべき、次に、香もかくれなき、月の瀬のうめは、匂兵部卿、を、まねび、其外、名もしられぬ、梅ども、思ひ〳〵のいでたちして、にし、ひんがしに、立わかれてぞ引きそふ、西は、紅梅殿の、梅をはじめとして、多くは、紅梅なり、ひがしは、白梅、今や、引か

からんとする時、いそぎ來たる、つくしの飛梅「しばし、まちたまへ」と聲かけたり、えびらの梅とまるべくもあらず「なにがしは、八幡叡感の、神木ぞ、引おくれなば名木の、名をれ、飛梅は、菅原道眞公に、つかへて、文の道にこそ、好文木の名も、かぐはしからめ、武の道は、いかばかりの、ことや、候べき、まづ御ひかへ、候へや」といひさま、はしりいりて、小松が中に、ことに根づよきを、もろ手をかけて、えいと引に、つち外ざまに、飛ちつたり、このいきほいに飛梅は、あとじさりしつ、ねたさをしのびて、のぞみをり、されば、是も、さきがけは、えびらの梅、夫より、次第に引きそふ、紅梅の中には、女もまじりたるに、紅梅のきぬども、袖つま、風にひるがへりたる、さながら、にしきのみはたのごとく、なびきあひたり、つよき女は、末摘花にもそへたる、はしかくしのもとの紅梅、たすきかひ〴〵しくひきゆひたる、手足雄々しく、顔は、うすめのみことのごとく、男梅もおよばぬ松に手をかけて、やゝといひつゝ、引ぬきざま、松をにぎりて、どうとまろびぬ、是をみてありし、梅ども、手をうちて、ほめのゝしり、どつと大わらひになりて、ことをへたり、このものおとに、みすの内なる姫松は、みすたかくかゝげさせ、女房どもにいひつけて酒肴をいたせり、よき梅は、えんにしりうちかけ、次ざまなるは、芝のむしろにゐて興しあへり、めのとは松君をいだきて、この有さまを、みせまゐらせつ、このまつ君といふ名は大納言伊周公、世にいふ、儀同三司、のおん子の、松君、二才計りと、枕草紙に、みえたるを、思ひて、姫松の子の名とせるなり、そも〳〵、正月初子日に、小松を引は、もろこしよりおこりて、千歳の綠を手握といふ、吉例なれど、いま、世もいさゝか、みだれぬにしもあらねば、この大日本に、向ひ奉らんとする、おろか國の、つちを手握といふ、ことにとりなして、今日の遊びは、もよほされたるなれば、常よりも花々しく、いさぎよき、あそびなりき、梅どもよき程にゑひて、白きも、うすくれなゐの、いろになりて、のちは、うたよみかはしなどするに、えびらの梅に、先がけせられたる飛梅、このかたにても、とや

飛うめの飛ひらめきてなるかみに
　　うち平らけんおろのえみしを

實に、あら人神も、まもりましなん、言葉のやうにて、よみいでたり、かゝるをりなれば、多くは、いひつゞけず、二時過るころまで、遊ひて、しりぞくに、みなろくえて、かへりぬ、

花のたより

ひとへのさくらが、さくら島にうつろひたる、秋のつかさめしには、餘り程なきにはゞかりて、かりの音づれもせず、ことし、きさらぎ末つかた、花のたよりあり、すゞのやの、ふるすわすれぬ、つばくらめにそへて、さくらのうすやうにかきたるを、ちひさくむすひたり「松の翁、うこんのいてふとのへ」とかきたり文の詞「葉ざくらの青葉の雲にたちへだてつゝ、都をいでにしことは、こぞの、さみだれはるゝころなりき、我名にしおふ、さくら島へは、實に、三千里の外の、こゝちもして、いと遠きさかひを、滊車滊船にものらで、風にたへひて、ふかれとしは、やゝ、秋ちかきころなりき、いづこをあてと、たよりぬべきかたもなく、いまだひらけぬ島なれば、にひ島もりなど、いひてもありぬべきを、ひなのわかれにおとろへながら、蜑がなはたぎ、いさりするすべをもしらで、さくらかざしてくらしつる、大内の春のみ戀しう、まづ、とみにすみかたづぬるうち、いとひらけたる、まちにはあらで、ある漁村の、海士がいへの庭に、うつろなる、さくらの木のありけるを、ふとみいでゝ、やどり木の、やうにてなん、はた、この島は、いで湯なども、あまたところあり、あつさのたへがたき程こそ、ことに賑はひけれ、秋風のふきたつまゝに、たちかへる波のおともいとあはれに、思ひいでぬことなきがうちに、月のあかきに向ひて

　　波路ゆくかりかねかなしめくりあはん
月のみやこをとほくのぞめば

さて、そのころ、みゆるされもあるべきやう、のたまひてしかど、つゝましさになん、ことしの秋にもみゆるしたまはゞと、この春は、このうつろ木に、花をさかせぬべく、その庭の花たちは、とく咲いでたまひしや、みやこのさま、ひとこときこえ給へ」など、あはれにかきつゞけたり、おきなまづ、よみくだすをいてふもきゝて「いとあはれにもきこえつるかな、この秋は、かならすゆるいたまはんやう、おきなもとりなしたまへ」などいふは、いとたのもしう、ともがら、思ひぞかし

かしは木すのけ

ゆげひのすけが、やかうのすがたなめり、おどろ〳〵しき、赤衣(あかすろ)きたる男、けんぎのものやある、とて、みまはりにくるあり、おきな、そこすぐるはたぞ、とゝふに、「こは、ゆくりなくも、うこんのつかさの人人おはしけるところに、まゐりたり、なにがしは、柏木にはべり、衛門兵衛を、かしは木と、申により、衛門のすけが、夜行のすがたをまねび、赤衣きて、まゐるものなり、其名ばかりに、おはします、文の大君なればとて、うこんのみにては、いかでおはせん、されば、かしは木ども、衛門兵衛となりて、この庭の内をまもり候ものぞ」といふも、いとたのもしきことぞかし柏木詞「いにしへは、つぼねのほそどのにしのびふして、にげなきものといはれ侍る、今は、さるすきごとするものはなし、たゞこの赤衣の、おどろ〳〵しきのみなん、むかしの五位がさまを、をさなき人に、みせはへらん、とて、かゝるすがたは、しはべるなり、とてすぐるもあり

卯の花月夜

この庭のかたすみによりて咲たる、このごろの、うの花月夜、いとおもしろくまくらの草紙に、うの花はしなおとりて、といへるところに、紫野のわたりちかき、あやしのいへども、おどろなる垣根などに、い

と白う咲たるこそ、いとをかしけれ、青色のうへにしろきひとへがさね、かつぎたる、青朽葉、などにかよひて、といひたる、青色など、みしこともあらぬ、賤どもうちより、垣根づたひに、おのが世のさかりをよろこび「きたどのこそ、きゝたまへや、われらは、紫野のわたりよりや、うつされけん、加茂のわたりよりや、うつされけん、いづこのたねともしらず、いとこゝろ安き身を、おなじいやしきいへのものにても、夕顔に侍らばこそ、ものがたりにもとりいでめ、あなうの花、といはれぬる、花のちぎり、くちをしきものから、かう、月のせかいにゝたるほどをうれしくはおぼさずや、といふに、今ひとりの男「げに、みなみどのゝいはるゝごとく、いつも月夜に、とは、たれものぞむことながら、はた、雪にもよそへ侍り時鳥のよすがとさへ、さだめられたる、なか〳〵に、よき人は、われらのせかいを、うらやましくや、おぼすらん、この月と雪とのさだめは、いづれか、まさりたり、とおぼす、とゝふに南「そはいふまでもなく月こそまさりたれ、春はかすめる影の。あはれなるよりして、夏は月の霜夜、秋はことさら、光りもまさり、冬の月もいはゞ秋めでられて、さかりはすぎなめど、なか〳〵におくふかき山の、杉の梢にみえたる木の間の影、うちしぐれたる、むら雲がくれの程など、いふことも侍るは、といふにきた「それはまことの月のことぞや、この卯の花の月夜と、雪の光りとの、さだめにはべり、我は、月のせかいはよくしらず、雲のせかいといはゞ、こしぢに、こそは、そのこしの國なん、われらが、この、うの花の垣内にありて縄なひ女は糸引などせん、もかの國の、冬籠りのさまに、かよひて、いとにあはしく、ことしは、麥の秋も、ゆたかなるべきに、この雪の國も、いとたのもしく待るや」といふに「我は、はた、さ、うづもれてはあらじ、思ふに、子どもらは、とく、學びやの、庭にもうつして、いつも月夜は、およばずとも、よねは人につかせまことの白かさねは、いかなるもの、といふ程にはさせん、といふは、かの夕顔の巻に、きゝとがめけん碓のおと、こぼ〳〵とふみとゞろかして、つきやといふものを、なりはひとせるなめり

水くるま米つくせとの川そひに
しらけてみゆる花うつ木かな

と、いふうたあるなり

かへり花

さて、ことしはづきも、いつしか過て、松の翁より、とくかへりたまへ、などいひやりたる、ひとへのさくらは、十月ばかりにや、かへりぬらん、もとより、をかせるつみのあるにもあらず、しばしの、かしこまりにて、配所の月、みてかへりしことなればなか／＼に、まちうけられて、はえぬべきわざなり、もとの木のもと、はきゝよめ、うらがれの芝生も、ちりひとつ、おかぬさまに、ところ／＼に咲のこりたる、黄菊白菊など、いとのどかに、かをりあひたるところに、かへり花さへ、咲たるなれば、それより庭のうちも、にはかに賑はしく、日ごと、こゝかしこによばれなどしつゝ、外の木ども、冬がれしらぬこゝちして木の本にうち集ひつゝ、興じあひたり、この時よりなん、かへり花はさかせける、

月のかつら

住の江の岸の姫松は、そのゝち久しく、かゞみを、おそれてとらず、はれとある時には、外のかゞみしてみるに、さりげなきも、冬の月のかゞみ、梢にかゝりたるが、ものすごきをみても、かのふるかゝみのことを、こゝろのうちには、いかにもして、住の江のたつの、こゝろをやわらげ、かつその龍の、行をへて、天にのぼらん時せつをまたば、はゝの姫松も、いかに安くおはしまさん、その時のかゝみの顔は、かならず、天女のすがたとなるべし、こはうか／＼として、をるところにあらず、大かたの世の人もいふなる、龍の雲井にのぼらんまでは、山に千年、川に千年、海に千年の、月日をへて、さてなん、天にのぼるといふ

我も、その龍の行をよそながらたすけなば、海に千年の、月日のうちも、またぬまに過て、天にのぼらん時いたらん、そは、おん經のくどくにはしくものあらじ、おとにきく、天竺の那蘭陀寺、ちかきところなる池に、たつすみて、名を那蘭陀といひ、首楞嚴經をよむも、そのたつの、すみたるゆゑこそは、是は、いかなるおん經ならん、かゝる御經などのことは、ことに、學びなきもの丶、しらんやうもなきを、よし、おん經ならずとも、鬼神のこゝろをも、やはらぐるは、うたのとくなり、今よりはひたすら、うたにこゝろをよせ、うたによりて、龍のこゝろをもやわらげ、天の、みゆるしをも、まつべきなり、夫も、わがちからにては、及びかたしこの庭の内なる人まろの御筆柿をまつりたる、やしろにまうで丶、願ひ奉らん、今宵は丶や、ふけたれば、あすの夜より、いもゐをして、もゝか丶間、まうで丶、まなび奉らばや、とて、かくさだめつ、さて、そのあしたより、少し、さはることのあるよしして、手枕の松にもあはず、松君のめのとには、それとなく、ねがふべきことありて、よな〳〵、まうづるよしをのみ、つげて、庭の内なれば、ひそかにまうでぬ、もとより草木の身なれば、學ひのあるべきやうもなく、たゞ住の江の岸の姫松をよみたる、うたのみをおぼえたれば「我みても久しくなりぬ」とよまれたるのちも、なほいく世をか、おくりけん、この姫松よ、もろこしの松の太夫のやうなる、いさをしもなく、いたづらに、世をおくらんが、はづかしきに、その岸にすむたつなれば、何をもてか、雲井をゆるさるべき、せめては、天の、あはれとだに、みそなはすべき、うたをだに我に、よましめたまへ、とて、かへす〳〵も、神をたのみ奉りつ、そのはしめの夜より、芝濱の、濱の眞砂を、かずとりに、よめども〳〵、よみえがたくて、もゝ夜になりぬ、今宵もはた姫松は、人まろのやしろより、かへりきて、ひとりふしどにいるさまして、うたに思ひをこらしたり、こよひばかりを、いかにしてか、よみいでん、何ごとも、世にしたがひて、まつは久しきものながら、たつといへど、たつこかたき、へみにしあらば、はひや、のぼらん、そよ、いにしへの人は、

椎の木をたのみて、三位したまひしためしだにあり、我母ながら、位なき、姫松の梢よりは、のぼりがたけん、是は、たつ木をしらぬなりけり、かくて松の根に、をりし月日を、椎の木の本に、つまゝしかば、今まで、のぼられぬ、ことやは、ある、とて、

天つ神あはれとはみよのぼるべき
たつきをしらでおくる月日を

からうじてよみいでたり、かくて其夜はうちふしぬ、つとめて朝日に向ひて、女のかゞみをとり、いだしつ、久々にて、我顔をみるに、姫松がうたにより、龍も雲井やゆるされけん、はた姫松には、月のかつらの枝やたばせし、是までのわが顔ならず、すごきところは、いつしかうせて、あいきやうこぼるゝばかりいとにほはしう、わかゞへりたる、折から、きさらぎ末つかたなれば、庭に咲たる花の影、うつりやすると、をりだちつ、ひとふさをりて、さしかざし、またあらためて、さし向へば、天つ乙女のおもかげに、ますみのかゞみ、うれしきまゝに身もかろ〴〵と、小蝶にあらで天の羽衣、うちゆるされしこゝちして、天によろこびそうすらん、今はとこゝろおちゐるにも、はゝの姫松がよろこびさこそと、おしはかられ、ひとりうちゑみゐたりけり

たまくらの松

さて、その夜はたまくらの松にもあひつ、手枕の松は姫松がいつになき、こゝちよげなるおもゝちなるに、まつ程久になりぬれば、いかゞなと思ひはべりしに、いとこゝちよげにものしたまふ、何ごとのつゝしみにて、かうながくはといふに「みづからはうたなど、よみ侍りしことも、侍らざりしが、ふと思ひたちはべる、ことありて、にはかによみならはゞや、とおもひはべりしかば、もゝかゞ程、いもゐをして、人まつの神を、たのみたてまつり、からうじて、みそひともじを、つらぬるほどには、なりはべりつ、是まで

世の中をば、はかなくのみ、思ひとり侍りしを、うたにこゝろをよせ侍りしより、むねのうき雲はれわたり、まことの月の光り、花のにほひを、さやかにも、みはべることを、えはべれば、今はおもふこともなく、たのしくのみ、とて、なほまめやかにつかへたり、姫松がこのことばをきゝて、手まくらの松は、かばかり、うたのとくゐることをば、けふはじめてしりて、日ごろはいつも、もの思はしげに、我にさへ、うちとけがたき姫松の、このうるはしき、おもむきのみか、さまかたちさへ、いたくまさりたるは、ひとつは、こゝろのあらたまりたるより、みまさりも、せらるゝなるべしと、氷とけたる谷川に、春をまちえしいろくづの、うれしき中に、何ごとか、みづからは、こゝろにはづる、ことありげに、思はずながき、いきをつきたり「我はさばかり、うたのとくゐることをしらず、はた、それのみならで、わづか、もゝかの程にいもゐをさへして、ならひたまひし、そのよみいでたまへるは、いかなるうたぞ、たゞみこゝろはれやかに世をたのしくおくりたまふだに、大きなるとくなり、我はゝた、それに引かへ、あひたまはぬがさう〴〵しさに、宵よりうたゝねの、手まくらに、かひなく過し月日こそ、くやしけれ、今よりは我もまなびて、をり〳〵は、露しものしげきをわすれ、やがては、老をやしなふ、たのしみとせん、とて

まなはさるわかうたゝねの手枕に
かひなく過し月日くやしも

是よりたまくらの松も、うたにこゝろを、よせたりとなん」

（をはり）

夏日戰死者靈前に陪して

賜題鋭といふことをよめる歌

御歌所錄事　加藤　義淸
仰き見ぬ人こそなけれよをてらす　うらやすくにの神のみかゝみ

小川　直子
武士のみたまをうつすますかゝみ　あふけはぬるゝわかたもと哉

鈴木　小舟
世の人に臣のかゝみとあふかれて　くたけしたまも嬉しかるらむ

岩崎　勝従
神となる人をそしのふみかゝみの　なかにもかけのある心地して

中村　禮子
よくうつる鏡もあれとやすくにの　みたましろこそたから也けれ

三宅　龍子
朝なゝゝ向ふかゝみに耻ちさらむ　こゝろを社は持たまほしけれ

服部　磯子
みまつりの神の御前のますかゝみ　向へはおつるわかなみたかな

磯部　艶子
千早振かみのみまへのかゝみこそ　くもらぬ御代のすかた成らめ

戰死者慰靈會兼題

杜　鵑

北白川宮富子
まつらるゝ人の昔をしのひねに　なくかことしのやまほとゝきす

田中　光顯
ものゝふのかはねの上を古里に　かへれとなくかやまほとゝきす

東久世通禧
うちかはす筒音たえし夕くれに　なくやうらるのやまほとゝきす

高崎　正風
聞く人も血に泣きつへし名のりては　雲かくれゆく山ほとゝきす

鍋島　直大
郭公たえすなくなりきみかため　たふれしひとをなれもをしむか

鍋島　榮子
益荒雄のみたまを祭る折しもあれ　一聲たかくなくほとゝきす

近衛　貞子
あたらしき森の木陰の奥つきに　ぬかつきをれはなくほとゝきす

前田　利嗣
初聲をさゝけんとてか大和うた　たむけのにはになくほとゝきす

津輕　承昭
御軍にたふれし人をまつる日に　名のるもあはれやまとゝきす

わたし野にちりて殘れる花の香を
猶慕ひてやなくほとゝきす　長岡　護美

敵味方うちわふつゝのおとたえて
ひとこえもらす山ほとゝきす　大原　重朝

國の爲つゆときえにしますらを丶
とふらひ顔になくほとゝきす　西三條實義

ほとゝす昔をしのふ聲すなり
ひと村雨のかゝるのきはに　加藤春路子

雲井にや鳴て告くらむほとゝきす
身を碎きにし人のいさを丶　竹屋　光昭

わた波に聲はきえてもほとゝきす
雲井にたかき名はひゝき鬼　長谷　信成

國の爲のこすいさを丶ほとゝきす
雲井につくるこゑのさやけさ　池田　政禮

時鳥このみまつりをかしこみて
初音もらすかやすくにの森　松平　乘承

みいくさに命をすてしますらを丶
しのふ雲井になくほとゝきす　水野　忠敬

もの丶ふのみたまをまつる此夕へ
わはれをそふる山ほとゝきす　本多　芳子

つはもの丶みたまを忍ふ夕暮に
わはれ血になく山ほとゝきす　諏訪　忠元

靖國のやしろの森のほとゝきす
雲井に名のるこゑのさやけさ　岩崎　寧子

ねさめして御軍人をおもひやる
空にひとこゑなくほとゝきす　南郷　柳子

たまつる御軍人のおやに子に
もの思はせてなくほとゝきす　松平　健子

郭公なくとはきかしいさをしき
ひとのあととふゆふくれの聲　阪　正臣

みにかへてたてし勳功を久方の
くもゐにあけてなくほとゝきす　宮地　嚴夫

戰ひのありし野山のほとゝきす
誰をしのひてなきわたるらん　北郷　久政

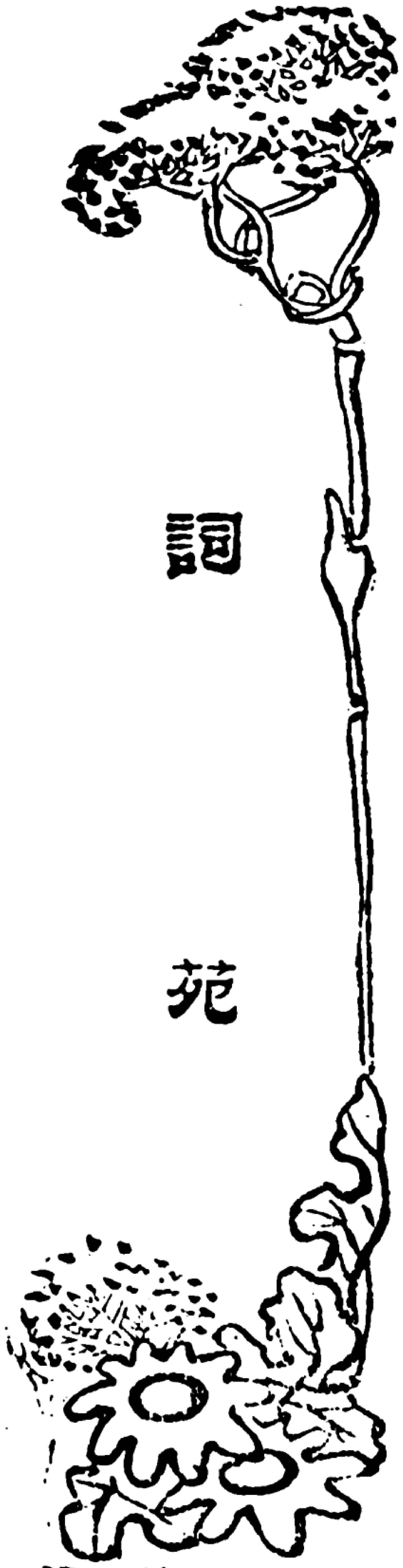
月かけは雲にかくれておほ空を
さやかになきてゆくほとゝきす　田中　瀧子

星か岡なきたま祭る今日なれは
ひとこゑもらせやまほとゝきす　香川秀五郎

國の爲いのちを捨しますらを丶
とふらひかほになくほとゝきす　東儀　季熙

益荒雄の御魂吊らふ折しもあれ
あわれときなく山ほとゝきす　芝　葛鎭

夏草のしける野末にもの丶ふの
夢のあとゝふほとゝきすかな　小出　粲



詞苑

従二位男爵 黒田清綱先生撰

（代撰菊池武則先生）

夏月

天

東京青山南町七の二 森千里子

なか〳〵にかゝけしよりも玉すたれ
もり來る月そなつは涼しき

地

愛知縣葉栗郡淺井町 松本たか子

晝のまのあつさわすれて見る月に
ねるまもをしき夏の夜半哉

人

埼玉縣入間郡川越町 横田須磨子

鮎はしる数さへみえてかつら川
宿れる月のかけそすゝしき

甲

能登 加野こひ子

夕立になこりのつゆもおきそひて月かけすゝし小野のしのはら

肥前 藤松りか子

むら雨のなこりのつゆの玉ことにやとれる月のかけのすゝしさ

東京 林 艶子

若竹の葉ずゑにつゆのしらたまにすゝしくやとる月のかけかな

愛知 後藤のふ子

風わたるしたりやなきのしら露にみたれてやとる月のすゝしさ

名古屋 木下鶴子

みしか夜のねふりもよほし見る月はふけていよ〳〵涼しかりけり

能登 高橋貞子

瀧つせに淀める見ればなつの夜の月もすゞしとかけやとすらん
埼玉　横田秋子

山の井のすゞしきつきの影くみてあたら清水をにごしつるかな
河内　田中たまの子

わか竹の葉ずゑをのぼる月みればさら〳〵夏とおもはざりけり
東京　佐野ふき子

たへかねしひるのあつさもわすれけり月とともにも相涼みして
東京　大枝庸子

きてみればころも手すゞし月かげのすみ田川原の夏のけしきは
東京　佐野とみ子

庭艸におく霜さゆるこゝちしてなつとも見えぬつきのかげかな
能登　高森いち子

乙

ゆあみしてはしゐし居れば涼しくもこのまをもるゝなつの夕月
和泉　福原葦子

しげりあふ草の葉ごとに露みえてやどるもすゞしなつの夜の月
津　神田正子

月いてゝたへぬあつさも忘れけりいさはしゐして友とかたらん
薩摩　松原みれ子

ほとゝきすなきて入りにし夏山にかげなつかしくいでし月かも
秋田　古瀬惟子

かやりひのなびく軒はのはざくらに夏もを　ほろの月をみるかな
上野　飯田かつの子

みれど飽ぬ月たにあるをさよ更てほとゝきすさへをち歸りなく
東京　松川千代子

風わたるすみたの川に　ふれうけてやどれる月をくたくすゞしさ
東京　高橋翠子

月かげはなつの外にやゝどるらん風なき夜半もすゞしかりけり
東京　青木たま子

生しげるくさ葉のつゆのしらたまにやどるもすゞし夏のよの月

丙

（以下到着順）

夕立のはれて露けきくさのうへにやどるもすゞしなつのよの月
遠江　竹田みつ子

花とともに霞むとみしはきのふにて青葉すゞしくやどる月かな
東京　小坂みさを子

かされてもよるそすゞしきうすきぬに霜の色なる月もやどりて
東京　伊藤ふく子

ゆあみせしすゞしの袖に風見えて月もやどれるよはのすゞしさ
東京　伊藤竹子

月よみのかつらの露やかゝるらむすゞみのとこの袖そすゞしき
東京　小幡榮子

たか殿のをすのゆらきに風みえてすゞしきそふるなつのよの月
但馬　田尻保代子

草ふ木に吹く風よりもすゞしきはみそらに清きみぢか夜のつき
伊豫　岡田いの子

消えやらぬ葉山の露に　やどろかなくもまをもれしなつの夜の月
大阪　田中れん子

月に鳴くこもちからすときくほどにはや　明にけり夏のよのつき
東京　伊藤敏子

ほとゝきす横山松のひとこゑに　すゞしくのころありあけのつき
大阪　大道ゆり子

短か夜におそれの　里はたれならんひるのあつさを月にかたりて
岐阜　豊田ふゆ子

水枝さすわかばのこずえつゆみえて　涼しくやどるなつのよの月
伊豫　高橋芳子

ふく風にさゝなみたちてかげうつる　月にあつさもさるさはの池
奈良　天野照子

能登　中江よし子

ゆふ立のくまなくはれし海の上にすゞしくやどるなつのよの月
能登 金森かゆ子
あつさをも忘るゝはかり水よりもすゞしく澄める月のかけかな
東京 三村喜代子
露くさのすゞしく見ゆる夏野はら月さしいてゝかせそよくなり
東京 田島光子
夕たちのはれゆくみねの松の上にすゞしくいつるなつの夜の月
東京 上田玄子
あまりにも涼しき月のをしけれはまたもはしゐに夜を更しつる
伊豫 高橋かめよ子
面しろく月こそやとれあめすきし露のちまちだあをなみのうゑ
東京 山口琴子
うち水をそゝきし艸のはをしけみ涼しくやどるなつのよのつき
東京 田中千賀子
おはしまに涼しくむかふほともなくひかりおさまる夏の夜の月
埼玉 戸田折香子
みそらよりしつく落つる心地しててるかけすゞしなつの夜の月
東京 松本まつ子
おはしまによりて風まつ夏のよはすゞしのそてに月もやとりぬ
東京 入江きく子
うち水にくさはつゆけきなつのよのすゞしき庭にやとる月かな
福島 三森須磨子
みとりこき小田のいなはの夕つゆにもろくも宿るみちかよの月
河内 田中しす子
ゆあみしてはしゐしをれは涼しくも梧の葉そよき月は出にけり
松山 楠たけ子
わが庭にしけれる松の木の間よりもるかけすゞし夏のよのつき
松山 よし子
くひなゝく手町の小田に露みえてすゞしくやどる夏の夜のつき
金澤 北隆子
枇杷の實のくちなし色もこかれとそまかひて見ゆる夏の夜の月
埼玉 横田やな子
あつしとてひろはうとみし睦か屋の夏には庭のつきをみるかれ
肥後 德永萬壽子
短夜のあくるもしらてをはしまにすゞしきなつの月をみるかな
肥後 德永而有子
しけりあふ庭の若葉のかけきよくなかめすゞしきなつのよの月
肥後 德永旅子
夕かせをまちゐる窓にすゞしさをそへてそてらすなつのよの月
東京 星野千代子
折り〳〵にながめはあれどはつ夏の若葉をもるゝ月ぞおかしき
大坂 船越小仙子
ひんかしははやむらさきにあけ初ぬ眠氣に見ゆるみじか夜の月
神戸 花園戸淸子
おほきみのひかりをうくる武夫の異郷のそらになつのつき輝る
神戸 今西みさを子
夕たちはあとなく晴れて床草のしげみを照らすなつの夜のつき
群馬 林旅子
夕立もあとなくきえて月かけのさやかにてらすつゆのしらたま
石川 比古田君子
機張りて落ち來るたきのしら糸に織る月かげを見るそすゞしき
秋田 古瀬りく子
夏のよのふしもみしかき若たけの葉末のつゆにやどるつきかけ
秋田 細矢はる子
庭石のくほみにのこるうちみつにうつりてすゞしなつの夜の月
埼玉 町田勝子
大きみのみよこそいとゝたふとけれかやにさし添ふ夏の夜の月
下野 井上なほ子
ふけゆけば秋としおもふ夏のよのなかめあかぬにあくる月かな

夏の夜にあたなす雲のなかりせはいかにうれしく月を見るかな　埼玉　澤田房子

ましみつに宿れる月を眺めなれはみしかよまたき明そめにける　奥　和住千鶴子

袖かよふかせのすゝしくなりにけり　つきかけふみてわたる谷橋　大和　栗山俊子

なには潟しけれるあしのふしのまもあらて　短かき夏のよのつき　秋田　古瀬とよ子

蚊やり火のけふりも消えて賤が家の軒端すゝしき夏の夜のつき　伊賀　佐々木まさ子

日の熱さわするゝまゝにみる　月のみるまほとなくあくる夏の夜　東京　奈良春子

ふりもよき松のはこしにもる月のかけはことさら涼しかりけり　埼玉　柿沼福子

門に出てゝ涼みする間はさすつきの　影のみ庵のあるじなりけり　能登　杉下富美男子

はしゐしてをもはすふけし　夏のよの月にきこゆるとりの聲かな　津　神田みよし子

夕立のあめにとさしてまとのとを明てこそみれなつのよのつき　東京　増野やす子

そよとふくかせさへ松のこのまもる　影すゝしきなつの夜の月　和泉　中江なほ子

ほたるかりこゑもろともに　初田川ながれてはやき夏の夜のつき　肥後　佐々有隣子

さしあふらおこたるひまもあらなくに夏の夜をしてしらむ月影　東京　小林芳子

夕たちにたまりし庭のみづの面にさすかけすゝし夏の夜のつき　廣島　石井千代子

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　廣島　堂面千里子

永き日の暑さわするゝゆふ月夜かたふくまで　もなかめあかさむ　備後　田中操子

夏山のくさ葉のつゆのたまよりもきよくすゞしくわたるなつ月　能登　菅野貞子

あたらしきくさのいほりにつき落ちてふけゆくそらに杜鵑なく　東京　杉田繁子

こしたかけたとりてくみし山のゐに凍るばかりの月ぞやどれる　三河　山内睦子

たゝひとり見るそすゝしき浦なみのよするまきはの　夏のよの月　三河　金原ぬい子

あまのこがつきの光のさやけさに更くるもしらて貝ひろひつゝ　三河　榊原きく子

ゆふ立もあとなくはれてすゝしくも月かけ清くつゆにかゝやく　日向　岸上はる子

樓上のことの音やみてつきさゑてたちばなかほる　夏の夜半かな　肥後　佐々小夢子

夏の夜はふすかとすれはあかつきの　鐘もろともにあくる月かけ　東京　日暮郁子

わか竹は風にそよきてもちつきのまとにもれいる　影そすゞしき　長崎　松尾ますテ

螢のよのあつさもつきぬに忍はれてすゝしくてらす　夏の夜のつき　千葉　石橋たけ子

夕雨のすきにしあとのつゆのへに　かすみていてしなつのよの月　長野　田島みよ子

しけりあふ木立もりくる月かけは　夏もすゝしきこゝちこそすれ　愛知　榎本つな子

なつかはのなかれに浮ふ月かけのすゝしき光りいよゝすゝしき　信濃　羽入田常子

ますらをか清き光りを身にそへてけん　をまくらにもろこしの原

播磨　横田春枝子

かせゆたるのきのしのふのかけ舞ふて蚊遣にくすむ夏のよの月
石狩　笹乃雪子

石やくるひるの暑さにひきかへてまたなくすゝしなつの夜の月
紀伊　高池はくらむ子

ゆふたちのくものたえまにさしのほるかけもすゝしき短夜の月
岐阜　齊木まさを子

あめすきし庭のくさ木につゆみえてまたき秋なる月のすゝしさ
東京　岡田柳子

池もせにかけをうつせるうの花にてらすもすゝし夏のよのつき
三河　永井さい子

風わたる木々のわか葉の露かりてもりくる月のかけのすゝしさ
陸前　前田河千年子

池水にかけをやとせる月みれはひるのあつさもわすられにけり
能登　池野いさみ子

小夜更けて涼風そよくかはつらのやなぎ葉もるゝなつの夜の月
陸前　前田河みさを子

すみわたる月に心のうつろひてすこすともなく夜そふけにけり
東京　岩谷淺子

ことさらに磨きあけてもみゆるかな對馬わたりのなつの夜の月
東京　林環子

さらてたに短かき夜半をゆみはりの山の端さしていれる月かな
羽前　木村旬子

雨はれてこゝろも清くやまの端にすゝしくいつるなつの夜の月
愛媛　高橋茂子

やり水にうつれる月のかけきよみすゝしき庭にあふれけるかな
北見　中川伊代子

ゆふたちのなこりすゝしくいけ水にやとるもきよき夏のよの月
熊本　田代綾子

すゝしさは風はかりかは庭の面のわかはのつゆにやとる月かけ
東京　山田ふみ子

しけりあふまきの若葉のつゆもりて涼しくわたるなつの夜の月
大和　栗山たか子

木のかけのくさの葉ことにおくつゆに光すゝしく月そやとれる
伊豫　山本田鶴子

五月雨のはれしはかりのまつか枝にかゝるも涼しなつのよの月
愛媛　山本里美子

かはつなく小川のみつに月すみてなかれぬかけのさても涼しき
岐阜　中島もと子

かは風のなすふきかへすまにくもすゝしくもるゝ夏の夜の月
熊本　日高かす子

すゝしさもひかりも添ぬ夕かほのはなさくのきのなつの夜の月
東京　高橋珍子

ゆふ立のなこり涼しき木の間よりひかりもきよくいつる月かけ
神奈川　森田はな子

賤家ののきはさしいろつきかけのかやりの烟にかすみてそみゆ
備後　片山松子

手にむすふ池のしみつにうつらひてみるも涼しき夏のよのつき
東京　瀬藤ちよ子

汀なるやなぎの糸のまねくらむあかれる夏のつきそすゝしき
兵庫　山内初榮子

百千たにたきりてめくる岩しみつはこしにてらす月のすゝしさ
兵庫　山内初榮子

心から涼しくもみるか夏の夜のしみつにやとるつきのおもかけ
大分　西野つれ子

あめやみて門田の稲葉におくつゆにひかりも清きなつの夜の月
岩代　菅野和子

ゆふ立のあめはくまなくはれ行てあをはなすへる夏のよのつき

れやのうちにさしいる月の涼しさに夏なきよはと思ひけるかな　三重　茨木みす子

魚

天

たまかはのあさせをのほる若鮎も
雲ゐにめさるさちもありけり　秋田縣羽後國由利郡本荘町谷山小路　細矢はる子

地

たまかはのなかれを引きしいけ水に
けさ嬉しくもあそふ若鮎　東京市青山南町七ノ二　森千里子

人

さだめなくかはるふちせの川よどに
うきしづみても遊ぶ魚かな　薩摩國伊佐郡山野村字布計　松原みね

甲

夏川のなかる〻みつのきよければひれふる魚のかけもみえけり　和泉　篠原菫子

おきわたす霜かとみえて庭もせを照すもす〻しなつの夜のつき　松山　山崎匡子

乙

池水にすめる魚たに日さかりは木かけもとめてむれつとひけり　陸前　前田河千年子

瀬つせをうへにのほりてゆく見れは淵にひそみし鮎としもなし　東京　伊藤竹子

ひれふりて早瀬をのほるしはらくは魚のこゝろも涼しかるらん　岐阜　青木まさを子

うなゐらかなけしおものを打集ひあらそふ魚のおもしろきかな　東京　林瓊子

丙

（以下到着順）

みなそこにひそみし魚もひれふりて游ふ比とも成りにけるかな　静岡　竹内みつ子

はやかはのせゝに若鮎ののほるとき里のおきなの笑はひらきぬ　東京　星野千代子

人ならははなの乙女のわか鮎か瀬をのほりゆくすかた雄々しも　大阪　船越小仙子

なつなれや池のほとりにうなとりのたもとかゝけし姉弟も見ゆ　神戸　花園戸清子

幸なくもなとなけくへき魚の子の浮世のあみにかゝる世なれは　神戸　今西みさを子

さしのそく清き小川にかす知れぬむつへる魚のすかたあいらし　群馬　林ひろ子

菊の池の波にあそへる魚みてもむかしのかけのしのはるゝかな　肥後　徳永萬壽子

池水にあそへる鯉はひとなれてうえをもとむるさまのをかしさ　肥後　徳永而有子

海ばらに舟こぎみれはかすしれす名をたにしらぬ魚そおそへる　肥後　徳永廣子

木のま行くなかれすゞしき里川にあつさ知らすの魚あそふなり　石狩　岱の雪子

愛知　後藤のぶ子
たのしげにのほりてはまた下りつゝひれふり遊ふ河のいろくつ
河内　田中たまの子
猿澤のいけのいろくす手をうてはきよるはかりに人なれにけり
三重　茨木みす子
わたの原底さすみかの魚すらもうき世のあみにかゝるはかなさ
津　神田正子
いさましく竄り登たかしけふのいち魚のゑものや多くあるらん
長野　田島みよ子
海神をおのかすみ家となす魚もうき世のあみはのがれざりけり
愛知　榎本つな子
わかいほのこかけ流るゝきよみづに楽しく遊ふ小魚つみなき
下野　井上なほ子
あひきするあまの子おほしいせの海魚のかず〳〵山やなさなん
埼玉　澤田房子
骨身をはくたきてのちもかつふしともて囃さるゝ初かつ魚かな
呉　和住千鶴子
おほ海をわかものとしてすむ魚のゆきつ歸りつひれをふるみゆ
秋田　古瀬とよ子
浮くさのかくれのいけにすむ魚もよにはうきせのあるよなり鳧
伊賀　佐々木まさ子
みつきよく波もしつけき池に住む魚はふち瀬も知らであるらむ
津　神田みよし子
なにことも習ひなるかな池にすむ魚もうつ手につとひきにけり
東京　奈良はる子
時しらす水にすむてふいをもまた夏こそいとゝすみよかるらめ
埼玉　柿沼福子
さゝなみのしつかによする岸のへに小さき魚のむれてあそへり
能登　杉下富美男子

ふえ吹きていそ邊をあるくおほろ夜を瀬にとらふゝ漁舟のうた
埼玉　横田次磨子
里長か庭になかるゝいさらかはいさこもきよく小ふなよるなり
埼玉　横田やな子
たまかはの水かみとほくやなうちてあゆの貢のときは來にけり
東京　奈良たく子
さゝ波のまに〳〵うきつしつみつゝ遊ふ魚こそうれしかるらめ
大和　栗山高子
あみの目をもれてのかれし櫻たいいまこそ濱にうきていてけれ
肥前　藤松りか子
うなゐ子かうちこむあみをのかれ出て沖つ波間におどる魚かな
愛媛　さゆり子
流にはゆるき里の小かはに若鮎ののぼりくたりつすみよかるらむ
愛媛　せき子
そこひ深くさなから見ゆる池にすむ魚のこゝろや清けかるらむ
愛媛　薫子
つりたれしおきなかへれる川すそにこゝろありけにあそふ若鮎
愛媛　美雪子
池水にはなちてもみむうない子かつゝみにのこすあわれ小魚を
和泉　中江直子
波のそこくゝるすかたも水雷のそれかと見へていさましきかな
肥後　佐々小峯子
黄金いろの魚こそおどれ朝日かげさして匂へるいけのなぎさに
名古屋　木下鶴子
世を易くうき沈みするいけみつの魚のこゝろやたのしかるらむ
東京　小林芳子
さひしさのまくらにちかくきく音は池の水面にこひおとるらむ
秋田　古瀬惟子
いろくつをおのか幸〳〵もちわけておきよりかへるあまの釣舟

大みけにつかへまつるとあまのこもいとなくあさるはたの廣物
東京 松田繁子

そこ清きにはの池にもすみなれてひれふる魚のあひらしきかな
愛知 三河賤子

水の中をいとたのしげにおよきつろうをやいかなる心なるらん
三河 榊原きく子

耶びとかちときあげてわたりゆくかは瀬の魚もおとりてそとぶ
肥後 佐々有鄰子

谷川のまろ木のはしを過ぎくればあしもと近くたうをとぶなり
日向 岸上はろ子

すみなれてともにそだちし池水にあそべる魚のむつましきかな
東京 日詻郁子

夏くればみろめもすゝし池水にぴこぴくろこぴ ぴれふりあそふ
熊本 田代綾子

水にすむ魚もいて湯に遊ふなり身はならはしのものにもある哉
東京 山田ふみ子

うちむれてひれふろ魚のやさしさよなのか日ころの心ともかな
和歌 山本里美子

かはそこに济ううつりし藤なみのかげをみたして魚のぼりゆく
茨城 西野春萩子

餌にはりのあるともしらてあせろらむ魚の心そあはれなりける
岐阜 中島もと子

わたつみも細谷川もうろくつのうきしつむ瀬はある世なりけり
熊本 日高かす子

名もしらぬ魚のかずかず集めきてみやこの瀞にみるそうれしき
東京 高橋珍子

やしなはずまかず野さず耕はずさはの おものをみつく魚かな
東京 高橋なよ子

岩代 菅野和子

おぢ君がつりにふけりし其むかしおもひて なれは魚むれあそぶ
三河 永井さい子

おく山のたにの小川のいろくつはうき瀬もしらすすみ渡るらん
東京 岩谷あさ子

せをはやみ岩にせかれてみゆるかな鮎さかのぼるいでのたま川
陸前 前田河みさを子

魚たにも身をすてひとを結すふん人とうまれて みちやたがへん
東京 林艶子

水清みそこさへみゆるをがはにはなとてか魚のすまずなりけむ
長崎 松尾ますゞ子

つりふれにまひのほりける魚みればあはれも深きわたつみの原
東京 後藤喜代子

すみた川きよきながれをいさましくさゝ波たてゝあそふ魚かな
東京 佐野ふき子

めせめせとあふごになひて初かつをなびさぐ聲こそ高くきこゆれ
名古屋 近藤卓子

水きよく澄めるをがはのそのなかにあそべる魚のかげ二つ三つ
東京 山口琴子

うなはらのくしらの魚も おほ君のみつきの爲にうきいてぬらむ
能登 栗倉ふみを子

雨晴れて夕日てりそふいけの面にすゞしくなどろうを二つ三つ
埼玉 町田勝子

あすかがはふちせと替る世のなかに水と魚とのましはりもある
福島 三森須磨子

聲たてゝなぎさにかへるいざり舟かずもしられぬ魚をつむなり
東京 入江きく子

水きよき池にあさりし鯉ふなをおやのゆふげのみさかなにせん
瀧の川 松本まつ子

のとかなるみよやうれしき池水にむれゐる鯉のうきてひれふる

華族女學校教授 井上頼國先生撰

郭公を聞く

地

東京府北豐島郡日暮里村元金杉百四十三番地 淺野はる子

別れし花を戀ひ、鶯の行へを惜しみつる間にいつしか、垣の卯の花眞白に匂ひ出で軒端の花橘そこはかとなくかをりてそゞろに、昔を忍ぶ頃とはなりぬ。此の夕只管、待たるゝは、郭公になむ、いかで、今年は初音をきゝてむと、宵々に、待ちわぶる甲斐もなう、まだ、忍び音だに、洩らさぬぞ、口惜しき。今宵は朝よりの雨も名殘りなう晴れ渡りて樹々の梢いとすがすがしきに、弓張の月さへ、ほのめきたるえもいはず、かゝる、清き夜には、如何に、郭公とて、初音忍びあへむ、など、ひとりごちつゝ、端居して耳傾け居る程に、あな嬉し、一聲高く、月に名のりけるよ「あはれ、今一聲もがな」とおもほへど、いづち、去りけむ、姿も、影も見えず、唯、冴えに、さえたる月影のみぞ、殘れる。とかくする程に、四更の鐘の音響くに、いざ、臥床に入らんとはせしが「きかでたゞ、寢なましものを」と、いひけん人の、そゞろ忍ばれて一聲のなつかしさ、中々に、忘れ難ければ、やがて、燈火、かきたてゝ、かくは物しつ。

評 意到り筆隨ふ

地

東京下谷上野公園內時鐘堂傍 杉田繁子

庭の橘も、いつしか花散りて、實さへ玉にぬくべう、なれるをまだ、郭公の一聲もおとづれぬは、つれなの鳥やと、空のみながめくらすに、隅田川のほとりに、なりどころもたる人のもとより、此程、庭に水せき入れて、涼しき木陰に、夜がれなく、郭公のなき渡れば、せちにものし給へと、消息に、かぎりなくう

れしくて、夕つかたよりゆく。堤の櫻の若葉、風にかほりて、床しきに、泊る、川船より、灯のもるゝもゑんなる詠なり。言問のわたりにてふと、道にふみ迷ひ、こうじはてけるをりに、桑つめる少女の、たどりゆくに、道教へよとこへば、すなはち、指てをしふるかたを見やるをりしも、めづらかなるこゑにて、

木下やみまよへる道のしるべにと
わがさきおひてゆくほとゝぎす

猶も、きかまほしう思へど、いづちいにけむ、たゞ、西の空に、三日月のほのめくのみ。

評　また涙また涙

人

播磨國加西郡西横田村　横田春枝子

四方の山々は、夏の衣とつけかへて、緑の色こく、宇治の里にも、茶摘の歌まばらなれば、郭公の初音きくもとほからじと、京の友よりのおとづれに、氣もそゞろ、いかでと、まけじ心に、いぎたなくも、夜な夜ないもやすく寢ねず。枕にのみ心して、待ち侘ぶれど、はかなくもまだ一こゑの、忍びねだに洩さねば待つ身につらきと云ひけむ、言の葉も、しのばれて、いと口惜しくおぼえつゝも、一夜二夜を過しつ。月のかくる迄はと、弱らでありしかひありてや、ある夜の曉に、うれしき夢のあとおひて、うつゝにねむる閨の戸近う、耳元にさしあてたらむように、一聲高く打鳴くに、さてはと枕おしやり居直れば、又二聲三聲、こたびは遠くさやかに、あまりの床しさに、涙もこぼれつべくなりて、故人がよみし歌の心など、さまざま胸に浮びいで、思ふ事なき身も、ひきしまるようなるに、ふしどにも得あらず、妻戸押しあくれば舊暦二十三夜の曉月清うすみて、片端にかゝる横雲白く、木々のかげ、地に墨繪をゑがきて、垣根の卯の花ひるよりも白く見え、花橘のそこはかとなく香りてえならぬ景色なるに、よべ繙きし、古き詩集の時鳥の巻に、思ひ合されて、あかず眺むるあなたの空に、小さき鳥一ッ、月をかすめて、さて過ぎゆきけむ跡

もなし。今一聲もがなと思へど、只青葉を渡る風に、眞玉ときらめく露に、はら〳〵と、散る音たかく、月に聲なき夜とはなりぬ。

評　趣掬すべし

秀逸

尾道　片山松子

しがらみもかきあへぬ月日のみ早う流れ行き霞のとばり花の錦のやよひの春も暮れ果てゝ今はた青葉のみ己が世とはびこりゆく今日此頃をまして天離る片山里の淋しさは一きはにこそ埴生の宿に訪ふ人とてもなくたゞ〳〵水鷄の聲のしきれるも物思ふ身にはいよ〳〵哀をますのみなりけり。今日は朝より打曇りて、晴れもやらず、さりとて降りもせでいとゞ心地すぐれねば、常より早く床に入りぬ。されどなか〳〵にあつかはしくて、眠られぬまゝ、再び枕を離れて、暫し綠の陰に涼まんと、垣根のあたりさまよひぬ。折しも今や谷の戸を出でけるにや後の山にて二聲三聲郭公鳴き渡りぬ。覺えずあなと叫びて、御空高くふりさけ見たれど、早何處に行けん、影だに見えざりき。やよ郭公夜毎待ちわびし初音漏らせし嬉しさに今一聲をと思へどもすべもなしされど〳〵今の一聲は折々聞きゝし聲と異りいとゞ哀にいひしらぬ悲う聞えしは如何なる故にかなべて此處等の住む里の淋しき爲かはた夜の更けし故にかあらじうしと聞き面白しと聞くも皆已がしゞ聞く人の心々になんありける。

評　眞情かれ至る

竹のふし

群馬

小止みなく降り續く五月雨の空未だはれやらぬにや軒の玉水物憂げにしたゝる音の枕に響き寢ねられぬ儘何思ふとしもなく啼音せはしき蛙の聲に耳奪はれし折しも絹や裂くらん一聲に夢よりさめし心地しぬ如何なる鳥の悲鳴ぞやあはれ血に啼く郭公、いと物凄し、そも人の心は樣々に、時の境遇に從ひ、月にも嘆き

花にも啣つとかや、實に宜なりかし、思ひ回せば十年の昔、母君と伊香保に湯浴みせし折、かの物聞山のほとりにて、聞きつる郭公の聲は、嬉しくもおかしくて、里の子と「母様チョト來て聞きなされ」等、調面白く眞似びつゝ、旅の徒然を慰めき。さるを母君には常になくはれの面もちして「あゝ淋し」とのたまひしは、いといぶかしと思ひき。あはれ其昔忍べとてか、今の一聲は、如何に淋しくも悲しく響きしぞ。あゝ今母君なし歸らぬ旅に只一人行き給ひしなり、歸るに如かずと啼き行く郭公の中々に羨ましくぞある、いつしか戸のひまより月かげ淡くさし入りて小田には蛙の聲もなし。

評 情緒纏綿

三河　左右木増惠子

日頃いぶせくのみ、眺め渡りつる空、夕べの程より、晴れ初め、月さへさし出たるが、名殘おぼゆる軒の雫にきらめきあへる、げに玉をつらねたらん樣にて、前栽の若葉の梢も、いとなまめかしう、風さへ能き程に、吹き出たるなど、實にたゞならぬ夜の樣なりけり。かゝる折しも、郭公などの、啼き出たらんには、いかばかり、心ゆくわざならめやと、一聲だにも聞まほしうて、端近う物す。さるに心なき、鳥はかすかにだに、おとづれもせず。今は月も傾かんとするに、口惜しさやらん方なし。あはれ我宿花橘などゆかしきかほりもなく又卯の花も、垣根に咲き出ねば、こぬにやとかこつ。折しもあれたゞ耳もとにさしあてたらん樣に啼て過ぬるうれしとも、嬉しうなん。

紀伊　樋口はつ子

卯月の初めつ方より、まだしき聲をこそと、待ち渡りて、今は寢ぬ夜の數も、双方の手には餘りつ。今宵は村雨の空おぼつかなく、青葉をゆるぐ風さへ、異に見ゆるに、斯る夜半こそと、覺ゆれど、如何にせん、あやにくに、眠けさして得堪へず。鳴かば直ちにと、まろねしたれど、いぎたなくて、現なになりぬ。

かくて夜明け方とおぼしき頃、其れかあらぬか、

能登　池野いさみ子

ほのかに鳴き渡るなる聲するに、いそぎ板戸押しわくれば、又も一聲。

餘りの名殘惜しさに、裏井の方を眺むれば、有明の月影かたぶきて、あたりの景色、見なれし身にも何、珍らしく、暫しは塵の浮世を、逃れし心地しぬ。

吹きくる風の何となく、腥さく覺ゆるにぞ、見渡せば此處は淋びしき野なりなり。螭魅罔兩も露れいでんずらん、荒凉として果てしもあらぬ樣、月なく星なく只暗きに、腥き風の習々として一しきり、オ、此處は戰ひの野なり!

とばかり打ち驚きて、見渡せば、矢玉の響きたへたるは、今し方なるべし。軟吹く風に、血の香、冷う流れて、こゝに折れたる刄、小銃、かしこに累々たる屍!慄然としておのゝきたる其の刹那、人の影忽然としてあらはれたり、我は思はず叫びぬ。オ、兄上!

一兵卒なれ共、銃をひつさげたる其姿、英風凛々として、而も嫣然として微笑めり。オ、兄上!、駈けんとすれば夢は醒めたり。

殘月ほの白く、幽かなる小窓に映りて、夜色沈々、亡き兄上が夢醒めて愁腸轉た切なるに、血を吐くごとき杜鵑の一聲、悽惋として、森の梢より聞えぬ。

やよ杜鵑よそも何が故に汝の聲はしかく悲しきよ哀なるよ、汝はかの悲壯なる戰ひの野に於ても、しかく悲しき聲たてゝなくかやよ杜鵑よ、さんぬる某月某日の夜實に奉天攻撃の際なりき、阿修羅の如く奮戰又奮戰、突撃又突撃、遂に名譽の戰死をせし我が兄上の息絶へし其刹那、如何に悲しき聲たてゝ叫びしか、やよ杜鵑よ!さても思ひで多きなれが聲かな。

主をはなれた劍の鬼が
月にさけぶか杜鵑

折しもあれ又もや血になく一聲月の影や

▲投稿諸嬢に告ぐ

近来本欄に投稿せらるゝ方の益々多くなりましたのは何より悦ばしい事でムいますが随つて投稿規定を守らない方の少なくないのには取扱上甚だ閉口の次第でムいますから左に例を擧げて御注意申します

一葉書又は半罫紙を用うる場合には一枚に付一首を認むべき筈なれば異りたる題の和歌を二首以上同一の紙に認むるは宜しからざる事

一文章は一行必ず十五字の定めなれば之を守らるべきは勿論一枚の行數をも二十行とせられたき事

一姓名住所は葉書にても半切紙にても必ず題の下に記さるべき事

一匿名又は雅名を用ゆることは大家先生に向つて添削を乞ふ道にあらず必ず慎まるべきことなり且つ當選したる時に賞品の宛名に困ることあれば必ず住所姓名を明記せらるべき事

一其他投稿規定を熟覧せらるべき事

右に違ひたる時は選抜の榮を受くべきものも選抜せられざることあるのみならず沒書となりて登載洩れとなることもあると御承知を乞ふ

や薄暗ふなりぬ。

岡山　小山松枝子

緑したゝる木かげをわが宿と心をやりしも、ふり續く梅雨のいぶせさ、軒の玉水よりほか、音なうものもなく、わびしきまゝ夜に入りて、一人孤燈の下に書ひもときて、見ぬ世の人のゆかしさこひしさ深くあこがれつゝあるほど、ふと耳を驚かししは郭公の一聲いとうれしく窓おしあけて仰げどかたちもかげも見えぬぞ口惜しき。折しもやみをやぶりて又二聲三聲いづこの空へ、いそくらん次第にかすかになりぬ。

あはれこの鳥よ、みやびの人は、初音きかんと山路にわけ入り、あるは夜をあかし、日を重ねつゝ詩歌の友とせり。されど心なき身にも、ゆくりなくあいきようつきたる聲のめづらしきに、むすほれし胸もはるゝやう、何となくなつかしくて、うち出れば、雨はいつしかやみて何の音もなくたゞ卯の花かげのみ淡く殘れり。

東京　岡田柳子

世ばなれたる山里の友より、ふりはへて、文おこせぬ。

昨日けふ垣の卯の花、白妙に咲き匂ひ、昔を偲ぶてふ花橘も、懐かしう吹き通ふ風に薫りくれば、待ち渡る郭公の初音聞かむも、遠かるまじうこそ覺え侍れ、いでや一聲もらさぬ先にと驚し侍るを、とくとくおはしませとあり。

待ちつけし初音、聞きしにも増りて、嬉しさたへ難う、とる物もとりあへず、友がりおとなひぬ。嬉しうも月の影さす柴折戸は開かれつ。庭の橘も心ありげに匂ひきて、我をまつらんものゝ如く、床しといふも中々なりや。哀れ心つくして、云ひやりし甲斐には、ふりはへてとひ來し甲斐にはいかでまたじき程の聲をだに、聞かせよかしと互に願ふ程に、短夜は早更けゆきて、照らせる月影も既に〳〵失せなんとす。噫如何にしけんと待てども〳〵さるけはひだになし。今は中々に恨みん言葉も、つきはてゝ、思ふ思ひも絶えぬる折柄、夢か現か遠方にて、一聲かすかに名のりて過ぎつるあなやと空を打見やれば、今度はいと〳〵さやかに、鳴音もらせる、嬉しさ云ひ知らず。友も我も

暫しは、夢中の心地しぬ。さるにても招かせられし君なくば、此初聲も、人傳ならではきき難かりけむをと、今更に友の恵の、身にしみてなむ。

大分　西野つね子

五月の名殘の露をやどせる青葉を渡る風のなつかしう、垣根の卯の花匂ひゆかしき此の頃、待たる者は郭公ぞかし。年毎に人づてにのみ聞きつれば今年こそはいづちにか、と念ずる程に、友の許よりの玉章來りぬ。いそぎ開き見れば、浦島が子の、玉手箱ならて、よべ初音聞きつ、み車まけ給へとの言葉に、時をも移さず、用意して出ぬ。彼の地は名高き宇佐の宮の鎮座の地にて、神さびたる森立茂り、後には萬年草山高く聳え、清く大きなる河、其の下を流る、友の住家は、其の峯に在り。つきたるは夕日舂つく頃なりき。やがて夕げなどすまし、友と早苗の小田のわたりをそぞろ歩きしつ待ちわぶれど、今宵は如何はしけむ、忍び音だに洩らさず。聞こゆる者は、夜半の鐘のみなり。あゝ妬き鳥かな、夜もふけぬれは、寝給へと、友はいへど、猶も心殘り、しばしゐして月影をのみ眺めゐたるに、はては眠氣の耐へ難く、恨らめしけれど、寝なむと窓の戸閉す折しもあれ、耳元近く鳴きてすぎぬあな嬉し日頃の願ひ初めてかなひぬ、やよ時鳥いかに、今年は我里にも鳴けかし。父母君にも聞かせまほしきにと呼べど、いづち行きけん、唯有明の月のみぞ。

兵庫　山内初峯

花の白雪散り果てゝ、また胡蝶の夢のさめやらぬに、遠近の山々は緑の若葉につゝまれ、垣根の卯の花白う咲き、深山を出でゝ名のる時鳥を待ち顔なるたそがれ、縁に端居して、夕景を眺め居し身は、心ともなく歩み始めぬ、そよ／＼と吹く夜風に、薄き袂をはらませ、道の邊の名もなき草に宿れる白露をわけつゝ、いつか眺め涼しき磯邊に至りぬ。三五の月はくまなく冴えて、打よするさゝ浪に、光を増すなど、云ひ得ぬ風情なり。嗚呼思へば涙の種なるか、去歳の此頃は、互に手を連ねて、親しく語らひし友は、此の世を去り玉ふ、打よする浪は、かへせども、歸らぬは懐かしき、友の面かげなり、折柄月をかすめて啼く郭公、かれ

何をかなしみて啼くにやわらん、妾の心を推して
か、はた亦遠征の君を偲びてか。

能登　金森かの系子

よべは月明かなるものから、いで〻今年はと初音をのみ待ちわびたる心盡もしらずや、忍び音をだに露もらさぬことのいと口惜しく、若葉の風心地よくたち花の色はかなくかをりて、たゞならぬに端近く出で〻、まてどゝつれなし。こよひもきかで明なんにや。待たて聞きつるなといひしもあればねやに入りてまちぬ。

夢はいづこにかよひけん！

けさほのかに告げわたる頃、夢さむ。さてもうつつならましかばと、一人ごしつ〻恨みける程、ききしりかほに二聲三聲なきいでたる、去年のふる聲ともおほえずいとうれし。

下野　井上喬子

うた〻ねの夢醒めて、窓を推せば、月一輪雨中に綠を増せし松の上に宿り、垣の花橘の香、窓の邊に迫りきぬ。たま〳〵一聲さやかに啼きて、月につばさのかゝりし樣に見えてさながら繪のやうなる、此ぞ郭公を知りし、なく音、雲を破りて又雲に入り、次第に遠ざかり、すがたはみえずなりぬ。今やいづこの里に、初音洩して過ぎ行くや、一聲々々身をしぼりて、絹裂く如き聲は、人をして寂寞悲愁のふちに立たしむ。一こえだに耳にせし人の、唯徒にき〻すごすべき。去年ほと〻ぎすきかまほしうて、病めるいろひあらできくよしもなく、程近き乳母が里に、いく夜枕のちり拂へつ〻、まつかねと共に、歌二つ三つを土産に歸りにき何となく淋しき今宵、はしなくも啼く音耳にして、去年のこと思ひ出でられ、いとゞうさの增りけり。苔の下に埋ろ〻人に郭公一こえいかにしてきこえまゐらすべき、實に罪多き郭公なるよ。

あはれ今よひほと〻ぎすき〻て、愛さます人われのみかは、一しきり吹く風袖を拂ふて、机上の燈火消えんとして消えやらず。庭の松が枝に、月をやどせる白露、ほろ〳〵とこぼれぬ。

愛媛　山本里美子

日數忘る〻ばかりふりつゞきし雨、今しおとなく晴れて、たちばなの馨、したゝるばかり涼しき折柄、雨後の月、山の端をはなれて、松の葉ごしに、さしのぼる景氣、いとなかしきに、思ひきや、郭公の初音なのりいでんとは、あまりの嬉しさに、まづ窓の戸をしひらくに、はれ渡りし深空の、いつしかかきくもりて、其姿見んよしもなきぞ、名殘りなし、いかで、今一聲もがなと、またる〻に、あはれかひなく、また一しきり、ふり出でし五月雨、曉までもまちなば、もしや聞かる〻、こともやと、はしゐすれば、萬感胸にみちて、あるは、出征の士を思ひ、あるは亡夫のたま、きつる友を思ふ、折しもあれ、一聲、軒端をすぎて燈かすかにまたゝきて、嗚呼また、郭公の二聲三聲、げに腸ちぎれ、物思はするは、此怪鳥なるかな。

能登　杉下　富美男子

ふる五月雨の絲よりも細う、色褪せし垣根の卯の化、いと哀れに月影にほの見ゆるに、今はた脊葉の陰に郭公をきく。げに淋しき

夕なりや。妾はえもいはの悲しさをおぼえつ。あはれ思ひ出づるは、去年の初夏、戀子の君と觀音山に遊びし時よ。青葉の陰に三日月ほのめきて、例の橘薫りくる夕まぐれ、郭公のさやかに名のりいでたるをきゝて、いみじう嬉しう、うたなどよみてかたみに興じぬ。あゝ其時なりしよ。いく世變らぬはらからの……妾は、御身の姉君とぞ仰ぎ待るなる。——明けん年はもろともに、あづまの都に學ばんとこそ誓ひの言葉、口そゝぐ間も忘れでは侍らざりしに、あゝ天は何の恩ありてか、この温き交りを絶たしめて、妾をこの山中にさすらはしめしぞ。あゝ誰か云ひそめしうき世とは思ふにまかせぬことのみ待るかなと。あはれ樂しき觀音山の逍遥も、今は小袖をしぼる一場の昔夢とはなり待りぬ。あはれ戀しき友は、今いづくの地におはすらん。

さはれ、戀子の君。花のあした、月のゆふべ、學びの窓のたりをりは、觀音山に郭公をきゝし昔を偲ばせ給ひて、くれ〴〵も故郷の野べな忘れ給ひそ。そこには人こそ知られかりかれの渡り行く空眺めては淋しうも涙に聲す一人の少女あるを。夜はいたく更けたるらし、妾は去らむとして、二足三足力無う歩み出せば、又もあはれに郭公のなきぬ。あはれ郭公よ情あらば、妾の心を他山の空におはす彼の友につげてよ。

東京　岡田ちか子

濃く濃く、綠にそめし夏木立も、夕暮れよりは、一様に、うす墨にてゑがきたらんやう、梢をはらふ、夕風は、花橘を薫らせて、ゆるゆる我窓に、通ひきぬ。あゝ、懐しき、其かほりよ、さるにても、思ひ出でらるゝは、わが古里なりけり。我植ゑし、軒の花橘、今やま盛りと咲き匂ふらん、たらちねの母君、はらからには、いかに床しと、眺めさせ給ふらん、眺めまして、いかに、物思ひやし給ふらん、など、遙に、忍ばるゝ折柄、なつかしともなつかしき、母君よりの玉章は、我手に落ちぬ。嬉しさいひしらず、とりもあへず、よみもてゆけば、いつもながら、細かに、教へ諭し給へる、さらぬだに、戀しく、懐しき母君のみもと、飛びもゆかまほしう、鳥ならねども、翼もがなと、そゞろに恨めしう、故郷の、空のみ、打仰ぐ折しもあれ、山時鳥の、なくれさやかに名のりいでたるこそ、いみじう哀れを、催さるれ。あゝ、時鳥よ、斯くまでこふる、我心を知るやいかに。ふりはつて來なきし今宵は、踏げにだに、姿みせてよ、さらば故郷の景色、思ひいづるよすがにもなりなん、と打みれば、はや、影だになく、たゞ、雲間をもるゝ月影の、さしわたるなりけり。あはれ、血になく其こゑを、いかにきくらん、故郷の母。

伊賀　佐々木まさ子

日毎に茂る青葉の影に、木の下道も小暗うなり行き、梢にわたる朝の風も、いと涼しうて、何となう若やぎたらむやうにて、打ちはへて我山里のきのふけふのさま、あはれ都の人に告げやらばやさるにても今年の時鳥のなぞおそきことよ、花橘こそなけれ、とく一聲名のれかしなど、かこちつゝも雨の夕、となりの友垣訪ひて四方の物語の末、この鳥のうはさも出で互に待ちわびて、夜もふけぬれは、いざまからむと立てる、折しもあれ、ゆくりなく一聲なのれる初時鳥あるは、ひが聞きにはあらじかなど、論ひつゝも表に出づれば、村雨の空やう〳〵晴れて、山の端出づる月の光もいと清し、折から又も聞ゆる二聲三聲に、さては前のも誤ならざりしよ、あはれ我里を過ぎがてにしも、せざりし心のやさしさよなど思ひ浮べし時のうれしさ、なか〳〵に忘れ難うなむ。

東京　星野千代子

あはれ本年も例の初音、聞き給ひしか、山里の住居もかゝる折こそはと、ほう笑まれてなん、軒端に近き卯の花の、匂ひそめてより、村雨のかゝる夕なぞ、時鳥の鳴きしきり侍りつるをと、さる友よりは、訪れ來ぬ、さらぬだに、都ながらも、場末なる程なれば、——五月待ち得て、未だしきほどの聲もがなと、ゆかしき折

にこそあれ、最とゞ懐さの加はりぬれば、斯くてよりまどろまぬ夜も、いとゞ多かり。今夜はまして眠られねば、枕押しやりて、はかなき頼みに身を鎮め、耳そばたて、待たるれば芝生に交ちる照礎のそよぎにだに、心置かれたり。漸々板戸の隙洩る影の、明くなりぬるにぞ、やをら起き上り、雨戸押し開くれば、有明月の、いとおかしう、所狭き庭の、木立さへ、めづらかなる心地するに、譲葉のうら若きがなつかしき程に、打ち匂ひたる置き餘る露の、しづくの、玉と亂るゝなど得も云はずかし。

ほの〳〵と明け行く空は、緑の薄絹引きはえたらんやう、鏡の如く照り添ひて、行衛も知らず、戀しさに打ち眺めらる。折しも彼方の森の小暗きあたりに、ほの名乘り初むる一聲、それかあらぬか、ゆかしの聲よ、やよ時鳥、心しあらば、など此月を惜まざる。汝も亦吾にはつれなき者――なるか。しこほとゝぎす、今よりは、悪くき數にも、入れつべし、など、心もいらちて、月の顔ふづと打ち守りぬ。時しもあれ、此一瞬時、何所よりか、月をかすめて、さやかなる聲音、ゆかしき其姿の、耳にいとゞ響きて、あはれしはしと見出せば、窓の燈火いと白くねほうれたるか、鳥の聲かとばかり、二聲三聲きこゆれば、

あはれさを誰にかこたん時鳥
　　ゆめの中なるあはれ其聲

岩代　菅野和子

高嶺は、早や雨雲に蔽はれしと見る間に、村里は、東の方より時雨降り來りぬ。慌たゞしう農具擔ぎ蓌逆さまに被りて、家路につく者もあり。あはれにも濡れて、頼寄るべき木陰もなければ、自暴の歌、高らかに謠ひ行く馬方もあり。此雨に逢ひし二人の少女子は、姉妹にや、今日一日を睦ましき野遊びに送らんとせしならん、手に手に春の名殘りの山吹、躑躅を持ちたり。色褪せては居れど、二人の元氣はいやまされり。

我身に比べて、むかし幼な遊びの折々を偲びては、去年の此頃我

を棄て給ひて逝きにし君、嗚夏江の君を思ひ浮べ、後より名呼ばれたる心地しては、立留りて泣きぬ。

彼の君の殊に愛でし花は……。オヽ花の頃はいつも散歩を缺かざりき。

世の人の、多くは櫻、菫、に心うかれて、鮮かなる山吹を寵せぬと歎かれ、可惜、黄金の色を山川の水に流すを惜まれて、一抱手折りし彼日は、忘れんとして、忘られじ、まして花の咲かぬ時はなきものを。

雨はやみぬ。されども、ぬれぬ所とてはなかりき。慮みの親よりなつかしき夏江の君を思ひては、傘も用をなさゞりき。

遅々の歩みは思出多ければ、急ぎに急ぐ、足踏の音にうたがひし一聲！アヽほとゝぎす一聲々。逝きにし人の靈魂郭公となりて天を翔らば、彼鳥は我友か、打仰げば五月雨蕭々としてふりしきる。

能登　高森はじめ子

あらまアなんて綺麗な月だ事子エ、アレ彼處の杉に懸る月の懸ッた處なんか、恰と繪を見る樣だわ、あらッ、郭公の聲が聞えてよ、そう貴孃今初めて、そうか不知都ッてば そんなに稀なの、あら又鳴いて!!イーエ私度々聞くのよ、でも何んですわ貴孃の樣に稀に聞く方がどんなに床しいかしらん。…………私子エ此聲を聞く度に亡くなれた峰子さんの事が思ひ出るの、エヽ私のお友達なの其方が、郭公の、聲を一等好きだッて、いつも此頃になると二人で此處へ來たの、そしては御歌なども詠まれたのよ、私なんかとても及ばないわ、それで郭公の聲を聞く度毎う言ふの「其方を可愛がられた峰子さんは、早や此世には御出ぬから此處ばかりに鳴かづと峰子さんの御出る極樂とかへも行ッて其方が清い聲を聞かせ申してくれよ」ッて、ホ……知らぬ者が聞くと氣違ひだッて思ふわ子エ……あら又鳴いてあら〳〵又鳴いて、どうしたんでせう今夜はこんなに鳴いて!!そう〳〵貴孃があす御立だものだからですわ、なぜッて斯麼田舍の者はいつも聞くからなんだけれど、貴

嬢の様に珍らしく聞かれると、彼だツテどんなに嬉しいか知れませんわ、………アラ誰方か呼んで御出ろぜ、サア這入ませう……あら又聞えてよ。

群馬　林　ひろ子

頃は水無月中になん、友の許より「郭公きゝ玉はずや、かたみに積れる御物語してむ」と文おこしぬ。

幸ひに、何の障もなきものから、仕度もいそ／＼と、君が門をば訪ひ侍りぬ。

君にはよくこそ来ませしとて、色々のお物語、さては日々に古き歌など口ずさみつゝ、かたへなる老樹の梢の下影に休みて、遙か大空を眺むれば、弓張月の影淡く、ねぐらをさして帰る鳥、あなたこなた飛び行き、遠寺につぐる晩鐘のかれいとゞ哀にきかれつ。君には、さすがに浦さびしとて、首をすゝらるゝ。

生ひ茂れる木々の梢の何處にか、いとゞさやけく郭公一聲高く、鳴きつる方をうちみやれば、君も等しく目はかなたにぞ走りける。空見上ぐれどせんなく、もはや姿もみせで、なく郭公聲も、いよ〳〵細くに、哀れさいやまさりぬ。

君は早くも、得意の三十一文字にかへられつるぞ、姿にもとてしゆらるれば、拙きながら一句ものして返し侍りぬ。

夜更くる迄、語りてもつきせぬ話の泉、いつ果つべしと思ほえれば又の日を約し、おしき袖を右左に別ち　御空高く照します月を友としつゝ歩をば急ぎぬ。

肥後　鎌　永　廣　子

いつしかすぎまもりくる風に、花橘のにほひもゆかしくおもふなりから、いとまちわびしきは、山郭公の聲にぞありけるか。まいて日毎の雨のいとわびしきものから、初音きかまほしとおもへどせんなければ、はやくふしにいりぬ。短き夜とても今朝はとく目さむれば、母君の夜半に、郭公のはつれもらせしものをとかたり給ふにぞ、いとめたく思ひて、今宵こそはとまちつるは幸ひにも雨はれ雲まをもれし月影のさやかなるもいとうれし。ひたすら一聲をのみと耳そばだてつれば、なりからおとづれ、なつかしくながむれば、庭面は白雪のふりつもるがごとく、離たわわに、卯の花さきみだれ、露は青葉にしたたり、いとうるはしくすずし。あすの夜も、又一聲はきかせよと、ひとりごちつゝ、時計を見れば、午前三時もすぎたりき。

東京　松本くすゑ子

都には稀にだに聞ことかたき郭公の、こゝには里馴て夜毎に訪つれ侍るなど、山里に病養ふいとこのせちに云おこすに、日頃床しかりつれば、さはとて母君もゆるし給ひければ嬉しくて一日まかりける。少し立入たる暇が家居にて、木ぶかくもの古りたれど、よしある様に住なしたり。軒には岩清水筧にうけて、末は泉の音清くたわゝに咲ける卯の花、垣根の下くゞりて、行へもしらず露をふくめる苔新しう庭をかざれるなといとおかしき處なるを、従姉は徒然と過すなりけり。待ち喜ぶ様にいはずもあれ。嫗まめ／＼しうもてなすに取そへて、之見給へ。是ぞ清少が戀しうしつる下闇にこそあれ、かゝる處ならでは又昔覚ゆるものも無しや、など打興ずる程に、定めなき五月の空の雨雲むら／＼と立ひろごりて、さらでだに恐げなる木立の、物凄ふたそがれて、やがて降いぬ。暮てはさすが旅れの侘しうて、まちつる聲も聞えぬに、雨さへ蕭々と板戸にそゝぎて、軒端も呉竹と、もすれの音淋しう通ふに、この家主が妻出來て又物語ふ、

親心の月も花も是有りてこそと思ふは、人の情なるに、末の世迄もと頼みつる子のこぞ皇軍に召れて、満洲野のしこ草がりにと出しに、已れ先沙河の渡の露と消しを、家の業は又さるものにて、淺緑美しう生ひ出る苗代、見ても今年はたが手にやと歎かれたり、穫する麥秋のにぎはひも、彼あらはさぞと思はれてと、果はいまはの心の中迄、忍びうれふるに、聞さへ袖しぼりあへぬを、更行

燈に背ける姿いたましうかへの影さへ、心細く打沈みて、つひには座にも得堪ず、こは由なき事に御輿をさまたけし、いへは胸晴るに思はずなめなる繰言をとて消ゆるやうにすべり出ぬ。とばかり筧の音のみ高くひくゝ打ひゞきてほの〳〵すきもる花橘の薫、現としもなく、差向ひたるに、

そよや、只一聲遙にふり捨て行に、急ぎ見出せば、うすれし雲の絶間より、山の端近き片破月の光淡く、あはれたが亡き魂をや導きけん、此處にも諸音に血になく人の有りとはしるやしらずや。

愛媛　高橋茂子

夜もすがらもえし螢の光こそとくきえぬれと、み空には月まだ殘る朝、そゞろあるきを思ひ立ち、そと庭口いでぬ。いとなつかしき若葉しげりて、おのづからみす〳〵しくも見えわたり、露をく朝の心地よさ、暫し我身にあらぬ迄、憂きもつらさも忘れはてけによみがへりたる心地こそすれ。やがてそわたるそよ風や、ふるゝ小島に、散る露を身にあびながらなほも さまよひ行けば、いつか衣や更へつらむ、卯の花衣涼しげに晝もお暗き奥庭も、袖垣白う見えしより、思はずまたも歩みつゝ、そゞろ思ひは、去年共にそゞろあるきよ青見よとこゝよかしこと青葉陰えりにえりつゝきそひつゝ共に遊びし姉上は、今は如何にかましますや、都の空に出て立て、一人我身の淋さよ、眺めは去年に變られと、變るはおのが淋しさとかこつ折から茂みにてはからすなのる、郭公あな床しやとそこはかとくまなく見れとかけはなく、只うらめしく空みれば、ありし〳〵見えし朝月もはや山の端にうすれ〳〵ぬされと思へば興多き朝にも有るかな、いざなつかしき姉上にありにしまゝを筆にせむ、共に入れなむ卯の花も、あゝ只何とせむ郭公の聲をのみ、

郭公かけこそ見えれとく起きて
青葉かくれに聲をきくかな

東京　石川讃子

よべ郭公の一聲現に聞き洩しつ。ゆかしさ堪へ難くて、今宵こそはと——更け行く儘に、燈の影うら淋しく、寐られぬ夜なれば、臥床にも入らで、我は一人窓下に座しぬ。見渡せば、夜はいと靜かなる都には遠き一村落、小田の早苗青々と若葉の梢翠暗う彼方の畦畔には、衣ほすてふ卯花白く、折々に橘の得ならぬ匂ひ、秋をかすめつ。二八月は薄雲少し懸り今や林の上におりて、一人淋敷寐れる夜を照しぬ。げに神すみ心靜けき今夜、遙かはれ瓶の音するは、誰屋のねしや。彼方にも寐られぬ儘のすさびなるらし。それも今宵郭公何處にか鳴く。今こそは聞き洩らさじ、よいざ床しの一聲、我に洩せと心靜かに耳は鋭く、目は冴え來れば、夜は益々音もなく。されど思はあらぬ方に走りて、それよりそれはては親しき友亡母亡姉に及びて憐れ心現ならんとすとき刹那！床しの一聲又一聲、小暗き森の一村より鳴き渡りぬ。驚破と我に返りし時は、既に餘音の耳に止まるのみ。「あはれ今一聲：……かばかりの月に只一聲鳴きて止めんとすか、今一聲洩せ」しかく我の叫びし時、そが通じてか、非ずか？又一聲さやかに答は影に花橘の匂ふあたりに名のり出でぬ。あはれ其音の淋しかりしよ、亡母姉君の御聲かとも思ひて……さはれ我兼ての思ひ今宵ほどあやかに聞きし事あられば、何とはなく心すが〳〵しふなりぬ。げにや朝の事を忘れても待るゝ物は郭公の聲

神戸　今西みさを子

庭の花橘香り滴るばかり、青葉に結ぶ白露の光りも、夕つ方一しきり降りたる雨に、一しほ涼しく、折から松の葉越に、月の影さやかに差出たる、云知らず、なかしき宵なり。何となく嬉かしき鶯の聲、やう〳〵うとくなりて、花そめ衣、ぬぎかへにし頃よりいつかはと待渡りつる郭公、今宵こそは、彼の血をはく思ひの一聲聞かばやと、端近ういでて、待てども待てども、其けはひだに見えず。さはれ、など此儘止むべきやと、物の書など取りいで、繰

りひろげつ。古より此鳥な種に風雅の友として、今に至る迄もておそぶにそ有ける。思へば中々床しうて、際の世な、なしのごひたらん如き、此大空の下に、とくいて來て鳴けよかしと、わりなき思ひにふけれる程に、短夜の更けやすく、早三更もいつしか過ぎて四隣いよ／＼静に月はます／＼澄み渡りぬ。かゝれば今宵に途に甲斐なからんかと獨言ちつゝ、國近に歩を運ぶ折しもあれ、一聲高く名のり出たる、げに嬉しとも、うれしくて、恰も我大和國が敵國との戦に勝ちたる報、聞きたらんこと思はれて、急ぎ庭の面になり立ちて、空打仰げば、哀れ、何地行けん影だに見へず、たそがれ頃より、さつ／＼音のふ松風のれのみ、げに古人の歎ひけん言の葉の理りなるを、今更思ひ當りつ。

あはれ、まゝならん事にしあれば、幾千里遠くへだつる、異域のわが同胞の君達に彼の妙なる一聲、玉章もて送らまし物を。

能登　高森いち子

今宵は風もなく、月もさやかなれば、郭公も必ず浮れ出するならむ、いでや今よりそが聲聞きに行かばやと、祖父君の宣ふに、妾は何の意存やあるべき、日頃彼が繪姿こそ見たれ、未だに聲さへ聞きし事もなし。そは稀なりとさゝてはいよゝ慕はしく今も今とて、月影に庭の木立の隙子に寫るを見て、日外見し月に郭公の繪も偲ばれて、何となう郭公の懐可しく、そが思ひにのみ餘念なかりし時とて、早く／＼とせき立てつゝ、妹諸共祖父君が影をたどりぬ。戀しさ聚び屋を右方に眺めつゝ、いつしか淨明寺森のほとりに出でたりき。早やそこには同じ心かは知られども、三々五々人の群なすあり、此鳥の樫能からむと我等も杉の根に打こ懸け待ち居たりけり。こゝに居る事二時餘りされど待つものは見えず、月も稍々傾き乙女子が螢追ふ影も消え、童が軍歌の聲も聞えずなり妹はあくび二ツ三ツ、そこらに居し人々もちら／＼歸るを見て、我等も歸らむ又あすにせむと祖父君の仰せに「あな心なの郭公よ」と、やをら身を起たむとせし刹那、青葉たる新樹の隙に一聲高く聞えたり。すゝ何たる清き聲なるぞ、アゝ此音都に居給ふ君に送らまほしきゐはゝ郭公よ、今一度なれが床し音聞かせくればや妾は天空打仰ぎぬ。

千葉　瀧澤登代子

なやみなく降りしきる五月雨の空、いつ晴るべきけはひもなす。茂る木立の青葉かくれに、色つきし梅の實のうみにてゐるや、折々枝をはなれて落つる音いと淋しげに聞ゆ。今日もひねもすをくらき書齋にたれこめて、一人文机によりしかそも夜に入りては手ふれんにもうとましくつれ／＼なるまゝ窓を開きて、庭面の景色眺むれば雨やみて茂る葉柳の間より十日餘りの月の影かすかに光りをもらしぬあなめつらしと眺め居りしに彼方にてしなり戸ほと／＼叩く物あり此夜ふけ何人の訪ひ來たりしかと打ち見やれど何の影だになしさては又水雞に驚かされてよといとおかしくやをら戸を引きしめんとする折しもほのかに名のる郭公の一聲實に夜なく／＼待ちし初音ながら流石に今宵とは思はざりけりあなやと打驚きて急ぎ其方を仰ぎ見今一聲もかなと耳傾けしが其かひなくあはれ郭公何處の雲間にわけ入りにけん影だになく彼方の茂みに螢のかげ二ツ三ツ

岐阜　中島もと子

晒さす日も、やがて、山のはにかくろひけるに、いざ、今宵は戦捷祈念の爲とて、村はづれなる、うぶすなの社にと、立出ぬ。畝道たどりくれは、いとさびたる松杉などの、木の間よりもれくる御神燈の影ほのかに見えて、朱ぬりの鳥ゐも、いつしか過ぎ行けり神のみ前に、ぬかづき、うつかしは手も、あたりにひびき渡りけり。折から、颯と吹きくる神風に匂へる花橘のゆかしき香こそ、石の上のふるきみ光りも、忍ばるれ。外つ國までも、輝かむ軍の、勝利など。時しもあれ、さやかに、なのる一聲の、初郭公跡もなくいづちか、去りぬ。

郭公はつ音をきゝしうれしさに

むされて杜を霧れきまさむ、今、一聲と空うち眺むれば、はるか西なる山の端の松に、かゝれるは、まゆげも、細き月かげの、なか〳〵、心にくゝも、見ゆるぞげに、わりなしや。

東京　山口琴子

夏木たちの青ばしげりて霞も殘ぬ空のはれ〳〵しういつしかとまちにしほとゝぎすのをちこちに聲のきこゆる夜半のみしかさもわすれて心涼しくなん

なしますにかたろふ夜半のほとゝぎす松の心をなくさめてけりあかぬほどにて早明方ちかくなりぬ。

東京　津野千代子

花過ぎて、春と夏との燕子花、咲くや卒月の永雨に、やづれもあらぬ花の色、見るにつけても恥しや、身のやつれてし昨日今日、輕ろき衣に似もやらで、重き思ひに沈む身の、弟はいとしや過る月御國を守る武夫に、召し出ださるゝ日も近く、樂しみ待ちし甲斐も無く、無情の風に誘われて、散りにし事も夢現、まだ覺めやらぬ心地して、乾く間も無き袖袂、たより無き身のせつなさを、知るか知らぬか夕月に、いゝかけてと名乘る郭公、「チト、戀し」と鳴くにつけ、一としほ深き吾思ひ、千々に亂れて亂れ髮、櫛かき上ぐる方さへ、ぬけ毛も多きやつれかた、やつれ果てたる身の果を、誰れに語らん樣も無く、泣き明したる明石がた、かたみに殘る弟が筆、額に掛けたる唐歌を、嘗きにし事も去年の夏、夏は變れど、變らぬ月、變りし物は吾身の上、行く末へ思ふうき思ひ、何所へ行くか郭公「オトヽ戀し」「オトヽ戀し」の二タ聲に、また泣き明す夏の短夜。

愛知　榎本綱子

木々の梢のいや茂合葉末に置ける玉露に、しばしば宿る月の影、清き流の水の面は恰も銀糸引たらんが如く、而も時を得顏に飛かふ螢の樣など加りて、實に面白も覺へける折、稍々身にしむ風の吹き來るよなと思ひたる時、時鳥の血に鳴く聲音の彼處の森の邊より聞へつる、嗚呼、と許りに身を振はせば、いつしか浮し心は流れ去り、いともの凄く、又、物悲く心の底にしみ渡り、しばし目も開き得ず、其のまゝ前后不覺となりにけり、去る程にひと〳〵落つる玉の露、熱き涙、傍に衣も濕ひて早や寒氣をも催し來たることに、ハット許に驚きて久方のみ空、仰ぎぬれば五月の日はとく落ちて、唯た黄金色取る星のみ光りてぞありしなり、

短歌

出征の夫を想ひて　　東京　武井光子

さなへのひぬ麥はみのりぬ我つまはいつこの野邊に仇をうつらん

述懷　　兵庫　花子

いたつらに矢竹こゝろのはやれともをの子ならぬを我いかにせん

母　　伊豫　益田美子

いとし子を君のみためとことほぎてかと出を送るはゝのこゝろれ

從弟海軍大尉戰死せしにつき　　磐城　須磨子

時ならぬ嵐にちりしはなの身をおもひ出てゝはそでしほるなり

海軍全勝　　東京　日暮郁子

あた船はあとなくきえてひのみはた大うなはらにかゝやきわたる

折ふし神にまうてゝ　　三河　磯子

ひたすらにおのか思ひをまこともていのるこゝろは神はみまさん

折にふれ思ふことども　　山梨　櫻武子

くもりなきこゝろの月はしらくものはれ渡りゆくときをこそまて

翁の還暦の賀に　　肥後　千々波橋子

ちはやふる神や守らんよろすよも老せてつもるきみかよはひは

夏祓　　東京　大塚里子

圍つつみはらひなかして川やしろみそきすゝしきなつの夕くれ

なりにふれたる　同　同

鐘のおとは花にかすみて上野山木末ににほふ三日月のかけ

花下餞別　同　同

咲にほふはなの木かけにこまとめていさむ門出をいはふますらを

早苗多　同　同

賤の女かうたふ田歌もにきはしくいつこのさとも早苗とるなり

對鏡　松原みね子

朝夕にむかふかゝみにてらしても恥かしからぬこゝろもたまし

折にふれて　愛媛　高橋茂子

思ひ出のかと出の折りの笑顔こそそれをかきりのわかれなりしか

孤兒院　群馬　林ひろ子

さちうすき世のみなし子も大御代のめくみの露のかゝる嬉れしさ

名誉の戦死者の葬式に愛國婦人會の人々と參り詣て　肥後　德永廣子

たからてふたまにもまさるひかりなりたまとくだけし倉光のきみ

戦死せられし倉光岸吉君の葬式場に有志者より花火の數發を見て　肥後　佐々小學子

久方のあまつみそらにたてし名は花火のわさにみえてをゝしも

翁の七十賀に寄鶴祝を　肥後　秋吉輝尾子

太刀のしり玉まく田ゐにすむ鶴の千代へん齢は君そきくらん

小學校　北見　中川仲代子

おまさかるひな山里もまなひやのまうけあるこそうれしかりけれ

友の寫眞を見て　同

わかれにし友のうつしゑ見る毎にをさなき折のしのはるゝかな

新緑　和泉　中江なほ子

あさまたき木々のわか葉を吹く風にゆめのなこりもさめてすゝし

うき雲　愛媛　さゆり子

それとなくうらかなしさに眺めやるみそらの月に雲そかゝれる

郭公をきく　麹町　奈良たく子

母人にきかせまほしと思ふまになきすてゝゆくほとゝきすかな

人傳時鳥　同　さまき

人つてにきゝにし日よりほとゝきすきくよはちかき心地こそすれ

遠國の友に　同　同

よし遠くへたてつるともわすれしな君とわれとのふみのかよひち

水邊螢　岐阜　中島もと子

かは風に橋のともし火うち消えてほたるそ道のしるへなりける

海軍大捷　同

よなよなの夢にそかちし船いくさまことゝなるは嬉しかりけり

かひこ　群馬　林廣子

千はやふる神の御代より津たへきしこかひの道は今もさかえり

新聞を讀みて　肥前　藤松りか子

船いくさかちしたよりに大君のみこゝろいかにうれしかるらん

待時鳥　同　同

こよひしもやま時鳥こえたてよとひきし人もまちてゐませは

懐舊　和泉　福原菫子

いにしへのをさなき影をみる毎にしのふくさくさ多くもあるかな

樹上蟬　津市　神田みよし子

とらへんとうかかふ子らにこゑのこし蟬は木たかく枝うつりせり

●お斷り　都合により短文新體詩等は次號に掲ぐることとせり

投稿募集

歌　文

八月（撫子・泉・老人）……避暑旅行

九月（草花・先秋・古寺）……日記の一節

短文　短歌　今様　新體詩　其他　隨意



御誕辰當日の 兩皇孫殿下

去月十二日は畏くも第一皇孫迪宮殿下第五回の御誕辰に相當せしを以て青山御所に於ては例に依り御祝儀の式を行はせられ宮中よりは御祝儀品の御下賜あり午後よりは各皇族方を始め奉り貴紳方の參賀を受けさせられしが此日迪宮、淳宮の兩皇孫殿下は菊花の御紋章付きたる羽織袴を御着あらせられいと御機嫌うるはしく御座所の椅子に玉體を寄せられ幾百人とも知れぬ參賀者の禮を受けさせ玉ひ一々御會釋あらせられけるが御齡尚五歳と三歳のいとけなき御身にわたらせられ下ざまの童ならんには一時はおろか半時の間なりとも靜粛を守り得べきにあらぬを兩殿下には兩の御手をチヤンと御膝に置かせ玉ひ側目すら觸らせ玉ふ御氣色さへなく三時間に餘れる長時間をいともいとも靜粛に端座まし〳〵て一人々々にやさしく御會釋を與へさせられたる御行儀の正しさと御耐忍の強くわたらせられしには當日參賀の文武百官一人として感じ入り奉らざる者なく自然に備はらせ玉ふなる御智徳のほどを只管歎賞し奉るの外なかりけるとぞ

かくて式の終りたる後宮内省より賜りたる精酒其他くさ〳〵の御馳走あり餘興には松井源水が獨樂の手練を御覽あらせられしが茲に亦記し奉るも畏れ多き極みながら御父君たる皇太子殿下には源水が獨樂の餘興始まるに先ち軍國の今日四民共に國事に盡粋しつゝある折柄なれば賑はしき鳴物などは控へさせよとの御内意あり仰せ畏みて御附の人より源水に此旨を御下命あり一切の鳴物を廢してさて獨樂の曲に着手りたりしも流石技藝にかけては日本一と呼ばるゝ源水も一切の鳴物なしにて獨樂の曲を演ぜしは此日

が生れて初めての事と云ひ何分鳴物なしにては演ずる方も見る方も更に興味なく感ぜらるゝに源水より更に此由を願ひ出で殿下の御ゆるしを請ひ得て然る後初めて御苑内の松樹と松樹との間に形ばかりの圍ひをなし其中にて出來得る限り耳騷がしからぬ音曲を奏しつゝ彼が獨特の妙技を演じけるに兩皇孫殿下には一入御機嫌うるはしく玉の如き御双頬に笑を湛へて御覽ありける由仄かに承り及びぬ

跡見學校に通はせ給ふ閑院宮女王殿下

閑院宮第三女王に當らせらるゝ季宮殿下には今年八歳に渡らせられ去月六日より小石川柳町なる跡見花蹊女史の宅に毎日御通學遊はさるゝ由園生の御身に在しながら何故に華族女學校には通はせ給はざるかと聞くに是には深き縁由ある事にて明治七八年頃は我國の女史教育未だ熾んならず當時女學校としては跡見學校の外僅かに竹橋女學校位のものなりしかば今の閑院宮御息所に在します智惠子殿下には疾くより跡見女學校に御入學去る十五年の春卒業遊ばされ其後閑院宮に御嫁かせ給ひてよりも深く花蹊女史の學風を慕はせ給ひて第一の女王恭子殿下（御十歳）第二の女王繁子殿子（御九歳）の姫宮を一昨年の四月より同じく花蹊女史の許に通學遊ばさるゝこととなりしにて扨て跡見にては此上もなき榮譽の事なればと特に女學校の一室を三殿下の御教室に充て教師村松直子を專任として午前八時より午後二時まで家庭的に尋常小學の程度に於て御教授申上げて居れる由三殿下には日々御手車にて通はせられ一名の御守を伴はさせ給ひ御服裝は黑木綿の御紋服にて質素に打扮せ給ふといふ

大海戰祝捷餘聞

東京府教育會女子體育部にては去月四日午前九時より神田橋外和強學堂に於て海戰祝捷會を開けり出席者は重に女子にて約五百名なりき先づ君ケ代の奏樂に次で同部長井口あぐり氏の式辭あり夫より左の

賀表捧呈祝捷文贈呈の件を一同に諮りしに一同拍手を以て之を迎へたり

賀　表

陛下の忠勇なる海軍は日本海の海戰に一擧して敵の艦隊を殲滅し四海の波濤に穏に浦安の國礎瀰々固きを加ふこれ皆陛下の御稜威に依らざるなし臣等旣に日月の御仁慈に浴し今又た空前の御武徳を仰ぎ感激忭舞の至りに堪へず謹みて表を奉りて以て聞す誠恐誠惶頓首

明治三十八年六月四日

東京府教育會女子體育部長
正八位臣　井口あぐり

祝　捷　文

征露の師興りてより閣下及麾下一同は皇國の興廢を以て任し風濤を凌ぎ寒暑を侵して海上に務め曩には敵艦を旅順口に擊ちて之を鏖にし其勞苦未だ慰めざるに又もやバルチック艦隊の來り寇ずに及び八重の汐路に漂して心を勞し身を苦しめ終に之れを日本海に激擊して空前の大捷を得たり是れ一に陛下の御稜威に依ると雖も又閣下及麾下一同の忠烈勇武の致す所に外ならず我等は欣喜雀躍に堪へず茲に謹んで賀詞を呈し併せて閣下及麾下一同に對して限りなき感謝の意を表す

次で海軍少佐佐野常羽伯の軍事講話ありて天皇陛下の萬歳を三唱し會衆之に和し續いて海陸軍の萬歳を唱へ、終りに女子體育部の唱歌を合唱して式を了り餘興として桃川燕林の時局講話ありたりとぞ

廢兵院設置の議

愛國婦人會にては豫て其附屬事業として現戰役の爲め不具廢疾となれる陸海軍下士卒を收容して相當の業務を授け終身衣食に不自由なからしむべき趣旨を以て廢兵院を起すの議ありて旣に略ぼ決定したる由なるが其資金は當初先づ同會より年額三萬圓を支出し陸海軍兩省より年額六萬圓の保護金を仰ぎて之に充つる筈なれども斯る少額にては到底滿足なる經營を爲し難きこと勿論なれば其不足は今後益々同會の規模を擴張して會員の醵出する會費と別途の寄附金とを以て之に充て漸次之を擴張するの計畫なりと云ふ最も時宜に適する企圖といふべし

東郷婦人と片岡婦人

○去二日東京市にて海事協會の祝捷會は近頃の都べての公會中に一異彩を放つたものであつた、夫れは何でもない男子部と女子部とが合併して當代の貴

紳と當代の貴婦人淑女とが一堂に會した事である無論這んな事は一私人の宴會や園遊會などには珍らしくもない、又婦人を基礎とせる團體に男子の混じた例もないではないが純然たる男子の事業に對して貴婦人が助力を與へ而も一堂に會したといふは先づ此の海事協會丈けであらう

◎當日は男子方の百人餘に對して婦人方は六十人餘即ち男子の半數以上を占めてゐる而かも其の人々は毛利公爵堂、鍋島侯夫人大山夫人を始めとして何れも當代交際場裡の花と云はるゝ貴婦人令孃のみで、無論其の服裝は立派には相違ないが夫れも當時流行の華美な服裝をした者は一人もなく寧ろ我等をして崇高の念を發せしめた

◎其の中に於て尤も人目を惹いたのは今度の大海戰の大功者たる東郷大將夫人と片岡中將夫人であつた當日一方の卓の正面には毛利、鍋島の二夫人、其の右側の列は大山夫人に續いて東郷夫人、片岡夫人等順次居並び之に向ひ合つては伊東軍令部長と有地中將とが席を占めてゐたのは絕好の對象であつた

◎有地理事長の發聲で男女一齊に帝國萬歲海軍萬歲を三唱した後感謝狀の決議に次で伊東大將は今度の海戰の意想外の大成功と共に國民に油斷をしてはならぬとの事を委しく述べられた後有地中將は旅順の沈沒艦引揚や今度の捕獲の結果で海軍擴張の必要がないといふものあらば大なる了簡違ひである、戰爭は無事に濟んでも平和の戰爭に利權を保護するは矢張海軍の力である、且又義勇艦隊の今後益必要なる事は今度の海戰に多數の商船を武裝した一事でも分る將來の敵は露國のみと思ふ勿れとの趣意を述べて喝采を博した

◎各人歡語談笑の中に有地中將は更に東郷夫人と片岡夫人を一同に紹介し今回の大捷に就て兩夫人の爲に祝盃を擧げたしとの事で會衆一同直に盃を擧げて萬歲を祝した此の瞬間の兩夫人の感想は如何であつたか他の列席夫人の感想は如何であつたか、我等は一種微妙の感に打たれた

◎東鄕夫人は一寸見た處年齢四十許り、有體の處決して美人ではない其の風采及び服裝は寧ろ質實一方である、且其の容貌及び狀態は自から謙讓の精神を示し其の良人たる大將が目前に世界無比の大功を樹てられた事と何等の關係も無きが如く極めて恬淡に見受けられた、此點は良人の大將と自然の絕美なる一致をなしてゐたものである

◎片岡夫人は年齢　二つ三つ下に見受けられた其の容貌及び態度は淸楚の二字が之を盡してゐるであらう、夫人は男子側に於ける衆目の集點となるを多少おもはゆく思はれてや宴後の多くは卓を後に彳立して他の貴夫人と交る〲談話を交へてゐた

◎此の間東鄕夫人は餘念なく隣席の大山夫人と何事か語らひつゝ大山夫人のすゝめた卷煙草を受けて呑んでゐた、此の日の大山夫人の服裝は淡泊なる洋裝で流石に交際塲裡のクヰン丈けに誰人にも滿遍に愛敬を注ぎ伊東大將とも時々語を交はしてゐた、

米國女子大學日本工藝科を設く

米國聖路易市フォーレスト、パーク、ユニバーシチー(私立女子大學)校長ケャーンス夫人は教育熱心家にして身を育英事業に委ぬる事茲に四十餘年寄宿舍を設けて嚴正なる薰陶を施すより其信用益々厚く生徒は各州より來りて校運愈々隆盛なる由なるが夫人は頗る日本贔負の人にして昨年の天長節には全生徒を講堂に集めて我が陛下の御威德を頌したる程にて生徒も自然其感化を受け非常に我國に同情するに至れりとの事なるが聖路易博覽會に於ける我が女子職業學校の出陳品を見て刺繡、造化、水彩畫等の美術工藝科を本年九月の學期より增設する事とし適任者を選定され度き旨博覽會事務官別府丑太郎氏の許へ依賴し來りたりと云ふ因に女子職業學校の出品を同校に寄附したるに同校よりは其製作品を女子職業學校及び教育博物館に送付し來れりと

憐むべき軍人の寡婦

四ッ谷區鮫河橋谷町二丁目四十二番地森ヒサ(二十六)は第一師團後備役陸軍輜重輸卒森福松の妻なるが福松は昨年三月八日召集に應じて輜重大隊に入り出征の日を待ちつゝありけるに計らずも同四月六日服務中前胸部に馬蹄傷を受けしが元となりて肋膜炎を繼發し東京豫備病院に入りて治療を受けしも遂に心臟痲痺に陷り哀れ同月廿一日死亡したり福松は石工にして元より財產などある身ならねば遺族は忽ち生活の道を失ひ非常の困難を極めしが健氣なるひさは毎日金五郎(三つ)を同居の老婆に托しはつ(二つ)を携へ同區西念寺横町に至り卷煙草の內職を初めしが手馴れぬこととて一日僅か八錢內外の賃金を得るに過ぎず日日兵營より麥混りの殘飯並に副食物を購ひ辛うじて生命を繼ぎつゝある有樣なれば近隣の人々此の慘狀を見るに見兼ねて頻りにひさに幼兒二名を他家に與へて再婚せんことを勸めしもひさは二人の幼兒が父に別れたるだに悲しさの至りなるに此上母に離れたらんには如何ばかりか悲しからん且つは福松が臨終に軍人の身として勇しく戰役に死せずして空しく病院に死することの口惜しき旨を幾度か繰返し兩兒の事をくれぐれも托したりしことを思へばたとひ此の身は紛となるとも體のつゞく限りは如何なる艱難辛苦をも忍びて幼兒の成長を待たんとて、髮も結はず湯も浴みず垢付きたる衣服を着けて一心に働き居る心掛の殊勝さ感じても餘りありといふべしされども飢寒は尙此の貞婦の上に執念くつきまとひ時には飢を訴ふ幼兒の泣聲さへ洩るゝといふは世にも憐れの話ならずや

精勵の効果

(軍人家族の好模範)

山形縣山形市小姓町時計職細谷徹之助妻ゑの(二十五)は昨年四月夫が後備步兵一等卒として召集せらるゝや家計維持の困難なるより一人の姑を親族に托して實

家に身を寄する事とせしも生家も亦頗る貧窮なる上に實父は眼病を患へて起つ能はざるの、苦心一方ならざりし折柄千家男爵夫人俊子等の主催にかゝる赤坂檜町なる軍人家族授産婦人會の擧を聞き同年七月上京して同會に身を寄せ爾來ミシン裁縫の業を習ひしに熱心の功に依り頗る習熟し今にては日に五六十錢の收入を得るに至りたるが先頃同女は現時の狀態を出征中なる夫に申送りしに徹之助も大に感勵する所あり奉天附近鐵道線路の激戰の際に先頭第一の偉功を奏せし由なるが一昨日芳川内相が同會を訪問したる際ゑのは會員總代として答辭を述べたりと云ふ今同女が昨年七月以來得たる工賃及其費途を聞くに左の如しと

工賃	百四圓五錢一厘
内	
出征中の夫へ送金	十六圓
姑へ返金	十圓
實家へ送金	五十二圓
貯金(同會に保管)	八圓五十錢
貯金(自己の分)	十圓
計	九十六圓五十錢

即ち差引七圓五十五錢一厘同女が十ケ月間に自己の用途に費せる所にして之を一ケ月に分てば僅かに六十八錢六厘に過ずと

露提督の婦人令孃

昨日までは廻瀾の意氣海を壓して堂々五十の大艦巨船を率たる露提督ロジエストウエンスキー中將が一夜にして變る今日の境涯こそあはれなれ勝敗は兵家の常敗れたりとて愚と笑ふべき事かな、血あり淚ある我が國民は提督今日の境涯に對して一片同情の淚を惜む者にあらず我が幾多の出征將卒の家族はいかなる思ひを戰地の人に寄するか、その思はロ提督の家族にも同情を致してこそ花も實もある日本國民なりけれさてもロ提督が家族の上を聞くに中將は素バルチック海鎭守府長官たりしかば彼得堡の本邸には落ち着きて住ひし事もなく不在勝にのみしたりしかば夫人令孃も物淋しき夜食の卓にいつも夫父の事のみ語り出でられ寂寞たる家庭の心なぐさむよしもあらざりしに、今回の戰爭となりてよりは軍務に從ふ中將

の猶さらに事繁くて家門を過ぐれども立ち寄らぬまでに國事にいそしみ居たるが令嬢は都に在りて徒づらに父の上を案じ暮さんよりせめては戰地に勤めを求めて國家に盡さんこそ心安かれと母に願ひて特志看護婦となり哈爾賓に至り傷病兵の看護に盡くし居たるが其内に中將は第二艦隊司令長官の重任を帶び極東に出發したるぞ夫人には愈〻心淋しく獨居の憂に堪へかねて令嬢を滿洲より喚還し中將が安否いかゞあらん極東の戰況我に利あらずやとこれより物案じは一層增りしが其折々の消息を聞くにつけ次第に敵地たる日本に近く進航すると云にこの次の報は吉か凶かと待たるれどさて心がゝりにもあり夫人令嬢は上の空に暮し居たりといふが今回の報は露都にても公表されたれば最早家族の耳にも入りつらん之れを聞く夫人令嬢が驚愕と悲嘆は目に見ゆる如く思ひやるさへ笑止千萬なり猶中將邸に昨年招かれて親しく居室の狀を見たりといふ某英國婦人の語れるを聞くに同邸の客室は其裝飾總て純朴の裡に一種莊重なる所あり殊に同婦人の目を惹けるは壁間に掲げられたる大肖像畫にして提督の正服を纏へる中將の風采躍如として其人の在るが如し右は極東出發につき中將の舊幕僚たりし人々より紀念として贈呈せし者なりといふが其肖像の主は今や戰敗れて身も負傷を被り敵國の囚虜となれるなり此肖像に對する家族の感慨夫果していかにぞや

女學生の父兄種別

府立第二高等女學校に就いて取調べし所に依れば

官吏の娘	五十一人（勅任官の娘……十六人、奏任官の娘……五十七人、判任官の娘……三十八人）
教員の娘	三十五人
軍人の娘	二十一人
公吏の娘	八人
醫師の娘	七人
農	四人
商	十二人
會社員の娘	二十八人
工	六人
無職	五十一人

無職の中には華族もあり又今學期より首めたる村上專精氏の東洋女學校七十一名の生徒に就いて調査せし所は

商五、官吏十九、無職二十、農六、會社員五、貿商三、教師二、醫師七、印刷業一、華族一、新[illegible]屋一、乾物商一、銀行員一、軍人二、米屋一、工業一、建築師一、牛乳搾取業一

にて平均の年齡は十四年六ヶ月、最も年長けたるは二十三歲、最も少は十二歲なりしとぞ

●新刊書籍及雜誌

▲武家時代少年士道の訓　貝原益軒の武訓、山鹿素行の武家小學、徳川齊昭の告志篇等を抑て九篇を收む武士道教訓の良書として青年者の熟讀すべきものなるべし編者は文學士久保天隨氏なり（定價六十錢神田區表神保町同文館發行）

▲松陰先生逸事一節　スパルヂング氏の日本遠征紀と米國人某氏の著書中より抜抄したるものにして松陰先生の逸事として長く後世に傳ふべきものなり山口縣萩の杉靜子女史態々一本を寄贈せられたれば此に記して其の厚意を謝す（非賣品、東京市京橋區南傳馬町一ノ一二相澤敏太郎氏發行）

▲女子の見たる女子の本性　現代の女子は如何に社會より待遇せられんと望むか、男子と女子との距離を如何なる程度まで近づかしむべきか、如何にすれば女子をして愉快に働かしめ、又如何にして自由に其の天分を盡さしむべきか、を解決せんと試みたるものなりとは、著者の自白する所なり思ひ切つて書き立てたる筆鋒鋭く一女子の作としては較々異とするに足るものありそれに又竹風道人、有美仙人の序あるは大に多とすべし此書にして此序あり一讀せんも亦一興ならずとせず（定價三十錢下谷區中根岸嵩山房發行）

▲むさし野（五の二）　材料も多く体裁も立派なりハイカラ雜誌の上乘といふべし（毎月一回壹部十六錢本郷根津宮永町古今文學會）

▲青春（第壹號）　これも亦体裁の好き四六四倍大八ページの色摺雜誌なり美文、小說、新体詩など花やかにして最と賑はし（毎月一回定價一部五錢下谷區谷中初音町青春社發行）

▲職分論　編輯　文學士若月保治氏がスマイルス氏のデユチーを譯述したるものなり前篇已に讀書家の好評を博したれば此篇又世上の歡迎を受くべきは疑ふべからず文章穩健にして飜譯的臭味なきは尤も悅ぶべし（定價五十錢本郷駒込西片町內外出版協會發行）

▲Gold Dust「ゴールドダスト」　歐米の金言、格言、俚諺等二百句を集めて原文と邦文とに區別して對照の便を與へたる可愛き豆本なり朝夕愛誦せば自ら餘師あらん（定價八錢牛込矢來町園屋書店）

▲高等女學講義（第一學年第一號）　修身國語歷史地理理科家事裁縫等女子必須の學科を極めて平易に記述したる完全なる通信講義なり講師は高等師範及高等女學校の教授教諭等にして科外講話には肝付兼行氏の海軍話を掲げたり月謝は一ヶ月金四拾錢にして二ヶ月以上前納すべき規定なり（神田三崎町三ノ一大日本高等女學會發刊）

●寄贈書目

をんな	五ノ六	東京	大日本女學會
大日本婦人教育會雜誌	一七五	同	同教育會事務所
慶應義塾學報	九一	同	慶應義塾
教育公報	二九六	同	帝國教育會
教育	六四	同	若溪會
國學院雜誌	一一ノ六	同	國學院事務所
新國民	一ノ三	同	大日本國民中學會
日本婦人	六八	同	帝國婦人協會
青春	一	同	青春社
婦女新聞	毎號	同	婦女新聞社
時好	三ノ六	同	三越呉服店
精神	一ノ六	同	精神學會
向上主義	毎號	同	久友社
愛國婦人	毎號	同	愛國婦人會
直言	毎號	同	平民社
六合雜誌	二九四	同	ゆにてりあん弘道會
家庭週報	毎號	同	櫻楓會
成功	六ノ六	同	成功雜誌社
商家の友	三九	同	時事新報社
正教要話	六ノ五	同	教要社
體育	一三九	同	日本體育會
東京經濟雜誌	毎號	同	同雜誌社
婦人世界	四九	大阪	浪華婦人會
家庭のしるべ	一二	東京	白木屋呉服店
女學生	一	同	久友社
正則中學講義錄	毎號	同	大日本國民中學會
教界時事	毎號	同	教界時事社
婦人と子供	五ノ六	同	フレーベル會

河原操子女史
寄附品の件

報告

一金二十五圓五錢也　締切當日迄の分　第四號報告通

一金八十一錢　締切後到着の分

內

金二十錢　上總國鶴舞町　高石登代子

金二十一錢　薩摩伊佐郡山野村　松原みね子

金二十錢　香川縣善通寺元中町　後藤政子

合計金二十五圓八十六錢　收入總高

一金二十四圓六十二錢五厘　藥品五十種器具五種代

一金九十五錢　荷造費

一金四圓十錢　神戶迄運賃

合計金二十九圓六十七錢五厘　支出總高

右の通りに付差引不足金三圓八十一錢五厘は國光社に於て負擔支辨し六月五日官吏某氏出張の幸便に托し北京公使館に向け發送し迅速送達方を依賴したり此段報告候也

明治卅八年六月

女鑑編輯局

定價

一冊	前金貳拾錢
三冊三ヶ月分	前金五拾七錢
六冊半分	前金壹圓拾錢
拾貳冊一年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁　三十二行	金八圓
一頁　六十四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一、一切前金の事（但郵劵代用一割增の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十八年六月卅日印刷
明治三十八年七月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊　榮一
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　株式會社　國光社
（電話新橋二六三九番）
（電話新橋特八八番）

わかば會

わかば會研究部規定

○わかば會研究部は、本會々友と否とを問はず、斯道に熱心なる同好者を廣く歡迎す。●わかば會研究部は、斯道の先輩大家の賛助を辱うす。●わかば會研究部加入者は左の手續に依り、歌の添删を乞ふ事を得。(當分の内短歌に限る)一、毎月二回(第一第三水曜日)一回毎に、五題づゝを課し、第一水曜の課題は、其の月の十五日迄に第三水曜の課題、其の月の末日までに、本會へ到達する日積りを以て出詠せらるべし。二、本會へ到達したる詠草は、直ちに添删して課題と共に水曜日に附郵返草すべし、三、前項課題の方法によらずして添删を乞はるゝ時は。一ヶ月二十首以内とす、●わかば會研究部加入料は、一ヶ月金五拾錢とし、前月の第三水曜日迄に送付せらるべし。但し郵劵代用は、一錢切手にて一割増の事●わかば會研究部加入者にして、前掲の規定外に、作歌の添删を乞はるゝ時は、二十首毎に一ヶ月の加入料に相當する添削料を加へて、寄稿せらるべし。わかば會研究部に加入せんとする方は、住所氏名生年月を詳記したる名簿に、一ヶ月分の加入料を添へて、本會へ申込まるべし。●わかば會研究部は東京市神田區山本町廿三番地わかば會内に置き單にわかば會の名を以て、書信の往復をなすべし

以上

わかば會々幹　塙　忠雄

東京市神田區
山本町廿　番地
わかば會

武士道史傳

文學士大町桂月著 飯沼珠城畫
田岡嶺雲著 同畫
文學士三好物外著 同畫
文學士笹川臨風著 同畫
文學士白河鯉洋著 同畫
法學士太田蒼溟著 同畫
文學士中內蝶二著 鏑木清方畫

山中鹿之助
小早川隆景
上杉謙信
本多平八
立花宗茂
木村重成
大石良雄

菊判洋裝美本 全七册
一册定價十九錢
一册郵税四錢

文學士矢田七太郎著
● 幕末之偉人 **江川坦庵**
和裝四六判寫眞銅版數葉入 定價金三十錢 郵税四錢

法學士工藤景文著
● **藤田東湖**
菊判洋裝一册 定價金十九錢 郵税金四錢

清藤正輔著
● **西郷從道**
菊判洋裝寫眞銅版數葉入 定價二十五錢 郵税四錢

水主天姥著
● 千古寃魂 **石田三成** 及其時代の形勢
四六判洋裝全一册 定價金三十錢 郵税四錢

…((歷史小說))…

塚原澁柿著 小堀鞆音畫 鏑木清方畫
● **小牧合戰**
菊判洋裝美本全一册 定價金五十五錢 郵税金十錢

● **山崎合戰**
菊版洋裝定價全一册 定價金三十九錢 郵税金六錢

山崎忠和著
● **文久物語**
菊判洋裝定價全一册 定價金二十八錢 郵税金六錢

醫學博士森鷗外著
琵琶歌 **長宗我部信親**
菊半截洋裝全一册 定價金十錢 郵税金二錢

發兌元 東京築地 株式會社 國光社

第五回內國勸業博覽會

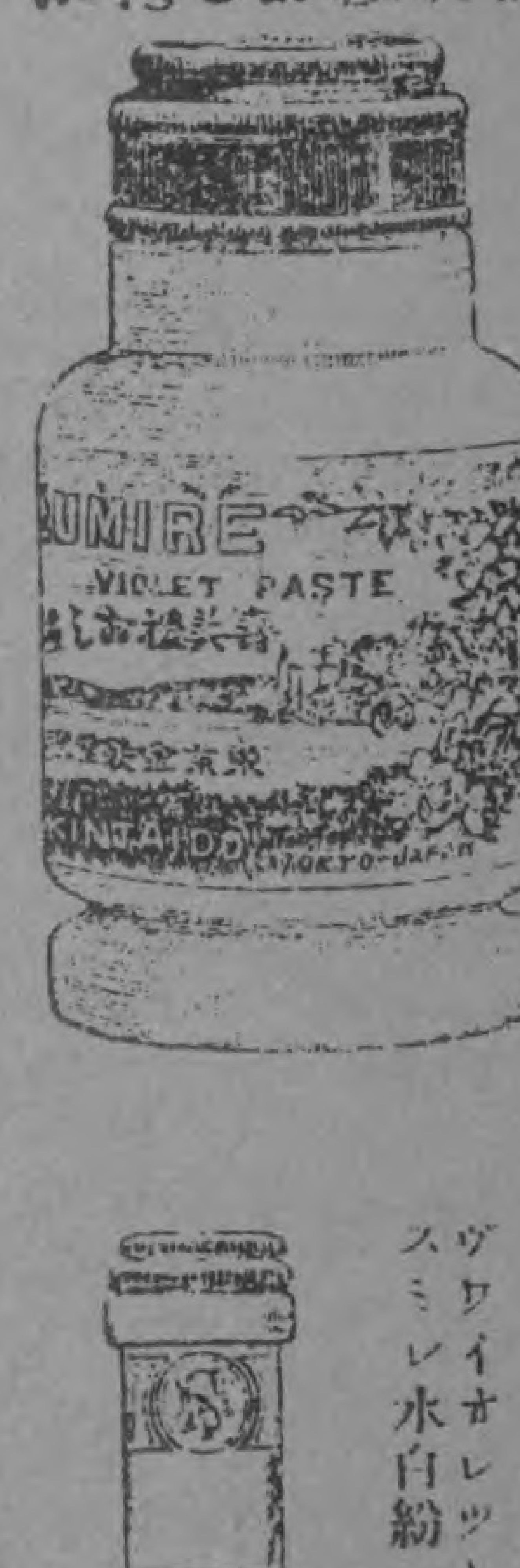
賞牌并に襃狀受領

おしろい

登錄商標

五二會品評會功勞銅牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
錫器附 乳白硝子器入
壽美禮おしろい



壽美禮おしろい

おしろい製（定價）大壜二十錢 小壜十二錢

水製（定價）大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢

ヴワイオレツト水
スミレ水白粉



すみれ白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟稿等を以て調製しあるを以て總てを[illegible]ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性なり

菫おしろいは芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に望みて衞生上良好の逸品なり

壽美禮白粉は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博し一〻流行せり

壽美禮あらい粉

綠、藍、紅彩蝶畫ひボックス入三錢

罐詰六錢五厘 袋入壹錢

◉弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞讚する香料及弊店新製の原料を用ひて製せしものなれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば能くあかを落し御肌を美しくなす

◉常に髮洗ひに用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹縮等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

◉使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登錄商標

SUMIRE.
WASHING POWDER

壽美禮あらい粉



製造本舖

東京兩國
南兩國[illegible]元町

伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧店藥店其他勸工場各[illegible]に在り

女鑑

明治三十八年七月一日發行　毎月一回一日發行　第拾五年第七號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可